
緋弾のエリア ~ 緋弾に集いし仲間達 ~

888

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜緋弾に集いし仲間達〜

【Nコード】

N2252S

【作者名】

888

【あらすじ】

俺の名前は雛菊京助。
ひなぎくきょうすけ

唐突な質問だが空から女の子が降ってくると思うか？

いいや、普通は降ってこない。が、降ってきた。降ってきた人物の名は『神崎・H・アリア』武偵だ。そんなある日の夜、俺はとある依頼についた。『ランクSS 神崎・H・アリアの護衛、観察』俺はこの依頼を受けているいろな目にあつた。が、後悔はしていない。俺には、仲間と大切な人が増えたからな。そして、俺はアリアたちに明かしていくことになる。『アリアが一番敵視している組織』に、

俺はいたということを。それがどれだけつらかっただろうか。今でもそのつらさを覚えている。注、文才皆無、更新不定期

自転車制御略奪へチャリジャック (前書き)

MF文庫「緋弾のアリア」を基につくられた、半分コピー半分オリジナルの作品です。ダメだしなどもバンバンどうぞ。そのダメだしを基に直していくつもりです。

自転車制御略奪へチャリジャック

空から女の子が降ってくると思うか？

それはかなり危険でかなり面白く、ちよっぴりめんどくさいが、かなり楽しい物語のプロローグ。

ゲームかなんかじゃあるまいし、降ってこないほうがいいだろうが、現実って奴はとことんひどいものだ。すぐに人の望みを殺す。ただ俺は、そんな物語も面白そうだ、と思った。

|| || || || ||

俺の名前はヒナギク キョウスケ雛菊京助

ある日俺は、否、俺らはなぜか世にも珍しいチャリジャックに会った。

これが、俺らの不幸のはじまりだった。

俺が朝寝坊してその日はたまたま7時57分発のバスに間に合わなかった。

「しゃーない。チャリで行くか。」

このとき俺は知らなかった。いや、気づいていなかった。サドルにプラスチック爆弾が仕掛けられていることに。

2分くらい走っていると聞き覚えのある某ボーカロイドの声が聞こえてきた。

「ソノジテンシャヲゲンソクサセルトバクハツシヤガリマス」
(マジかよ、おい)

そして何気なく横を見ると、案山子が並走してきている。

足元にスピーカー、手にはUZIが握られている。

（ハハッ。ふざけてやがる。）

確か某18禁ゲームにこんなのがあったよな。UZIね、使わないな最近。

（まあいい、とりあえず第2グラウンドまで行くか。）

|| || || ||

第2グラウンドまで着くと見覚えのある顔が見えてきた。

なんだあいつもか。付いてねーな俺たち。

「ようキンジ。朝の運動は楽しいかい？」

こいつは遠山キンジ。ひょんなことから俺にHSSを見せちまったおつちよこちよいだ。と、キンジは思っているだろう、実際には違うが。

「これが楽しいように見えるか？」

「いや。にしても朝っぱらから不幸だね。もしかしてお前に全ての幻想を打ち殺す腕でも付いてんじゃないの？」

「そんな右手はねーよ。それよりコイツらどうにかしねーと。」

キンジはあごでUGIとプラスチック爆弾をさした。

「まあ、俺はこの案山子人形はどうかできるが、お前はどうかキンジ？」

キンジは首を横に振った。やっぱりな。

「キンジ。お前とは1年間という短い付き合いだった。」

「見捨てるのかよ。」

「だってお前HSSじゃないと戦力外じゃん」

「あまりHSSと言わないでくれ」

「まあ死ぬまで生暖かい目で見守ってやるよ。」

「あんた達。手を上げなさい。」

その女の子の名前は、神埼・H・アリア。とある有名な名探偵さんのひ孫だ。専攻は強襲科^{アサルト}。武偵としてのランクはSだ。

「くるな！こいつには爆弾が仕掛けられてる！」

キンジがそう叫ぶ、が、戻ってきた言葉は予想外だった。

「武偵憲章1条、仲間を信じ、仲間を助けよ！行くわよー！」

俺はキンジを指差して

「俺は助かる方法を知っている。こいつを助けてやってくれ。」

言う俺はなるべく神埼・H・アリアから離れる。

俺には不思議な力があって一時的にだがHSS並みの力を出すことが出来る。俺は銃を抜こうとするが、

「ジユウヲヌクトバクハツシヤガリマス」

チッ！と舌を打つ。それにしてもなぜ武偵殺しは俺を狙う。狙いはキンジだけでいいはずだ。なぜ俺を？

「おい武偵殺し！どうせ聞いてるだろ。なぜ俺を狙う！」

「ソレイジヨウシヤベルトバクハツシヤガリマス」

くそッ！今の状況はしゃべっても爆発、銃を抜いても爆発。だったらまずは爆弾をどうにかしねえとな。俺は超能力^{ステルス}の錬金術で爆弾の中の火薬を全て金に換える。

そのとたんに、バババババババ！とUZIを撃ってくる。俺は自分の目の前に氷を生成し弾くと、腰のホルスターからガバメントを抜き、センサーと銃を撃ち、破壊する。胸元にはマイクが装着してあった。俺はそのマイクを取り、話しかける。

「おい武偵殺し！お前の正体は大体割れている！そうだろ、リュパン」

「ヤリバレティヤガリマスネ。デモ、オシヤベリハモウオワリデヤガリマス」

言うボン！とマイクとスピーカーが爆発した。

（逃げやがったな。そうだ、あいつらは大丈夫か）

そのとき、7発の銃声のあとに7発の銃声が聞こえてきた。

「行ってみるか……と、おもったが、それどころじゃないな。」

周りには案山子が3体ほど集まっている。俺は手榴弾のピンを抜き2体固まっつてるところに投げもう一体をD・Eで撃破して、俺は体育館倉庫に向かう。

「だいじょぶかキンジ？つて、訊くまでもないな。」

今のキンジはHSS状態。

「お、恩になんか着ないわよ。こんなおもちゃ、わたし1人でも何とかできた。これはホントのホントよ。」

「負け惜しみか神埼。見苦しいな」

「風穴アア！！」

俺は挑発混じりにからかうと、腰のガバメントを両手に持ちトリガーを引く、が、それだけ。弾は発射されない。俺がキンジを見ると手にはガバメントの弾倉。^{マガジン}俺はキンジに耳打ちする。

「キンジ、俺がトリガー引いたら目を閉じろ」

「分かったよ」

俺は小太刀を取り出して襲い掛かってこようとしている神埼に銃を向け、ウインクしながら発砲する。

「じゃあな、教室で会おう」

発砲した弾はものすごい光りを放つ。その弾は一発百万は下らないという武偵弾。その閃光弾。^{フラッシュ}

「キンジ！急いで教室にゴーだ！遅刻するぞ。と言つかもうしてるぞ」

俺は言うのと駆け出す。後ろからは待てー！と聞こえるが無視することにした。どうせいやでも教室で会うんだ。

The aria continues

緋色の居候が来た日（前書き）

すいません。雛菊京助の設定忘れてました。

設定・・・髪 茶髪、

顔 のんびり顔

体 平均よりやや筋肉質、体脂肪は6%

性格・・・おふざけ者、明るい

このキャラのイメージは、ハルヒに出てくるキョンをマイペースのオタクにしたような感じ。

趣味・・・ゲーム（主にMGS、GTA、アサクリなど）、アニメ観賞、などなど

世間一般で言う「オタク趣味」

緋色の居候が来た日

2年になり最初の日が終わる。

寮に戻ると、同僚の二人がテレビ優先権をめぐり、銃を撃ち合いナイフで斬り合い。

「おいお前ら。止めてくれ、俺のゲームとかフィギュアに当たったらどうしてくれんだ？」

「「しるか!!」」

この寮のこの部屋の壁は発砲で出来た穴とナイフによる傷でボロボロである。

その間俺は何をしてるかというと、荷物をまとめていた。被害がこちに来る前に逃げちまおう、という魂胆だ。

どこに行くかはいうまでもなく探偵科である。インクスタ

アサルト強襲科との寮はそう遠くは無いので荷物を持ってやって来た。キンジの部屋に。

キンジは前強襲科アサルトにいたが中途半端な時期に探偵科インクスタに転科したため一人暮らしなのだ。羨ましいなあ。

とりあえず俺はインターホンを押す。しかしキンジは出てこない。

ピンポンピンポンピンポピンポピンポと連続で押すが、やっぱり出てこない。

俺はワイヤーを使いベランダに渡り。発見。

「みつけた」

と、俺。

キンジも観念したようにベランダの鍵を開けた。

「何のようだ？」

「いそろろつになりにきました。テレビの優先権は譲るから。あ、でも番組の録画はさせてな」

キンジは溜息交じりに呆れながらこう言った。

「はあ、もう一度聞くが何しにきた」

「お邪魔しまーす。それとキンジ。ゲーム持ってきたぞ。やるか？」

「だから、お前俺のどこに何しに来たんだよ」

「キンジ、これでいいな」

「人の話を聞け」

そんなことを10分程度していると、ピンポーンとインターホンの音

「出なくていいのか？」

キンジは縦にうなずいた。

が、インターホンの音が止むことは無い、と直感が告げる。

「あーもう、うるせー、だれだ？」

とうとうキレたキンジはドアを開ける。

「遅い！あたしがチャイム鳴らしたら5秒以内に出ること。」

そこにいたのは緋色の髪をツインテールに束ねてカメラリア色の瞳をした神崎アリアだった。

キンジは何も見えていないというようにドアを逆再生のごとく閉めはじめた。

「！？」

すかさず神崎アリアの足が動く。ドアが閉め終わる前にドアの隙間に足を挟んだのだ。

「待ちなさい」

あきらめたキンジはドアから手を離す。

「何のようだ？」

「用が無けりゃこんなとこ来ないわよ」

俺はドアの隙間からランプ柄のトランクケースが見えたような気がしたが気のせいであってほしい、と思ったが現実はそう甘くなかった。それは誰がどういう角度でどう見ようとトランプ柄のトランクケースだ。とりあえずキンジはこれが見つかりとまずいので「入れ」

と、言った。たいへんだなあおい。

お邪魔しますも言わずに入ってくると開口一番といわんばかりに、
「あんたたち、あたしの奴隷になりなさい！」

数秒の沈黙の後、ありえんだろ、とキンジがつぶやく。

「断る」

「ふーん、奴隷ねえ、もしや神埼は俺達をバキューンして、ズキューンでドキューンにするつもりか？」

「アリア、でいいわ。それとバキューンとズキューンとドキューンてなによ？」

「ま、奴隷ってのはパートナーになってくれってことか？まあ、面白そうだからなってやるが、殺りあうのは。いや、なんでもない。お前さんの母親を助けるために俺達をパートナーにしよう。無駄だよ、といたくは無いが、あいつらが相手なら難しいな」

「あんた、ママを知ってるの？」

「ああ、ちよつくら知ってるだけだ。まあ、なつてやる」

後始末は、こいつがやる必要はないからな。だろ、教授。
プロフェシオン

「ふーん。まあいいわ。でキンジあんたは？」

「だから断ると」

「いいわ、こうなることも大体予想はできてた。キンジが言いというまであたしは泊まってく」

アリアはトランク指して言葉を続ける。

「そのための準備もある」

「だからあんたが首を縦に振るまでここに居座るからね！」

こうして、神埼・H・アリアことアリアは、この部屋に住み着くことになった。

The aria continues

依頼RへクエストR

その日の夜。正確には次の日の午前2時15分電話がかかってきた。
(誰だこんな時間に)

「もしもし」

『雛菊京助君だね?』

「はい、そうですが、俺に何か?」

『その寮の屋上に来てくれ。依頼^{クエスト}がある』
ぶつつ

電話が切れてしまった。

|| || || || ||

「あんたか?俺を呼んだのは」

この人の第一印象はまるでルパンみたいだった。

「ええ、その人の代理ですけど」

格好は黒いシルクハット、映画に良く出てくるような片方しかない
眼鏡。片眼鏡^{モノクル}といったか?

^{クエスト}「依頼とは?」

それにマジシャンのようなスーツ。

「私達の依頼とは、神崎・H・アリア君の観察だ」
まるで怪盗ルパンのような格好だ。

「観察?」

「そう、観察。それと護衛だ。観察といっても四六時中見張ってる、
とは言わない。簡単でいいんだ。どこでどんなことをしたくらの
ことで。これを日曜日の午後23時〜25時の間にここに連絡して
くれれば良い」

そういつて男は俺にメモを渡した。

「この番号は・・・教授^{プロフェッショナル}、見張りのつもりか?」

メモには番号と、文字が書いてあった。『雛菊君、期待しているよ』と。

「これを遂行してくれれば週30万は約束しよう。二つ目の護衛はこれからアリア君に、色々な敵が現れるはずだ」

「その敵に、俺は入ってないのか？」

「それは時機に分かることだ。それに、護衛と言っても死なないようにするだけでいい。この護衛を引き受けてくれれば2億君の口座に振り込んでおく」

「それは教授からの軍資金か？」

「余計なことは気が無くていい。ただ、この依頼を受けるかどうかだ。依頼のランクはR」

ランクRとは、Sよりも上のランク。Sランク武偵は一個中隊と同じ戦力とされているが、Rランクの武偵は一個大隊と同じとされている。それと併せれば、この依頼は相当難しく、危険なものだ。

「2つ訊くぞ」

「何かね？」

「お前は何者だ？」

「そうだね、死神の手先とだけ行っておく。便利屋みたいなものだ。キミ達武偵と同じだよ」

死神の手先で便利屋か。金さえ払えばなんでもするって訳か。

「ならもう一つ訊く。どれだけの敵を倒せば、この依頼は終わるんだ？」

「それは、アリア君が死ぬまでだよ。寿命で死ぬか、病死するか、はたまた戦死するか」

そしたらこの便利屋はふと思い出したように、

「そうそう、君にこれを渡すよう教授に言われている。45経口の閃光弾と響音弾だ。」

この人は1弾100万もする武偵弾を3弾つつ計6弾を、俺に渡してきた。約600万相当。

「教授からのプレゼントだ」

俺は、フン、と鼻を鳴らし受け取る。

「では、私はこれで。シユー・アゲイン」

と言いながら屋上から飛び降りると、背中のマントがパラグライダーに変わり夜の空を飛んでいく。

「ご利用はいつでも。ただし、少々お金がかかりますよ」

男はみるみるうちに見えなくなる。

The aria continues

依頼RへクエストR（後書き）

対決1 〈Confrontation 1〉

あの件の2日後

強襲科でナイフ投げの授業の後アリアと俺の模擬戦が行われた。アリアが俺とやってみたいといいオレが承諾したとこ蘭豹が「おう、やれやれ、死ぬまでやれ。」とか良い始めた。なぜ教員免許が剥奪されないのかは不明である。

〓 〓 〓 〓 〓

5分後

「さあ、やるわよ!!」

先手必勝とばかりにアリアがガバメントを撃ちながら突っ込んでくる。近接拳銃戦《アル〓カタ》に持ち込むつもりらしい。接近拳銃戦《アル〓カタ》とは通常「銃〓剣」という方法の高等接近戦だ。防弾防刃制服を着て行こう。アル〓カタは引けば引くほど不利になるためこちらは突っ込みながら閃光手榴弾のピンを抜く。「!?」とアリアは驚いたが、すかさず目を瞑る。俺はD・Eを腹に撃つ。が、避けられた。いつの間にかアリアは俺の背後にいた。

「いつの間に…ッ!」

行ってる間にもアリアは左右のガバメントで1発ずつ撃ってくる。俺はギリギリで避け距離を取ろうとするが、アリアは距離をつめようとすべく接近してくる。俺は右手でガバメントを撃ちながら左手で響音手榴弾のピンを抜き投げる。アリアは閃光かと思ったのか右目を瞑り閃光に身構える。その瞬間に俺はアリアの右側に回り死角に入りこむが、アリアは右目と左目の瞑りを入れ替える。

そのとき、ガウウン!!と響音手榴弾が爆発する。アリアは一瞬怯んだがすぐに体勢を立て直そうとする。俺はその隙をつき零距离まで接近し腹と銃口を密着させる。が、アリアは背中から抜いた小太

刀で首を刎ねにかかるため俺は距離を取りながらガバメントを撃つ。
「やるじゃない」

「お互いに」

俺は背中のホルダーから緑色発煙手榴弾のピンを抜きながら接近してくるアリアの目の前に投げる。そして、シュウウウ、と緑色の煙幕が出てアリアと俺の視界を塞ぐ。が、一瞬にしてアリアは煙から出てくる。が、そこに俺の姿は無い。

ピンピン！とピンを抜く音。それは背中のホルスターから閃光手榴弾と響音手榴弾のピンを抜く音。そして、それをアリアの目の前にカランカランと転がす。

はッ！と気づくアリアに俺は追撃の銃弾をかませると、それは防弾制服を掠めただけで終わるがガウウン！という音と強烈な光が俺とアリアを包む。

俺は銃口をアリアに向け接近するが、ガッ！という音と共に銃が止まる。

「なに・・・ッ！..」

今のアリアは、目が開いている。そのアリアの手のガバメントの銃口は、俺に向かっていて。が、俺の左手のサバイバルナイフもアリアのガバメントに刺さっている。

「引き分けね」

「いや、俺の勝ちだ」

俺は靴の隠し銃でアリアを撃つ、その銃弾はアリアの腹へと真っ直ぐ向かうと、アリアは後ろに若干後ずさりながら、倒れた。

「あんたの勝ちね」

そのときにこの場は拍手で覆われた。俺がSランクに格付けされた瞬間でもある。

「うん。100点」

「100点？」

「そう。100点」

アリアが起き上がりながら言う。

「あんたの点数よ」

「よお、京助、これで死ぬ確率が上がったな」「ああ、おまえなら高い依頼クエストばっか選んでミスってすぐ死ねるな」「よっし、今からさつさと一番難しい依頼クエスト行つて死んで来い！」

俺は煙たがりながらも出入り口に向かうと、閃光手榴弾と発煙手榴弾を使い、一気に逃げる。

The aria continues

ある偉い人は言いました。UFOキャッチャーは貯金箱である、と。

「100点、か」

「何が？」

「いや、さっきアリアと戦^やつてね。100点だった。まあ、でもHSSのお前にはかなわないと思うが」

「ふん。大変だな。まあがんばれ。」
たったったったった

何の音だと思つて振り向いたら何がいたと思う。ではここで問題だ。三択で答えてくれ。

？アリア　？神崎　？神崎・H・アリア

答えは全部だ。

「何しにきた？」

「そんなのわかるでしょ。あんたの首を立てに振らせにきた」

「やだ」

即答かよ。そういうとアリアの鋭い視線がキンジの背中に刺さつてる。

「……あーわかった。やればいいんだろやれば」

「やっとその気になったわね」

ついにキンジが無条件降伏したと思うと

「ただし、条件がある。強襲科^{アサルト}で起きた最初の事件を一度だけだ。いいな。わかつたらついてくるな」

アリアはニコニコしながら

「わかった。その代わりどんな大きな事件でも一回よ」

「ああ、どんな小さな事件でも一回だ。わかつたら帰ってくれ」

「バス停まではいっしょです」

「そうだキンジ、ゲーセン行くか？」

「げーせん？」

アリアは帰国子女だからゲーセンを知らないようだ。イギリスには

無いのか？

「まあ、いけばわかるさ」

「……………」

「ここがゲーせん？なんだか子供っぽそうね。あれはなに？」

「それはUFOキャッチャー……」

（あれ？おーいアリアさん、説明聞いてますか？）

「聞いている」

（嘘だ、絶対嘘だ。だって貴女、顔がUFOキャッチャーのガラスケースと張り付いてますよ。）

「おーい、アリアー」

「……………」

返事が無い、アリアはガラスケースの中のトラダカライオンだからわからないストラップをじーっと見ている。

「おーい、もしもーし。聞こえてますか？」

「……………」

「キンジ後任せた」

「へいへい。おーい、アリアー、やってみるか？」

アリアは誕生日に欲しかったおもちゃをもらったような目をして、

「いいの？でもやり方知らない」

「教えてやるよ。やり方は縦のボタンと横のボタンを順番に押してくださいだけ」

「簡単そうね。やらせなさい。すぐにとってみせるわ」

クレーンが横に縦に動き下がる。このトラダカライオンだからわからないストラップの足に引っかかってすぐに落ちた。

「……い、今のでやり方がわかったわ、つぎ、つぎこそ探ってみせるわ」

「一度やれば誰だってわかるだろ」

クレーンが横に縦に行き足に触れてクレーンが上がる。

「わ、わかったわ。コツがわかったわ。こんどこそ、こんどこそ探
って見せるわ」

わかってないやつの子セリフだな。

案の定3000円使って一個も取れてない。

「ううう」

「おや、あきらめたか、じゃあ次ぎ俺やる」

京助は500円で6回出来るので500円玉を3枚計18回プレイ
できる。

クレーンを横に縦に動かして、右足が上がり落ちる。頭が上がり落
ちる。腕が上がりまた落ちる。あと3回のストック。

「キンジ、後任せた」

「はいはい、こうなるとは思ってたけどな」

キンジがプレイすると、クレーンがストラップの胴をがっしり掴み
その腰にストラップがついていて、さらに2個目のストラップのひ
もに3つ目の足が引っかかっていた。そんなのありか？

「キンジ。落とさないでね。いいわね。落としたら風穴よ」

「だったらケースをたたくな。それに俺がどうこうできるもんじゃ
ない」

ストラップは落ちた。穴に。

ゴトゴトン

「ほらよ」

「あ、ありがとう」

あー、こいつも素直に礼いえるんだな。

「それと、京助、これあんたの分。あれだけお金使ったからこ褒美」
俺がそのストラップを見ると名前がついていた。

（レオポン？なんかいろいろとすごい名前だな）

俺がそのストラップをポケットにしまおうとすると

じーーーーーーーー、というアリアの視線。

「うう・・・わかった付ける。だからそんなに睨むな。何か息苦しく
なる。」

「わかればいいのよわかれば。」

|| || || || ||

俺はキンジの部屋に帰宅後ガバメントのメンテナンスをしてすぐに寝てしまった

バス強取へバスジャック

俺がすやすやと眠っていると電話がかかってきた。こんな時間に誰だ。

「はい」

俺が眠そうに答えると。合成音声で

「その寮の屋上に来い」

|||||

「ふふ、やっと来たね」

この声、どこかで。

「貴方の育て親、覚えてる？」

ああ4年前に事故で、いや、仕組まれた事故で死んだ。

「私はその人の、いやその人は双子の姉さんなの」

「あの人に姉妹がいることは知っていましたが、貴女が？」

「ええ、あの人に4年前に頼まれて、貴方が武偵の2年になったらこれを渡せって言われて」

渡されたのは袋だった。

「あけてみて、何が入っているかは知らないけど」

あけてみたら入っていたのは日本刀が二本。

「それとこれは私からの贈り物」

もらったのはスプレー、薬とナイフだった。

「時間が無いから手短に言うわね。まずそのスプレーは冷却スプレー爆弾にしっかりと吹き付ければ24時間は爆発しないわ。次にその薬、その薬は相手の心理、つまり心の中をのぞくことが出来るわ。ただし、効き目は3分間だけ。最後にそのナイフ。そのボタンを押してみて」

これか？

「何も起きませんよ……いや、微かにだが、振動している？高周波ナイフですか？」

「そう、高周波ナイフよ。知っていると想像するけど超音波で振動してありとあらゆるものを切断することが出来る。振動数は1秒間に4万回振動する。これ造るのに1週間掛かったんだから大事に使ってね。そろそろ時間だから、じゃあね」

すると彼女はさっそうとどこかに行ってしまった。

1人俺は屋上に残された。ためしに日本刀を抜いてみると手紙が落ちてきたので、俺はその手紙を読むことにした。

『京助へ。この手紙を見ているときにはもう私は貴方の前から消えているでしょう。ですが、ひとつ貴方に依頼をします。この少女、神崎・H・アリア。この少女の味方になってください。報酬は1億引き受ける覚悟があるならこの番号の最後に1を加えてください。引き受けないならこの手紙のことは忘れてください。それと京助、私の形見は持っていますね。あれは貴方の未来を切り開くために必要なものです。いついかなるときもはなしてはいけません。この日本刀の前の持ち主は神崎かなえ。もし彼女に会うことがあればもうひとつの日本刀に入っている手紙を渡してください。P S、かなえさんに、ごめんなさい、ありがとうと伝えてください。さようなら』
かあさん。この刀。ありがたく頂戴します。

|| || || || ||

その日俺はうつかり寝坊して7時57分のバスに乗り遅れた。

しょうがないから1時間目のサボリ決定で歩いていくことにした。

そんな時ふと電話がかかってきた。

「京助。あんたどこにいます？まあどこでもいいわ、すぐに強襲科女子寮の屋上に来て」

そりゃちょうどいい。俺は今その目の前にいる。となるとこれがアリアがいった一回目の事件なのだろう。

「わかった。今すぐいく」

俺はそういうと屋上に向かった。

|||||

「早かったわね」

「まあ、真下にいたもんでね。それよりキンジはどうした？」

そう言った直後にキンジが来た。

「キンジ遅い！」わよ」

「わりい」

「まあいいわ。インケスタ東京武偵高校探偵科7時57分発のバスが武帝殺しにジャックされたわ。バスの後方にはUGIを装備した人形も付いてる。みんな、へりに乗って」

俺達はへりに乗り、俺は手に持ったUZIを空めがけて撃ち、動作確認をすばやく終える。

へりにはレキもいた。

「キンジ、これは『武偵殺し』の仕業よ。あんた達の自転車を襲ったのと同じ奴」

俺は『武偵殺し』と言う言葉に眉をひそめる。

「（やはり、アイツなんだろうか。まだこんなことを………人が死んだらどうするんだ、リュパン）」
すると、アリアの声が聞こえる。

「背景の説明をしている時間はないし、あんたには知る必要もない。このパーティーのリーダーはあたしよ」

「さて、………待てよアリア、お前」

「事件は既に発生しているわ！バスは今、この瞬間にも爆破されるかも入れない！ミッションは社内にいる全員の救出！以上！」

「リーダーをやりたいきゃやれ！だがな、リーダーならそれらしくメンバーにきちんと説明をしろ！どんな事件にも武偵は命賭けて臨むんだぞ！」

「武偵憲章1条！『仲間を信じ、仲間を助けよ』！被害者は武偵高のみんなよ！それ以上の説明は必要ないわ！」

「クソッ！ああやるよ！やりゃいいんだろ！」

「おまえら、少し静かにしてくれ、自己暗示に入りたくないんだ」

ゴメン、と顔を下げながら謝るアリア。

でもその顔は、笑っていた。

徐々にヘリはローターの回転速度を上げていくため、俺たちはインカムを通じて話を始める。

そして次第にヘリはバスに追いつく。

「ゲーエン！！」

俺の叫びと同時に、俺たちは自由落下に近い速度でバスの上に降り立つ。

が、バスの上はすべり安く、俺は足を滑らせたが、足元に氷を生成、すぐに体勢を立て直す。

俺はまず手榴弾のピンを抜き敵車の中に放り投げた。

爆風が押し寄せる。すかさずどこからともなくヘリがやってきた。

キンジは既にバスの中に入って行った

「アリア、爆弾は任せた。俺とレキはヘリをどうにかする」

「わかりました」

「わかったわ」

俺はアリアが爆弾を探しに行く前に今朝貰った冷却スプレーを渡す。バババババ！と小型ヘリのローター音。

ヘリは8機。

俺はUZIで横薙ぎに——通称馬賊撃ち——撃ち、3機撃ち落とす。

バスン。レキが1機撃ち落とした。

あと4機。俺はD・Eを取り出し。

バアン。1機撃ち落とした。あと3機どこだ？

左右と後ろから聞こえるローター音。

俺はUZIでは間に合わない判断し、UZIを捨てると同時にホ

ルスターにしまつてあるガバメントを一丁取り出して左右のヘリを撃つ。

「おいアリア！大丈夫か？」

最悪だ、と俺は思う。

「キンジ！伏せる！」

俺が言うが、キンジは状況が理解できずに固まり、そして、アリアの頭に銃弾が刺さった。

バスの上に飛び散る鮮血。

「アリアっ！？」

雨で流れていくアリアの鮮血。

バン！とD・Eでヘリを撃ち落し、追加でやってきた案山子人形の乗った車に手榴弾を投げ込む。

「アリアッ！アリアアアア！！」

俺は携帯を取り出し救護科に電話した。

「ここに任務中^{クエスト}に負傷したものがいる。場所はレインボーブリッジ。早く来てくれ。額に銃弾二発。キンジ、バスを止める。」

|| || || ||

その後バスは止まり救護科^{アンビュラス}の人たちがアリアを運んでいった。幸か不幸かアリア以外のけが人はいなかった。京助は祈っていた。

アリア、万が一、いや兆が一にでも死んだら風穴地獄に送ってやるからな、と。

The aria continues

バス強取へバスジャック（後書き）

後書き

「ゲーエン」とは開始、スタート、という意味のドイツ語。

g e h e n ——— 日本語読み・ゲーヘン

ドイツ読み・ゲーエン

それとわかると思いますが、武器とかわからなかったら言っておさ
い。

航空機強取事件開始へハイジャック・スタート」

翌日、アリアは目を覚ましたという連絡を受け俺は武偵病院に行った。

（個室か、さすがお嬢様つて所か。神崎・H・アリア。）
コンコン

俺はノックして病室に入ると、アリアの額に×の字が2つ刻きざまれていた。

「何だ、あんか。何かよう？」

「お前が目を覚ましたと聞いてな」

「そつ、それで、何か用？」

・・・

俺はいったん黙ったが、すぐに口をひらく。

「ま、これでも食つて元気出せ」

俺はそこで買ってきたももまんを渡すと。

「ありがと」

元気の無いアリア。

「じゃあな」

俺はそう告げると病室を後にした。その眼は、どこか悲しそうだった。

＝ ＝ ＝ ＝

あさつて、アリアはロンドン武偵局に帰るそうだ。

俺はこの前の依頼主に観察結果を報告した。すると電話がかかってきて。

「はい」

「ふむ、君はどうやらアリア君に失望されたか、それとも」

「・・・」

するとこの前の依頼主はこう言ってきた。

「なに、気にすることは無い。これも予想どつりの出来事だよ」
（まだ依頼は続いてるって事か。）

〓 〓 〓 〓 〓

次の日の下校時、アリアを見つけた。だが、そのアリアはどこかいつもと雰囲気違って見えた。

「尾行^{っけ}してみるか。」

つけていくとキンジが見えた。どうやらキンジもつけていたらしい。さらに尾行していくと意外なところに着いた。

新宿刑務所

「・・・・・・へったな尾行。尻尾から頭まで見えてるわよ」
「どうやらキンジがつけていたのがばれてたらしい。」

「お前、前に言っただろ『武偵なら自分で調べなさい』って」

俺はアリアの後ろに回りこむ。

「ふーん、かなえさんに面会にでも着たか」

アリアとキンジは驚いている。どうやら気づいてなかったようだ。

「あんた、いつの間に」

俺はアリアに近づいて、まあ、気にするな。といってやった。

「まあいいわ、どうせ追い払ってもついてくるんでしょ。勝手についてきなさい」

拘置人面会所で2足りの管理官に見張られながらアクリル板後越しに女の人が出てきた。

「まあ・・・アリア、この人たちは彼氏さんたち？」

「ちっ、違うわママ」

この女性、やはりイ・ウーのスケープ・ゴート。

「始めまして、私は――」

「神崎かなえさん。イ・ウーのスケープ・ゴート。約900年の濡れ衣を着させられている。H家の末裔こと、神崎・H・アリアの母親。お久しぶりですね」

かなえさんは驚いたようで、ええ。と返事をした。

「あんた、なんでそんなこと知ってんの？『お久しぶり』ってどういうこと！？」

そんなことはどうでもいい、と前置きをして、俺はこの前もらって帯刀していた日本刀を見せた。

「これあなたのものだった物ですね。これの鞘の中に手紙が入っていました。うちの母からです。読みますか？」

「あなたのお母さんは、ひなぎくきり雛菊桐さん？」

「はい。それとうちの母から遺言です。ありがとう、ごめんなさい。だそです。」

管理官が、時間だ。と、3分てのは早いもんだな。

「分かりました」

そこにアリアが入ってきて。

「ママ、絶対にママのことを助けるから。絶対最高裁までにはイ・ウーの連中ここに入れてやるから。だから待っててママ」

管理官に押さえつけられながら出て行くアリア。

刑務所の前まで出る。

俺は1つ溜息をつく。

「しょーが無い。少し待ってるお前に1つプレゼントをしてやる」

俺はアリアをなだめるためにそう言う。

「いらない」

（はあ、こう返事が来ることはわかっていたが、ちと傷つくな。）

「人の好意はありがたく貰っておけ」

俺は電話を取り出すと早速とある屋敷に電話し始めた。

『坊ちゃん、何の御用でございますか？』

「その呼び方はやめてくれ。」

俺は真剣な顔に戻して。

「一つ頼みがある。日本新宿刑務所に拘置されている神崎かなえさんの面会時間を増やしてくれないか？」

『かしこまりました10分ほどお待ちください。』

電話を切ってから俺は近くにあったファーストフード店に入った。

10分後

俺が店から出てくると、アリアの顔に涙の筋があった。

電話が鳴った。

『坊ちやま、神崎かなえ様の面会時間が13分に延びました。』

「有難う、それとその呼び方はやめてくれ。」

俺は電話を切りアリアのほうを向くと、

「アリア、どうやらお前にプレゼントが出来たらしい、かなえさんとの面会時間が週3分のところを一日13分にすることが出来た。」

アリアはこれまでに笑顔で、そしてものすごいくらい顔で有難うと笑っていった。

「礼だったらジジイ言ってくれ。俺は何もしてない。それよりも、早くかなえさんに伝えたらどうだ？」

そういうとアリアは刑務所の中に行ってしまった。

アリアが出てくると。

「ありがと。こんど何かお礼しないとね。」

「なに、気にするな、俺は4条を破っただけだ。」

〓 〓 〓 〓 〓

その日の夜、俺は夜の東京をうろついていた。すると裏路地に女の

子を絡んでる不良？がいた。

「おい、その不良としてはチトいろいろと厳しそうなアホ面の不良ども、なに年下いびりしてる。ロリコンなの？いじめいくないかつこわるい。」

「あああ？何打てめえ。コイツで脳天ぶち抜かれなくなけりやとつとどつか行きな。」

グロック17、中国製が。

「3・7%」

「はあ？らりつてんのかてめエ」

そりやこつちの台詞だセリフ

「もう一度言う3・7%この距離でお前達素人が俺の額に当てる確立。だからやめとけ。それにそれは中国製、どうせすぐにジヤムる。」

「だが良く考えてみる俺たちは7人、お前は1人。どう見てもこつちがかつ。みんな、やつちまえ。」

仕方ないか。俺は制服から閃光手榴弾スタングレネードを取り出すと。

「ほれ」

音をつけるならビカアアア、だろうか。不良たち6人は気絶してしまった。

リーダーらしき者が

「た、助けてくれ。これやるから見逃してくれ」

男はそのまま逃げてしまった。

中国製のチャ力貰つてもな。

「大丈夫か君？」

「え、あ、はい。助けてくれて有難うございました。よければお名前教えてくれますか？」

「東京武偵高強襲科所属2 - A雛菊京助だ。じゃあね、1 - Cこんの今野

江梨ちゃんえり」

そういつて京助は帰っていった。

「なんであたしの名前を。」

彼女が自分の武偵手帳が落ちてるのに気づくまで30秒かかったのは余談だ。

〓 〓 〓 〓 〓

翌日

羽田の飛行機でアリアは帰るはずだまだ間に合うな。

俺は武器をありったけ持っていくとふとあの薬のことを思い出しそれも持っていく。

〓 〓 〓 〓 〓

羽田の飛行機の中に俺はいた。

「おー、さすがは貴族様。ここ片道20万以上するんだぞ。」
そのとき

『武偵だ、離陸を中止しろ』

おいおい、キンジー体お前何やってやがる。

T h e a r i a c o n t i n u e s

航空機強取事件開始へハイジャック・スタート（後書き）

話しが分かりにくかったらごめんなさい

対決2《Confrontation 2》

『武偵だ離陸を中止しろ』

アナウンスがONになっている為機内中に聞こえる。

「あの馬鹿、なにやってんのよ。」

「まっただ。」

「何であんたもここにいろのよ、ロンドンに付いたらすぐにひき返さない。エコノミーくらいは買ってあげるから。」

キンジなにやってやる。

『お…お客様！？失礼ですが、ど、どういふ——』

『説明している暇は無い！とにかくこの飛行機を止めるんだ。』

キンジの説得もむなくこの便は動き始めた。

この飛行機が動いてから少ししてキンジがこっちに向かってきた。

「さすがワリアル貴族。これ片道20万位するんだぞ。って、何で京助がここにいろ。」

俺は少し考えながらぶつぶつとつぶやいた。

「キンジ、チャリジャック、バイクジャック、バスジャック、カージャック、シージャック、金一、武偵殺し、3回目、っ……そうか、そういうことが、次に狙われるのはアリアー！」

バンバアアン

俺達には聞きなれた音が聞こえてきた。

俺は回りお見ると、どさ、どさ、と音がしたところを見た。そのアテンダントの足元には二人の同僚と思われるもの達が転がっていた。俺はガバを抜くと、

「動くな——」

そのアテンダントは、にい、と笑って

「—Attention please《お気を付けください》」で

やがります。」

すると相手の背中からシュウウウ…という音が聞こえた。

ガス缶か、「みんな部屋にもどれ、ドアを閉める！！」

俺が部屋に戻ると、自分の異常を確認した。

（異常なしか、クソ、ダミーか、やられた。）

「京助、武偵殺しは一階のバーよ。」

俺達は慎重に一階のバーに向かっていく。カウンターには足を組んで座っている女がいた。さっきのアテナダントだ。だが、来ているのは武偵高の制服。

「キレイに引っかけってくれやがりましたね。」

武偵殺しは、ベリベリ、とマスクを取った。すると見たことがある顔が出てきた。

「やはりお前か。武偵殺し、峰理子。いや、理子・峰・リュパン4世。」

「リュパン、まさか、あのリュパンか、教科書に載ってる。」

「よく知ってるんだけど家の人間は理子とは呼ばなかった。家の奴らはみなこう呼んでた、お母様がつけてくれたこの可愛い名前を呼ばずに、どいつもこいつもみんなして理子を4世4世4世4世、理子は数字か、DNAかあたしは理子だ！数字じゃない！あたしは曾お爺様を超えなきゃ一生あたしじゃない。あたしは自由になれる、だから、ここでオルメス、あんたを倒す。そのためにイ・ウーに入った。」

「ちよつと待て！オルメスって何だ！！イ・ウーってなんだ！」

俺はキンジを黙らせるために、後で教えてやるといった。

「双剣双銃のアリア。奇遇よね、理子も二つ名を持っている。そう、双剣双銃の理子。でもアリアのそれは完成ではない。これが真の双剣双銃。」

髪が動く。髪にはナイフが2本、手にはワルサーP99が二丁。

「アリア、キンジを頼む。」

「はあ、あんたなに言ってるのよ、役立たずのくせに。」

「いいから、武偵憲法第一条、仲間を信じ、仲間を助けよ。行け！」
俺はアリアとキンジを一時撤退させると、

「いいの？仲間を逃がしちゃって。まあ、ディナーは取っとくものよね。」

言ってる、悪いが俺は負ける気はさらさら無い。

「いくぞ！」

俺はAKS-47を取りしてフルオートで撃つ。

「その程度の弾幕はあたらない！」

俺はワイヤーでこのバーに張り巡らせた。これで少しは動きは制限できる。

おれはAKS-47を捨て^{デザートイーグル}D・Eでまた撃つ。今度は狙って。こいつなら防弾制服の上からでも相当ダメージを食らう。

バアンバアン

俺は戦いながらワイヤーを奴の動きを封じるように張り巡らせた。

「4世、ひとつ教えてやる、戦いの勝利方法は、裏の裏まで攻略することだ。」

なに？という顔をしているな。

「俺がただ弾幕を張ってるだけだとも思ったか。ならばお前の周りを見てみな。」

はっ、と気づいたようだがときすでに遅し。

「理子峰リユパン4世、お前を逮捕する。」

にやり、不気味な微笑み。

（髪が動いている）

理子は一髪で持っているナイフでワイヤーを斬った。だが、俺はその間にベレッタに替えると。

バアン

俺は片目をつぶり、狙いをつけるようにしながら閃光弾^{フラッシュ}を撃った。
（時間稼ぎはこのくらいでいいだろう。俺はあくまでサポートだ）

俺は片目を一時的に失明したが、理子は一時的に失明しているはずだ。俺は片目でアリアたちが隠れているところに行く。

「おやおや、アリアの顔が真っ赤ってことは、なるほどふむふむ。」

「あ、あ、あ、あんたなに考えてんのよ。」

「京助、理子は？それと片目どうした。」

「本物の閃光弾で失明しているだろう。」

「あんたよくそんなもの持ってたわね。」

「来たぞ。俺に考えがある。」

「くふふ。バッドエンドのお時間ですよ。」

俺はベットを守るようにして立ち、キンジはシャワールームを守るようにして立った。

キンジは酸素ボンベを盾にして理子に向かっていった。すると機体が大きく揺れた。

理子のワルサーP99が体制を崩したキンジの額に向ける。やばいぞ死ぬ。

ピキン

バタフライナイフが開く音。すると額に向かっていった弾丸を斬った。なんでもありかHSS

「アリアいまだ！」

俺が叫ぶとアリアが荷物入れに潜んでいたアリアが出てきて理子の髪を切り落とした。そこに俺がD・Eで追い討ちをかけた。

「理子峰リユパン4世——」「殺人未遂の現行犯で——」「逮捕するわ。」

ん？俺は何か異変を感じた。試しにあの薬を飲んでみる。

はっ、読める。こいつの考えが。なるほど。

「こいつにこんな過去が。」

俺はさっきのバーの所まで行って有った。爆弾見つけた。俺は冷却

スプレーを爆弾に吹き付ける。これで逃げ道はふさげた。
あとはアリアの説得だな。

The hijacking end

俺はあの薬で理子の心、記憶を覗いた。

それにはいつもの理子とは考えられないようなひどい姿の理子があった。

服はぼろきれ一枚。部屋にはフリフリのドレスなど無く、ただ薄暗く冷たかった。

理子はそこに監禁されていた。

そこに一人の男が現れ理子に向かってこう言った。

「4世。いや、理子峰、ここから出たいか？」

理子は縦にうなずいた。が、理子がそこから出る前に男は殺された。

「4世。ここから出ようとしても無駄だ。だが、ひとつチャンスをやろう。初代を超えたという証明を俺にしてみろ。そうすれば俺は貴様をもう追わない。ここからも出してやる。」

鬼は理子に向かってこうこう言い放った。

理子はそこから出た。その鬼の呪縛に縛られたまま。

それから理子はイ・ウーに入り、今に至る。

|| || || || ||

「そう、理子にそんな過去が。でもだめよ、こいつはママに約10年の冤罪を着せた。武偵殺しとして。逃がしたら共犯として俺たも逮捕することになる。」

ああ、と答えてから。

「なら、こいつも俺達の仲間につきずり込めばいい。闇の世界から、光の世界へ。だろ。それと理子。」

理子は顔をうつ伏せたまま話を聴いた。

「お前には武偵殺しとして証言してもらおう。」

俺は、でもな、と前置きしてから。

「自分が武偵殺しだって証言したら、俺がお前を守ってやる。」

俺は理子の頭をなでながらこうささやいた。

「命に代えても。」

その言葉を聴いたとたん、理子は泣き出した。

「だから、逃げないでくれ。いまからは俺はもうお前を4世とは言わない。これからは、『理子』って呼んでいいな？それともしにここから逃げたりしたら、風穴開けるからな。」

そういうと理子は縦にうなずき、泣きながら抱きついてきた。

ドガンドガン

急に機体が大きく揺れた。

「京助、ミサイルが飛んできた。内側の二つのエンジンがやられた。」

チツ、内側のエンジンは燃料門の役割もかねているんだ、そこやられたらどこ止めても燃料の漏出は止められない。

「キンジは、コックピットに向かえ、アリアも一緒に。」

キンジはアリアはもう向かっていると俺に告げてからコックピットに向かった。

「さて、なあ理子、一緒に来てくれるか？武偵殺しに頼んでるのはなく、俺は理子に、峰理子に頼んでるんだ。」

理子は、わかったと答えてから俺と一緒にコックピットに向かった。

|||||

「アリア、キンジ、これ運転できるか？」

「セスナなら、ジェット機なんて飛ばしたこと無い。」

クッ、

「キンジ場所かわれ。」

俺は無線機を探し当てインカムからスピーカーに切り替える。

『……31……で応答を。繰り返す——こちら羽田コントロール。AN A 6 0 0 便、緊急通信周波数127・631で応答せよ。繰り返す、127・631で応答せよ。』

俺は計器盤に備え付けられたマイクをONにする。

「……こちら600便。当機は先ほどハイジャックされたが、取り戻した。機長と副操縦士は負傷し、現在は同乗武偵4名のうち3名が操縦している。同乗武偵は遠山キンジ、神崎Hアリア、雛菊京助、峰理子だ」

キンジは機長から拝借した衛星電話を操作している。俺はそれをスピーカーにつないでおく。

『もしもし』

そこから聞こえてきた声は武藤の声だった。

「俺だ、武藤。変な番号からですまない。」

『キ、キンジか、お前の彼女が大変だぞ。』

武藤剛毅。（ロジ）車輜科の優等生。

「彼女じゃないがアリア、京助、理子がここにいる。」

「か……かの、かの!？」

俺はアリアに落ち着けといってから。

「キンジ変われ。武藤ハイジャックのこと報道されているのか。」

『京助か。ああ、大ニユースだ。乗客名簿に通信科が周知してな。（コネット）』

そこにアリアと京助の名があった。今みんなで教室にいる。』

「そうか、まあいい、こっちの情報を手短に教える。この機は武偵殺しにハイジャックされ武偵殺しはどっかに行っちゃった。」

理子の顔が、えっ!？って顔をし、アリアが、武偵殺しならそこにいる、と言おうとしたのでキンジが人差し指でアリアを制止した。

「おまけに内側のエンジンを二基やられ今TOTALが540、538、535、クソ、大幅にもれてる。」

アリアが割って入ってきて

「燃料漏れ、止める方法教えなさい。」

「無理だ、内側のエンジンは燃料門の役割をかねている。どこを止

めても無駄だ。」

『よく知ってるな、まあ残量はともかく漏出のペースが早い。もって後15分だ。』

『ANA600便、操縦はどうしている、自動操縦は絶対にきらないようにしろ。』

「そんなものにつくに壊されてるわ。今はあたしが操縦している。」

「……というわけだ、着陸方法を教える。着陸はキンジに任す。すぐに接近する航空機との緊急通信を準備しろ。そしてすべての機長に同時に通信を開いてくれ。」

『一度につて、キンジは聖徳太子じゃないんだから。』

「出来るんだよ。今のあいづなら。」

この便横須賀上空に差し掛かったところで

『ANA600便。こちらは防衛省、航空管理局だ、羽田空港の使用は許可できない、空港は現在自衛隊により封鎖中だ。』

『なにいつてやがんだ！』

叫んだのは武藤だった。

『誰だ。』

『俺は武藤剛毅。武偵だ。600便は燃料漏れを起こしている。飛べて後10分なんだ代理着陸なんてどこにも無い。羽田しかねえんだ！』

『武藤武偵。私に怒鳴っても無駄だ。これは防衛大臣による命令なのだ。』

俺はふと横を見るとANA600便の横に——F-15Jイーグル——

航空自衛隊の戦闘機がぴつたりとくっ付いている。

するとキンジが

「おい防衛省。窓の外にあんたらのお友達が見えるのだが。」

『それは誘導機だ。誘導に従い海上に出て千葉方面に向かえ。安全な着陸地まで誘導する。』

「アリアそれに従うな。そいつらは海に出たら俺達を撃つつもりだ。」

京助がそういうと、ここにいるみんなが息を呑んだ。

「おい防衛省、あれ撃ち落して良いか？」

「そんなことしたら君達も危ないのがわかってるだろう。」

「アリア、地上すれすれを飛べ。武藤滑走路にはどのくらいが必要だ？」

「エンジン二基のB737 - 350なら... まあ2450Mは必要だ」とするとキンジが。

「レキ、学園島の風速は？」

「私の体感すが、5分前に南南東風速41・02M」

「じゃあ武藤。風速41Mに向かつて着陸すると滑走距離は？」

「... まあ... 2050つてとこだ。」

「... ぎりぎりだな。」

「ああ、キンジ、あれに降りるつもりか。武偵高の人工浮島に、南北2KM東西500M 南南東に向かつて着陸。対角線で2061Mまでとれる、か。」

「お、おい」

「大丈夫だ、こいつは『学園等』に突っ込むわけじゃない。『空基地島』だ。」

「おいお前ら、本当に京助とキンジか？ そんなのSランクでも思いつかねーぞ。」

「武偵憲法第1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。返ったら俺達の面拝ませてやる。」

「... あれにか、理論上は可能だが、でもなお前らどんなパイロットでも誘導灯が無けりや夜間着陸は無理だ。しかも豪雨で最悪、おまけに爆風ときてる。底に素人が手動着陸なんて。」

「だったらここでみんなで心中するか？俺とキンジとアリアと理子と。」

「あ… あんたらと心中なんて死んでもお断り!!」

矛盾したこといつてるな、っと突っ込んでる場合じゃない。

「ああよかった、アリアやらとやっと意見があった。俺もまだ依頼受けたばかりだからな。武偵憲章第二条、依頼人との約束は絶対守れ。つーわけで俺はまだ死ねない。」

理子の顔が少し朱色になった。俺はキンジに無線を渡した。

「当機はこれより着陸準備に入る。」

「勝手にしやがれ、失敗したら轢いてやる。」

無線が斬られてしまった。

後3分

この飛行機は短い滑走路に着陸するため減速をしていた。

「アリア、キンジ、間違ってもしくじらないでくれよ。乗客約200人とアテンダントと俺達の命がかかってるんだからな。」

「馬鹿にするな」

へいへい。アリアは操縦のメインを副操縦士に渡した。

すると俺でもわかる。無理だ。

「キンジ。大丈夫。今のあんたなら出来る。武偵をやめたいなら、武偵のまま死んだら負けよ。それにあたしだってまだママを助けない。こんなところで死ぬわけにはいかない。」

まるでアリアの言葉が魔法のように空き地島に、キラ…キラ…キラ…と空き地島に光が見え始めた。

「キンジ見てるかバカヤロウ。」

武藤の回線が復活した。

「武藤!?!」

俺とキンジがはもった。

「お前が死ぬと白ゆ… いや、泣く奴がいるからよお! 車輛科で一番でかいモーターボートと装備科の懐中電灯みんなが無許可で持ってきたんだ! 全員分の反省文お前らが書け!」

その回線に3者間通話、4者間通話…と割り込んで来る回線があり、

『キンジ！』『機体が見えるぞ』『あと少しだ！』『京助、後でなんか奢りやがれ！』『りこりん大丈夫？』

などと聞こえてきた。あいつらは学園島から空き地島に渡り、誘導灯を作っている。

——武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ——

キンジは高度を丁寧に下げていく。奴らが示した誘導灯まで。

ANA600便は、雨の人工浮島^{メガフロート}に強行着陸を敢行する。

目玉が飛び出んばかりの振動でアリアが逆噴射をかける。

「止まれとまれとまれとまれとまれとまれ——」

甲高いアリアのアニメ声に合わせて

「いくぞー！」

キンジは地上走行用のステアリングホイールを素早く操作して機体をカーブさせた。

雨の滑走路、やはり2050では止まらない。だが手はあるんだろうキンジ。もちろんそのつもりで突っ込んでいるんだろうな。

迫ってくる、風力発電の、風車の、柱が——！！

ガスンンンンンンンンッ！！

翼に風車の柱をぶち当てて、引っ掛けて、600便はぐりりとその機体を回すように滑らせキンジとアリアはシートベルトをしていたにもかかわらず洗濯機の服のようにもみくちゃになり、アリアのスカートは派手にめくれがりキンジに覆いかぶさるように重なっていた。

パシャン

カメラのシャッター音

キンジが恐る恐る後ろを見ると俺がカメラでそれを取ったのが見つかった。

「おつと忘れてた。」

俺が理子を起こすと。

なに？というような顔をしたんで

「武偵殺し、殺人未遂の現行犯で逮捕する。」

カシヤリ

手錠がしまる音。が理子は逮捕されてない。えっ？と言う顔をして
いるので、

「俺は言つたろ、『武偵殺しを殺人未遂の現行犯で逮捕する』って、
理子は理子だ、武偵殺しじゃない、だろ。」

俺がそういつて笑うと理子はまた泣き出した。

「でも、かなえさんの証言はしてもらうぞ。」

〓 〓 〓 〓 〓

俺、キンジ、アリア、理子は救護科に運ばれ次の日の朝から夕方ま
で警察やら取材やらで大変だった。

理子は事件を起こした犯人を逮捕することでその犯人の冤罪の分が
引かれるということだ。

俺達はみんな1単位分ずつもらえることになった。

〓 〓 〓 〓 〓

俺たちはやつとのことでキンジの部屋に戻ってきた。

そこには、俺、キンジ、アリア、なぜか知らないが理子もいる。

「キンジ、京助、話がある。」

俺とキンジは首をかしげて頭に？を浮かべていると、

「おお、アリアがついにキーくんかきょーくんに愛の告白、または、
ふたまた？」

「っ・・・ ちっ…違っ…断じて違っ。」

「まあ、まあ、で、話って何だ？」

「そうそれ、明日このヘリでイギリス海軍の空母まで行ってそこ
からロンドンに行くわ。パートナーが貴方達なら良かったんだけど。
まあ、一回って言う約束だし。しょうがないよね。それにあたしロ
ンドンで派手に動いてたから早く帰って来いってうるさいのよ。こ

れを機に体勢を立て直すつもりだけど。まあ、気が向いたらで良いけどたまには会いに来てね。」
その間誰もしゃべれなかった。俺もキンジも、理子も。

＝ ＝ ＝ ＝

次の日の朝

「じゃあねキンジ、京助。」

そういうとアリアは行ってしまった。

が、足音がしない。俺とキンジは気になって覗いてみると、アリアが泣いていた。

「いいのかキンジ？」

「ああ、あんな疫病神がいなくなってせいせいする。」

その声色はどこか強がっていた。

俺は殴りたかった、そんなことを言うキンジを殴りたかった。

20分してもう一度覗いてみるとアリアはいなかった。

（まあそりゃそうか、ん、キンジ？）

キンジは何かをつぶやいてから出て行った。多分、女子寮の屋上に
ある、ヘリポート。

「ふっ、もうちょっと素直になれよ。」

「きょーくん何が？」

なんでもない。といってから。

「お前は俺に何か聞きたいことがあるんじゃないか？」

理子は裏理子になってから

「なぜ私の本名を知っていた？」

「そんなことに理由が必要かい？まあ、あえて言うなら知ってたから、かな。」

理子は俺にワルサーP99を向け

「はぐらかすな。」

「怖い怖い。そんなものを向けなくてくれ。まあこのこと口外にし

たら理子、死んじゃうよ。」

「かまわん」

「俺の本名は雛菊京助。これは本当だ、まあ、前の仲間に調べてもらっただけだ。イ・ウーにハックキングして。以外に浅いところにあつただけだね。協力者のコードネームはH・Eだ。俺が言えるのはここまで。後はこれを見てくれればわかるね。」

出したのは武装検事の勲章。

「なぜ、そおれをお前が持っている。それになぜあの時私を殺さなかった。」

「言つたでしよ、守るつて。」

ガチャン

鍵が開く音

「おかえり。」「ただいま」

おれはこの何気ない動作が幸せなのかもしれないとおもつた。するとキンジが、

「新しい同居人の歓迎会だ、みんな、買い物行くぞ。」

「その前にキンジ、あれを。」

「あれか。」

と言い合い二人ではもらせるようにして

「「これにて一件落着」」

The aria continues

The hijacking end (後書き)

誤字が有ったら教えてください。

新たな物語の始まり〈Opening of a new story〉

買い物が済んでキンジの寮

「ご飯はお代わり自由、肉、野菜は早い者勝ち。麦茶、オレンジジュース、リンゴジュースはそこにある。水は蛇口ひねれば出てくる。肉、野菜は栄養にして7日分はあるから遠慮なく。では、みんな揃ったことだし、いただきます。」

「……いただきます」「」

アリアも少しはこっちの生活に慣れたようだ。いいな、こっこの。俺は理子の隣に座り、話しかけた。

「どうだこっこの、楽しいか？まあ、俺はお前のトラウマが消えるまで付き合うよ。」

「きょーくんなに言ってるの。理子がこんなことしてて楽しくないわけ無いじゃん。」

アリアとキンジが肉を奪い合っている、野菜も食べ野菜も。

「そうか、それは何よりだ。」

俺は肉と野菜を持ってきて、

「ほれ、まだ大量にあるから奪い合うな。」

こんな何気ない日常。平和な日常。イ・ウーのことなんか忘れてしまいそうな日常。

アリアとキンジが肉を取り合っている日常。

俺はベランダに向かう。

「どうした京助？」

パチパチパチパチ

さて、一人だけうまいものでも食うか。

そこにあるのは、炭に火が点いている七輪がおいてある。

「京助、一人だけ七輪とはどういう冗談だ。」

キンジの目が据わっている。怖い、地味に怖い。

「わかったわかった。お前らも使うがいい。」

アリアは、七輪？つてなに。つて訊いてきたので俺は答えてやった。「七輪つのは、簡単に言つて肉をおいしく焼く道具。ただし、遠火^{とあひ}で焼かないといけないため時間がかかる。ついでにアリア、野菜も食わないとでかくならんぞ。背も胸も。」

風穴開けられたい？と訊いてきたので首を横に振つておいた。
イ・ウーではなく仲間に殺^やられたらたまらん。

|| || || ||

次の日の夜

キンジはケータイのメールがなったのに気づいてギョツとした。俺がそのケータイを覗くと49通目のメールが送られていた。その1通目を見ると『同棲してるってホント？』で始まり、49通目を見ていると

『今からいきます。』となっていた。おいおいどうするキンジ。ピンポン

来た。やばいなキンジ。俺が恐る恐るあけてみると、いた、やつぱりいた。

「きんちゃん、同棲してるってホント？」

そこには巫女装束に額金、たすき掛けという戦装束^{せんさうそく}に身を固めた白雪がいた。

アリア、空気読んで部屋から出てくるなよ。

「キンジ、ももまんある？」

出てきたよ。ああ、理子だけでも逃がすか。

「ア、アリア、に、に、にに、ににに逃げろ！！」

「やつぱりいた神崎ハリア。」

「ま、待て白雪！落ち着け。」

「きんちゃんは悪くない！きんちゃんはだまされてるに決まってる。」

「キンジ、後は任せた、俺は逃げる。まきぞいを食らうのはごめんだ。つーわけで、じゃ。」

「じゃ。」

理子と京助が逃げやがった、後でどうなるか覚えとけ。という顔を
しているが気にしない気にしない。

「この泥棒猫、きんちゃんを汚した罪、死んで償え。」
神崎Hアリア

「ま、まて白雪。俺はどこも汚されてっ、汚されてない。」

噛むなよそこで。

「キンジ何とかしなさいよ、何でこうなってるの、何なのよこの展開！」

ほろろきしらゆき
星伽白雪、つやつやした黒髪ロングの、おしとやかで慎ましい、古き良き日本の乙女のはずだ。

：本来は、鬼の形相で、日本刀を振り上げて、

「ア、ア、アリアを殺して私も死にますうー！」

などと言うわけが無いはずなのだが。キンジ、アリア、死ぬなよ。

てんちゅう
「天誅うー！！！」

白雪はアリアめがけて突進し、脳天めがけて刀を振り下ろした。やべ、助けてやるか。

カキン

心地よい金属音が響く。俺がこの前もらった日本刀で受け止めた。今気づいたが、これかなり強いな。

カキンカキンカキン

続けざまに鳴り響く金属音。白雪はたまにこういう発作をする。主にキンジに近づいてくる女性に対して。よし、この日本刀の名前を決めた。村正に決めた。

「まあ、白雪落ち着け。」

「どいてきょうくん。私は、私はアリアを殺^やる。そして私も死ぬ。」
はあ、不幸だ。

「いいか、聴け白雪。アリアを連れてきたのは俺だ。アリアとはパートナーを組むつもりでいて、連携を高めるために同居しているに

過ぎない。わかったら落ち着け。」

「そうなのきんちゃん？」

「あ、ああ、そうだ、そのとうりだ。」

「なに言ってるの。私がムグッ」

俺はアリアの口をふさいでから

「アリア、頼むから余計なことを言わないでくれ。」

俺はアリアの口から手をどけると、ムグムグ、プハア。と息を整えている。

「わかったか白雪、お前が思ってるのはあくまで誤解だ、わかったらここから立ち去ったほうがいいぞ、あれがそろそろ切れそう^{アリア}だ。切れたら俺はもう止めん。いいな。あれが切れる前に帰ってくれ。」

というわけで、じゃ。」

俺が白雪を強引に押し出すと、

「わ、わかった、その代わり何かあったらいつてね。」

そう言っ^{アリア}て白雪は帰って行った。まったくなんだったんだ。

「まったくなんだったのよ。」

やれやれ。困ったもんだ。あの発作はどうやったら直るんだ。

The aria continues

とある休み時間にて

あれから3日後の昼休み

「ここいいかな？」

そう言ってきたのは不知火亮^{しらぬいりょう}。昔よくパーティーを組んでいた。

武偵ランクはA、バランスの良いAだ。格闘・ナイフ・拳銃とどれも信頼が置ける。拳銃はLAM付きのSOCOM^{ソーコム}と信頼性抜群の人気の銃だ。おまけに几帳面でイケメン。そのため良くモデルだが不思議なことに彼女はいないらしい。

俺が不知火を呼ぶと、なんだい？と答えてきた。

「放課後あいてるか？相手たら組み手いいか？」

不知火は快く引き受けてくれた。そしてなぜ俺がこいつと組み手をするかというと、アリアと戦^やって勝ってしまうとSランクに格付けされてしまう。今のキンジでは相手にならない。武藤と理子はダメだ。そのため不知火しかない。まあ、理由はそれだけではなく武器の扱いやすさとかを調整するためにはこういう組み手が有効だ。それに装備科^{アムト}に武器を作ってもらってそれが今日完成するのと。この前もらった武器のそれもあるけど。

「ん、組み手、良いよ。」

そこに武藤が割って入ってきた。

「キンジ、事情聴取させる。」

事情聴取って、キンジ何かしたのか？まあ、俺には関係が無いが、

俺は飯も食べ終えて暇なのでゲームを始めた。

「キンジお前星伽さんとけんかしたか？なんか沈んでたぞ。今朝温室で花占いしてたし。」

キンジやアリアが花占いって何だ？って顔してるから俺が教えてやろうとすると、

「理子知ってるそれ、花びらちぎって、スキ、キライ、スキ、キラ

「イ、つてやる奴。」

あの大和撫子やまとなでしこはそんなこともやるのか。

「ポピュラーじゃないか。」

そして突如俺の視界が闇に包まれた。

「だ〜れだ。」

はあ、邪魔だ。

「1ーCこのえり今野江梨、アムト装備科所属、武偵としてのランクはA戦闘能力はB所属部活は陸上部。」

当の本人は手をどかしながら意外そうに、正解です、と言ってきた。するとアリアが

「よく知ってるわね。」

と言ってきた。まあ、アムト装備科の平賀文ひらがあやさんが絶賛していたからな。

それと消去法、俺に近づいてくる女性はそういない。アリアや理子はそこにいる。そしてこの前助けた子と声の音程が同じ、そのため計算できたということ、と答えた。

「あの雛菊先輩わたしのアミ」「断る。」「まだ全部言っていないですよ。」「今はこの依頼で手一杯なんだ。」「依頼って、ゲームじゃないですか。」

バンバン、突如放たれたグロック18の弾2弾が京助の脳天に向かって放たれた、が、壁にあいた弾痕は4つ。ここにいるみんなの頭に疑問符が浮いてるのが見える。なぜ弾痕だ4つあいてるかは簡単だ、弾を斬った。

「なあっ、なな、なんですあ今の?」「弾丸斬り。」
するとキンジが、

「そうだ忘れてた、こいつはゲームをやってる途中に現実からの攻撃を受けかけると異常に強くなる。そういう特性を持っている。」

バババババ

このえり今野江梨がグロック18を連射してきた。すると京助はその全部を

ナイフで斬り落とした。ありえん。

カチャツカチャツ

弾切れになったようだ。

俺はひとつため息をつくど、

「そこまでなりたいか？」

はい、と答えてきた。

「ならこれで決めよう。」

出したのはハドソンの某双六ソフト。

「これでお前が勝てば戦^{アミカ}兄妹になってやる。何回でも相手になってやるが、負けたら何かおごれ。」

江梨は、わかりました。といったけどわかってるのか？

「いいでしょう、相手になります。」

俺はゲームをしながら話していた。するとキンジが

「…そういえば不知火、アドシアードはどうするんだ？代表とかに選ばれてるんじゃないか？」

アドシアード——年に一度行われる武偵高の国際競技で、スポーツで言うインターハイ、オリンピックのようなもの。

「たぶん競技には出ないよ。補欠だからね。」

「じゃあイベント手伝^{ヘルプ}いか？何かやらなきゃいけないんだろ、手伝い。」

「まだ決めて無くてね、どうしようか。」

女子なら一目ぼれしかねないため息をつく不知火、武藤とは大違いだ。俺はアリアに向かって

「アリアはどうするんだアドシアード。」

「あたしも競技には出ないわ、拳銃射撃競技代表に選ばれたけど辞退した、だからあたしは開会式のチアだけやる。」

チア、アルカカタこと。イタリア語の『武器^{アルマ}』と日本語の『型^{カタ}』を組み合わせた武偵用語。武偵高^{うち}の女子はチアと呼んでいる。

「キンジもやりなさいよパートナーでしょ。手伝いどうせ何でもいいでしょ、京助も。」

「わりい、俺スピアリング槍競技代表。」

槍競技とはいわゆる対戦競技で相手の武器を落としたほうが勝ち。
フェンシングみたいなもの。

アリアが、あんたそんなことも出来るの、と感嘆の声を上げていた。
「ああ、まあな。いまちょうどその武器を装備科アムドに作ってもらっている。で、今日とりにいく。さっき行った不知火との組み手はそれの確認も含んでるが、それが？」

するとキンジが、

「それが、って槍競技スピアリングって人にもよるが狙撃競技スナイプより難しいっていわれているんだぞ。」

「きょーくんすごい。」と理子。

「……まあ、それはおいといて神崎さん、代表を辞退とは持ったえない。知ってる？アドシアードのメダルを持つてると進路がバラ色になるんだよ、武偵大も推薦で進学できるし、就職にも有利。武偵局にはキャリア入局できるし、民間の武偵企業だって一流どころの内定がよりどりみどりって話し。」

「あたしはそんな先のことはどうでもいい。あたしは今すぐにでもやらなきゃいけないことがある。競技の練習に出ている暇は無いわ。」

「やらなきゃいけないことが。かなえさんを助けること。理子もその一人だった。」

「それに、キンジの調教のほうが先。」

そこ反応したのが江梨だった。

「ちょ、調教って、アリア先輩とキンジ先輩はそんなことまで。」

武藤も頬を引きつらせて、

「お、お前ら、変な遊びでもしてるんじゃないだろうな？」

俺は冷静に、

「アリア、訓練といってやれ、要らん誤解を招くぞ。」

「キーくんアリアとそんなことしてるんだ、くふふ。」

「ほら、だから訓練といってやれ。」

「うるさい、奴隷なんだから調教。」

キンジはあきらめたようにいて、

「もういい、で、調教って何するんだ？」

「そうね、…んー。まずは明日から毎日一緒に朝練。いいわね。」

「アリア、一言言っておく、日本で奴隷制度は禁止されている。」

俺はそう言っておいた。で、ゲームでは俺の圧勝だった。

「ぐう、もう、もう一回です。こんどこそ、今度こそ勝ちます。」

「まあ、やるのはいいがもうすぐ予鈴になるぞ、というわけで続きがしたけりゃここ来てくれ。」

渡したのはキンジの部屋がある寮のキンジの部屋。キンジ、に怒られそうだがまあいいや。

The aria continues

とある休み時間にて（後書き）

ある程度オリジナル入ってます。

対決3《Confrontation 3》

その日の放課後の装備科^{アムド}

「平賀さんいますか？」

「はいはい、雛菊さん例の物は二つとも出来てますよ。」
^{ひらがあや}
平賀文

身長145センチくらいの赤いランドセルとソプラノリコーダーが似合いそうな人だ。

例の物とは螺旋状にまかれた二本の鉄が先端で平行線状にまっすぐ伸び、一度の突きで二箇所突けるようになっていて。もうひとつは槍の先端が十字になっている。

「ありがとうございます。あと、あれは出来ましたか？」

「ああ、あれですね。はい出来てます。では、全部あわせて、78、900円です。」

あれとは、俺が頼んでおいた閃光響音手榴弾。名づけてスタングレネード。

78、900円か。まあ、こんなもんか。

ドダダダダダ

（怪獣か何かの足音が聞こえるのは俺だけだろうか？）

とか思っているとなぜ以上に厄介なのが来た。

「雛菊せんぱあーい。」

「平賀さん。これ、代金。お釣りはチップとしてとっておいてそれじゃ。」

「せんぱあーい。まってくださいーい。」

来たのは当然の如く今野江梨だった。

〓 〓 〓 〓 〓

アサルト
強襲科グラウンド

俺は今野江梨を追い払ってからここに来た。^{アサルト}

「悪いな不知火。組み手付き合ってもらって。ではまずこのロング
ヌスから。」

俺は螺旋状にまかれた槍を持ってそういった。

「神殺しの槍ですか。また物騒な名前ですね。」

不知火は普通の女子なら一瞬で一目ぼれするような微笑を作る。

「この学校ほど物騒^{武偵高}じゃねえだろ。」

不知火はそうですね、と言ってから、では始めましょう。と仕切った。

普通は模擬戦というのだが銃を使わないため俺は組み手と呼んでいる。

まずは武器の調子確かめるために振り回す。まあ、問題なしか。

「じゃあいくぞ。」

『では実況は海原^{うみはら} 流野介^{りゅうのすけ}がお送りします。』

どこかの暇人が実況しようとしてるがまあいい。俺は中距離に接近し突く。間髪いれず突く。だがかかわされる。

『おおっと、雛菊さんが槍で間髪いれずに突く、が不知火さんには当たらない。この状況に対し不知火さんは反撃しない。不知火、どう出るか?』

だが槍は突くだけ取り柄じゃない。槍は切ることも出来る。

『雛菊^{ひなぎく}京助^{きょうすけ}は攻撃方法^{こうげきほうほう}を突きから叩きつけに変えた。が、攻撃は一

向に当たる気配が無い。たいし不知火^{しらぬいりょう}亮に攻撃の気配は無い。どうする、不知火亮!!!』

「やっぱすごいな不知火、全然中^{あた}らない。」

「いえいえ、僕も少し中り掛けていたんですが、貴方が手加減してくれていたおかげです。と、言いたいんですけど、何か観客みたいのが増えてきましたね。」

「だな。よし、もうこの際だ模擬線突入ということでもいいな?」

不知火は、ええ、と答えた。いちいち、かつこいい奴だ。

俺は右手と左手に槍を持った。さっきのロンギヌスと、

「そうそう、こいつはクルス・スピアって言うんだ。なぜかは見てのとうりだ。」

そう、十字の槍は槍の先端が十字になっているからだ。

「神殺しの槍と神の槍ですか。何かすごいセンスを感じますね。」

「では、先行は貰った。」

「情報科から貰った情報によりますと、なんと雛菊京助は双槍競技代表のようです。！！このことにより彼が二槍琉だということがわかりました！」

観客からは「あの京助が！？」「スゲー」などなどの言葉が聞こえてくる。

「行くぞ不知火！！」

俺はやはり中間距離で槍を突いていたさっきよりも早いペースで。

「不知火氏から余裕の笑みが消えた。それに雛菊氏からはさっきよりもかなり早い突きを連続して繰り出している。」

バンバン

不知火のSOCOMが放たれる。俺は槍を背中に直して右手にガバメント、左手に超音波振動式ナイフ。SOCOMの弾をかわす。

「これはすごい。SOCOMの弾をかわしながら両手の武器を数瞬で変えた。しかも、雛菊氏は不思議な構えを取っている。あれは、クロス・クォーターズ・コンバット、通称CQCのアレンジだと思われる。」

俺は不知火に接近し足払いをかける、が、はずれた。俺はすかさずナイフで不知火の腕を取る。不知火はその腕を引いてナイフに抵抗しようとした、俺はそのベクトルを使い不知火の背後に回りこむ。そしてナイフをすべるようにして不知火の首元へ持っていく。

バンバン

蘭豹がそこで模擬戦を終了させた。

「んー。あんた以外に出来るな。よしSランク。」

「は？」

「やったな、京助。Sランクか、これで俺より早く死ねるな。良かったな。」「おう京助、早く死ね。」

『新Sランク武偵の誕生だ！』

ああ、何でこんな目に。俺についてる不幸の神がいたらこの神殺し^{ロンギ}の槍で刺してやる。^{ヌス}

The aria continues

対決3《Confrontation 3》（後書き）

京助がSランクになりました。

4つ目のクエスト《fourth quest》

不知火との模擬戦が終わったあと

俺はあの後強襲科アサルトの奴らに取り囲まれたがどうにか逃げ出した。

そして、たまたまアリアとキンジを見つけた。ふと隣を見てみると

『呼び出し 2年B組 超能力捜査研究科 星伽白雪 』

武偵高というのは隅から隅まで危険だが『3大危険区域』と言うものがある。それが

強襲科アサルト
ジャンクション
地下倉庫

そして、教務課マスタイズ

である。なぜ教務課が危険かというと話によれば、教師の中には前職に元軍隊の人や用兵やマフィアや特殊部隊や噂では殺し屋……などなどetcということなのだ。ただまともなのは少しいるということなのだが俺は見たことない。

「キンジ、手届かない持ち上げて。」

そして、こいつら、アリアとキンジはその虎の穴・教務課マスタイズに進入しようとしている。

「じーーーーー」

びくっ

アリアとキンジのからだか2センチくらいはねたような気がした。

「なんだ京助か。脅かすな。」「次やったら風穴」

キンジは俺とわかったらアリアを持ち上げてダクトに進入した。

「ほーれ、たかいたかい。」

「風穴っ！」

なんかいまゴスツという音が聞こえたような気がする。

「キンジこれをもってる。蘭豹が来たらこれを詠め。」

キンジにその何かがプリントしてある紙を渡しておいた。

「まあありがと。貰っとく。」

俺はキンジを見送ると、蘭豹が来た。

「おう、なんかここにようか？」

「いえ、ようは済みました。そういえば蘭豹先生、こんなものをネットですてたんですけど。」

見せたのは、蘭豹のプロフィール。蘭豹の顔つき+プリクラ。

名前：らんらん

歳：19

その他いろいろ

蘭豹の額に汗がたらたらと出てきている。やっぱり大当りだ。

「口止め料2万円ということだ。」

|||||

そのころキンジたちは

「そのボディーガードあたしがやるわ。」

俺こと遠山キンジは記憶をさかのぼると約2分前

白雪は、呼び出しをしていた教師の個室にいた。

「星伽ほしぎいー」

室内では女にしては低めの声を持つ2年B組みの担任で、タギユラ尋問科の教諭こと、綴梅子つづりめこが星伽白雪に向かっている。

白雪は向かいのいすに座りうつむいている。

「おまえ最近、急うーに成績が下がっているよなー……」

器用にタバコの煙をわか形に吐いた綴は、室内でも真っ黒なスーツを羽織っている。

そのコートの着方がまるで漫画に出てくる博士の白衣見たいな着方だ。腰には皮製のホルスターに入っている真つ黒なグロック18が丸見えだ。綴りはタバコらしきものを灰皿に押し付けた。

「あふぁ…まあ、勉強はどおーでもいいんだけどさあ。なーに……えーっと…あれ…あ、変化。変化は、気になるんだよね。」

そしてこの教師の性格は無気力の塊である。

「単刀直入に訊くけどさあ。星伽ひよつとしてあいつにコンタクトされた？」

デュランダル
「魔剣ですか。」

アリアがその言葉に眉を動かす。

「それはありません。と言いますか……もし仮にデュランダルが実在しても、私なんかじゃなくてもっと大物の超偵を狙うでしょうし

……」

「星伽いー。もつと自分に自信を持ちなよお。あんたはうちの秘蔵武偵高つ子なんだぞー？」

「そ、そんな」

「星伽い、何度もいったけど、いい加減ボディーガードつけろってば。諜報科は魔剣デュランダルがあんたを狙ってる可能性が高いつてレポート出してるし超能力捜査研究科SSRって似たような予言出してたろ。それにもうすぐアドシアードから、部外者がわんさかここ来る。武偵高そのあだだけでも有能な武偵をボディーガードにつけな。これは命令だぞお。」

「……でも、魔剣なんてそもそも存在しない犯罪者で……」

「これは命令だぞお。大事なことから先生二回言いました。3回目には怖いぞお。」

「は、はい。分かりました。」

ガシャン！

とアリアがダクトの通風口のカバーをパンチでぶち開けた。

ヒュラッ

ダクトから飛び降りたアリアは豪快にスカートを翻しつつ室内に降り立った。

目を丸くする白雪と綴と俺。

はい回想終了。

俺はその言葉で身を乗り出しすぎて落ちてしまった。そして、体がなぜか浮いて、壁に投げつけられた。投げたのはもちろん綴。なんて馬鹿力だ。

「なんだあ、このあいだのハイジャックのカップルじゃん。」

タバコを吸うと、

コキ、コキ

薄ら笑いを浮かべながら斜め上を見て首をコキコキ鳴らしている。それとカップル言うな。

「神崎・H・アリア：ガバメントの二丁拳銃に、小太刀の二刀流。

二つ名は双剣双銃のアリア。欧州で大活躍したSランク武偵。でもあんたの手柄書類上では全部ロンドン武偵局が自分らの手柄にしちやっみたいだね。協調性が無いからだマヌケエ。」

「あたしはまぬけじゃない。それに貴族は自分の手柄を自慢しない。それがたとえ相手が自分の手柄だと吹聴しても、否定しないものなのっ！」

「へー。損なご身分だねえ。アタシ平民でよかったあー。そういえば欠点。あんた、およ……」

「わあーーーーー」

アリアは顔を真っ赤にさせながら大声でジャミングした。

「そそ、それは弱点じゃない。う、うきわが有れば泳げるもん。」

なるほど、アリア泳げないんだな。

『へー。アリア。ふーん、フフフ。』

唐突に聞こえてきた京助の不気味な笑い声。

「な、あんたどっから。」

『それは、さつき京助に渡した紙の中から。』

俺がさつき渡された紙を開けてみると、中にマイクとスピーカーが入ってた。

『まあ、そういうわけだ。今度からアリアは調教するばんから調教されるばんだな。』

「ふーん、アンタらそんなことやってんのぉ。へー。」

「キ、キンちゃんとアリアたちは、そ、そういう関係。」

白雪から、ふらぁ、とした白雪らしきものが抜けていった。様な気がした。

するとアリアは顔をさらに赤くして、

「ひ、人前では訓練、と……い、言いなさい。」

ものすごくテンパるアリア。

『その言葉そっくりそのまま返すよ、かなづちさん。』

「いい、あ……後で風穴あ。」

京助、ご愁傷様。短い間だったな。

『まあ、そんなどうでもいいことより、俺はアリアに賛成。まあ、条件付だが。』

「……星伽い。なんか知らないけどSランク武偵二人が護衛してくれるらしいよぉ。無料で。」

「い……いやです。アリアがいつも一緒だなんて汚らわしい！」

アリアはキングジのこめかみに拳銃ガバを押し付けて、

「……アタシにボディガードさせないとこいつを撃つわよ。」

「あ、あの、アリア……さん。……9条忘れていませんか？日本の武偵は人を殺しちゃいけないんですよ。」

ギロツ！

アリアはさつきだけで人を殺せそうな目で俺をにらんできた。

「はい、ごめんなさい。」「よろしい。」

白雪は腕を真下に、ピンツ、っと伸ばして涙をこらえながら、

「じ、条件があります。キン、キンちゃんも私の護衛をして！24時間体制で！わ、私も、私もキンちゃんと一緒に暮らすうー！！」
俺の体から何かがひとがたの何かが抜けていった。

The aria continues

魔剣の宣戦布告

帰宅後

「で、京助、ひとつ問うが、な・ん・で、今野江梨がここに居る？」
「それは簡単な質問だ、答えは決まっている、俺がここの場所を教えたからだ。」

そう、今日の昼の終わりにこいつにここの場所を教えたからで、おまけに電子ロックではないので装備科アムトのこいつなら簡単に入れるだろうと思っていたら、案の定キンジ宅にいたのである。

「まあキンジ、さらににぎやかになるからいいじゃないか。」

ここは住もうと思えば24人まで住めるのだがそうなるといういろめんどくさいので基本は2〜6人なのだ。ここには、キンジ、俺、アリア、白雪、任務でいないが理子、そしてここに住む気満々の今野江梨、とこれだけいる。

「じゃああたしもまん買ってくるわ。」

「あ、俺も買いたい物あるから、アリアのちょ、じゃなくて訓練のための道具。」

「じゃあわたしもいきます。いいですね先輩？」「まあいいか。」
俺はキンジの家を出た、カメラを残して。

おれはこの浮島にあるホームセンターを目指している。

「あ、そうだ江梨戦アミカ兄妹の件についてだけど、なってもいいが条件がひとつ、ふたつ。」

「なってくれるんですか！でも条件でなんでしょう？」

「俺は装備科アムト関係はさっぱりでわからんから、戦闘なら鍛えてやる
ことが出来る。だから、毎日の朝練におまえも参加しろ。二つ目、

俺からの依頼は1割引で受けてくれるとありがたい。」

「朝練はがんばります。二つ目は全然オツケーです。」

そんな話をしているとホームセンターに着いた。俺たちは中に入って浮き輪を5つと空気を入れるポンプを1つ買う。

「そんなもの何に必要なんですか？」

「アリアの訓練。」

俺はさらっとそういうと、アリア先輩泳げないんですね。と江梨がいった。そして、出るとかすかな殺気を感じた。そして、俺が刺された。

江梨は状況を把握していないのか、それとも絶句しているのかまゆひとつ動かさない。

バアン

相手はD・Eの弾を剣で弾き飛ばした。

「現れたな魔剣。」

「せ、先輩がつ、い、いき、生きてる。」

「ああ、このとおり生きている。いまのは変わり身だ。俺のご先祖様は忍者をやっていたらしい。おまけに相手は剛鉄をも切り裂く剣を持っているって話だ。」

俺は江梨をかばうような姿勢をとってから、

「さあて、どうする魔剣それともデュランダルって言ったほうがいいか。」

ガバメントとナイフで構える。

「何打その構えは？馬鹿にしているのか？」

「どうかな？」

俺は銃口を上に向け引き金を引いた。そして、夜の学園等に小さな太陽が現れたような気がした。

武偵弾の閃光弾

「さあて、これでそろそろ仲間が来ると思う。早く逃げないと捕まっちゃうよ。」

デュランダル
魔剣は舌打ちしてから退却していった。

そして少し遅れてアリアが来た。

「京助、何があったの？まさか、あいつ？」
デュランダル

俺は、ああ、と答えると、江梨が状況を把握していないので教えることにした。

「いいか江梨、この話を聴くと死ぬかも知れんぞ。忠告はする。おまえにも戦兄妹としてある程度情報供給する必要がある。死ぬのが嫌ならここから逃げておかまわな。どうする、その覚悟があるか？」

江梨はうなずいた。アリアはいいの？と訊いてきたが俺はいいと言った。

「まず俺たちが戦っている奴らのことを教えよう。だが、教える前にもう一度言っておく。このことを聴くと死ぬ危険がある。それに口外するとそいつも死ぬかもしれん。その覚悟はあるか？」

「わかりました。」

「わかった。包み隠さず教えよう。が、ここは場所が悪い。フオロ・
付いて
ミー。
来い」

俺が向かったのは、人気のなさそうな路地裏。ここなら聞かれる心配が減る。

「まず、俺たちが戦ってる敵だ。相手の名前はイ・ウー。犯罪をなんとも思っていない不法集団だ。次に俺たちが戦っている理由。アリアはスケープゴートとして捕らえられた神埼かなえさんを助けるために戦っている。俺はこいつの奴隷として戦っている。パートナー3つ目さっきの奴。名前はジャンヌ・ダルク武器は大剣デュランダル。これが二つなの由来。そして4つ目、これは一番聴きたくないだろうが、あいつは、ジャンヌ・ダルクは三下だ。」

「京助、あんたどこでそんな情報を？」

「協力者であり義父の友人、コードネームH・Eだ。」
デュランダル
そう、魔剣は下っ端だ。

「わかったか江梨？相手はそれだけの大物なんだ。願わくばここで

聞いたことは全部忘れてもらいたい。」

〓 〓 〓 〓 〓

俺たちが玄関から中に入ると

「やめてキンちゃん!」「おとなしくしろ白雪!」
というのが聞こえてきた。

はあ、そこには上半身裸であたかも服を脱がせようとしているように見えるキンジの姿があった。

白雪は涙ぐみ着衣は乱れている。そして、アリアから何かが切れる音がした。

「……………こんのおお……………」

アリアはスカートに手を入れると

「バカキンジイイイ!!!!」

ババン

アリアは問答で弾を放つ。足元に命中した弾にキンジは飛び上がる。

「ちょ、ちょ、ちょっと任せたらこれ。あたしに強^{きやうわい}狼^{わい}した拳^{こぶし}句^く今^{いま}度は白雪!?このど変体、けだもの、うじ虫、バクテリア、強^{きやうわい}狼^{わい}魔^ま!死ね!」

「まあ、落ち着けアリア、話せばわかる。」

とキンジ

「そうだよアリア、負け惜しみはもうやめて!」

と白雪。負け惜しみってなんだ?

「な、な、何であたしが負け惜しみなのよ!

「あれはキンちゃんがムリヤリしたんじゃないの!合意の上だったんだよ!あれは私が自分で脱ごうとしたの!だからキンちゃんは悪くない!」

「ぬ、脱ぐって、あ、あああ、あんたら一体何しようとしてたのよ!それにたとえ合意の上だとしても、そ、それは、ボディーガー

ドとして失格、禁止事項よ！」^{タブー}

アリアは銃口をキンジに向けて、

「風穴祭り！！！！」

バババババババババババアッ

キンジはベランダから飛び降りて、ベルトのワイヤーを使い、某蜘蛛男見^{もおとこ}たいに手すりからぶら下がった。

「アタマ冷やしてきなさい！浮き輪はあげない！」

アリアが最後の弾を使い

バアン！チュイン！

とキンジのワイヤーを銃弾で切って、

ジャボオオン！

キンジが海に落ちた。

え、カメラはどうしたって？そんなもの跳弾で壊れてしまった。

屋上にて……

ボディーガードは依頼人と深い関係になつてわいけない。これは基本中の基本でいざというときに冷静な判断が出来なくなるからである。

で、もともと疲労がたまっていたであろうキンジは、シャワー後に白雪ともみあつた挙句、アリアに裸で夜の冷たい東京湾に落とされたキンジは

……風邪をひいた。

「だらしない!!」

とアリアがいったが少しは罪悪感を感じているのかそれ以上は何もいわない。

次の日の強襲科^{アサルト}の休み時間

キンジは風邪も治つて屋上で寝ている。

「なあ、キンジ。デュランダルについてどう思う。」

「いないと思う。そんなデュランダルなんてアリアの妄想の世界だ。」

グシャ!

キンジの顔に白いスニーカーが降ってきた。ついでに俺にも。

「あんたたちなにサボってんのよ!ちゃんと白雪をガードしなさいこのポンコツ!」

それは俺のことも含まれているのだろうか?

キンジと俺の耳脇にストピングを落としたのは、チアガール姿のアリアだった。

「あ、アリアッ?!こんなところまで追つてきやがって。」
講義の目線を送ってるキンジが上半身を起こすと……
ぶうんう。

アリアは右足を天高く自分の頭の高さまで振り上げて……

「ごすっ！

パシッ。

キンジの両手はアリアのスネの上空で情けなく拍手を打って…… 2
1 センチのミニあんよがキンジの脳天に食い込んだ。

…… どて……

と、キンジは再びしりもちをついた。

「もうっ。白刃取り、いっぺんぐらい成功させなさいよねッ！遊びじゃないのよ。」

「あのなあ……おまえパートナーなんだから相方のコンディションくらい少しは考えてくれよ。たまには休ませてくれ。俺は病み上がりなんだ。どっかのバカに、冷たくて、汚い夜の東京湾に落とされたからな。」

「そっ……それは悪かったわよ。あたしも、ちょっとやりすぎたと思っただから……」

「まあ、もう風邪のことはいい、白雪がくれた『特濃湯根湯』^{とくのつかつこんゆ}のおかげで治ったからな。」

「え？

キンジの言葉でアリアは目をまん丸にし驚いている。

「あ、あれは、あたし……」

キンジは頭に疑問符を浮かべて

「…何だよ。あれはマイナーな薬だけど俺には効くんだよ。確かおまえにも前言ったはずだけど、白雪が何でかそれを知ってて買ってきてくれたんだ。」

「白雪がそうだったの？」

「ん？ああ。」

「ま、まあ治ったならいいわ。あたしは貴族だしそういうのは我慢する。貴族は自分の手柄を自慢しない。それは無様なことだから、たとえ横取りされてもね。」

「なんだよ言いたい事が有るならはつきりいえよ。」

「なによいいじゃない！！言いたくない事はいわないの！」

べー！とアリアは舌を出してから

「良かったわね白雪に看病してもらえて！白雪、白雪。あんたにいいことをするのはいつも白雪！もうあんた、白雪と結婚しちゃえば！？」

「なにキレてんだよ！」

「うるさい！うるさい！うるさい！キレてない！」

「キレてるだろ！」「あんたこそ！」

ぐぬぬー！

と、お互い犬歯を出しながらにらみ合うキンジとアリア。

「この際だからいわせてもらうけどな、パートナーの方針だからつきあってやってたけど、真剣白刃取りの訓練なんてもうやめだ！あんなもん達人技だろ！」

アリアは後ろに手を回したかと思うと唐突に俺のほうには小太刀を振り降ろしてきた。

パシッ！

「ほれキンジ。俺は素人だが出来るぞ。」

「ぐう。とにかくやめだ。俺には出来ん。無理だ。」

「だめよ！続けるわ！噂では魔剣は鋼おも切る剣を持つてていわれてるもの。だとしたらナイフやジュラミンセイの盾でも受け止められない。白刃取りの訓練は重要な意味を持つよ。いざ白雪が襲われたときにあんたを覚醒させて――」

「――いざ、って、ここ数日白雪に張り付いていたけど何も危ないことなんて無かっただろ！こうなりやもういつペンというがデュランダルなんて、いねえんだよ。おまえが一刻も早くかなえさんを助けたいのはわかる。でもな、今のおまえは平常心を失っている。敵の名前を聞いたとたんに、おまえは『いてほしい』て思っちゃったんだ。それがいつのまにか『いる』ような錯覚におちいつているんだよ。」

デュランダル

「魔剣はいる！あたしのカンではもうすぐそこまで迫ってるわ！」

「そついうのを妄想っていうんだよ！白雪は大丈夫だからどっか行

け。おまえは何でもかんでも独断でやりすぎなんだよ。この前だつてそうだ。とつといい家に生まれたからって調子に乗るな！いいか俺たちが普通に、おまえはずれてんの！」

アリア相当傷ついたようで、一步、二歩三步とさがっていき。

「あんたも、あんたもそういうこと言うんだ。みんなあたしのこと分かってくれないんだ。みんながあたしの事を、ひとり走りの、一人決めの、弾丸娘、ホームズ家の欠陥品って呼ぶ。あんたもそう！あたしには分かるのよ！白雪に敵が迫っていることが！でも、でも状況をうまく説明できない！曾お爺様みたいに誰にでも分かりやすく、理論的に説明できない！だからみんなあたしを信じてくれないで……あたしはいつも独唱曲で……でも、でも直感で分かるのよ！こんなあたしが言ってるのに誰も信じてくれない！どうして、どうして誰も信じてくれないの！」

「……ああわかんねえよ、いもしねえ敵が迫ってるなんてそんなの信じられるか！主張があるなら証拠を出せ！それが武偵だ！なんでもいってやる！敵なんかいねえ！」

「この……この……どバカ、バカバカバカバカバカバカバカ！」

ついにきれたアリアが拳銃を抜いてきた。

ひっくり返ったキンジが後ろの貯水タンクを見ると

『バカキンジ』

と撃たれていた。

「キンジ、ひとつおまえにアリアと似たようなことを言う。俺はデュランダルは『いる』に付く。それとキンジ、おまえこそデュランダルとの接点が無いイコールデュランダルはいないと自己暗示している可能性がある。いいな。これを忘れるな。今のおまえがデュランダルとあったら、死ぬぞ。」

俺はキンジにそう告げて、じゃあな、といって帰っていった。

アリアの水泳特訓！！ 1

結局アリアはあれからキンジの部屋にこなくなった。
本人に聴くと、レキの部屋にいるから、とのことだ。

そして俺が手に持つてるのはとあるチラシ。

『5月5日 東京ウオルトランド・花火大会：一足先に浴衣でスター・イリュージョンを見に行こう』（これ、みんなでいければよかったんだけどな。アリアやキンジや白雪たちと、もちろん理子やレキも。まあ、来年だな。）

俺は、もう遅かったので寝ることにした。

次の日の朝

リリリリリ リリリリリ

携帯がなってる。今は朝7時。はい、休日だから寝かせろ。とか
思いながらも出てしまった。

『先輩、おはようございます。』

江梨からのモーニングコールだった。

「なんのようだ。」

『先輩言っただじゃないですか。朝練やるって。』

そういえばそんなこともいった気がする。

『もしかして忘れてました？』

ぐさっ、っと俺に何かが刺さったような気がした。

「ああ、すっかり。まあ、悪かった。でもGW中は無理だ、いやちゴールデンウィーク

よっと待て。少ししたらかけなおす。」

俺はそう言っで電話を切ると、アリアにかけた。

『もしもし。あんた何のよう？』

「おまえの調教だ。くんれん9時に水泳セットをもってここの寮の入り口に
来い。補足としていっておくが、俺は水着フェチでもロリコンでも
ないから変な勘違いはするな。こなかったら風穴。それに依頼は

あいつ一人で大丈夫って言ったんだ、だから大丈夫だろう。しないするな。あいつらにはGPSをつけている。それに衛星写真もついている、だから問題ない。」

「わ、わかったわよ。行けばいいんでしょ行けば。」

「よろしい、といってから電話を切った。で、また江梨に電話をけなおした。」

「江梨か？9時ここの寮の玄関に来てくれ。それと、泳げるか？」

「……あ、あまり、およげません。」

「江梨は恥ずかしそうにそう告げる。」

「なら水泳セット、てのを持ってきてくれ。アリアのついでにおまえも泳げるようになれば、何かの役に立つかもよ。」

「江梨は分かりました、と、やはり恥ずかしそうに言いながら電話を切ってしまった。」

8時50分

アリアたちが来るのはもう少しだな。

「と思いながら俺はダンボールをかぶった。その後すぐにアリアが来た。」

「なによ、人のことよんどいていないじゃない。」

「俺はダンボールを音を立てずに脱いで無音でたった。」

「いや居るが……」

「アリアがビクッ、と何時かみ^{いつ}たいに体が2センチくらい飛び跳ねた。」

「あ、あんたいつからそこに。」

「3分くらい前」

「俺はダンボールに隠れていたことを言うと江梨が来た。」

「じゃあいくぞ。」

「あの先輩。行^いくつてどこに？」

「そうよ、その前にどこにいくか言いなさい。」

「そんなこと持ち物見て解るだろ、温水プールだ。」

＝ ＝ ＝ ＝

武偵高には温水プールがある。そこに俺とアリアと江梨はきた。

「とつとつ着替えて始めるぞ」

俺はそう言ってプールに先に入っていった。

そして少ししてアリアたちが入ってきた。

アリアは一般で言うスクール水着、江梨は花柄の水着。一言で言おう、可愛い。^{かわい}

「じゃ、始めるけど、アリアおぼれるなよ。」

アリアは若干威し気味に、風穴あけるわよ、^{おと}といってきた。

「まあ、まずやることは、水に慣れる。これが一番最初にやることだ。」

アリアと江梨は俺に従い水にはいった。

「そしたらその縁^{ふち}を持って足を浮かせてみるなるべく力を入れるな。」

アリアと江梨はそれをやってみてが、これがまた面白い、江梨は浮くの^{ふく}にアリアは浮かない。

「アリア、まず呼吸したらよく息を吸ってゴーグルを取って水にもぐれ。目は夜寝るときみたいにやさしくつぶれ。イメージは遊泳飛行しているようなイメージで力を抜け。」

アリアはやってみると言ってもぐった、そして、浮いた。

「そしたらその仰向きばんもやってみる。それができたらおぼれる事は基本無くなるはずだ。」

アリアはそれもやったら出来た。俺はアリアの頭をなでながら、
「おまえはやれば出来るというのを俺は知っている。だからがんばれ。じゃあ次ぎいくぞ、さっきのあれにバタ足を足しただけ。補足で言うがバタ足は今足は足を曲げるな。やってみろ。」

江梨は何がうれしいのか目を輝かせて、「はい、わかりました先輩」と、言う勢いで練習に入る。江梨は結構のみこみが早いらしい。それに比べてアリアは、全然出来ていない足が下のほうでモガモガし

ているだけだ。はあ、先が大変だ。

「アリア、足はなるべく水面ちよい下のところで動かせ。」
「というとアリアは足を水面に近づけてバタ足をしている。」

「よしアリア、もういいぞ。じゃあ次だ、たぶんアリアは板が必要だな。江梨は、まあいらなかな。」

「ちよつと、何であたしだけ板使うのよ。」

「板使わないとおまえ多分無理だと思うからだ。だから早く取って来い。戦場には都合よく浮き輪なんて無いぞ。それに江梨はちよつと教えれば結構出来るから板は要らないと思っっているからだ。そんなことも推理できないようなら、天国で曾お爺様が泣いてるぞ。」

アリアはグウだのフンだのいいながら板を取りにいった。

「さて、では今から江梨の言うことを説明するからよう聞け。まず頭の上で手と手を重ね、腕を伸ばせ。これが基本姿勢だ、そしたらそれで向こうまで泳いで行って帰ってきてくれ。仰向けで二回。では、レッツ・ゴー」

入れ違いでアリアが戻ってきた、

「で、あたしは何をすればいいの？」

「今江梨がやってることをまねしろ、板の上に手を載せて、または板を掴んでおよげ。て言えば解るか？それを二週だ。」

ここから向こうまで50メートル、それを2週分、計200メートル、まったくの素人は少しつらい距離であるが、武偵なのでこのくらい大丈夫であろう。

ちよつとゆっくりしてたら江梨が、先輩、終わりました。との報告、アリアもちよつと終わった。

「よし、じゃあ、休憩だ。連続で続けてもあまり意味は無い。というわけで休憩だ。」

「わかりました。」

「わかった、でキンジたちに変化は？」

「ちよつと待て…よし、問題ない。ちよつとしたらまた始めるぞ。」

2分後

「よし、じゃあ始めるぞ。やることはさっきのを、今9時50分だから、10時10分までさっきのをおよぐ。そしたら今日は終了。さて、俺も泳ぐか。」

10時10分

「じゃあ今日は終わり、アリア、キンジの二の舞にならないようにちゃんと拭け。ついでに明日もやるぞ。アリアはもうちょいだな。江梨はクロールできるか？」

「いえ、ちょっと、解りません。」

そうか、と俺は答えてから、

ゴールデン・ウィーク

「GWの訓練はこれで終了。後は自主練。はい、解散」

そう言っただけ俺は一足先にキンジの部屋に戻っていった。

ゴールデン・ウィーク

今はGWなので俺は少し寝る。

そしてキンジが白雪と帰ってきてきて明日5月5日の花火大会について話していた。

The aria continues

ケースD7

ゴールウィーク
GWが終わりアドシアード当日

アリアや江梨もあれから練習してアリアは浮き輪無しでもある程度泳げるようになったとのこと。江梨は上達が早いので今度クロールとかを教えることにする。

そして、今は午後5時。あと1時間ほどで俺の競技が始まる。

「キンジ、京助、ケースD7！星伽さんが失踪した！」

「！？」「なにッ！？」

ケースDとはアドシアード開催期間中に武偵高で発生する事件をあらわした符丁だ。ただ、ケースD7というと、事件かどうかは不明で連絡は一部のものにのみ届く。なお、保護対象の安全を守るためみだりに騒ぎ立ててはならない。極秘裏に解決せよ。という状況を表す。さっきまで寝ていたキンジの携帯にも何通かメールが来ていた。キンジがメールを見ると

『キンちゃんごめんね。さようなら。』

というメールがあった。

星伽白雪という人間は従順な奴だ、それに責任感が強い。自分の仕事は最後まで確実にやり遂げる。それが突然と失踪した。武偵高がケースD7を発令したのもうなずける。

俺は白雪に着けておいたGPSを見ると発信が途絶えている。これは半径20キロまでは有効な優れものだ。それが途絶えている。多分これはただの失踪じゃない。星伽白雪の身に何か良くない出来事が起こっている。

「クソッ！！キンジここに向かえ。何かあるかもしれない！」

俺が見せたのは星伽白雪の反応が途絶えた場所、地下倉庫。

ジャンクション
地下倉庫

武偵高3大危険地域のひとつ。ここで銃を使用すれば、最悪この学園島が吹っ飛ぶ。

「キンジ、俺がこの前言った言葉を覚えているか？『魔剣と接点が無いイコールいないになっている』と。おまえは敵がいけないほうがいいと思っている。それがいつのまにか『いない』と錯覚しているんだ。俺は武器をとりに行く。どの道相手がデュランダルなら銃は効かない！先に行ってる！」

〓 〓 〓 〓 〓

約十分後地下倉庫
ジャンクション

キンジは足音を殺して進むと、いた、白雪がいた。

キンジはホルスターのベルトを引き抜こうとした、が、やめた。やはりここは火薬庫なのである。

やがて、デュランダルと白雪の声が聞こえてきた。

「どうして私を欲しがるの魔剣。デュランダルたいした能力も無い……私なんかを。」

「裏をかこうとする者がいる。表が裏の裏だと知らずにな。」

少しばかり時代が買った男喋りの女の声。

「和議を結ぶとして偽り、陰で備えるものがある。だが闘争ではさらに裏をかくものが勝る。わが偉大な始祖は、陰の裏——すなわち光を身にまとい、陰を謀ったものだ。」

「何の話？」

「敵は陰で、超能力者を練磨し始めた。われわれはその裏で、より強力な超能力者を磨く。ステルスその大粒の原石——それも欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは、自然なことよ。不思議がることではない、白雪。」

「欠陥品の武偵……？誰のこと？」

「ホームズの女には少々てこずりそうだったが、あの女を遠ざける役割を、私の計画どうりに果たしてくれたのが遠山キンジだ。奴が欠陥品でなく何というのだ？」

「キンちゃんは、キンちゃんは欠陥品なんかじゃない。！」

「だが現にこうしておまえを守れなかったじゃないか。」

「それは……それは違う！」

そして、その声の持ち主はどこからともなく現れた。

「ああ、そのとうりだ、魔剣、デュランダル。この前はとも、借り返しに来ました。」

その声の持ち主は、京助だった。

「それと一言、」

俺は力強く、そしてはっきりと、

「またせたな！」

「貴様も来るか？裏切り者。私のところに来ればいように使つてやる。」

「はあ、これだから貴族さんは。あいつは仕掛けた監視カメラを逆

に使われているということに気がついていた。そしておまえはキン

ジのふりをして白雪を遠隔操作した。おかげでアリアは出て行く

という演技を自然に作れた。この結果がこれだ。はめられたな魔剣。デュランダル

「貴様のような弱い奴が何を言う。おまえがイ・ウーの幹部だったのが不思議なくらいだ。」

「だが、ちよつとした誤算があつた。」

「私のも誤算が有つた。私は白雪は約束を守る奴だと思っていたのだがな。『何も抵抗せず自分を差し出す。その代わり、武偵高の生徒、そして誰より遠山キンジには手を出さないで欲しい。』私は確かにそう約束した。だが、その裏で――おまえは奴を呼んでいる。」

「

「解釈の仕方は自由だ、だが、おまえのこの計画自体が誤算だな。」

その瞬間キンジは俺たちのほうにかけていた。

「逃げる白雪！！」

「キンジ、逃げるのはおまえだバカヤロウ！でしゃばるな！！」

「来ちゃだめ！逃げて！武偵は超偵に勝てない！」

すると突然キンジが前のめりにつんのめいて倒れた。

「『ラ・ピュセルの枷』罪人として枷を科せられるものの屈辱を知

れ武偵。」

キンジは起き上がろうとするも肘にも白いものが広がっていく。

「わが一族は光を身にまとい、その実体は陰の裏、策士の裏をかく、策を得手とする。その私がこの世で一番嫌うもの、それは、『誤算』でな。」

そして室内の非常灯が消え闇に包まれる。

ちやりちやり、という金属音が響く。

ギンツ

と刃と刃がぶつかり合う音。

「じゃあ、バトンタッチね。」

真つ暗な闇を切り裂くアニメ声。

「そこにいるわね『魔剣』デュランダル みせいねんしゃりやくしゅみすい未成年者略取未遂の現行犯で逮捕するわ！」

「アリア!？」

「ホームズ、か」

広い大倉庫を一周するように次々と明かりがともっていく。

「やっと来たか、遅いぞ。」

だが、デュランダルと白雪は消えていた。

俺はアリアに刀を渡す。

「かなえさんの物だ。後おまけの高周波ブレード。だが使用可能時間は20分だ。それまでに、おっと、決着をつけるぞ。」

俺は跳んできた銃剣を交わしながら言う。

「ありがと。」

突如アリアめがけて銃剣が二本飛んできた。

「ほら、お試した。」

アリアは高周波ブレードで、銃剣を斬った。

「重いわね、あたしには向かない。返すわ。」

「そうか。キンジ。パス。」

俺がキンジに投げたのは高周波ブレードでなく、高周波ナイフ。ブツン

「うお、あぶね。」

俺はキルトラップのワイヤーを投げて斬り、キンジの氷のひびに命中させて氷を砕いた。

プツンプツン

「ありがと、アリア、敵の気配がない。逃げたか、または、」

「分散させて一人一人片付けるつもりね。」

俺たちは白雪のほうに向かう。

倉庫の壁際に立ったまま鎖で縛られていた。おまけに白雪には手錠と足かせがはめられている。

チャプ、チャプ

という水の音、そして、排水溝が壊れた。

「あいつ排水溝を壊しやがった。壁も壊れている、やばい！みんな逃げる上に行くんだ！」

「だめ、キンちゃん。この鎖はなかなか外れない」

「アリア、いくぞ。」

「で、でも。そうだ、あのナイフを使えば。」

「だめだ、一瞬で斬らないと白雪にダメージが来る。それに白雪は切り札で依頼人だ。」

「解ったわ、でも、だめなら絶対あたしを呼びなさい。」

呼んでどうなる訳でもないのだが

I t i s t h e l a s t i n s t o r y n e x t o
f D u r a n d a l

The Duran Dal edition end

俺とアリアはひとつ上の階に上がって地下6階。周囲には情報科や通信科の機材が並んでいた。コネク

「こりや情報科や通信科には悪いが銃は解禁だな。」インフォルマ

「そうね。」

そして俺たちは程なくキンジと合流した。

「キンジ。よかった、無事だったのね……」

アイコンタクトして小さくうなづくキンジ。アリアは俺と一緒にキンジと白雪を残して言ったことに罪悪感を感じているらしい。

「キンジ、逃げたいなら逃げたほうがいい……といっても、今のまえにこんなこと言ってもしゃーないか……」

そう、今のこいつはヒステリアモードなのだ。キンジ

「可愛いアリアをおいて逃げられるほど、俺は理性的なタイプじゃないんでね。」

「……な、なによそれっ。」

「アリアが俺に会いたがってると思うと……体が止まらなくてね。」

「な、なななに言ってるのよこんなときに。」

ピッ

そしてストップウォッチの音。

「はい、アリアの素面しづめから赤面まで約0.5秒。新記録おめでとう。寮に戻ったら賞状を上げよう。」「いらないわよそんなの。」

「まあ、こんなたわいもない話はおいといで、白雪はどこだキンジ？」

「白雪はさっき見失ってしまった。それより魔剣デュランダルは？」

キンジはそう訊いてきたが俺は首を横に振りながらこういった。

「まだ見つからない、だが、この部屋のどこかに必ずいるはずだ。」

うえに続く鍵は全部内側から壊されてたし、エレベーターの扉も内側から……」

「あの臆病者あたしと戦う気がないみたい。それとさっきあいつが
言ってた、京助はイ・ウーの幹部だ、って話、本当？」

アリアは目を吊り上げて訊いてきた。俺は声のトーンを下げて

「ああ、真の話だ。」

イ・ウー

神崎かなえさんに約900年の冤罪を着せ、表向きにはキンジの兄、
遠山金一を殺した組織のこと。

「だが、変な解釈をされても困る。5つほど話そう。1つ目、俺は、
人を殺してない。2つ目、俺がこの前理子を逃がしたくなかったの
はあいつの身を安全圏に置いときたかったからだ。あいつを捕まえ
るまで。まあ、結果はたいして変わらなくなっちゃったけどな。そ
して3つ目、魔剣デュランダルが言ったように、イ・ウー内では裏切り者扱いさ
れている。4つ目、俺はイ・ウーの中では希少系でな、犯罪者を逮
捕して回ってる変わり者だ。もちろん顔は隠してるけどな。5つ目
遠山金一は、生きている。今も立派に。これは今のおまえだから言
えることだ。さて、俺の話すことは今はこれだけだ。これ以上は、
あの人と会ってからじゃないと話せない。」

さすがに今のキンジでもあの人の話をされるとパニックを起こすら
しい。

「じゃあ、兄さんは、死んでなんかいないんだな。」

ああ、と答える。

アリアは、全身で痙攣けいれんを起こしたように震えている。

（無理もない、か。あれだけ信頼していた俺に、突然こんなことを
告白されるだからな。）

「あんた、今までのあれは、全部あたしたちを騙していたの？あた
しのことも、キンジのことも。」

アリアは震える手で俺に銃口を向けてくる。俺は、戦意がないこと
を示すために頭の前で手を組む。

「騙してた、のかもしれないな。だから、おまえには俺を撃つ権利
がある。俺は自分の死を恐怖しない。死は終わりではない。死はリ

セツトだ。一度無に返るだけ……」

「いいえ、撃たないわ。あんたにはまだまだ付き合ってもらわなくちゃ困るもの。分かったわね。」

アリアはもう震えていない。むしろ力強い。分かったさ。なんせ俺はおまえの奴隷だからな。

俺は立てひざを突いて主人の命令を受けるように、こういった。

「イエス・マイ・ロード」

「京助、かっこつけてる場合じゃない。向こうから白雪の声が聞こえた。行ってみよう。」

「キンジ、アリア、後ろは任せた。」「OK」「分かったわ。」

|||||

白雪は程なくして見つかった。だが、変だ。白雪は薄い甲冑のようなものを着ている。それに、今のキンジなら白雪には補助刀剣サブ・エッジを出しとけと言っているはずだ。するとキンジはそれに気づいたらしく先手を打った。

「白雪、大丈夫か？」

「うん大丈夫。」

「そうか口の怪我は？」

「大丈夫、少し血が出ているだけ。」

俺はもう少し手を打つ。

「そうか、よかった。心配したぞ。」

するとキンジが

「アリア逃げろー!!」

そして俺とキンジは白雪めがけて発砲した。

白雪、いや、魔剣も予想済みだったらしくはかまに入っていた籠手こてで弾をはじく。その弾が周りの機械に当たった。そして魔剣は目にデュランダルも止まらぬ速さでアリアの側面を動く。

俺はこの前の案山子人形から奪ったUGIに持ち替えて、キンジは

フルオートに切り替えて白雪めがけて撃つ。が、捕らえたのは袴はかまの裾すそだけだ。魔剣デュランダルはその勢いを利用し、機材の下に隠してあった白雪がいつも帯刀している刀を取り、鞘をエレベーターの前に投げる。その刀の刃をアリアの頸動脈けいどうみゃくにつける。あと数ミリ首に持っていけばアリアは数分と持たずに死ぬ。

「しら……ゆき！なによ！どう、したの！」

アリアの拳銃の握られた右こぶしに息を吹きかけると、そこが凍り始めた。

落ちた銀色のガバメントも凍り始める。

キンジがこう叫ぶ。

「アリア違うんだ！そいつは白雪じゃない！」

さらにアリアの左手にも息をかける。

「きゃああ！？」

落ちたガバメントも凍り始める。

「ただの人間ごときが、」

その声は白雪ではない。

「超能力者ステルスに抗おうなど、愚かしいものよ。」

「……魔剣デュランダル……！」

「私をその名で呼ぶな。人につけられた名前は好きではない。」

「あんた……あたしの名前に覚えがあるでしょう！あたしは神崎・

ホームズ・アリア！ママに着せた冤罪107年はあんたが償うのよ

！」

「……と魔剣デュランダルはアリアをあざ笑いながら

「この状況で言うことか？」

と勝ち誇り気だ。

「それにおまえの名、たかが150年ではないか。150年ほどの歴史で誇るのは無様だぞ。私の名はおまえよりもはるかに長い、600年にも及ぶ光の歴史を誇るのだしな。なるほど、おまえは双剣ドラか、リユパン4世がいつていたとおりだ。」

突如、俺の中で何かがキレた。そう、俺の持ってる二つ目の不思議

な力。それは遠山家のものが近くにおいてHSS状態であるのが条件。俺はこの力を、裏HSS――裏ヒステリアモード――と呼んでいる。それがわが一族に伝わる、能力。雛菊家は代々遠山家の影武者であつた。それが、何らかの理由でバラバラになつて俺以外の兄弟姉妹はみな殺され、俺が唯一生き残つた雛菊家の人間らしい。うたいしまい
「魔剣。デュランダル今なんて言つた？リユパン4世？言いか良く聞け魔剣。デュランダル俺の目が黒いうちはあいつの峰理子ことを4世と言つたらぶつ潰す。」

「おまえのような弱い奴に何が出来る？アリア、おまえは偉大なる我が祖先、初代ジャンヌダルクに良く似ている。」

「嘘よ、ジャンヌダルクは火刑で……十代で死んだ！」

「あれは影武者だ。我が一族は策の一族。聖女を装うもその正体は魔女。私たちはその正体を歴史の闇に隠しながら、誇りと名と知略を子々孫々に伝えてきたのだ。私はその30代目。30代目ジャンヌ・ダルク。」

俺は白雪が機材から首だけ出してのぞいてるのを見つけた。白雪、ちゃんと動いてくれよ。

「おまえが言つたとおり我が祖先は危うく火に処せられるところだつた。そのご、この力を代々探求してきたのだよ。」

俺は多少笑いながら。

「演説どうも。では、レールガンって知ってる？ローレンツ力で中の物体を撃ち出す機械でな、これを直で食らうといたいと思うよ。

ビリビリってね。」

その試作段階の電磁加速砲、通称レールガンを構え、ジャンヌに向ける。

「京助撃ちなさい！」

「やめろ京助！」

「武偵法9条を破るつもりか！？」

「これは音速の何倍ものスピードで飛ぶからよけるのは、不可能！3！2！1！」

「やめろおおおお！！！」

「0！」

俺は撃った。勢い良くアリアとジャンヌめがけて弾が飛んで行った。
ズゴゴオオオ

轟音が鳴り響く。周りには氷のかけらが飛び散っている。ジャンヌ
が作ったものだろう。

「いまだ白雪！」

ジャンヌの持っていた刀の柄に鎖がまかれて。とられた。

「しまった！」

「キンちゃん、アリアを助けて！」

俺はアリアを挟むようにして弾幕を張った。

ジャンヌは後退していきざまに緋袴から筒を落とすと、

シューウウウウウ

筒から白い煙が上がっていく。

発煙筒

スプリングラーが煙を察知して水を噴出す。

「大丈夫かアリア！？」

キンジはありあのそばに行きこう問う。

「ええ大丈夫。それより魔剣は？」

「すまん。逃した。それより策を練ろう。この室内は今急激に温度

が下がっている。多分今は14 くらい。即行で片付けないと俺た

ちみんなお陀仏だ。」

俺はそうアリアに告げる。

「この中で超能力者と戦ったことがあるのはアリアと白雪。でもア

リアはもう使えない。となると…白雪、前線を頼めるか？」

「まて、白雪が行くなら俺も…」

「ダメだ！おまえはこの戦いの王手を見るのに必要な、いわば城だ。

そして、ここでの女王は白雪。俺は馬。チェックメイトは白雪が討

つ。キンジは銃を話すな。俺は白雪の援護をする。アリアはキンジ

に出させるタイミングを教えてください。いいな。これは俺たちの連携

にかかっている。」

俺は深く呼吸を吸ってジャンヌを挑発するように叫ぶ。

「弱虫の隠れることしか脳のないジャンヌ・ダルク！少しはご先祖様を見習え！」

「おまえなど隠れることすら出来なかつた。」

真後ろ。エレベーターホールあたりから声が聞こえてくる。

「白雪、アリアの治療を。」

「わかつた。アリア、これすごく……しみると思うけ我慢して。」

白雪は呪文のようなものをつぶやき始めた。不可視の力がアリアの手に伝わっていく。

「……あつ……！んくつ……！」

アリアは相当痛がつてるらしい。が、敵に見つからないように声を最大限まで殺している。

アリアはその痛みへのけぞって、前髪が跳ねる。

（×の字の傷跡。女の子の大事な大事な顔。それについた傷跡。何で俺はいつもこうなんだろうな。）

|||||

1年前、

なぜか再会した家族はみな殺された。

人体実験のモルモットにされて。

殺した奴の名はわかつている。

吸血鬼^{ドラキュラ}。またの名を、——無限罪のブラド——

俺はそいつと対峙したことがある結果はボロ負け。

俺はもうちょっとで殺されるところだつた。

そこに現れたのは『山猫^{オセロント}』と名乗る人物だつた。

俺はコードネームとわかつたので本名は聞かないことにした。

山猫^{オセロント}と名乗る人物は早撃ちがすごかつた。

彼は本当にすごかった。

何とかブラドを退けは出来た。

そして、俺は彼に誘われた。

「イ・ウーにはいれば、君は敵を^{かたき}打つことが出来るかもしれない。」
俺はそうやって犯罪者を逮捕して回ったが、そこに無限罪のブラドはいなかった。

犯罪者リストには載っているのに。

〓 〓 〓 〓 〓

「京助、大丈夫か？」

「……ああ、悪い、大丈夫だ。」

気がつけばキンジたちの服が乾いている。

白雪はジャンヌにはつきりこう伝える。

「ジャンヌ。もうやめよう。私は誰も傷つけたくない。それが貴女^{あなた}であつても。」

「笑わせるな。原石であるおまえがイ・ウーで研磨^{けんま}されたこの私を傷つけることは出来ん」

^{グレード}「私は^{ステルス}G17の超能力者なんだよ。」

^{グレード}G17
Gとはいわゆるレベルみたいなもので、高ければ強い超能力がつかえる。それが17ということは世界でも有数の高超能力者ということになる。

「ブラフだ！G17などこの世に数人しかいない」

「貴女も感じてるはずだよ。星伽には禁じられているけど……この封じ布を、解いたときに」

「……仮に真実であつたとしてもだ、おまえは星伽を裏切れない。」

それがどういうことを意味するか解っているならな。」

「それは今までの私、今の私は星伽の、どんな制約おきてでも破れる。たった1つの存在のそばにいる。その気もちの強さまでは、貴女は見抜けなかった。」

この、以前とは違う白雪によって、室内は常温になっている。

「やってみる。直接対決の可能性も想定済みだ。Gのグレート高い超偵はその分、精神力を早く失う。持ちこたえれば私の勝ちだ。」

意を決したようにジャンヌの姿が明らかになる。

「リュパン4世による動きにくい変装も終わりだ。」

ジャンヌは緋袴ひはかまを脱ぎ、下には部分てきに体を覆う、西洋の甲冑かっちゅう。

ベリベリ、と、特殊マスクもはがす。刃のような切れ長の眼。色はサファイア。二本の三つ編みをつむじ辺りに上げて結んだ髪は氷のような銀色。

「キンちゃん。これからは……あたしを見ないで。」

白雪の声色は震えていた。

「これから私は星伽に禁じられてる技を使う。でもそれを見たらキンちゃん……私のこと……怖くなる。ありえないって思う。キラいに……なっちゃう。」

「白雪……安心しろ。ありえないことはひとつしかない。俺がおまえのことを嫌いになる。それだけはない。」

しゅらり

白雪は自分の髪留めの白いリボンを解いた。

「すぐ戻ってくるからね。」

ドクン

きたか、久しぶりだな。この力。

「ジャンヌ。もうあなたを逃すことは出来なくなった。星伽の巫女がその身に秘める、禁制鬼道きんせいぎどうを見るからだ。私たちも、貴女達と同じように始祖の力をずっと継いできた。アリアは150年、貴女は600年、そして私たちは……およそ2000年もの永いときを。」

そして白雪の刀に緋色の炎が灯る。俺の持っていた刀にも緋色の炎が灯る。

「白雪って言うのは真の名を隠す伏せ名。私の本当の名前は、『緋巫女』」

「ジャンヌ。おまえに3つ教えておこう。ひとつ、おまえは俺たちに勝てない。2つ、今の俺はいつもの俺ではない。通称裏ヒステリアモード。3つ目、俺たち雛菊家は本来、星伽家と遠山家の影武者だ。よって、雛菊家には似たような能力が引き継がれている。」

言い終えると同時にジャンヌに迫る俺たちの業に眼を奪われていたジャンヌはその場に低くかがむ。背後に隠していた洋剣で、俺たちの渾身の一撃を受け止めた。

俺はU G Iを取り出すとジャンヌに向けて弾切れを起こすまで撃ちつづけた。が洋剣を盾にされ、いたるところへ跳弾する。弾切れを起こしてM4に変えようとすると、M4を凍らされてしまった。俺は氷を溶かす前にほかの銃に変えようとして、白雪がジャンヌめがけて刀を振り下ろした。

それをジャンヌは受けずに後退した。

俺はジャンヌに向かってこう叫ぶ。

「やはり炎が怖いかジャンヌダルク！」

炎、それはジャンヌ・ダルクの祖先を殺そうとしたもの。恐怖しても無理はない。そのためにジャンヌダルクの祖先たちはこの力《超能力》を研究し始めた。

「今のは星伽候天流の初弾、緋？毘。次は緋火虞鎚……その剣を斬ります。」

白雪は、緋色に燃える刀を頭上に掲げる。

「それでおしまい。このイロカネアヤメに斬れぬものはないもの。」

「俺はこっちのセリフだ。聖剣デュランダルに斬れるものはない。」

「白雪！援護する！」

京助や白雪やジャンヌの刀や剣が掠めたものは、冗談のように切断されていく。

防弾防刃製のエレベーターや機材が音もなく凍りつき、炎上し、炎が鎮火する。^{ちんか}

そう、これが超偵同士の戦い。

俺は近くにおいていた電磁^{レールガン}加速砲の充電をしておく。俺はガバメントを取り出し発砲するが弾詰まり^{ジャム}を起こした。

「くそ、ジャムった。」

それもそのはず。メンテナンスをしていない使い捨て用のガバメント。

俺の刀。村正は欠けてきている。後3回持つかどうか。が、高周波ブレードは使えない。あれは重装甲戦車を紙を切るように斬れる刀。人外にしか使えない。もしその刃が白雪に当たったら。俺は舌打ちをして、机の下に隠してある銃を取りに行く。

「キンジ！あたしの3秒後に続いて！」

叫んだアリアが背中から二本のに本当を抜き、銃弾の如く飛び出した。

—— 1秒 ——

白雪との戦いに集中していたジャンヌが、ハッ、と振り返る。

—— 2秒 ——

「ただの武偵ごときが！」

剣を横薙ぎに払ったジャンヌより早く、巫女服を右手の刀で払い上げるようにジャンヌの視界をふさぐ。

アリアはスライディングの要領で身を低くする。

ジャンヌは空中の巫女装束を押し分け、アリアの頭上を青白い本流が巻き上がった。

それは氷だった。それが天井にまで飛んで行き、巨大な氷の花が咲いたように凍結していく。

「今よキンジ！ジャンヌはもう超能力が使えない！」

キンジは空中のダイヤモンドダストをかき分けながらジャンヌに迫っていく。

キンジは3点バーストに切り替えたベレッタでジャンヌの正中線を

銃撃する。

ジャンヌはデュランダルでそれをはじき俺に突っ込んでくる。
アリアはその足元をなぎ払うが跳躍して飛び越えてくる。

その力を使って体を回転させたジャンヌはキンジの脳天めがけて斬り下ろす。

が、キンジはそれを受け止めた、しかも片手で。

——真剣白刃取り——その——片手版——

ジャンヌは柄を握ったままキンジの真横に着地した。

「これにて一件落着だよ、ジャンヌ。いい子にしておいたほうがいい。」

キンジはそういいながらジャンヌに銃口を向ける。

「よもや忘れたわけではあるまいな。武偵法9条を……」

「どこまでも賢いお嬢さんだ。」

「お…お嬢さん……？」

ジャンヌは顔を少し赤らめる。

だがジャンヌは剣に力を込める。

「キンちゃんに、手を出すなアアアアアア！」

白雪がキンジとジャンヌの間にあったデュランダルめがけて鞘に収めてあった刀を下から上へい合い抜きのように走らせた。

——ヒノホトギガミ——
「緋緋星伽神」

ジャンヌの持っていたデュランダルが、真っ二つに斬れた。
「言っただでしょう。おとなしくしておいたほうがいいって。

最後の最後にまた想定外の出来事。

ジャンヌは立ち尽くすしか出来なかった。

デュランダル
「魔剣。」

ガチャン

手錠がかかる音。

「逮捕よっ——！」

ジャンヌが視線を向けた先には対超能力者用の手錠がかかっていた。
「き、キンちゃん。………あ………ありがとう。こ………怖く………なか

った？」

「なにがだい？」

「さっきの私。……あ……あんな……」

「怖いもんか。とてもキレイだったぞ。強い火だった。この間の打ち上げ花火よりずっとずっと。な。」

白雪が泣き出してキンジが受け止めてやった。

そして、アリアが俺に口を開いたと思うと……

「あんた、スピアリング槍競技は？」

「あ……………」

開始まであと5分。ここからアドシールド会場まで20分はかかる。

「ちよつと喋らないでくれ。」

俺は携帯で不知火に電話する。さもけが人を装って。

『もしもし雛菊君？どこにいるのみんな探してるよ。』

「わりい、怪我して出れそうにないからそう伝えてくれ。では、
ピッ

携帯を切る。電源も切る。

「ちよつくらキンジの部屋よってくから。先会場行っててくれ。ま

た後ほど。じゃ、」

そう言っジャンクシオンて俺は地下倉庫をあとにした。

The aria continues

The Durandal edition end (後書き)

イエス・マイ・ロード

(Yes, My Lord.)

直訳「はい、ご主人様」

意識「かしこまりました」「御意に」「ご命令のままだ」 など

山猫^{オセロット}は、MGSのオセロットとはまったくの別物です。

魔剣編——エピソード——（前書き）

今回は京助がひどい目に遭あいます。（笑）

俺はアドシアードを何とか怪我で誤魔化しきって、武偵高唯一のフ
アミレスにいる。

デュランダル
魔剣を逮捕できたアリアは上機嫌で、

「あたしのおごりよ」

と、高々く宣言した。

各人の注文が終わり、おしぼりで手を拭いてると……

「あ、あの「ね」

と白雪とリアがハモる。

「あ、アリアが先でいいよ。」

「あんたが先に言いなさいよ。」

「アリア、俺たち外れたほうがいいか？」

首を横に振るアリア。すると白雪が先に話し始めた。

「え、えっと……あのね。キンちゃんにも聞いてほしいの。私……

どうしても、アリアに言っておかなきゃいけないことがあるから。

あの……このあいだ、キンちゃんが風邪ひいたとき……私、ウソつ
いてました。」

「ウソ？」

アリアが聞き返す。

「うん……あのね……あの時キンちゃんが飲んだお薬……私が買っ
てきたんじゃないの。あれは……アリアが、部屋においていったで
しょ？」

「ミネラルウォーターと烏龍茶ウーロンチャとコーラとレモンティーお待たせし
ました。ごゆつくり。」

空気を読まずに注文した品を持ってくる定員。仕事だから仕方ない

としても、ちつと空気読めや。

俺は軽く会釈えしやくをしておく。

「アリアだったのか……」

キンジがすまなさそうに謝る。

「やっぱりな。」

「……………」

無言のアリア。

「な、なーんだ！そんなこと！」

アリアはわざとらしく両手を頭の後ろに隠す。屋上でのアリアの言葉。

『あたしは貴族だから、そういうことは我慢する。』

『貴族は手柄を自慢しない。それは無様なことだから。たとえ横取りされてもね。』

「イヤな女だよね私。でも、イヤな女のまままでいたくなかったから……………ごめんなさいっ！」

俺はキンジに耳打ちをする。

「おまえもアリアに言うことがあるだろ。魔剣マジックンタルの事にしても、屋上のことにしても」

「ああ、アリア。」

なに？と、アリアがこっちを向く。

「この前の屋上のこと、悪かったな。信じなくて……………それに、急にキレたことも……………」

「べ、別に気にしてないからいいわよ……………はい、この話わこれで終了。じゃあ、今度はあたしの番ね」

アリアは咳払いをすると、姿勢を正す。

「白雪。あんたもあたしの奴隷ドレイになりなさい。」

で、どうしてもドレイなのですねアリアさん。ニボンデハ日本、ドレイ奴隷セイドハ、キンシサレテマースヨ。
禁止

「ありがとう白雪。」

前後の文脈が180度くらい違いますよ。

デュランダル
「魔剣を逮捕できたのは、3割あんたのおかげ、4割はあたし、2割レキ。」

「よし、俺がその言葉を訂正してやろう。3割白雪、2割俺、2割キンジ、2割レキ、1割アリアだ、なんせアリアは今回まったく役にたつてグボツ！」

「なんか言つた？^{京助}あんた。殴るわよ。」
殴つてから言うセリフじゃないですよアリアさん。

「あたし今回分かったの。あの魔剣、^{デュランダル}ジャンヌ・ダルクとの戦いは、あたしたちが一人一人だったら負けてた。5人がかりでやっと倒せた。それは認めるわ。」

「5人……？俺とキンジとレキと白雪と、あれ計算が^あ合わグボツ。」
また殴られた……しかも小太刀の峰で。

「あたしたちの勝因は力をあわせたことよ。今までのあたしはどんな敵が相手でも、自分と、自分の力を引き出すパートナーさえいればいいと思つた。でも……2人じゃどうしようもない敵もいるわ。つまりあたしのパーティーに特技を持った仲間が増えるのはいいことなの。とくに白雪みたいに、あたしに無い力を持つてる仲間はね。」

するとアリアはキンジの部屋の鍵を白雪に渡した。

「ありがとうアリア！ありがとうございますキンちゃん！！」
神速でカードキーを胸ポケットにしまいこむ白雪。

「ダメだダメだ。そもそもあそこは男子りよ。」

「それに理子もいるし。何より俺が買おうとしているグッズがはいらなくなる。」

パシ

アリアはまた峰で殴りかかってきたので、白刃取りで受け止めた。

「二度も三度も同じ手を食らうかグボツ」

今度はキンジに殴られた。

「かつてに買い込むな。あそこは本来俺の部屋だ。」

「あんだけ余ってるんだからいいじゃねーか。」

「奴隷一号と二号、なんか文句あるの？」

「い、いえ、俺の話を……聞いてくれると、うれしいんだが、検討してくれないかな……」

途中でキンジの声のトーンが落ちたのはアリアが拳銃を抜いたからだ。

「条件付で異論は無い。」

と、俺が言つとキンジが当然であれば当然のようなことを聞いてきた。

「その条件とは？」

俺がいざというときのためにナイフを抜いておき、

「ケンカで銃を使うな、刀類を使うな、物を壊すな投げるな、素手でやれ、外でやれ。室内で始まつたら全力で止める。なにせ俺のグツズたちの命の危機になるからな。」

自分で言つてもなんだが昭和のケンカだな。

「ものに命なんてあるの？」

これは世界中の一部を除いて誰もが聞きたくなる質問だろう。

「ふむ、では答えてやろう。物は100年たつと命が宿するという古い古い言い伝えがある。まあガセだと思うがSSRではどう何だ白雪。」

「うふふ、合鍵……あいかぎ……キンちゃんとの愛の証。ふふふ。」

ダメだこりゃ。

「……じゃあなぜ銃の手入れをする？それと同じだ。おまえらがあそこで本物の刀使つてチャンバラやつたらあの寮崩壊するぞ。」

「しないわよ！」「いいやするな。」「しないっとならない！」「いいや、するっとならするな。」

バキュウン

ピン

ピシ

バリン

「な、グ、グラスが割れた!？」

今の一瞬で何が起こったかというと、アリアが撃ってきたので俺がナイフで天井に向けて跳弾させて、それがさらに跳弾し、ほかの客のグラスに当たったというわけだ。

「あの程度で崩壊なんかする訳無いでしょう!」「ほんとに?」

「ええ、当たり前じゃない!」

「あ、あの〜ステーキセットと炊き込みご飯御膳と、ももまん井と生姜焼きサラダセットお持ちしました。」

そこに、苦笑いして3歩くらいひいてる新入りのアルバイトと思われる女性が立っていた。

「まあいいわ、奴隷3号の誕生にCheeeers!」

「カンパーイー!」

するとあきらめたようにキンジが、泣きそうな顔で座っていた。ギヤグマンガなら滝のように泣いてることだろう。

「かつてにしろ。」

|| || || ||

当のジャンヌはというと、あのあとキンジとアリアと白雪で、尋問科の綴に引き渡したとのこと。そのときのジャンヌは、つーんと口を結んでいて綴が

「いじめがいがありそうだな。」

と、満面の笑みで言ったのがものすごい不気味だったということだ
(キンジ談)

吸血鬼ヘブラド編 プロローグ

俺と武藤とキンジと不知火で自習室にこもってカードゲームの自習をしていると、突然キンジの電話が鳴った。

そしてすぐ電話が終わる。

「だれだ？」

俺が問う。

「アリアから、女子寮に來いってさ」

「ステルス性クレイモア地雷には氣をつけろよ。」

ああ、といつてから出て行く。

すると数分後、アリアが目の前を通る。

「ふん。そういうことか、やるな理子。」

「なんのこと？」

「いいや、ついてきな。」

俺がそう言つて向かつたのは、

「で、何で女子寮なのよ？」

「まあまあ、いいからついてきな。」

俺は屋上に行つてそこからワイヤーを使って今キンジたちのいる部屋を盗み見る。

「なんていつてんの？」

「ではここは読唇術で、え、おほん。『理子は誰も殺してないもん。だから、武偵殺しなんてのは間違つたあだ名。正確には武偵さらいかなあ？』」

理子がキンジに覆いかぶさってしまったので唇の動きが分からなくなつてしまつた。

「あーあ、こりや読めん。」

「なにがですか？」

「「ううおあ！？」」

俺とアリアが素っ頓狂な声を上げる。まあ、それは驚くだろつ、な

にせ、隣にいつの間にか今野江梨がいたのだから。

「何でここに居る？」

「それは、先輩達が覗きをしているのを見つけたからです。」
答えになってないがまあいい。

「おとなしくしておけ。」

俺が言うと

ガッシャアアアアン！

アリアが窓を割って入った。

「あたしの奴隷を盗むな！」

「おいアリア、人のイベント中にほかのプレイヤーが割り込むのはマナーとしてどうかと……」

「うるさい！！」

アリア（赤面）は銃口を理子に向けながらこう叫ぶ。

「この……汚らしい、ドロボー一族！あたしのは盗めないわよ！！」

「アリアア？イベントシーンに別のヒロインが飛び込んでくるなんて……ちょーつとシナリオ的に無理があるんじゃない？」

「フツ、違うな理子。これはレッキとしたイベントだ。キンジがどの選択を選ぶかでこの後の物語が大きく変わる可能性がある。いわば、ここでアリアルートか理子ルートかハーレムルートかバットエンドルートになる。だからキンジにはここで誰を取る？あ、俺以外ね。」

「たたきのめしてあげようか？」
怖い怖い。

「なるほど、さすがきょくん。5歳からギャルゲやってたことはある。でもアリアだって見てたでしょ？きょくんは、最後は理子が制服脱ぐのを止めるのをやめた。もう理子の胸におぼれる3秒前だったんだからあ。そう、女の子の胸にひざまずかない男子はいない

のでえーす。あでも、アリアには関係ないか。」

「それは違うな。理子は知ってると思うが、世の中には『賓乳がいい』という人がいるのだ。特にアリアみたいなちっこい身体を持ち主にはロリコン殺到！おまけにアリアはツインテールだ。これに萌えない人は少なからう。」

やはり、というか、アリアが入ってくる。

「か、風穴！全員風穴！あけてやる！」

と、オリジナルの地団駄じだんだを踏む。

「まあ、そこでそれはやめてやれ、キンジが危険だ、それに、ほれ。」

俺は、今の地団駄で翻ったスカートを指で指す。真っ赤なアリアの顔がさらに赤くなる。

「風穴あああ！！」

ガバメントを連射するアリア。実に可愛い、といたいところだが、撃たれてるのは俺なのでのんきなことはいえない。俺は全部の弾を避ける。しゃがんだり、横にずれたり、俗に言うマトリックス避ける。したりと。

「あああ、もう！何でくらわないのよ！一発ぐらいあたりなさい！」
アリアは弾丸が尽きて小太刀に変えて横に払う。俺はジャンプして小太刀に乗る。

「……うがあああ！」

ついにアリアがキレた。俺は乗っていた小太刀から降り、背中からロングキヌス銃を取り出す。その銃の螺旋に小太刀を挟み、てこの原理で小太刀を奪い取る。するとアリアが腕を回して殴りかかってきた。が、頭に手を置くとあら不思議、なんと手が当たりません。

「あきらめましょうアリア先輩。アリア先輩の完敗です。」

アリアよ、のどをグルグル鳴らすのは止めてくれんか？

「で、理子はキンジに何の用があった？と、聞きたいが多分十字架を取られたな。どうだ？」

「何できょーくん分かるの？」

「禁則事項です。」

俺がそう言っではぐらかす。

「そーだよ、理子はブラドから宝物、その十字架を取り戻したいの、だから理子を助けて。」

「なにっ！ブラドだと！あいつ。もう死んだと思っていたが生きてやがったか。」

ぴりっ、と周囲の空気が張り詰める。

「落ち着け京助！今のおまえの眼は殺人狂の眼だ！……」

キンジの喝で正気に戻る。

「殺人狂。たしかに、そんな眼してるかもな。じゃあ、1つ俺からの願いを聞いてもらっていいか？」

みんながうなずく。

「多分俺がブラドとあつたらまたこうなると思う。そのときは……頼む。」

「ああ、わかった。」

しばしの沈黙。

「じゃあきょーくんはだめだね。じゃあキーくん、アリア、一緒に、」

理子はすこしためてからなんていったと思う？みんな呆れるわ。なにせ

「ドロボーやろうよ。」

だよ。武偵がドロボーって、どう思うよなあ。

吸血鬼へブラド編

プロローグ

(後書き)

この後の館には京助は行きません。

京助はちよつとした依頼クエストに行きます。

そこで新キャラ登場!?

名前を募集しますので、どんどんよろしくお願いします。

(あと性格も……)

覗き？

アンビュラス棟1階、第7保健室

俺はキンジがここに来るところを目撃したので、暇つぶしに尾行していた。

今日はここでは『採血』が行われる。そんなもの覗いて楽しいかキンジ？

ついでに今日の採血の担当は小夜鳴という美青年。

俺は別にそんなものに興味はないので帰ろうとすると、女子達がウフキヤキヤいいながらこっちに向かってきた。その中にはアリアと理子がいる。

見つかるかめんどくさいのでとりあえず角に隠れる。

「…過ぎたか」

「だれが？」

「だれがって、そりや……」

目の前には理子がいた。

「何でここにいる？」

「それは理子のセリフです。もしかして覗きに来た？」

「いや、全力で違うと言い張ろう」

そんなコントみたいな会話が終わると理子はブーンと手を広げながら中に入っていた。

少しすると小夜鳴が来て中に入っていた。俺は小夜鳴から獣のような臭いがついていることに気づく。

「小夜鳴センセ」

俺が小夜鳴を呼び止める。

「なんですか雛菊君」

「いえ、犬か何か飼っているんですか？」

「犬、ですか。いえ、飼ってませんよ」

おかしい、ならこの獣のような臭いはいったい？

「そうですか」

俺が言うと小夜鳴は保健室に入る。中にいたのは下着姿の女子達。何で脱いでいるんだろうか？

「え、えーと。皆さん。採血だけですから服は脱がなくて良いんですよ」

バンバン！と銃声。

「な、なんであんたがここにいるのよ！」

もちろんアリアが放ったものである。俺は弾丸の雨を潜り抜けてロツカーに近づくと、バン！とロツカーを開け放つ。

「ようキンジ、武藤、元気か？」

俺はキンジと武藤を後ろに放り投げると、そのロツカーがいきなり潰れた。

そこにいるはずのない巨大な動物。体重は100キロ程度はあるだろう。体毛は銀色、湧いているのは殺気。その名は、

「コーカサスハクギンオオカミ、絶滅危惧種、成獣になると体重が100キロを超える猛獣。肉食でこの世界にはもう数百匹程度しかない。でもなぜ日本に、暗殺者が何かを持ってきたというのが妥当か」

俺は狼を睨みながら悠長に解説をしていると、狼は床を飛んで小夜鳴を足場に窓を割って外に逃げた。いくら武偵高といえどパニックに陥るのは必須。最悪死傷者がでる。

「キンジ！その茂みに俺のバイクがある！使え！」

武藤は叫びながらキンジにバイクの鍵を投げ、キンジはそれをキャッチする。言うまでもなくキンジはHSSだ。そのバイクにキンジが乗ると、レキも乗る。

「レキ！これを！」

俺が渡したのは対猛獣用麻醉弾。レキはそれをありがとございますといい受け取る。

「さて、問題はこっちなな」

アリアたちからは異常なまでの殺気を感じ取れる。

「風穴アア！！」

俺はそれを全て弾丸切りできる。

「まてまてまてまて！俺が何をした！？」

「うるさいうるさいうるさい！風穴アア！！」

今のアリアのガバメントはセミオートのはずなのにフルオートなみの連射で俺を撃ってくる。なぜか他の女子達も。

「武藤！ヘルプヘルプ！」

「わりい、捕まった」

今の武藤は足枷と手錠がついていて、なおかつ柱につながれている。俺はアリア達の再装填リロードの瞬間に腰から催涙手榴弾のピンを抜いて投げる。催涙弾は非殺傷武器でただ敵を無力化するだけだ。

「武藤じゃあな」

俺は素晴らしい終わると、ガスが噴射されこの場の全員が涙目になり咳き込み始める。もちろん武藤も。
スモークグレネード

発煙手榴弾を窓に投げておきどの方向に逃げたかを分からなくする。

「ま、まちな、げほッ！さい！かぎ、げほッ！あな！」

バン！とアリアが撃ってくる。もちろん弾丸は虚空に消えていった。寮でアリアに風穴を開けられかけたのは余談だ。

The aria continues

番外編 1 ～ 人身売買 ～ (前書き)

1があるからといって2があるとは限りません。

番外編1 人身売買

あれから二日後

俺は今とある依頼クエストを受けている。

『人身売買、その居場所に侵入し、主催者を拘束せよ、また、身を売られる者も助けよ。』

で、その商品てのが、

「女の子、か。いや、美少女だな。」

単位は1.5で、報酬金額は100万。主催者は『富フォン 扶飯ファイハン』という中国人。で、その美少女の名前が、『アリア・クリス』、イギリス系の白人だ。どこぞの貴族一家に生まれたが、家を燃やされて彷徨っているところを拉致されたというわけだ。

で、深い森林の奥で開催されるので、警備が少なく、また、人が通ったような後はまったくない。

俺は無線を取りだし、掛ける。

「中空知、ここには人が通ったような形跡はないが。」なかそらち

俺と一緒にこの依頼を受けているのが、中空知 美咲みさき。彼女は強襲アサルト科作戦時には良く組んでくれる。

『いえ、約5分前に捕らえた衛星写真では、そこに人が2人通ってました。』

「じゃあ、どこに向かっているかわかるか？」

『はい。そこから北北東に約500メートル進んでください。そこに人工物らしき陰があります。』

「わかった。行ってみる。」

俺は無線を切って北北東に進む。すると、あった。ビンゴだ。

警備兵が1人立っている。俺は少し辺りを見回し通気孔を見つける。

俺はその板を壊し、中に入る。

そこを匍匐前進ほふくぜんしんで進んでいくと、光が突き抜けている場所を見つけた。

声が聞こえる。

「さあ、今日の品を見せましょう。こちらです。」

フォン　ファイハン
富　扶飯と思われる男が布を取る。

すると、かごの中に入れられている、アリア・クリスが顔を出した。会場がざわめく。

「さあこちらは、なんと、貴族のお嬢様だった物です。血統書もありますよ。なので値段は張りますが、自分の欲求を発散したり、使用人にするなり、自分専用の奴隷にするなり、色々利用方法はあります。で、今日はなんと500万単位からスタートです。」
すると腕が上がり皆自分の額を言っていく。

「1000万!」「1500万!」「2000万!」「2500万

!」

俺はダクトの網を開け、スタングレネード閃光響音手榴弾のピンを抜いて落とす。

すると客の一人が気付く。そしてその瞬間に、この部屋が強烈な光と音で満たされる。

俺はその瞬間に降りる。見た所、主催者、警備兵、客、合わせて25人、そのうち客10人は気絶、警備兵以外は失明している。俺はまず警備兵に向かって左右の足に発砲、もう1人の警備兵にも発砲これで無力化できたはずだ。さらに客を村正の峰で殴って気絶させる。

フォン　ファイハン
「後は富　扶飯、おまえだけだ、おとなしく投降しろ。」

「ふふふふ。貴方の狙いはこれですね。」

奴はアリア・クリスに銃口を向ける。

これでは動けない。が、1つだけ手がある。

インヴァジビレ
不可視の銃弾

「さあ、早く銃を捨て降伏しなさい。商品として生かしてあげますから。」

だが、あれをやるには殺人狂モードになるしかない。

でも、ここにはアリアもキンジも白雪も理子も、頼れる人間がいな

いいのかなって？

「さあ、早く降伏しなさい。」

答えは決まっている。いいに、決まっているだろ。

殺人狂モードは人を殺さなければただの戦闘狂。だから、抑えるんだ、自らの手で。

俺は銃を足元に置き降伏を示すためにうつぶせになる。その動作の途中でしゃがむ。

にやりと笑い、油断する富フォン ファイハン 扶飯、これで、勝った。

俺はその瞬間を逃さず、まず腰のホルスターのシングル・アクション・アーミーAに手を掛け、一気に抜き、奴の銃を持つてる手を撃つた。

見よう見まねの不可視インヴィジブルの銃弾。

俺は足元の銃を拾い、さらに追撃で足に二発打ち込む。

「うぐああ！！」

「富フォン ファイハン 扶飯！人身売買および拉致監禁の現行犯で逮捕する！」

ガチャリ

と富フォン ファイハン 扶飯の手に手錠をかける。

「うつ！」

俺はほかの客にも手錠をかける。それをひとつにまとめる。

手錠をすべてかけ終えて無線を取り出す。

「中空知、ここに警察を呼んでくれ。」

『問題ありません。すでに連絡済です。』

「そりゃ結構。」

俺は無線を切り、かごに向かう。すると彼女は泣きながらしゃべり始める。

「Without murdering me without coming without I stop it, and coming because it is a request. Help request, God.（やめて、こないで、お願いだから、来ないで、あたしを殺さないで。お願い、神様、助け

て。）」

英語か。まあ、イギリス人だからな。多分……

「I am all right, and I am your viewpoint. (大丈夫、俺はキミの見方だよ。)」
すると彼女は泣き止んだ。

「本当?」

「日本語しゃべれるなら最初からしゃべってほしかったな。まあいいや。ああ、本当だ。ちよっと下がってて。」

俺は高周波ブレードを取り出してかごを斬る。

「ごめんなさい。あたし、日本語うまくなくて。」

「それだけしゃべれば上出来だよ。」

俺は鍵開けの道具でアリア・クリスの手錠をはずす。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。ところでキミの名前だけど、クリスって呼んでいいかな? もうすぐお別れだけど」

すると彼女は眼を見開く。

「えっ、なんで、ですか?」

「俺は、クリスをここから連れ出すために雇われたようなもんだからな。だから、すぐお別れ。」

「……です。いやです。せつかく、せつかく、信頼できそうな人と出会えたのに……すぐ、お別れなんて、いやです……」

って、言われてもなあ。

「クリス、歳は?」

「……17です。」

17か、ぎりぎりだな。今はまだ5月入学にはぎりぎりだ。

「クリス、こっこの学校に来て見ないか?」

「えっ?」

|||||

あのあと、あの場に來た警察は中の客と富フォン 扶飯フイハンを連行し去った。

俺たちかというと、武偵高に戻ってアリア・クリスの入学手続きを行い、彼女の制服を発注した。寮のほうは教務課マスタースが、おまえが責任を持って、ということでキンジの部屋に住むという流れになっている。クラスは1・Cということで、江梨にこのことを携帯で伝えておいた。

で、いま彼女はというと、『武偵高入学規約』なるものと闘っている。

キンジ達が帰ってきたらひっくり返るだろうな、特にアリアが。

「おや？きょーくん浮気？」

「いつからお前は俺のものになった？」

「それともきょーくんはロリコン？」

「なぜそうなる」

俺は理子を流しながら奥に入る。

「そうそう、今日からの同居人アリア・クリス」

「知ってる」

「よろしくお願いします」

クリスは笑いながら言う。

The aria continues

ブラドとの戦い

クリスが来てから7日目

虫の知らせという奴であろう。俺の中で何かがうずく。

「先輩どうしました？」

そう言ってきたのは江梨だった。

「いやなんでもない。」

ふと空を見上げると雨雲がよって来た。

（なんなんだ？この嫌な感じは。）

ピチャ、ピチャ、ピチャピチャ、

と、雨が降り出す。

「先輩、雨です。雨宿りでもしましょうか。」

「そうだな。」

ブオオオオオ

その音は雷が落ちたものだと思った。が、その考えは捨てた。

俺はその音がしたほうを向く。

（この音……どこかで……いや、音じゃない、今は雄叫び^{おたけ}！？まさか、あいつが。）

自分の顔が怒りに赤くなって、恐怖に青白くなるのが自分でもわかる。

「どうしました先輩？顔色悪いですよ。」

「江梨、これ、部屋においておいてくれ。」

俺は持っている荷物を江梨に渡す。荷物といっても、袋の中に銃や銃弾がいっぱい入っている。さっきクリスのために買ってきたものだ。

「それと、それはまだクリスには触らせるなよ。まだ危険だからな。」

俺はそういうと携帯電話をかけながら探偵科男子寮めざし走り出す。
プルルルル、プルルルル

『もしもし？』

「武藤！いい乗り物があるんだが、乗ってみたいなか？」

『どんな乗り物だ？』

「当ててみる、G A U - 1 2 U イコライザー 25mm機関砲ポッドを装備し、ほかにA G M - 6 5 マーベリックやらクラスタ―爆弾やらがついてるゲームでも有名な『ハ』で始まって『ア』で終わる戦闘機だ。その複座形。」

『おいおい、まさか、ハリアーか？』

「大正解、乗りたくないか？」

『どこに行けばいい？アメリカか？カナダか？フランスか？』

「探偵科男子寮だ！とにかく来い。そして運転しろ！」

『探偵科男子寮だな！今すぐ行く！』

探偵科男子寮にはこんな噂がある。通常は一階から上しかないのに、探偵科男子寮のみ地下があるという噂だ。

俺は武藤が来る前にその地下から、武器とハリアーを出しておく。

武藤が到着するどこで手に入れた？と訊いてきくる。

「すべての口封じ料金としてこれハリアーをやるから聞くな。」

「よっしゃ！早く乗れ、どこに行く？」

俺は後部席に乗りシートベルトを締める。

「ランドマークタワー辺りだ！急いで！」

発進するハリアー。俺の横には日本では使用禁止のM 6 0が置いてある。

（あいつがいるとすれば、キンジたちが危ない。）

〓 〓 〓 〓 〓

ランドマークタワー上空

キンジはランドマークタワー屋上から落ちている。

「キンジ！」

そう叫んだのは理子だった。

理子は屋上からキンジめがけて飛び降りる。

キンジの顔にふわりと、理子のスカートがかかる。そして両ももでキンジの顔をはさむ。

「な、なんだっ!？」

そうキンジが言ったのと同時に、理子は改造制服の背中のリボンを解く。すると、布の多い制服が解けてパラグライダーになった。

理子は即座にビル風——上昇気流を捕らえランドマークタワーを旋回するように飛ぶ。

「り……理子……!」

そして、キンジはなる。

——ヒステリアモードに——

「過去は、塗り替えられた。理子の決断によって。」

理子は上がりも下がりもしない。

迷っている。ブラドのところに戻るか、アリアを捨ててブラドから逃げるか、。

「理子、理子は過去を塗り替えることができる子なんだ。だから過去におびえてちゃダメだ。怯えて、脅えて、でも、過去を塗り替えるんだ。理子の手によって。」

そして、キンジの上をハリアーが通る。

拡声器で聞こえる京助の声

『ブラドオオオオ!!』

同時刻ハリアー内

俺が怒りと憎しみにまみれた叫びを上げる。

「ブラドオオオオ!!」

「キンジ、神埼さん、峰さん!？何で下着!？いや、それよりもなんだあいつは?!」

「武藤!そこに降ろせ。そしておまえは全力で逃げろ!」

俺はランドマークタワーを指して言う。

「お、降ろせって言われても……」

武藤は俺の決意を受け取ったのか、わかった、とうなずく。

「京助、あいつらとおまえに伝える。死ぬなよ。」

俺は、ああ、と答えておく。

武藤はハリアーをギリギリまで近づけて、俺はランドマークタワーに飛び移る。M60を持って。

「京助！？何で来たの？それにそれ、M60じゃない！日本では禁止されてるのよ！」

そう言ってくるアリア。

俺は振り向かずにブラドを睨む。

「久しぶりだな、ルーマニア生まれの吸血鬼。何でこう、ルーマニアには吸血鬼が多いんだろうな？」

「なんだ、拾った命を捨てに来たか。」

「いつてろ、いまの俺は、あんどきよりも凶暴だぞ。」

「フン、何も出来なかったやつがなにを言うか。」

俺は言い終わると同時、ブラドにM60を連射する。

「あのときの借りだ。とくと味わうがいい！」

だが、ブラドはびくともしない。

吸血鬼には鉛玉は効かない。そのため、いま撃っている弾はすべて純銀だ。

そして吸血鬼には魔臓といわれるものが4つある。その魔臓は1つでも残っているとすべてのダメージを回復してしまう。が、魔臓は回復が若干遅い、といっても1秒程度だが。

ブラドの魔臓は4つのうち3つは見つけた。右肩、左肩、右脇腹。

それ以外は全部撃った。顔以外は……

「となると、そこだ！」

俺はM60で舌を狙う。

「グバアア！なぜわかった？！モルモット風情が！？だが無駄だ！」

俺はM60を捨て、右手は高周波ブレード、左手は高周波ナイフに持ち替える。

接近戦に持ち込み、高周波ブレードで左肩を切断、

「これは母さんの分だ！引き裂かれるものの痛みを知れ！」

左手のナイフで右肩の魔臓を突く。

「これは姉貴の分だ！貫かれる痛みを味わえ！」

さらに右手の高周波ブレードの刃を逆さにしてそのまま切り上げて舌を切る。

「これは父さんの分だ！顔が引き裂かれる痛み！」

俺は左手の高周波ナイフを右肩から引き抜き右脇腹に刺そうとして

「そしてこれは——」

「なめるなあアアア！！」

ブラドは俺の左腕を掴んで外に放り投げる。

「（クソ！こんなところで死んでたまるか、死んでたまるか）」

が、超能力で氷を生成しようとしても、精神が怒りと憎しみと憎悪と——恐怖——で荒れているため、うまく生成できない。

ドン！

中に投げ出された俺の体が何かに当たる。

「京助！さっきの約束破る気か？」

武藤の声。となると、俺が今乗つてるところは地上ではなくハリアーの片翼の上か。

「助かった。もうこんなへまはしない。」

ハリアーは屋上に向かっていき、俺は屋上に降りる。

「大丈夫か？京助……」

そう聞いてくるキンジ。

「心配無用、もう私怨には取り付かれない！状況を整理しよう。アリア、銃弾は？」

「あるわ。でも一発づつ」

「キンジ、銃弾は？」

「あと一発」

俺はチツ、つと舌打ちをする。

「あと一発足りねえ」

するとキンジが耳打ちをしてくる。

「大丈夫、理子が何とかしてくれる」

理子……

「わかった、理子にかけよう。アリアはブラドの背後から。キンジは前から。良いね」

ブラドがこっちにくる。

「スタートゲーエン!!」

アリアがブラドの後ろに回りこみ、狙いをつけて、撃つ。

4点同時攻撃

バアンという銃声、ピカアアという雷鳴、またバアンという銃声。アリアが放った一発は右肩にあたる。が、もう一発は、左の脇の下を通過してしまう。

(キンジ、頼むぞ)

キンジはベレッタを撃つ。アリアの放った弾丸に向かって。

ヒリヤード
弾丸撃ち

そして、すべての弾丸は、右肩、右脇腹、左肩にあたる。

理子は^{デリンジャー}超小型銃を取り出し、

パアン

と、ブラドの舌にある、魔臓を撃ち抜く。

銃撃を終えた理子はブラドの頭を踏み、その背後に跳んで、ターンして戻ってくる途中に、

「ぶわあーか。」

ブラドに『アカンベー』をした。

ドスウン

ブラドが倒れた。

俺は念を入れてブラドに『にんにくネックレス』と巨大な『銀の指輪』をプレゼントしておく。

「ブラド。チェックメイトだ。俺たちを^{ただの武偵}ポーンと見てたからチェッ

クされるんだ。ただの武偵 ポーンも頑張ればプロモーション強力な武偵クインになれる、ということを肝に銘じておけ。」

その後、ここに警察が来るのに30分かかったのは、たわいもない世間話にすらならないであろう。

武藤は？というと、武偵高に戻ってハリアーの整備がなんたらこうたらということだ。

The aria continues

アリア・クリスの歓迎パーティー + a

あのあとのブラドだが東京の警視庁などが動いて事件そのものは永久に他言無用とのことだ。

それに、ここ一ヶ月の犯罪はお咎めなし、と。武藤にとってはありがたいうことらしい。

なぜここで武藤がくるかという、まあ言わなくても分かるだろう。そしてあの雄叫びのような声。キンジ達が言うには『ワラキアの魔^ま笛^{てき}』という技らしいが、雷が落ちたということで片付けられた。

イ・ウーにいた身でありながらイ・ウーがどれだけタブーか思い知らされたよ。

寮に戻ってきてから

「「ただいまあ」」

俺とアリアとキンジで外から戻ってきたセリフを言う。

「そうそう、アリア、キンジ、ここでちょっと待ってて」

頭に疑問符が浮かぶアリアとキンジ。

その間に俺はリビングに向かい、ふすまを閉める。

そして数秒後

「良いぞアリア、キンジ、こっち来て」

歩いてくるアリアとキンジ。

「では紹介しまあす」

バサアアア

とカーテンの開く音。

「アリア・クリスちゃんです」

江梨にクリスの紹介をさせる。

「「は？」」

声をはもらせて眼を丸くするアリアとキンジ。

「「はあああああ!？」」

「うん、予想どおりの反応でちよつとがっかり……」
そういう俺とまだ眼を丸くしているアリアとキンジだった。

それから二日後

理子、ジャンヌ、ブラド、ときてかなえさんの冤罪を晴らすには十分材料が出来たので裁判所にいる。

それでいま、俺たちはかなえさんが無罪放免になるのを見届けに来た、というわけだ。

「では、判決を言い渡す。」

場が多少ざわめく。

「被告人、神埼かなえの最高裁を2年先送りにする。」

一瞬、この場が固まったように思えた。がそんな静寂もすぐに破られる。

「なぜだ！？無罪を証明する材料はあるだろ！どうして！？」

「そうよ！ママは無罪よ！そうに決まってる！」

騒ぐアリア。そこになえさんが入ってくる。

「落ち着きなさいアリア」

「アリア、悪い、席をはずす」

俺は外に出てケータイを取り出す。

「ハルか？」

「うん、僕だよ、ずいぶんと久しぶりだね。で、僕に何か用？」

「用があるからかけたんだ。じゃなきゃ国際電話なんてだれが使うか」

『まあそうだね』

「1つ頼みがある。神埼かなえ、その人物についてだ。日本の裁判所にハッキングして彼女のデータを持ってきてほしい。頼めるか？」

『お安い御用だ。でも、国際電話を使って話すことでもないよね。ちよつと待ってて』

ハル、彼はプログラミングなど、機械については天才、いや、鬼才

級だ。

少しして電話が掛かってくる。

『調べたよ。どうやらその神埼かなえさんは10億円の賄賂^{わいろ}で有罪判決を言い渡されたみたいだね。それに公安や武装検事のところにも行ってみたけど、証拠が全部捏造されていて無罪になるにはその証拠が全部捏造だと言う証拠が必要みたい。ほかに調べることは？』

俺はハルには見えないが首を横に振る。

「いや、ありがとう、もうない。また掛けるかもしれない。じゃあね」

『わかった。じゃあね』

俺は近くにあった木を殴る。

「金に取り付かれたクソ犬め！」

俺は再び中に戻る。

泣いているアリア。

重い空気。最初からおかしいとは思っていた。これほど大きな冤罪を帰させられている人間の裁判だというのに、マスコミなどが一人も来ていない。

「ママ……」

「アリア、いつまでも落ち込んでいてもしょうがない。次にかけるぞ」

が、反応がない。

「ママ……」

俺はアリアの胸倉を掴み、引き寄せる。

「アリア！いつまでそうしているつもりだ！最高裁まで2年しかないんだぞ！良いのか？かなえさんが終身刑になっても！」

「よくないに！決まってるでしょ！」

「なら、ここでうじうじしてるよりやることがあるだろ！」

「でも……もう、わからない。何をするのか……」

俺は手をアリアの胸倉から離す。

「今おまえのやるべき事は1つ、落ち着くことだ」
すーはーすーはー

と、深呼吸するアリア。

「ありがとう、落ち着いた」

|||||

次の日

アリアは元に戻っていた。

「あ」

隣にいたキンジたちが反応する。

「どうした？」

「いや、クリスの歓迎会、まだだったな」

「そうね、じゃあやりましょう」

即行で答えるアリア。

「でもいいのかアリア、かなえさんのことがあれだったのに……」

「いいわ、だって、絶対ママは助けるもん。それに、戦うときはみんな一緒」

「……そうか。じゃあやるか、料理はなに食いたい？ ついでに今回の費用は全部出すぞ」

そう、アリアの観察日記の報酬としていまのところかなりの金がたまっているのだ。使わないと宝の持ち腐れだろう、使わない手はない。

「俺スキヤキ食いたい」

「キンジ、これはクリスの歓迎会なのよ。あの娘の食べたいもの優先よ」

「ほう、じゃあ聞いてみるか、たしか江梨と一緒にいるはずだ」

俺はケータイを取り出して江梨にかける。

『もしもし、何でしょうか先輩』

「江梨、クリスは隣にいるか？」

『ええ、います』

「じゃあ何が食べたいか聞いてくれ」

『わかりました。……………聞きましたよ。日本食が食べたいみ

たいです。で、先輩、もちろん——』

「ああ、もちろんおまえもいいぞ」

『ありがとうございます先輩っ!』

「また後ほど連絡するな。でわあまた」

俺はキンジたちに向き直り、

「クリスは日本食がいいって。どうせならしらゆ——」

「きいいいんちゃあああん!!」

オリンピックで短距離金メダルを取れそうな速さで白雪が走ってき
た。

「——きもどうだと言おうとしたんだが…………」

キュキュキュウウ

と、音が聞こえてきそうなブレーキを見せた白雪。

「まあ、言う必要もなかったな」

すると白雪はなぜかすごい形相で、

「きんちゃん、部屋に女の子が増えたって本当!?!」

キンジはなぜか固まっているので、代わりに俺が答える。

「ああ、本当だ。住む許可を出したのは俺だがな」

「おまえだったのか!?!」

俺はキンジの口をふさぎ話を続ける。

「それで、そいつこと、アリア・クリスの歓迎会をやるんだが、お
まえも来るか?」

「……キンちゃんが……一緒なら…………」

ホントにキンジ一筋だな。おまえは。

「よし、じゃああそこにすつか。白雪、学園島を出るけどいいな?」
「……………うん」

変わったな、白雪。

「よし、じゃあ決まり。俺の行きつけの店があるんだよ」

俺は電話を取り出して、江梨にかける。

「江梨か？6時にキンジの部屋に集合な」

『わかりました』

ブツツ、と切る。今度は武藤に掛ける。

「よう、武藤か？探偵科男子寮の目の前に6時に1人でおまえを含め7人乗りの車で来てくれ。おーけー？」

『まあいいが、報酬は？』

報酬、か。武偵なら当然の反応だな。が、俺はこいつの扱い方はある程度知っている。

「報酬？フツ、知りたいか？なら教えてやろう。報酬はなんと、おまえの片思いの愛しい星伽さんと今日一日おしゃべりできる券だ。どうだほしいだろう？」

『よし行く。6時にあの寮だな』

同日午後6時

ブツブツ

車のクラクションの音。

「時間ぴったりだな」

車、といっても最大8人乗りのリムジン。

「でもな武藤。行くのは寿司屋だ。まあいい」

「星伽さんどうぞ」

「ありがとう」

なぜか泣きはじめる運転手兼ガイドこと武藤剛毅。

「あ、ありがとうだってよおお。星伽さんにありがとうっていわれたああ」

こいつに運転任せて大丈夫かな？

そしてみんな乗り終わる。

「武藤、江戸前寿司まで頼む」

「オーケー！じゃあ行くぞ」
リムジンで寿司屋に行く人は珍しかろう。きっとあのおっちゃんもびっくりだ。

時間は遡り30分前

プルルルル、プルルルル

『はい、こちら江戸前寿司！』

「ようおっちゃん！俺だ、京助だ」

『おお、京助か。なんのようだ？』

「実はな、その寿司屋を6時から貸切にしてほしいんだが……」

『そりゃあ、かのうつちゃ可能だけど、まあ、難しいな』

やっぱりな。あそこは人気だからな。

「へえー、そつかあ、美人さんが4人と美人巨乳さんが1人くるんだけど……それじゃあしょうがないな。別の寿司屋に行くか」

『ま、まってまって、難しいといっただけでだれも嫌だとか無理だと言ったわけじゃないじゃないか。あはははは』

「ほう、じゃあよろしく頼むよおっちゃん」

『まかされよ！』

時は元に戻る。

「さあ、つきましたよ」

江戸前寿司の前に着く。ついでにわいわい騒ぐから貸切だ。

「サンキュ武藤。おまえも来い。寿司食いたいだろ」

「はなからそのつもりだ！」

当たり前のように答える武藤。

「で、武藤よ、1つ聞くが、なぜにジャンヌと中空知がいるんだ」

俺が車のほうを見るとトランクが勝手に開いてそこからジャンヌと中空知の姿が見える。

「べつに来ても良いではないか！」

長時間トランクの中にいたせいだろう、ジャンヌはかなり不機嫌だ。

そして中空知はというと、足先に小石があるのに気がつかないのか、マンガのように転んだ。

「イテテテ」

その拍子にメガネが取れた。すると手探りでめがねを探し始める。

「めがねめがねえ」

俺はそのメガネを拾う。

「ほれ、おまえのメガネだ。相変わらずだねえ」

そう、中空知は相当のドジッ子だ。

「あ、ありがうとございます。雛菊さん」

ありがとうございます、であつてるだろうか。

「で、武藤よ、この際だからこいつらがいることはもう追求しない。おまえはそんな格好で物を食うのか？」

そう、いまの武藤は車の運転手、正確には謎のタキシード姿。すし屋に入るにはこれはどうかと思うぞ。結婚式か何かじゃあるまいし。

「まさかな。着替えるから先に中に入つててくれ」

江戸前寿司内

「おう、京助、こうやって会つのは久しぶりだなあ。でよう、おまえはベッピンさんをさらに二人も連れてきてくれたわけかあ。いやあ、こりやおまえ達の貸切で正解だなあ！あつはっは」

俺はみんなが座っている席に着き、仕切りだす。

「さあて、本題に入ろう、みんなコップは持ったか？」

みんなはコップを持つ。

「では、アリア・クリスちゃんの武偵入学を祝って、カンパアアーイー！」

『カンパアアーイー！』

「じゃあ、どんどん頼んでいいぞ。ついでに今日は俺の出しだ」

「まじか！」「よっし、食いまくるぞ！」

「武藤、アルコールと食べすぎには注意しろ。おまえは運転手だからな」

みんなはじゃんじゃん注文する。

武藤は人の話を聞いてない。

席は通路側からアリア、キンジ、白雪、武藤。反対側に理子、俺、クリス、江梨、ジャンヌ、中空知、という座り順だ。

「あたし先輩の隣が良いですー」

なぜか文句を言う江梨。

「峰先輩換わってくださいあい！」

「やあだもん」

懐がさびしくなりそうだ。

「うつ！」

足がしびれたのかうなりをあげるクリス。

「大丈夫、ここをこうすれば。」

俺は座布団のちよつと手前にあるふたを持ち上げて足を伸ばせるようにしてやる。

「ありがとう」

「どういたしまして」

そんなこんなで1時間すぎてしまう。

武藤は白雪の膝枕で死んでいる。

「やべっ！もうこんな時間か……」

するとこの店のお母さん（？）がやってきて、

「じゃあ、ここに泊まるといい。布団も部屋も足りる足りる、問題なし！」

「どうする？」「まあ、運転手がダウンしてるからな」「じゃあ、しょうがないわね」

「じゃあ、ご好意に甘えて、泊まらせていただきます」

次の日朝9時

「おっちゃん、思わぬ世話になったな」

「おうよ、今度はそのベッピンさんだけできてもらいたいなあ」

「ぬうう、それは俺らは来なくても良いと。ふん、ブログに書き込

「んでやる」

「そ、それだけのご勘弁を」

「ほら京助！いくわよ！」

「アリアたちがお待ちだ。」

「じゃあなおっちゃん。またくるゼイ！」

武偵島に着いたのは昼過ぎだった。

「道路があんなに混んでるとわなあ……」

愚痴をもらす武藤。

「昨日あのまま行って事故って死ぬよりはいいとおもっぞ」

インゲスタ

「コネク」

武藤は探偵科男子寮で俺と理子とアリスとアリアを、通信科棟で中空知とジャンヌを、超能力捜査研究科で白雪を降ろした武藤は車輜^シ科の寮に戻っていった。

The aria continues

かなと対峙

次の日

パソコンを見るとメールが届いていた。

差出人不明のメール

『夜、空き地島に來なさい。』

空き地島、あそこにはまだ飛行機の残骸がまだ残ってる。そこに呼び出される。

俺の頭にはいろいろな疑問を無視しても残る疑問がある。

——なぜ？空き地島なんだ——

|||||

夜の空き地島

俺は念のためD・Eを構えて進む。

「久しぶりね、京助。」

風力発電機のプロペラ。そこに1人の女性が座っていた。

「久しぶり？悪いが、俺はお前のことを知らん。」

風力発電機の足元にキンジが転がっているのを発見する。

「キンジ！」

俺はキンジに向かって走り出す。

バキュウン

その女性から放たれたと思われる銃声。

「わたしは、あなたとお話しをしに來たの。」

「そのために俺をこんなところまで呼び出したわけか。」

うなづく女性。

「そうよ京助。」

俺はその女性にD・Eを向ける。

「俺はおまえに名前と呼ばれる筋合いはない！」

「そう、これを見てもわからない？」

バギウウン

突如放たれる銃声。だが、銃自体は見えなかった。俺は驚愕しながら声を上げる。

「まさか、いまのは、不可視の銃弾！？」
インヴィジブル

「そう、今を見ればわかるでしょ。」

いや、さっぱりわからん。インヴィジブル不可視の銃弾は昔見たことがあるが、あれをやつてのけたのは男だ、女じゃない。

「ねえ京助。」

なんだ！？この女！？わけがわからん。

「一緒にアリアを殺しましょう。」

アリアを殺す！？だと、俺が、おまえと……

ああ、なつていくのがわかる。バーサーカー『殺人狂』に、なるのが。

「ふ、フハハハ、フハハハハハハ。」

なぜだろう、笑いがこみ上げてくる。

とうの女はきよとんと首を傾げている。

「『アリアを殺しましょう』だあ！？返答の代わりにこれをくれてやる。」

バギウウン

俺はD・Eをその女性に向けて放つ。

が、防がれた。髪で。

「そう、残念。あなたは仲間になってくれると思ってたんだけど。

あなたもアリアにつくのね。」

俺はD・Eをその女性に向けて何度も撃つ。が、そのすべてを髪で防がれる。

その髪はまるで『サソリの尾』
スコルピオ

「くっ！」

「げほっ！げほっ！」

キンジが眼を覚ます。

「キンジ！」

「きょう、すけ、か、彼女と、カナと戦っては、げほっ、だめだ、げほっ！」

それだけを言い残し、キンジはまた眠りにつく。

あの女性ひとの名前はカナというのか。

「カナと、戦うな、だって？断る。」

そう、ここで逃げたらアリアが死ぬ。

そして、周りを見渡したところにはもうカナはいなかった。

「チッ！逃げたか。」

そして、俺の頭に最悪の考えが浮かんでくる。

「アリアが危ない！」

俺は乗ってきたモーターボートに向かって走り出す。

が、キンジのことを思い出す。

「チッ！」

|| || || || ||

キンジの部屋

「アリアっ！」

キンジの眼が覚める。

「眼が覚めたかキンジ。アリアは無事だ。」

「そうか、よかった。」

「キンジ、カナって誰なんだ？」

疑問をキンジ投げつける。

が、

「かなは……………」

だんまりを決め込むキンジ。

「……………まあいい。知られたくないことは誰にでもある。」

「……………すまん。」

「おまえが謝ることではない。土足で入ろうとした俺が悪い。」

「……………」

沈黙が続く。

「キンジ、状況を報告する。」

|| || || ||

約六時間前

俺はキンジを抱えて寮に戻ってきた。

「アリア！無事か！？」

「なに！？いきなり大声上げて、びっくりするじゃない！」

「ええ、ぶじ、です。」

さて、カナはどっちのアリアを指した？

「いや。無事ならいい。」

高確率で神崎・H・アリアだと思うのが普通だろう。

「誰かここに来たか？」

「いや、誰も来ないわよ。」

「誰も着ていないなら良いんだ。」

|| || || ||

「それで、俺は6時間くらい寝てたってわけか。」

そういうキンジ。

「ああ、そのとうりだ。その間のカナは音沙汰無しだ。そのほうがありがたいんだが。」

「……かなは、あの人を言葉で表すなら、『強さ』でも、『いい人』でも、『最強』でも表せない。そう、『正義』だ。あの方は俺の憧れだった。その、『正義』に惹かれて。」

キンジは続ける。

「だから、たぶんかなが『アリアを殺そう』なんていったのはアリ

「ア1人の犠牲で何百人何千人もの人が助かるからなんだと思う。」
だからアリアを殺すってか。ふざけてやがる。

「そんなのは『正義』じゃねえ！本物の『正義』ってのは、誰一人死なせねえんだよ！」

「京助……」

「キンジ、カナがおまえの憧れってのはわかった。だがな、アリアを殺そうものなら、俺とアリアで返り討ちにしてやる。いいな。そのときはおまえはカナにいたら俺たちはおまえを倒さなくちゃいけない。」

「……………わかった。」

The aria continues

Quest boost 緊急任務（前書き）

すいません、今回は非常に短いです。

Quest boost

緊急任務

翌日

俺はアリアがかなとたたかったと聞いて救護科にとんで行った。アビュランス

「大丈夫かアリア!？」

そこにはキンジも一緒にいる。

「大丈夫だ。いまは寝てるだけだ。」

「そうか。」

すると突然聞き覚えのある声が聞こえてくる。

フオロ・ミ「ちよつとこい遠山!」

外からジャンヌの声が……

「お呼びだなキンジ。」

しぶしぶ外に行くキンジ。俺もついていく。

「これを見る。」

ジャンヌが紙を見せてくる。

「ん、なんだ、えーと、『一学期単位不足者 遠山キンジ 1/9

単位』なんだキンジ、おまえ留年すんのか。江梨とクリスをよろしく。」

「よろしくじゃねえよ。俺はもう武偵なんてやめるんだ。」

「どうやらおまえさんは問題児のようだな、遠山。しかし安心しろ。クエスト・ブースト緊急任務を持ってきたぞ。」

ジャンヌはその紙も見せてきた。

「えつとお、砂金関係の任務クエスト以下文略1/7単位、砂鉄関係の任務クエスト以下文略0/9単位、砂礫関係の任務クエスト以下文略0/5単位。キンジ、どれやる?」

「1/9はないのか?」

「あるぞ。カジノ『ピラミディオン台場』の私服警備で強襲科、アサルト探偵科、他学年可。」

「じゃあそれだ。」

「そういえばジャンヌ、足どうした？」

俺はジャンヌに話を振る。

「ああ、足にコガネムシみたいな虫がひぎに張り付いてた、私は驚いて溝に足が挟まったところを、バスにひかれた。問題ない。全治2週間だ。」

コガネムシ、ピラミッド、何か引つかる。

「どうした、京助。」

「……いや、深く考えすぎだな。そうだジャンヌ。アリアンとこいかねえか？」

「いや、遠慮しておく。」

俺たちはそうやってジャンヌと解れた。

白雪の強襲

翌日アリアは退院し部屋に戻ってきている。
今キンジの部屋にいるのは俺とアリアだけだ。

(888 から：以下文ご想像に任せます)

「さあアリア、どこにさしてほしい。」

「ど、どこにつて、あんたどこにさす気よ!」

「そりゃあ、もちろん、ここらへんかな。」

「や、やめなさい。そんなことにそんなものさしたら風穴開けるわよ。」

「じゃあ、ここにさすか。そうすればじたばた逃げ回ることができんだろう。」

「そ、そこにさしたら、やめなさい!」

「まあ、初めてのわりにはすごかったアリアのためにこっちにさしてやろう。それにどこにさそうがすぐおわる。」

「ど、どっちにさしても風穴!」

「じゃあやつぱりこっちにさすか。」

「な、なんでじわじわとお!」

「いやそれとも出すか?」

「そ、それをひかないと風穴ア!」

「よしちつとてまえに出すか。」

「そ、そこにだされると……ぐう、こうしてやる。」

「ハハッ、何をしている?じゃあこうしてつと、王手、そして詰み!」

「あああ!!!三連敗!何で勝てないのよ!京助、手加減しなさい!」
確かに勝てないのはむかつくが、シャーロックホームズの曾孫だろ

……

「まあまあ、頭を使わず突っ込んでくるだけじゃあそりゃ勝てないでしょ。2角2飛車って。それにアリアは最初から角と飛車を成らせているのに何で勝てない？」
「知らないわよそんなこと！」

「ただいまあ。」

キンジが帰ってくる。

「おかあ」

「ただいま。」

続いてクリスが帰ってくる。

「お帰りい。」

「キンジ、あんたあたしに味方しなさい！」

「将棋か、おい京助、どっから持ってきた？」

「禁則事項だ。今の俺にはブロックが掛けられていて言うことが出来ない。」

「まあいい。あああ、こりやどう見てもアリアの負けだな。」

グウウウ、とうなるアリアをなだめるのに苦労する。

「そうだキンジ、人員は集まったか？」

「ああ、俺とおまえとアリアとレキでやることになった。でもあと一人足りん。」

「そうか、にしても、何もないといいんだがな。」

|| || || ||

翌日

俺たちの部屋に荷物が届いた。

「キンジ、届いたぞ。」

「やっと来たか。」

「とりあえず着てみるか。」

俺たちは（アリア込み）で届いた荷物を着てみると、キンジは若社

長風スーツ、俺はディーラー、アリアはバニーガールという光景になった。

「背中見たら風穴。」

「それ、見てくさいって行ってるようなもんだぞ。」

俺はすでにアリアの背中にまわっている。

そこで見たものは、銃創。

キンジが「アリア」といおうとした瞬間に、アリアがキンジを蹴って『くの字』に曲げさせる。

「パットは！ファッション！パットは、おしゃれ！パット！ト！は無罪！」

「！」一回の割合でキンジを踏みつけるアリア。

「ふ、ふふふ、うふふふ。」

そこで聞こえてきたのは白雪の声。

「な、ななな、なんで白雪がここにいるうう！！」

「キンちゃん、ただいま。」

「お、お帰り白雪。」

「ごめんなさい。星伽でキンちゃんを占ったら『ウサギ難』の相が出たから、私、お仕事のあとすぐ帰ってきたの。それで、こんなこともあろうかと、『あれ』を持ってきたの。」

あれってなんだ？

「あ、あ、『あれ』はやめる白雪！昔使ってた言っただからあれって何だ！？」

「だからごめんなさいなんです。」

白雪はガシャガシャガシャ！と、M60を組み立てる。

「なんだ、ただのM60か。てっきりRPGかと思った。」

「京助！どっちでもシャレにならんぞ！」

「この！泥棒猫！あらもない格好で！キンちゃんさまとおとなの遊びに興じるなんて、万死に値します！万死万死万死！すなわ1万回死ぬべきです！」

「ちょ、ちょっと、いつもいつもこいつおかしいわよ！それに京助

！M60でも大変でしょうが！」

「くたばれ神崎アリア！これは天誅！天誅なのです！あは、あははははは！」

俺は『殺人狂』になり、アリアと白雪の間に高周波ブレードと村正をもって入る。

「アリア伏せろ！」

その瞬間に

バリバリバリバリバリバリ！

と、M60が業火を吹く。

俺はそのすべての弾を斬る。

バリバリバリバリバリ！

が、まだ止まらない。

「落ち着け白雪！」

俺は白雪を説得しながら弾を斬る。

「きょうくんどいて！アリアを、神崎アリアを殺せない！」

「殺さんでいいわ！」

弾切れになったのか白雪はM60を捨てる。

「かくなる上は！」

白雪は刀を抜いてきた。

カキン

と鋼と鋼のぶつかり合う音。

俺は白雪とつば競り合いをしながら対話を試みる。

「いいから落ち着け白雪！話しあおう、な。白雪の分もあるから！」

「わわわ、わたしはあんなもの！」

「ああいうの、キンジが好きだぞ。」

「え、あ、あああつ！」

白雪は嘘情報で何を想像したのか、ショートしてしまった。
キンジはというと、たぶん女子寮にいる。

The aria continues

白雪の強襲（後書き）

ついでに、最初の奴は漢字を使うとこうなります。

「さあアリア、どこに指してほしい。」

「ど、どこにつて、あんたどこに指す気よ!」

「そりゃあ、もちろん、ここらへんかな。」

「や、やめなさい。そんなことにそんなもの指したら風穴開けるわよ。」

「じゃあ、ここに指すか。そうすればじたばた逃げ回ることができんだろう。」

「そ、そこに指したら、やめなさい!」

「まあ、初めてのわりにはすごかったアリアのためにこっちに指してやろう。それにどこにさそうがすぐ終わる。」
詰む

「ど、どっちに指しても風穴!」

「じゃあやっぱりこっちに指すか。」

「な、なんでじわじわとお!」

「いやそれとも出すか（飛車を）?」

「そ、それを（角行）ひかないと風穴ア!」

「よしちつとてまえに出すか（金を）。」

「そ、そこにだされると……ぐう、こうしてやる。」

「ハハッ、何をしている?じゃあこうしてつと、王手、そして詰み!」

局面はご想像に任せます。

七夕での約束

あれから小1時間後、キンジは帰ってきた。

キンジの部屋は意識を取り戻した白雪が弾痕からベットにいたるまでキレイに直してくれたのは良いが……

「俺のPS3は直してくれないのな、雛菊さんは悲しいのです。」

「やめる気色悪い。」

「お帰りキンちゃん、ごめんなさい。私、私、私。」

「もう良いから、元通りに直ってるみたいだし。」

「そうそ、白雪はやろうと思えば完全犯罪もできるぞ。そういえば白雪。」

俺は白雪の持ち物の変化に気づく。

「イロカネアヤメはどうした？」

「……星伽に取り上げられちゃったの。私、色々と制約破っちゃったから。でも、それが盗まれたらしいの。」

盗まれた。あいつと何か関係があるのか？

「それでねキンちゃん、星伽でよくない虫が見つかったの。」

白雪が紙に虫の絵を書く。

「これは……」

俺が声を上げてしまう。

「知ってるのきょうくん？」

「あ、いや、なんでもない。」

出来すぎている。

ジャンヌもコガネムシに似たような虫を見たと言っていた。が、この虫は知っている。

「この虫、どうやら使い魔らしいの。」

「本当か！？だとすると話が出来すぎている。」

「京助、この虫になんかあるのか？」

あるか？だと、大有りだ。

「ああ、キンジ、あの依頼、取り消す気はないか？」

「ないに決まってるだろ。」

「そうか、……」

「で、白雪、ツカイ、なんだって？S研用語を使われてもわからん。」

「キンジ、式神みたいなものだ。」

「余計わからん。これ、ただのコガネムシじゃないのか？」

「うん、これはスカラベ、タマオシコガネだよ。キンちゃん、最近この虫見かけませんでしたか？」

「いや。見てないぞ。」

「そう、良かった。」

|| || || || ||

次の日

7月7日午前11時。

今日は七夕である。

隣にはクリスがいる。

「そうだクリス。」

「なんでしよう？」

クリス、彼女はいつも敬語を使ってくる。敬語使わなくても嫌いに
なりはしないのに。

「七夕って知ってるか？」

首を横に振るクリス。

「じゃあ行かないか？年に一度の、いや、毎日が年に一度だけだな。
今日は七夕って言うイベントがあるんだよ。」

「良いんですか？あたしなんかと一緒に。」

「ああ、当たり前だろ。こういうイベントには好きな人と行くもの
だからな。」

顔が一気に赤くなるクリス。

「あ、ありがとう。でも、すす、すす、好きなひ、ひひ、ひと」と

「じゃあ、行くか。浴衣を買いに。」
「はい！」

ユニス口店内

さすがに今日は買い物客が多い。
クリスは今試着室の中にいる。

すると、クリスが出てきた。浴衣姿で。

「ど、どう？」

「うん。キレイだよ。とっても。」

「ありがとう。」

夜7時緋川神社

ここで毎年七夕祭りが行われている。

「クリス。何をする？」

「ん、あ、あれ食べてみたいです。」

クリスは綿あめを指す。

「敬語じゃなくて良いのに。」

「すみません……」

「何で謝るの？」

「すみません……」

なぜか謝るクリス。

「まあいいや。クリス、お祭りつてのは楽しい行事なんだ。そんな顔してたら楽しめないぞ。それに、俺に対して敬語を使う必要はないよ。」

「でも、キライになったりしない？」

「もちろん。俺はクリスだけは何があってもキライになんかなるもんか。」

「…わかった。」

「じゃあ、食べに行くか。」

クリスはものすごい笑顔で、うん、とうなずく。

「綿あめ2個ください。」

「あいよ、300円ね。」

俺はその綿あめを持ってクリスのところまでいく。

「お待たせ。」

「ありがとう。」

クリスと俺はベンチに座って綿あめを食べる。

「なあクリス、ほかに欲しい物あったら言ってくれ。あまりに無理なものは無理だが。」

「わかった。つまり今日は思いっきり甘えていいってこと?」

「まあ、そうなるな。」

するとクリスは抱きついてきた。

「じゃあ、このまま抱きしめて。」

俺はそのまま何も言わず抱きしめる。

「ふにゅー。」

「あ、そうだ。肝心なこと忘れてたぞ。」

「肝心なこと?」

「そう、短冊に願い事書かないとな。」

俺たちはベンチを立ち、短冊を貰いに行く。

「これに何かくの?」

「んー、願い事かな。」

「願い事……」

「よしかけた」

「…なんて書いたの?」

「それは秘密だ。5年後、教えてやるよ。」

「じゃああたしの書いたのも5年後に教える。」

5年後か。

「じゃあ、指切りだな。」

「ゆびきり?」

「約束みたいなもの。いいから小指出して。」

俺に言われて素直に指を出す。

「指切り拳万嘘ついたら針千本飲ます。つと。」

「……じゃあ、これで5年後に覚えてなかったら許さないよ。」

「わかったよ。」

The aria continues

強運の京助

それから次の日

俺たちは、正確には、俺とキンジとアリアと白雪とレキは今カジノ『ピラミディオン』にいる。

このまま何も問題がなければ望ましい。

キンジは若手IT企業の社長という役割だ。姿だけなら様になって
いる。

俺はただの成金という設定らしい。嫌な設定だ……

俺とキンジはカウンターに来て合言葉を言う。

「両替を頼みたい。今日は青いカナリヤが窓から入ってきたんだ。
きつと、ツイてる。」

キンジはその言葉で作り物の札束1千万円分を色とりどりのチップ
に変えてもらっている。

「明日はきつと太陽が食われるだろう。ああ、世の終末だ。」

何で俺はこんな不吉なセリフを言わないいけないのだろう、まあ、俺
もキンジと同じくらいのチップは貰ったが。

「キンジイ、なにやるか？ブラックジャックでもやるか？」

「いい、やらん。俺はアリアと白雪を見てくる。じゃな。」

「じゃあ、またあとで落ち合おう。」

俺はそのままブラックジャックに向かう。

ブラックジャックが始まると、3回目のヒット（カードを引くこと）
で21が揃う。

その後もなぜか順調に21が揃い、観客も増えていく。

1千万円分のチップがあつという間に3千万円分くらいになった。

俺は飽きたのでブラックジャックテーブルを後する。

「2階に行くか。」

まあ、奴さい出なければいい暇つぶしにはなるだろう、と言うこと
で特等ルーレット・フロアに向かった。なんと最低掛け金は1000

万円、そんな金があるなら武偵弾を買ってくれと頼みたいね……

にここに入るのはパスが必要なのだが、成金風衣装と一緒に貸与されたパスを使えば入れる。

中に入ってみると部屋の一角に人だかりがある。誰かが勝負をしているらしい。

「……」

その勝負をしている台のディーラーは、レキだ。

「では、プレイヤーは次の賭け金^{ベット}をどうぞ。」

ルーレットはカジノにより多少ルールが異なる。ここのルーレットはプレイヤーが賭け金を賭けてからディーラーが球を投げ込む。球を投げ込んだら賭け菌の変更は一切禁止というルール。

「ハハッ、こんなに強くて……可憐なディーラーは初めてだよ。この僕が一時間も経たない間に3500万も負けるなんてね。キミは本当に、運を司る女神だ。」

「運を司る女神じゃなくても、運を司る神はいろいろいる。ローマ神話なら『アウトマティア』運の女神という意味だけど、まあ、そんなことはどうでもいい。」

割り込む俺。

「だれだキミは？」

「あ、俺14番に3千万円分。」

会場がざわめく。

「ハハッ、まあいい。僕は残り3500万、これを全部黒^{ブラック}に賭けよう。」

一枚100万するチップが俺とこの男合わせて65枚も動いたので会場が拍手喝采になる。

「『14』ですね。この手球が14に落ちれば配当は36倍です。」

レキは俺に向かって確認を問う。

「『黒』ですね。では、この手球が黒に落ちれば配当は2倍ですよ。よろしいですね。」

レキはこの青年、今思い出したが『ゲイ・ビルツ』とか言うERT社

長だ。

「ああ、だが配当金は要らない。勝ったら君を貰う。」
そういった若社長に周囲がよどめく。

「やめとけロリコン。」

「だ、誰がロリコンだ！僕はそうやって強運なディーラーを手に入れることで強運を手に入れてきたんだ。」

「はいはい、オケオケ、良いから耳塞いで。」

俺は銃（今日はD・EとコルトSAAとガバメント×2）を一丁取り出して、銃口を天井に向ける。

「皆様も耳を塞いでください。少々うるさいですよ。」

俺はそう言い終ってから発砲する。

これで、上から何も降ってこなければ一番良い結末だが現実^{リアル}はそうも行かないらしい。

ドスッ！

と、降ってきた。まあ、狙ったから降ってくるのは当然か。

「う、うわあああ！」

客の1人が悲鳴を上げるとそれに連鎖反応を起こし次々に悲鳴が上がつていく。

いまさつき降ってきたものは、

「砂か、くそっ！使い魔か。」

「京助、レキ！何があった。」

そこにキンジ、アリア、白雪が来る。

客はみな我先にと逃げている。

俺は天井を見ると、3、6、9、12と、12匹いるか。

「白雪、使え！」

俺は背中に忍ばせている高周波ブレードを白雪に投げる。

「キンジ！アリア！^{マガジン}弾倉だ！受け取れ！」

俺はキンジとアリアに^{マガジン}弾倉を投げる。

相手はどう見ても人型でわあるが人間ではない。人間の体にジャッカル（犬科の動物）の頭をくつつけたような敵だ。それと半月型の

斧を持っている。

「キンジ、アリア、レキ、こいつらは操り人形みたいなもんだ、糸のようなものがある。さっき試しうちで撃ってみてわかったが弱点は人間で言う心臓部分だ。そこを一撃で抜かないと非難中の客に跳弾する可能性がある。気をつける！」

バギウン

レキのドラグノフから弾が撃たれる。

それがジャッカル男の心臓部分を射抜き砂になる。

俺はガバメントを両手に持ち右手でのガバメントで一体、左手で一体射抜く。

「京助やるじゃない。」

「お褒めに預かり光栄ですつと。」

白雪は半月型の斧を盾にしたジャッカル男を問答無用で斬りつける。ジャッカル男殲滅まであと8匹

キンジが3点バーストで足止め、アリアがその隙に攻撃。

白雪はやはり問答無用で斬りつけている。

レキも相変わらずだ。

「さて、俺もやらなきゃな。」

俺は『^{バーサーカー}殺人狂』になり、D・Eでジャッカル男の頭を打ち抜き、怯んだ隙にガバメントで心臓部分を打ち抜く。

あと4匹

レキが銃剣でジャッカル男の心臓部分を刺す。白雪が斬る。俺はD・Eとガバメントで撃つ。

「キンジたちはどこ行つた？」

「キンジさんとアリアさんは逃走した敵の追撃に行きました。」

「そうか。かなりヤバイな。キンジ、アリア、海にだけは行くなよ。」

俺はそうつぶやいてからキンジたちを追いかける。

The aria continues

緋弾死す！？

キンジとアリアは案の定海に逃げたジャツカル男を追いかけてしまった。

「きょうくん。行つて！」

白雪が俺に向けて叫ぶ。

「ああ！そのつもりだ。」

俺はこのバニー^{カジノ}ガールの乗ってた水上バイクでキンジ達を追いかける。

（たのむ。間に合つてくれ。）

幸いバイクのエンジンは掛かったままだった。

そしてキンジたちの許^{もと}へ向かう。

が、海に出た直後、

パシユン

と、腕を狙撃された。幸いこのスーツは防弾製だ。

「ぐあつ！」

だが、衝撃までは緩和できない。

が、俺はハンドルは離さない。ここで手を離したら海にまっさかさまでキンジたちに追いつくことは不可能になる。

「もう一度、来るか。」

俺は高周波ナイフを抜いておく。そしてもう一度撃たれる。

パシユン チャキン

と撃たれた弾を俺は斬る。

その間にも俺はバイクを進める。

そしてキンジたちが止まったと思つたら、アリアが撃たれた。と思つたときにはもう、アリアは海に落ちていた。

アリアが海に落ちたところからは血の模様が広がっている。

「！？」

俺は一瞬怯んだがすぐさま海に飛び込んだ。

（どこだ、アリア、アリア）

海には血の線がある。そこを辿っていくと。いた。アリアの周りにはジャッカル男が取り囲んでいる。

（じゃまだ！）

俺はD・Eを取り出してジャッカル男の心臓部分を打ち抜く。ジャッカル男は砂になって海水に漂う。

（目隠しか。小賢しいまねを。）

砂がある程度沈殿していたときにはもう、アリアの姿はなかった。俺は海面から顔を出し息を整える。

「はあ、はあ。」

水上バイクに這い上ると、キンジが見ているものを眼で追う。

そこには、かつての恩人が居た。

「長い夢を見た。永い眠りの中で『第2の可能性』が実現される夢を。だが……な。キンジ、残念だ。パトラごときに不覚を取るようでは、『第2の可能性』は無い。」

「……兄さん。分からねえよ！『第二の可能性』って何だ！パトラって誰だ！何でそんなアリアを撃った奴の船に乗ってるんだ！」
キンジはその『兄さん』とやらの話しかける。

「キンジ！落ち着け！」

俺はキンジを落ち着かせようとする。

「これが落ち着いてられっか！アリアが撃たれたんだぞ！」
バン

俺はキンジに向けてD・Eを発砲する。もちろん狙いは外してある。
「いいから、落ち着けて言ってるのが、わかんねえかあああ！！」

「……………悪い。取り乱した。」

向こうでなにやらゴチャゴチャ言ってるが知ったことではない。
むこうで何があったかわ知らんが急に出てきたパトラは帰ってしまった。

そしてジャッカル男達が持ってきたアリアが入っているであろう棺

を追いかけてしようとしたとき、

「止まれ！」

「黙れ！お前はもう恩人でもなんでもない！お前はただの犯罪者だ！」

「『緋弾のARIA』か、はかない夢だったな。」

緋弾のARIA、だと。

「なぜ、お前が！……そうか、これでお前のたくらみ全てが繋がった！」

「兄さん！俺を騙したな。ARIAを殺すのはもうやめたって言っただろう！」

「俺は殺していない。ただ看過しただけだ。」

「あんたが助けてくれれば。ARIAは……ARIAは……」

「キンジ！まだだ！まだARIAの命のともし火は消えかかってはい
るが、消えてはいない！」

キンジの兄こと遠山金一は俺がそいい終わると同時に砂時計を投
げてきた。

「ああ、その通りだ。まだ死んではない。あと24時間は生きて
られる。パトラはその間にイ・ウーとの交渉にでるはずだ。だがそ
れだけだ。どう転ぼうと『第2の可能性』は無い。」

「ふざけるな！『第2の可能性』が無けりゃ、『第3の可能性』を
作りゃいいだけだ！キンジ、今は何も聞くな。今は、目の前の敵、
元・武偵庁特命武偵、遠山金一を、逮捕することを考える！」

「ああ、分かった。兄さん。いや、元・武偵庁特命武偵、遠山金一。
お前を殺人未遂の容疑で逮捕する。」

キンジは意を決する。その意思が通じたのか遠山金一も受けて経つ
姿勢だ。

「……いいだろう。俺も1つ確認していないことが有る。見せても
らおう。お前の、いや。お前たちのHSSを。」

俺たちは遠山金一の乗っている船に移動する。

「この船が沈むまで残り20秒といったところか。その20秒でお

前をもう一度試す。お前の想いが本物かどうか、緋弾との絆を確かめる！」

今のキンジはHSS状態。俺たち雛菊家^{ひなぎく}の人間は代々遠山家と星伽家の影武者だった。そのため、微力ながらも星伽の術とHSSが使える。が、封じ布を解いた星伽家の人間が近くにいれば、かなり強い星伽の力が使える。また、同じくHSS状態の遠山家の人間がいれば、雛菊家の人間もHSSを使うことが出来る。が、影武者は所詮影武者。本家には劣る。が、今の俺は『殺人狂^{バーサーカー}』に『HSS』だ。この死闘、勝てる。

The aria continues

同士討ちへフォーリング・アウト」

遠山金一は二対一だというのにびっくりともしない。いや、わずかに指先が動いた。

インヴァージブル
不可視の銃弾はその構えを取ること自体相手に悟られることは無い。故に皆はこう呼ぶ。

—— 無形の構え —— と

「京助、ここは俺1人にやらせてくれ。」

「キンジ……………そうか、わかった。」

キンジが集中し始めた刹那、遠山金一の目の前でマズルフラッシュが起こる。

そのマズルフラッシュからでたと思われる銃弾はキンジに突き刺さる。

いくら防弾性とはいえ衝撃までは吸収できない。

「なぜ避けなかった。」

「わざと……………食らったんだ。それくらい分かれ。……………見えたぞ『不

可視の銃弾』」

キンジが言つと金一はわずかに眼を見開く。

「兄さん、昔、ジョン・ウェインの西部劇で一緒に見たよな。その技の原型を。」

この前キンジから聞いた話だが、アサルトアリアは強襲科で金一の銃をコルト・ピースメーカーだといっていたらしい。それは名銃であるが19世紀後半に作られた銃だ。現在武偵はあまり使わない。俺はたまに使うが……………、そう、理由は、コルト・ピースメーカー、シングル・アクション・アーミーは拳銃史上では一、二を争う早撃ちに適した銃だからだ。

「……………さすが、俺の弟だな。誰にも見抜けなかったこの技をよく見抜いた。それは認めてやろう。俺が離れたことは正解だった。お前もまた、アリアを触媒に目覚めようとしている。だが、見抜いたと

ころで何だというのだ。いいかキンジ。お前の戦闘技術は全て、俺
がお前に教えたもの。そしてその技術の中に、この『不可視の銃弾』
を防ぐ手立ては無い。キンジ、お前はこれを躲すことは出来ない。

いかにHSSのお前とはいえ、放たれるまで1/36秒しかないこの銃弾を人間が躲すことは出来ないのだ。これは絶対だ。たとえ俺でも、躲せない。」

「だったら、不可視の銃弾を躲す手立てがないなら、作ればいいだけだ！」

そして、金一が一瞬眼を見開く。

「浅はかな。」

キンジがとった行動は、『無形の構え』

「見様見真似で同じ技を放つつもりかキンジ。お前の銃は自動銃、
『不可視の銃弾』を放つには不適切だ。」

この瞬間、キンジはある確信をする。

この勝負に勝てるという確信を……

俺たちや金一が乗ってる砂の船、『太陽の船』（と言ったか？）が崩れるスピードを速め、海風の強くなる。

「眠れキンジ、兄より優れた弟など、いない！」

『殺人狂』状態の俺には大体のものが見える。

俺の眼に映ったそれは、遠山金一が腕を動かすと、腕に払われた砂の軌跡が、それとまったく同じように腕を動かすキンジの腕が。どちらとも腕自体は見えていないが。

が、この勝負、このまま行けばキンジが、勝つ。

キンジのベレッタは装備科の平賀文が改造した、ちよつと不具合のある3連射。トリガーを一度引けば弾が二発同時に出る。

キンジが放った銃弾と金一が放った銃弾は互いの銃弾に真正面からぶつかり、互いの銃口へ戻っていく。言うなれば、

「鏡打ち、か。」

そして、キンジの銃口に戻ってきた銃弾は、キンジの二発目で明後日の方向へ弾いた。

金一が持っていたピースメーカーはキレイに破壊され、黄金の船が沈んだ。

キンジは兄を超えたという安堵^{あんど}からか倒れていく。

「京助…あとは、まかせた。」

ジョボオン

とキンジが海に沈む。

「キンジ！」

俺と金一がはもる。

俺は金一をにらみつけてから、海に飛び込む。

（クソッ、砂で視界が悪い。おまけにゴーグルもない。最悪だな。）
すると、キンジを見つけた。

俺は念のために持ってきたアリア用の浮き輪をキンジにつけて、膨^{ふく}らます。これは瞬時に膨らむタイプだからこんなときに役に立つ。
そして、俺たちが海面に出たときには金一はすでにいなかった。

The aria continues

キンジ、出発前

俺はキンジを連れて陸に上がる。息と脈を確認したがどちらも正常だ。

すでにレキあたりがへりを呼んでいたのだろう、車輜科ロジのへりが見える。多分、衛生科メディカと一緒に積んでるはずだな。

俺が安堵のため息を、ふう、ともらすと近くの茂みから狼が出てきた。

反射的に銃を構えてしまう。

「問題ありません。その狼は武偵犬です。ハイマキ、来なさい。」

「……武偵犬って、すでに犬じゃないし。」

それにハイマキって、どう思うよ、なあ。

ババババババ

とへりのローター音が近くなってくるのがわかる。

案の定、衛生科メディカもいた。

キンジはへりで運ばれ俺たちは車で帰ることとなった。

|| || || ||

約十三時間後 車輜科ロジ

「兄さん。」

そうつぶやいてキンジは眼を覚ます。

「キンちゃん？」

「白雪？」

「キンちゃんキンちゃん！へりで運ばれたときは、本当に心配したんだよー！眼が覚めて……本当に、本当に……」

この場では完全に空気な俺がキンジと眼が合う。

「白雪、俺はキンジと話がある。空けてくれるか？」

白雪は多少嫌そうな顔はしたが、わかった、といってこの場を後に

した。

「キンジ、アリアの時間があと12時間もない。俺が言いたいことは分かるな？」

キンジは頷く。

「全ての作戦は決めてある。お前と白雪テ・ミナであの墓に入り、アリアの確保およびパトラの逮捕。アリアの場所は北緯43度19分、東経155度13分。白雪の占いと理子のGPS、それと衛星写真でピラミッドらしき影をとらえ、解析。全部同じ位置だった。キンジ、歩ける、よな。」

キンジは縦に首を振る。

「じゃあ行こう。皆様がお待ちだ。それと、色々説明することがあるが、ここは2、3に絞っておく。」

俺たちが歩き出しながら会話を始めた。

「パトラは強力な呪術者だ。つまり、呪いを使う。」

「呪い？………」

「ああ、ジャンヌの足の怪我也、理子の眼の怪我也、ブラドが逮捕されたことも。」

「あのブラドが呪いのせいで逮捕されたぞ！そんなばかな。」

「だが、事実だ。パトラの呪いはそれほどまでに強い。ジャンヌは言っていただろう『コガナムシのような虫が足に張りついた』と。」

理子も呪われ今は右目が見えない。どれもこれも奴の呪蟲スカラベのせいだ。

「スカラベ、パトラの使い魔であり忠実な僕しもべ。」

「京助、パトラって………」

「ああ、察している通り、クレオパトラの子孫。自称だけだな。」

「ははっ、怪盗リュパンに騎士ジャンヌダルク、ドラキュラにクレオパトラ。王族の登場か。もう驚かねえよ、何でもきやがれ。」

その意気だ。あと20時間後に俺は、ここに居るかわからないからな。

そのまま沈黙を破るものもなくエレベーターに乗り、車輛科地下二

階に行く。

「キンジ、渡すものが有る。レキからだ。」

俺が渡したアタツシケースの中にはベレッタキンジモデル、バタフライナイフ、キンジが強襲科^{アサルト}で使っていたB装備。

「バタフライナイフはレキが磨いていた。それとこれは俺から。ロング弾倉^{マガジン}3つだ。」

「サンキユ京助。レキにも礼言わなきゃな。」

「遅いぞお前達。」

エレベーターが開くと、目の前にジャンヌ、白雪、理子、レキがいた。

「遠山、お前は早く準備をしろ。」

「キーくん、これ。」

理子がキンジに渡したのは、アリアの真新しい防弾制服。

「アリアは理子の獲物なんだから。死なせちゃガオーだぞ。」

約束

始めてきたであろう車輛科のドックには海水のにおいがする。

俺たちは進んで行き、第7ブリッジと書かれたところで

「キンジ」

油まみれの武藤が顔を上げる。

その武藤が整備してたと思われるものは、俺はイ・ウーで見たことがある。

白と黒で着色されたロケットを横倒しにしたような乗り物だ。確か名前は、

「これは『オルクス』。私が武偵高に潜入するために使った潜航艇だ。元は3人乗りだが部品が増えて今では2人乗りだ。武藤、何ノツトまで出せそうだ？」

「・・・まあ、170ノットってとこだな。」

「すばらしい。たった一晚でそこまで出来るなんてお前は天才だ武藤。」

「それは認めるがよ。オレ以上の天才だぞこれを造ったやつは。これは元々海水気化魚雷だスーパーキャビテーションったんじゃないのか？」

「スーパァー・・・・・・・・なんだって？」

キンジは訊く。

「高速魚雷が蒸発させた海水を自分の周囲に張って、水の抵抗を――

――

俺は武藤を制止しながら説明する。

「要するに、その魚雷を潜水艇に改造したわけだ。オケイ？ そうだ武藤、燃料は？」

「積めるだけ積んだが、2000KMも走らせるとなると、片道分の燃料しかない。後で何か持ってくけど自力では帰ってこれねえぞ。」
武藤はキンジを見る。

「聞いたのか武藤。俺たちの――その――」

キンジは武藤に問う。

「聞きやあしねえよ。好奇心ネコを殺す。武帝が書いた本にも載ってたんだろ。お前はほんと難に対しても鈍感なヤツだよな。俺たちが何も知らないとも思ってたか？眼を見りゃ分かったよ。ここ数ヶ月のお前が危ねえ橋を渡ってたことぐらいはよ。」

武藤は、バカにすんな、と言いたげな顔をキンジに向ける。
潜水艇のハッチから不知火が出てくる。

「みんな薄々分かってたよ。武偵だもん。危ない橋の一つや二つ、みんな渡ってるからね。ここの生徒は。それにー」

俺は不知火の言葉を盗る。

「武偵憲章4条、武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用のこと、か？」

「言葉を盗らないでほしいな・・・まあでも、やっと手伝いが出来て正直ちよつとうれしい。」

「あちがとう。」

キンジはそれだけしか言わない。

キンジと白雪がオルクスに乗り込む。

「ではハッチを閉めるぞ。武運を祈る。それと、これをもっていけ。」

言ってジャンヌは自分のデュランダルを渡す。

かつて白雪に切られたそれは、剣身は前に見たときよりも短く詰まっているものの、日本刀くらいの長さになっていて白雪には使いやすそうだ。

「ジャンヌいいの？船ももらっちゃったのに・・・この剣もあなたの大事な・・・」

「パトラは私の敵でもある。敵の敵は見方というからな。」

「・・・ありがとうジャンヌ。本当は、いい人だったんだね。」

まっすぐなお礼を言う優等生白雪。

「なっ、私は魔女だ、本当は怖いんだぞ。あ・・・ぶ、武運を祈る。」

「俺はハッチが閉まる前にキンジにある道具を渡す。」

「キンジ、持って行け。もしかしたら、お前の身代わりになるかもな。」

「ああ、もらっていく。」

俺とジャンヌはハッチから離れていき、ハッチは音も無く自動でしまる。

「キンジ、白雪、彼らに勝利を。アーメン。」

「形だけだな。」「うっせ。」

俺がそんなことをしているとジャンヌにつっこまれた。

「敵の敵は見方、か。が、所詮は敵には変わらない。最悪の場合、三つ巴になり身動きが取れなくなるぞ」

「ああ、分かっている。お前にそんなことを言われなくてもな。」

「くくッ。お前が魔女ねえ。まあ、超偵界ではそうなんだろうね。」

「なんだ、私が魔女だと何か不服か？」

「いや、イメージ的には、魔法少女だろうよ。まあでも、所詮は現実。^{リアル}いくら現実の人間が可愛いものつけようとも、ゲームの中の女の子には敵わないさ。」

俺はジャンヌの制服の腕の裾にピンクの糸が付いてるのを見つけ、指を指す。

「………！」

ジャンヌはそのピンクの糸を発見し顔を瞬時に赤面させる。

「予想するにたぶんお前のタンスか何かにはドレスか何かがつぶり収納してあるな。」

「……ま、……まさかな……ははは、そんなもの、この、この私が持つてるとでも……こ、これは頼まれてだな……」

俺は後ろにいる理子に話しかける。

「理子お、今度秋葉に行くか？5万までなら出してやるぞ。アリア^{アニメ}に日本文化を吹き込むいい機会だゲフンゲフン。」

「おおおお、じゃあ行きますかあ。」

俺はジャンヌに耳打ちし、

「ジャンヌも来るかあ？さあ、何人かで周ろうじゃないかあ。秋葉には少女マンガもたつぷりと有るぞおニヤニヤ。」

「う、ぐ、わ、私はそんなもの。」

「キョーくん、ジャンヌは乙女ロードに行きたいんだよ。きっとそうだよ。」

「わ、わわ、私はそんなこと一言も言っておらん。それに私は乙女ロードなどには興味のかけらも無い。」

俺はジャンヌに向けて問題を出す。

「では早押し問題。乙女ロードとは何か？」

パスッ

とジャンヌの手が挙がる。策士が策に引つ掛かったな。

「乙女ロードとは、乙女に人気な物が多く集められ、主に腐女子の聖地と……」

「「ニヤニヤニヤニヤ」」

俺と理子はジャンヌにニヤニヤとしながら詰め寄る。

「ああ、もう。行けばいいのだろう行けば。それにしても京助、お前はそんなところにも行くのか？」

「んん」。少女マンガ系も計百冊程度なら持っているけどな。有名な作品はコンプしたな。少女マンガじゃないけどお勧めの本は、『緋弾のアリア』だなこれはアニメもあつたけどもうアニメは終わったな。漫画化もされている。是非とも原作の小説を読もうじゃないかジャンヌ。」

「『緋弾のアリア』か、どこかで聞いた事があるな。まあ、読んでやるがお前がその代金を払うんだぞ。いいな。」

俺はうんうんと肯く。

その後、俺たちは解散。10時間後再度集まるとのことだ。

7時間後

俺はハリアーに乗り込む。

「どこに行く？」

ジャンヌの声が後からする。

「私達を、乙女ロードに連れて行くのではなかったのか？」

ああ、そのつもりだ。

「おまえ、死に行くつもりだな。」

.....

「そんなこと私は許さんぞ。もし行くというのなら、私を倒してから行け。」

「俺は、やらなきゃいけないんだ。」

いつもとは違い、ものすごく真剣な表情で話し始める。

「俺は、死ぬつもりは毛頭無い。」

俺はとあるペンダントをジャンヌに投げる。

「クリスに渡してくれ。」

が、ペンダントは投げ返される。

「甘ったれるな。自分で渡せ。・・・死ぬつもりは無いのだろう。」

ああ、そうだな。

「行つて来る。」

俺はハリアーを発進させる。

The aria continues

Go to the hell!シャーロック

このハリアーは毎時間1245KM進めるようになっていて、最大航続距離は2145KMと、車輛科に依頼して多少の改造を加えてもらっている。

約2時間でパトラのいる場所まで着く。

俺は、生きて、いや、生きて帰るんだ。と、決意する。

前までの俺の計画シナリオの通りに進めば、俺は死ぬ。

が、加筆、修正した計画シナリオどつりに進めば俺は生還できる。

どちらにしても、この計画シナリオに支障はない、か。

目標地点到達まであと1時間40分

『京助!』

無線が入る。

「な、なんだ。武藤か。」

『ジャンヌに聞いたぞ。お前、生きて帰ってこなけりや轢いてやる。』

「何か矛盾してるが、まあ一言だけ言う。死ぬつもりは毛頭ない!」
ククク、と無線越しに武藤の笑い声が聞こえる。

『そうか、でもなんでお前ハリアー持ってたんだ?2機目か?』

「ああ、その通りだ。今お前達も太平洋の真上だろ。たぶん出会うかもな。……では、そろそろ無線を切る。じゃあな。いや、またな。」

『ちょ、ま』

ブチッ

と無線を一方的に切る。

「またな、か。」

1時間39分後

ピラミッド型の建物、いや、船、アンベリーヌ号から緋色の球体が天に昇っていった。

それからズズズズ、とアンベリーヌ号前方数百メートル付近の海面が盛り上がったいく。

「アリアが覚醒し、伊・ウの出現。全て計画通りだな。」
シナリオ

伊、それはかつて日本で使われていた原潜の暗号名

U、それもまたドイツで使われていた原潜の暗号名

全長300M 以上は有る伊・Uが海水を滝のように流しながら海から出てくる。

俺はその船の甲板にハリアーを停める。
プロフェシオン

「お久しぶりです。『教授』」

「久しぶりだね、京助君。」

そして下からカナの声が聞こえてくる。
プロフェシオン

「『教授』……やめて下さい！この子たちと戦わないで！」
プロフェシオン

「『教授』は答えない。」

ピシュッ！

何かがカナを殴ったようにしてカナは後に倒れた。
インヴァジビレ

不可視の銃弾をやったのだ。『教授』が、狙撃銃で。
プロフェシオン

「かな！―」

キンジが叫ぶ。
プロフェシオン

「『教授』！やり過ぎでは？」
プロフェシオン

「『教授』は何も言わない。」

「……曾、おじいさま……!?!」

アリアが『曾おじいさま』と言った『教授』。
プロフェシオン

その姿はひよる長く、痩せたような体。

鷺鼻に角ばった顎。

右手に持った古風のパイプと、左手のステッキ。

いうなれば、シャーロック・ホームズ1世。

「京・・・助?!なんで、お前が、なんでお前がそこに居る?!」
キンジが叫ぶ。

「ノーコメントだキンジ。」

「はぐらかすな!答えろ!」

俺はやれやれ、といった風に首を振る。

「俺はイ・ウーの人間だぞ。ここにすることがそんなにおかしいか?」

「京助。お前、俺たちを騙していたのか?」

「騙す?違うな。俺はお前達を騙したつもりはない。」

そう、騙したことは無い。

「なら、なんでお前がそこに居る。イ・ウーから抜けたんじゃないか
つたのか!?」

「キンジ、それは勘違いというヤツだ。イ・ウーに居た、と言った
けど抜けたなどとは言っていないぞ。」

突如、アンベリーヌ号は轟音とともに大きく揺さぶられる。

魚雷、正確にはMk-60対艦魚雷の直撃。
マークシックスステイ

「きゃああああ!」

白雪の悲鳴。

「白雪!船尾側に救命ボートがあるはずだ!それを下ろせ!」

キンジが白雪に命を下す。

白雪が救命ボートを下ろしに行った直後、白雪の近くに転がっていた
黄金枢からパトラが出てくる。

「キンイチ!」

パトラは拳銃を抜こうとしたキンジを無視して遠山金一の下に駆け
寄る。
もと

パトラは傷を治す秘術を持っているはずだ、ここからでは良く見えないが金一の胸には穴が開いているはずだ。防弾服も貫通する銃弾、
装甲貫通弾によって。
アーマールヒアス

が、パトラの力の源たるピラミッドなしでは、完全回復は難しい。
イ・ウーは微速前身でアンベリーヌ号に迫っていく。対し、アンベリーヌ号は動けない。

ついにイ・ウーとアンベリーヌ号は衝突する。

眼前には炎の壁。が、シャーロック・ホームズはジャンヌが使っていたのと同じ能力を使い、炎を消しながら、パトラの錬金術で砂金の階段を作ってそれを渡る。

俺は、そのシャーロックを、撃った。後から。

シャーロックは頭を打ちぬかれて、砕け散る。

「少し甘いね。見事に殺気は消せていたよ京助君。でも、甘い。」
シャーロックの声の後からする。

「まだだ！」

俺は振り向きながら高周波ブレードをシャーロックに叩き付ける。
が、もちろん回避される。

「高周波ブレードか。なかなか厄介なものを持っているね。」

俺は右手に高周波ブレード、左手に高周波ナイフを構える。

双剣と呼ばれる技術。

が、幾度接近し攻撃しようとも、攻撃、回避、攻撃、回避で埒が明かない。

これなら、と思い出した手榴弾のピンを抜き、シャーロックに放り投げたが、空中で切られた。

火炎瓶を投げたが、ダイヤモンドダストで消化されてしまう。

何とか背後を取り切りつけるも、あるときは砂金に戻り、またあるときは氷となって砕けちる。

が、まだ勝機は残っている。

俺が接近し左手のナイフで切りつける際に大きく振りかぶり手元の極小のトリガーを引く。

バン

と、柄の底から銃弾が出て行く。シャーロックの頭めがけて。
が、ピン、と銃弾撃ちで弾かれる。

俺の手首は無理な体勢から撃ったものだから手首に負担がかかり、左手はほとんど使い物にならなくなっている。

ピシュッ！

という銃声と、飛び散る血液。

「ウグッ！」

幸い、撃たれたのは右股だ。

それでも、失血の量は凄まじい。

シャーロックが近づいてくる。

「これが、格の、差か。もうちょっと、いけると、思ったんだけどなあ。」

シャーロックはまたアンベリーヌ号に向かう。

俺は動く右手でシャーロックの足を掴む。

「さてよ。一緒に、地獄に行こうぜ。老いばれジジイ！」

俺はポケットから出した手榴弾のピンを抜く。

これにはシャーロックも反応できない。と思っていた。

まさに神速。

音速を超えるであろうスピードで手榴弾を奪い取り、空に放り投げた。

ドゴオオオオオ！

という爆音。

「あ、ああ、……」

絶句、それ以外の何者でもなかった。が、それは表面上のこと。

「京助君。命を無駄にしてはいけないよ。」

「お前が、言える言葉か？」

俺がもそもそしているのに気が付かないシャーロックではない。

「地獄^{ゴテューヘル}に行け！シャーロック！！！」

俺がピンを抜いた手榴弾を見せる。

こんどこそ、反応できなかったシャーロック。

二度目の爆音が、しなかつた。

「不、発……だ。」

そこで手榴弾が取り上げられ海に投げられる。

The aria continues

ヒステリアモード

俺は、刺し違えてでもシャーロックを殺すことは出来なかった。少なくとも今は。

俺は一般的には強い。だ、シャーロックはさらにその上に行く。

彼は強い。

そう、彼は強い。強すぎる。

故に誰もが畏れを抱く。

だが、まだ手札は残っている。次の引き、つまりキンジの判断によって全てが決まる。

シャーロックは錬金術で足場を作り、アンベリーヌ号に向かいながら言う。

「やれやれ、少し遅れてしまった。」

言い終えると同時、アンベリーヌ号の舳先に付いた。

「もう逢える頃だと推理していたよ。」

その言葉だけで全ての生物は畏れを抱き全細胞が硬直する錯覚に陥る。

「卓越した推理は予知に近づいていく。僕はそれを『条理予知』と

あらかじめ

呼んでいるがね。つまり僕はこれを全て、予め知っていたのだ。京

助君が使った仕込ナイフのことも。でも、最後の手榴弾だけは予知できなかった。ただどカナ君……遠山金一君。君の胸のう

ちも僕には推理できた。」

試験の答え合わせのような態度で瀕死の遠山金一に告げる。

「さて遠山金治君。君も僕のこととは知っているだろう。いや、こう思うことは決して傲慢ではないことを理解してほしい。何せ僕という男は、嫌というほど書類や映画で取り上げられてるからね。」

キンジはこのシャーロックが俳優か高性能なロボットや何かではないかと甘いオチを限りなく無に近い希望を抱いていただろう。が、これは本物だ。

「アリア君。」

自分の名前を呼ばれたアリアの体が一瞬ビクツとする。
血族同士の目と目が合う。

「時代は移っていくけれど、君はいつまでも同じだ。ホームズ家の淑女に伝わる髪形を君はきちんと守ってくれてるようだね。それは始め、僕が君の曾お婆さんに命じたのだ。いつか君が現れることを推理していたからね。」

俺は右足の傷を止血して氷の階段を作る。これはいつかシャーロックに教えてもらった超能力だ。

それでキンジたちと話せる程度の場所まで行く。

「シャーロックよ、なぜそれが、^{ツイテール}双髪なんだ？」

「それは次期に分かるよ。」

シャーロックは武装したキンジたちの間に先生が生徒間の話に入る程度の気安さでキンジたちに近づく。対しキンジはベレッタの銃口を少し上げるだけ。

「用心しないといけないよ。鋭い刃物を弄んでいるといつかはその手に怪我をする。」

ただそれだけ、その言葉だけでキンジは金縛りにあつたかのように動かなくなる。

「キンジ、それが、偉人だ。子孫でもなんでもない、^{オリジナル}親だ。」

俺はそれだけキンジに向かって言う。

シャーロックはさらにアリアに近づく。

「アリア君。君は美しい。そして強い。ホームズ一族で最も才能を秘めた、天与の少女。それが君だ。なのにホームズ家の落ちこぼれ、欠陥品と罵られその能力を一族に認められない日々はさぞつらかつたろうね。だが、僕は君の名誉を回復させることが出来る。僕は君を、僕の後継者として迎えに来た。」

完全に言葉を失ったアリアが、あ、とだけか弱い声を出す。

「おいでアリア君。君の都合さえよければおいで。悪くてもおいで。」

シャーロックが長いコートの裾をなびかせ手を差し出す。

「おいで、そうすれば、君の母親は助かる。」

その言葉にアリアは目を見開いた。

今の言葉でアリアは一気にシャーロックに傾いた。

当のシャーロックは『推理どつり』とでも言うかのような愉快的顔をしている。

「さあ、アリア君。とかく、好機は逸して後で悔やむことになりやすいものだからね。」

シャーロックは、ヒョイ、とアリアをお姫様抱っこする。

「あ……！」

が、アリアは抵抗しない。されるがままだった。

「行こう、君のイ・ウーだ。」

「キンジ……！」

アリアは今、混乱とも怯えともつかない顔をしている。

が、今の状況を拒んでいるようには見えない。

この好機を、受け入れようとしている。

「アリア君。君達はまだ学生だったね。ではこれから、『復習』の時間にしよう。」

シャーロックはその言葉を最後にアンベリーヌ号の舳先から古川でも飛び越えるような気安さで跳んだ。長いコートの裾を一瞬だけ髪飛行機のように広げて。

とても人間では飛び移れない高さと距離を、一歩で。

さつきシャーロックに抱かれたとき、アリアは逃げようと思えば逃げられたはずだ。少なくとも、もがくくらいは。だが、アリアはそうしなかった。逆らう理由を全て失って。

「アリア！」

キンジは叫ぶ。

が、ここまでは全てシナリオ計画通り。約1年かけて作ったシナリオ計画通り。

これからキンジが一新たなヒステリアモード《……………
・》を覚醒させることも。

「アリアアア！」

叫ぶことしか出来ないキンジが絶叫したとき、俺の中に眠るヒステリアモードも覚醒する。

「……シャー……ロック……バカめ。心臓を……打ち抜いた程度で、もう、義を制したつもりか……ッ」

キンジの後、遠山金一は全身防弾アンダーウェアになって立ち上がるうとする。

「た、立つなキンイチ！立ってはだめぢや！まだ傷は癒えてはおらぬ！」

「これでいい……これ以上直すな。」

金一は言い、髪に隠していた大鎌を後に投棄する。

その鋭い目つきに、俺たちは息を飲む。

金一は口元の血をぬぐい、キンジの横に立つ。

「キンジ、覚えておけ。H S S、ヒステリアモードには成熟や状況に応じた派生系が有る。今の俺は」

ダイイング

「ヒステリア・アゴニザンテ。別名死に際のヒステリア、重傷を負った男は死ぬ間際に子孫を残そうとする本能があり、それはその本能を利用したヒステリアモード、命と引き換えのヒステリアモード、か？」

「……なぜ、それを知っている？」

「兄さんやめろ……そんな、そんなにしてまで戦うな！」

「止めるなキンジ。これは好機だ、シャーロックを合法的に現行犯逮捕できる。」

俺が言い、金一が付け足す。

「この客席は日本国籍、その船上では日本の法律が適用される。ヤツは未成年者略取を犯した。」

「でも！」

「覚えておけキンジ！好機の一瞬は、無為な一生にも勝る！」
俺と金一が同時に同じことを言う。

「聞けキンジ。今のお前は通常のヒステリアモードではない。ヒス

テリア・ノルマーレ。それがいつものお前のヒステリアモード、女を守るヒステリア。今のお前は、ヒステリア・ベルセ。女を奪うヒステリアモード。ベルセは男に対する憎悪や嫉妬が鍵だ。全てに對し荒々しくなり、思考が攻撃一辺倒になる。いわば諸刃の剣。が、戦闘能力はノルマーレの1・7倍だ。」

俺がキンジに説明する。

「キンジ、雛菊家のお前、船があと1M沈んだら跳ぶぞ。あわせろ！」

金一はそう言う。

もし言い終わつたのと同時にカウントするならばあと90センチ。

「出エジプト記14章21節、主は海を退かせ、海を陸地とされ水は分かれた、か。」

金一が聖書の一説をつぶやく。

「行くぞキンジ！雛菊！まずはアリアを救助し」

あと5センチ。

「……シャーロック・ホームズを逮捕する！」

言い終わると同時、俺たちは跳んだ。

キンジと金一は流水へと跳ぶ。俺は跳んでから氷を足場に形成しそれを踏み台にして跳ぶ。

視界の向こうにはアリアを抱えるシャーロックの姿が見える。

「シャーロック！第2ラウンドの始まりだ！」

シャーロックはこちらに向くと、微笑する。

The aria continues

幕乗弾幕戦

俺は空中で背中から村正を抜き身で取り出し居合いの構えを取る。

「はあああ！」

落下のエネルギーと斬撃により剣先が音速を超える。

シャーロックはその斬撃を避ける。俺は上方から切りつけたため船と激突する。

俺は村正をハリアー付近に捨てハリアーから新たな武器を取り出す。それは4本の日本刀。

「ほう、4刀の刀を同時に操るか、面白いねえ」

4刀流、これは俺がキンジのベルセに影響されていてなおかつ星伽の鬼道術まがいの業を使っているからできる技。

日本刀は人差し指と中指の間に、中指と薬指の間にそれぞれ一本ずつ両手に持つ。

俺は何も言わずシャーロックに突っ込む。そして斬る斬る斬る斬るが、全て防がれる。片手一本で。

その結果起こったのが、鏢競り合い。

俺が後ろに飛んで日本刀をシャーロックに向かって投げつける。これが普通の相手なら自分の力で前のめりにつんのめって普通に当たる。が、シャーロックは違う。シャーロックはそれをさも予想していたかのように弾く。いや、実際予想していたのだろう。俺は日本刀を背中に納める。

「チッ！やはり無理か！」

そこにキンジたちが来る。

「シャーロック！」

叫んだ金一の体の中央でマズルフラッシュが起こる。

が、シャーロックの前方でギインという音がするだけで終わる。

シャーロックは『弾丸撃ち』と『不可視の銃弾』を同時にこなしたのだ。

さらに金一は撃つ、が、シャーロックはそれを跳ね返しキンジはその弾をシャーロックに跳ね返す、がシャーロックはさらにその弾を弾く。

パパパッ！

と金一の目の前で閃光が4つ。加えて宙にばら撒いていた銃弾を空中でリボルバーに再装填し6発の連射、もう一丁のピースメーカーで6連射、もはや神業といっても過言ではない『不可視の銃弾』の16連射。しかしその全ては『弾丸撃ち《ビリヤード》』ではじかれる。

キンジは長弾倉を挿しフルオートで金一と共に弾きかえす。『弾丸撃ち』だけでなく『鏡撃ち』も雑ぜるが、それらの攻撃も全て跳ね返される。

俺はハリアーから世界最強と知られているアサルトライフル『M4カービン』を取り出し戦闘に加わる。

見る間に32発、64発、128発と一秒ごとに跳ね返す銃弾が多くなり、一瞬のミスで最悪命を落とす。

この戦い、名付けて、

『べきじょうだんまくせん
『累乗弾幕戦』』

迫っていく敵との距離、累乗的に増える空中の銃弾、それらの弾丸を処理しなければならぬ時間がコンマ1秒ずつ縮まっていく。

「(クツ、これが、真のイ・ウー)」

刻一刻と弾切れに近づく。

人間のレベルを超越した銃撃戦。アリアが目丸くしているのが見える。

突如、キンジのベレッタから轟音が鳴り響く。

武偵弾 響音弾

ロングマガジン

前に渡していた長弾倉の中に仕込んでおいた武偵弾が発動した。

「京助、こんな聞いてねえぞ！」

「もう一つの弾倉には閃光弾を15発目に入れてある」

俺はそれだけしか言わない。

シャーロックは突如体をひねるようにして飛び上がる。7Mはある艦橋までたった1足で。

俺達の銃撃は一斉に止まる。

反転したシャーロックの腕にはアリアが抱かれていて、撃てない。今撃つとアリアに当たる。

シャーロックは手でアリアの耳を塞ぐと、奴のスーツのネクタイが破れ、シャツのボタンは弾け飛び、まるで風船のように膨らんでいく。

「ワラキアの…魔笛……やばい！金一、耳を塞げ！」

が、遅かった。俺が言い終わると同時に、

「エアアアアアアアアア！」

という甲高いシャーロックの咆哮に雲は千切れ、海面は沸騰したように泡立つ。

その轟音に全身の器官が引つ掻き回され、肺は潰れ、息が止まり、五臓六腑が口から飛び出そうになる。間一発ところで耳を塞いでいたキンジは何とか耐えた。

が、金一は耳を塞いでいなかった。両耳から血を流し、シャーロックに向けた手を鉤爪のように曲げて立ち止まっている。そして今の金一はヒステリアモードを解かれている。

「キンジ！避ける！」

金一が飛び掛るようキンジを突き飛ばす。

「させるか！」

俺は金一の目の前に分厚い氷の層を作る、が、氷の層は貫通される。一発の銃弾によって。

その銃弾はさつきまでキンジの心臓があつた場所、今金一の心臓がある場所にたどり着く。

そして、その弾丸は血の尾を引いて通過していった。

金一は再び心臓を撃たれてもなおピースメーカーを艦橋に向ける。

だが、そこにシャーロックの姿は無い。

「行くぞキンジ」

「でも兄さんが！」

「……キンジ……追え……！ヤツは、艦内に……に、逃がすな……」

金一は赤黒い血を吐きながらキンジに命令する。

「兄さん！あんたを置いてなんか！」

「行くぞキンジ！何のためにこいつがお前をかばったか理解できないのか！」

キンジが苦い表情をして立ち上がるうとして、

「待てキンジ………これを使え」

金一が渡したのは、二発の武偵弾。

「俺は始めてお前に理屈の通らん事を言ってるのかもしれない……このイ・ウーに、たった一丁のベレッタで、たった一本のナイフで挑め、と。だがキンジ、人生には理屈を超えた戦いをせねばならない時がある。今がそのときだ」

俺はキンジの手をとり連れて行く。それでもキンジは振り返る。当然か……

「振り返るな！……キンジ、もう振り返るな。行け！」

振り返るな、か。

「兄さん！死んだらあんたの弟をやめてやるからな！」

キンジの叫びに小さく笑う金一の声が聞こえる。

「それなら、キンジ。お前はずっと俺の弟だ」

俺はジャンプして足元に氷を作りそれを足場にして飛び、キンジは艦橋の側面にあった梯子を登り、開け放たれていた耐圧扉に飛び込む。

俺達は何も言わずに螺旋階段を降りる。

「こつちだキンジ！」

俺がイ・ウーの中を案内しながら広大なホールに着く。

「なんだ……これは……」

この部屋は最下層から最上層までをぶち抜いて作った天井から、天然石でできた床をシャンデリアが照らしている。

その床には、ティラノサウルスやらステゴサウルスやらの全身骨格標本がそびえてる。

壁には大シヤコガイやジュゴンやイルカや狼やその他もろもろの絶滅危惧種や絶滅動物の剥製が並べられている。装飾品だけでも100億や200億はくだらない。

「やれやれ。やっときたか」

俺達は声のしたほうへ反射的に銃を構える。

「僕は伊達^{だてひょうゆう}豹竜。イ・ウーのメンバーだ。悪いけど、君達にはここで死んでもらうよ」

「…行くぞキンジ、こんなのに構ってる時間は無い」

俺はそう言いそいつの横を通り抜けようとする。すると、上から日本刀が降ってきた。

「チツ！キンジ、ここは任せて先に行け！って、一度言ってみたかった」

「…わかった。行かせてもらう」

「アリアを、連れ戻して来い」

それだけ言っと、キンジは行った。

「じゃあ、はじめようか伊達さんよ」

すると、相手は静かに笑う。

「…何を言ってる。何で僕が君なんかの相手をしなけりゃいけんの？君の相手はこの娘^こ」

そいうと、上から人らしき影が降ってきた。

「よろしく」「ハッ！」

それだけの命令で黒い影、たぶん忍者と思われる影は襲ってくる。

武器は、クナイ、隙あらば手裏剣も投げってくる。正確に、人間の弱点だけを狙って。

そしてその忍者が纏っている黒装束、あれはどこをどう見ても防弾防刃性。

俺は左手に持った高周波ナイフで全てを叩き落す。相手は無駄と判断したのだろう、投げるのをやめた。が、接近する訳にも行かず、といった具合だ。

「どうした？来いよ」

俺はあえて挑発的な態度をとる。

「来ないなら、こっちから行くぞ！」

俺は右手に高周波ブレード、左手に高周波ナイフを構える。

高周波ブレードを振り下ろすと相手はそのまま避けた。相手は避けると同時に手裏剣を投げてくる、俺はをれを高周波ナイフで弾く。左手をガバメントに変え、撃つ。が、放たれた弾丸は全てクナイで斬られる。

俺はさつき降ってきた日本刀を取り、それに氷を宿す。

「食らえ！『オルレ안의氷花』！」

かつてジャンヌが使った技、それを相手に飛ばす。当然のごとく相手は避ける。俺はその瞬間に相手の懷まで接近し、相手の腕を自分の腕で両腕とも掴み、脇腹を思いつき蹴る、蹴る蹴る蹴る。

俺は相手が気絶したのを確認し腕を放し、後ろに下がる。

そのとき、倒れていた相手が起き上がって、主人であろう伊達豹竜のところまで下がる。

「申し訳ありません。倒せませんでした」

「…倒せませんでしたあ！！？」

豹竜は忍者の後ろに立ち、その背中を日本刀で切った。

飛び散る鮮血。

「豹竜…様……な、ぜ」

「なぜだあ？そんなもん決まってる。お前が無能だからだ。俺の部下に無能はいらねえ」

バンバン！

と2発の銃弾。俺がD・Eで豹竜を撃った。が、豹竜の背中で火花が散っただけ。

「てめえ、仲間を、何だと思ってやがる！」

「仲間？誰が？こいつは部下だ。仲間じゃねえ」

ブチッ、つと俺の何かがキレた。

「大体なぜ君が僕の部下を心配するんだい？負けたものが死ぬのは当然のことだろ」

「だったら、俺はお前を殺す」

俺が言い終わった刹那、豹竜の上から光る一閃が振り下ろされるが、豹竜はそれを悠々と避ける。

「いいねえその眼、気に入った。俺もこいつに仲間を斬られる事にイラついてんだ」

豹竜がいた場所に立ってた者は、真つ赤な袴はかまを羽織った男。その男は斬られた忍者を抱えている。

その忍者を見ると傷は完全にふさがっている。

「豹竜、貴様の悪事をこれ以上見過ごすわけにはいかねえ」

「ブラッド、きさま裏切る気か」

「裏切る？誰がテメエの部下になるか。アホぬかしてんじゃねえ」

「アホ？アホだと。この僕が…フッフ、フッフッフ、この僕を、アホって言ったね。いいよ、生き地獄を見せてあげるよ」

ブラッドと呼ばれた男は忍者を部屋の隅に置き、ここで待っている、とやさしく声をかける。

俺は高周波ブレードと高周波ナイフをそれぞれ手に持つ。

ブラッドは日本刀一本をさやから抜く。

The aria continues

罪の血

先手必勝とばかりにブラッドは切りかかる。

ブラッドは切り下げるが右手一本で止められる。

チッ、と舌打ちをするブラッド。

ブラッドは日本刀を自分の腕に添えたと思うと、自分の腕を斬った。

「グウッ！」

と呻き声を上げる。

「何をしている！？自分の腕を斬ってどうする！」

「こうするんだよ」

ブラッドが自分の持つてゐる日本刀を俺に見せてくる。その日本刀は弱々しくだが禍々しく紫の光を発生させていた。

「こいつは所持者の血を吸って真の力を発揮するいわば『妖刀』」

妖刀、聞いたことはあったが実在するとは思っていなかった。

「こいつは世界中に散らばる7つ妖刀の一つ。名は、『罪果^{さいか}』」

ブラッドが罪果の名前を呼ぶと刀は形を変え一度液化化したかと思うとブラッドを包み込む。

「ブラッド！？」

「大丈夫だ、問題ない」

液化化した罪果はさっきよりも強く光り、さらに禍々しさを増している。

「罪果！」

再びブラッドが名を呼ぶと、このホールを包み込むほどに罪果はまばゆい紫の光りを放つ。

光が収まるとブラッドは、紫の全身を覆う鎧と頭全体を覆う兜を纏っていた。紫の鞘には紫の剣が収まっている。言葉で表すならば、

「暗黒騎士……」

俺は驚愕と恐怖が混じった声で呟く。

「これは数々の罪を犯した者の成れの果て」

言うとなブラッドは剣を抜く。

その剣の刀身は透明で紫の光りを放っている。その柄は何者でも吸い込んでしまいそうなほどの漆黒。

「罪を犯したものは代償として全てを失う。自らの命も。お前も罪果から出る禍々しさをなんとなくだが分かるだろう。これは瘴気^{しやうき}。中性子線みたいなものだ」

「なっ！お前死ぬ気か？」

ブラッドは何も言わずに剣を構える。

「俺は血^{ブラッド}。全ての生物にあり一つの生物にしかないもの。そして、生物を殺すもの」

言うとなブラッドは消えた。いや、『殺人狂^{バーサーカー}』だった俺の眼が辛うじて捉えたのは、高速で動くブラッドの姿。その動きはまさに神速。次ブラッドがいた場所は豹竜がいた場所。豹竜は壁に激突していて、壁にはひびが入っていた。

「いつてえな。ああ？」

豹竜がそういった瞬間ブラッドは豹竜の目の前にいて剣で振りかぶっていた。豹竜は自分の持っていた刀を両手で受けの姿勢をとった。ブラッドの剣と豹竜の刀が激突すると床に小さなクレーターができた。

「が・・・ッ！」

あまりもの衝撃に豹竜の体は傷つき、刀にはひびが入っている。対しブラッドには傷ひとつ無い。

ブラッドがさらに力を込めると豹竜の刀は細い木の棒を折るようにして簡単に斬れてしまった。

ブラッドの剣は止まらずに豹竜に向かう。

豹竜は間一髪、横に転がるようにしてそれを避け、新たな刀を取り出す。

俺は豹竜に向かおうとして、やめた。頭の中に直接聞こえるその声。
「（手を、出すな）」

ブラッドは一撃につき豹竜の刀を一本斬る。そしてブラッドの鎧や

兜は一本斬るたびに禍々しさを増す。

次の瞬間、豹竜が真横に吹っ飛ぶ。

「（テラを、頼んだぞ）」

ブラッドが俺に言う。

するとブラッドの剣が液状化しブラッドと豹竜を包み込む。

液状化した剣は紫の光を放つのを止め、銀色に変わる。

「ざけんな」

俺はあえて平坦な声で言う。

「何が、頼んだぞ、だ。自分で面倒見やがれ」

「（だが、俺は・・・もう・・・）」

「生きればいいじゃねえか」

「（無理だ。俺は、大罪を、犯した。この鎧を纏えるのは、大罪を犯した者のみ。俺には生きる資格が無い）」

「なら、なぜ仲間が斬られることにイラついていた」

何も言わないブラッド。

「それは、お前が生きたいと少しでも思っているからだ」

「（・・・俺は、生きていてもいいのか？何百人、何千人もの人を

殺した俺でも）」

「ああ、良いんだ、生きていても。生きる権利は誰にでも有る。その権利を剥奪できるのは、誰もいない」

「（そうか、俺は、生きてても良いのか）」

「ああ、お前は、生きていたくないのか？」

「（いや、生きていたい。俺は、生きていたい！）」

ブラッドがそう叫んだ瞬間、銀色の罪果は純白に成り、中から豹竜と、純白の鎧を見に包んだブラッドが出てくる。

俺はブラッドに向かって手錠を投げる。

「豹竜、俺はお前を殺人罪で拘留する。だがよ、俺もすぐに、豚箱に入ってやる」

「いや、お前が入るのは豚箱ではない」

「地獄か？」

「いや、俺たちと一緒にくるんだよ」

ブラッドはテラと呼ばれた忍者を抱え、俺は豹竜を連行しながらキンジたちのところへ向かう。

T h e a r i a c o n t i n u e s

説得

俺達が奥に行くとその部屋は緋色に染まっていた。部屋の中央付近からは銃声が聞こえる。

接近拳銃戦《アルカタ》

アリアの得意分野でもあり強力な接近戦。

ブラッドは剣を抜こうとしている。俺はその剣の上に手を置いて静止する。

「キンジ！どうして！？」

片足バック宙を切ったアリアがキンジの顎を蹴り、拳銃を持った手で着地したアリアはその手を軸に回転し、キンジの頭に2発蹴りを叩き込む。

「キンジ！どうしてあたしをバカにするの！」

さらにアリアは着地と同時に飛び掛り、よろめいたキンジの背後に降り立つ。

「奴は？」

ブラッドが訊いてくる。

「彼女はアリア。神埼・H・アリア。シャーロックの曾孫。双剣双銃のアリアとも呼ばれる。実力は…見てのとおりだ」

俺達が話している間にも戦闘は進む。

そして、ガチィッ！という音と共に決着は付く、いや、付かなかった、といったも良い。

キンジのベレッタの銃口をアリアの白銀のガバメントの銃口に、バタフライナイフを白銀のガバメントの銃口に突きつけていた。撃てば、自損する。

「千日手、か。引き分けだなキンジ」

俺がキンジを見ながら呟く。

「どうして・・・どうしてあたしをバカにするの、キンジ」

アリアが上目遣いでキンジをにらんでいる。

「あんたの弾丸はあたしの銃ばかり、狙っていた」

やっぱりな、と俺は心の中で呟いた。

すると、キンジは銃とバタフライナイフを下ろし、手放した。アリアは眉を寄せる。

「撃てよ」

むき出しのアリアのガバメントが再びキンジに向けられる。

「もういい。撃つなら、撃てよ。頭でも、どこでもな」

俺はこんなキンジの顔を見たことが無い。全てをあきらめたような、全てに期待しているような、そんな複雑な顔は。

「今の戦いは引き分けだった。俺は話し合いでも戦いでもお前を奪い返すことができなかった。だから、もう打つ手が無い。お前は無法者の一味になって、武偵だった神崎・H・アリアは……いなくなる。そして、武偵憲章1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』、お前を助けきれなかった俺も、武偵憲章を守れなかった。つまり、もう武偵としての資格が無い。俺と、お前と、京助とのチームは、京助を残し死んだ。たった今。……撃てよアリア。どうせ俺には逃げ道なんか無いんだ。無法者どもに殺されるくらいなら、お前に殺^やられたほうが良い」

今のキンジの眼は、本物の武偵の眼。

「こ、殺させないわ……そうよ。あんたもここで、あたし達と一緒に」
「それ以上言うな、アリア。俺は犯罪者の一味になるつもりは無い。代々『正義の味方』なんかやってきた酔狂なご先祖様たちに、あの世でボコられたくはないからな。……いいんだアリア。お互い行く気がない方向へ相手を引っ張り合っただって埒が明かない。だから、どっちかが消えるしかない。そして俺は、どうしてもお前を撃てなかった。それが……どうしてなのかはいえないけどな」

どう解釈したのか、アリアの顔はカアツと赤くなった。

「だからお前が撃て。俺を斃して、後は好きにしろよ。でも……いつか思い出してくれ。全身全霊を使って、お前を連れ戻そうとした武偵がいたことを。そして、帰れ。無法者の世界から、あの日常に、

武偵高に帰ってくれ」

かみ締めるように言うキンジ。アリアはその一言一言に胸をえぐられるような表情を浮かべる。

そして、じわ。と涙を赤紫の瞳カメラアに浮かべる。

「撃てよアリアー!!」

アリアはびくつ、と銃口を震わす。

「……………」

そして、その大きな眼から、涙をこぼす。

「どうしてそんな……………できないことを言うの……………」

拳銃をキンジからそらし、胸に抱くアリア。

「あたしは、曾お爺さまに銃を向けることはできない……………」

ぼた、ぼた、と床に涙が落ちる。

「でも、あんたを……………パートナーを撃つことも、できない。できないよ……………」

顔を真上に上げて、何度か、こらえようとしてから、いつかのように

声を上げて泣き出した。

アリアはさっきまで銃を向けていたキンジの胸に、飛び込んだ。

「アリア……………」

キンジはそつと抱きとめる。

しばらくそのまま、抱きしめていた。

「アリア、1つ、告白させてくれ」

キンジが告げると、アリアが泣き顔をあげる。

「俺は、…俺達は、お前を殺せと命じられたことがあるんだ。カナに」

「……………」

「イ・ウーを殲滅するために、な。さっき見ただろ。カナは二重人

格の片側みたいなので、本当は俺の兄さんなんだ。兄さんは俺の、たった一人の家族なんだよ。あの時は俺も、肉親とパートナーの板ばさみになって泣いていたよ。今のお前と同じようにな。…俺も、兄さんを神様みたいに思っていた。あの人はいつも正しくて、強い人だったから。兄さんに絶対勝てないと絶望して、どうしようもないと思ったこともある。でも、道はあった。俺はその道を辿って、途中で兄さんに銃を向けながらも…今ここにいるんだ。お前の隣に」

「…カナより、あたしを…キンジは血のつながった肉親より…あ、あたしを、選んでくれたの？」

ここからだと思いきい、アリアの顔から拒絶や敵意が失せていく。

「わ、悪いかよ」

アリアはぶんぶん首を左右に振る。

「でももう、あんたはあたしを信じてくれない。あたしは…裏切り者よ。キンジに、銃を向けた」

「いつも向けてるだろ」

そこでアリアは黙った。

「…戻ってこい」

「…っ」

「俺は…その、いつもお前を信じてるよ。前言ったろ。『生涯お前を信じる』って。それに、パートナーと仲間割れしてこれ以上内心下げられ手もこまるしな」

少し恥ずかしくなったのか、キンジはアリアの肩を両手でつかみ、少しだけ離す。

「後は、お前が自分で自分を信じられるかどうかだ。少なくともさっきのお前は自分で自分を信じられてなかった。だから、止めたんだ」

「あたしが、あたしを…」

「いいかアリア。お前の母親…かなえさんは絶対助ける。でも、お前がさっき取ろうとした道は間違ってた。あんなやり方、かなえさんが望んでるわけないだろ」

キンジの言葉はアリアにとって決め手の一言になった。

「さっきのお前はこれで解決だなんていったが、違う。安易な道に逃げかけているだけだ。もう逃げるな。さっきも言っただけだな、逃げ道なんかどこにもない。ここから先、道は一本だけだ。シャーロック・ホームズを逮捕して、イ・ウーを制圧する。それこそが武偵のやり方だろ」

「でも……キンジ。あたしは、曾お爺さまに銃を向けることは……」

「いいんだアリア。俺にも力ナのがあったから、お前の気持ちは分かっているつもりだ。だから、お前はシャーロックに銃を向けるほどのことはしなくていい」

「……キンジ……」

「ヤツを無傷で逮捕する手も考えてはある。だが、それにはお前の協力が必要になるんだ。だからほんの少しでいい。俺に力を貸してくれるな？」

そしてキンジはダメ押しの一言を告げる。

「俺には、お前が必用なんだ」

アリアは、口をわああ、という形にして、魔法をかけられた顔をした。

そして数秒後、ほとんど全身力チコチに固まったまま、コクリ、とうなずいた。

The aria continues

戦闘開始

アリアから聞いたところ、シャーロックはアリアをこの場所に残し、奥の扉から姿を消した。

その扉を抜けると鋼鉄の隔壁があり、アリアが前に立つとそれが自動ドアのように開く。

少し進むとラジオハザードマークが描かれた厚い隔壁が警戒するまもなく開いた。

そこには幾本もの柱が並んでいる。

「ちがう、柱じゃない。これは・・・ICBM!？」

ICBM、それは世界のどこからでも発射でき、世界のどこにでも届く、『大陸間弾道ミサイル』

その上部。数は8本

「なんでなの・・・」

隣から上がるアリアの声があがる。アリアはキョロキョロ周りを見渡し、改めてキンジのほうを向き、赤紫の瞳を大きく見開く。

「あたし、この部屋を見たことがある」

禁じはその言葉に眉をひそめ、アリアに声をかける。

「落ち着けアリア。そんなはずはない。それは既視感^{デジャヴ}ってヤツだ」

「ちがうわ、確かに・・・見たことがあるの。そして・・・あたし、ここであんたと会ったことがある」

「ありえん。少なくとも俺はこんなところに来た覚えはない」

そのとき、音楽が聞こえてくる。

「モーツアルトの、魔笛か」

俺がつぶやく。

「音楽の世界には、和やかな調和と甘美な陶醉がある」

落ち着いた声と共に、柱もとい、ICBMの陰からシャーロックが姿を現す。

「それは僕らの繰り広げる戦いという混沌と、美しい対象を描くも

のだよ。そして、このレコードが終わるころには戦いのほうも終わ
つてることだろうね」

シャーロックはこっちに歩み寄ってくる。

「はは、いよいよ解決編という顔をしているね。だがそれは早計と
いうものだよ。僕は一つの記号に過ぎない」

『序曲の終止符』^{プレリュード・フイーネ}か。ならさつさとその序曲を終わらせてやるシ
ャーロック」

俺が言うとシャーロックはやれやれ、という感じで手を横に振る。

「この戦いはキンジ君とアリア君の奏でる協奏曲の序曲に過ぎない。
僕のこの発言の意味は時期に分かる。まあ、その演奏をキミが聴く
もよし、乱入するもよし、というところかね。さて、ところで同士<sup>フォーリン
グ・アウト</sup>討ち、カナ君がイ・ウーに仕掛け様とした罫の味は、いかがだった
かな」

その言葉にキンジとアリアは顔を見合わせる。

「曾お爺さま・・・」

勇気を振り絞るような足つきで一步、アリアがシャーロックに近づ
く。

「あ、あたしは、私は、曾お爺さまを尊敬しています。だから、こ
の銃を向けることはできません。あなたに、命じられでもない限
り」

丁寧な言葉で言うアリアは自分の銃を足元に置く。

「私はあなたの思惑通り、あなたに立ち向かおうとするパートナー
をこの銃で追い返そうとしました。でも、とめることはできなかつ
た。彼は、私が見つけた世界にたった二人しかいないパートナ
ーのうちの一人なんです。曾お爺さま、どうかお許しください。私
は彼に協力しようと思います。それは、あなたに敵対する行動を
取るということなんです。どうか、お許しください」

「いいんだよアリア君」

それにシャーロックは満足げな表情を浮かべる。

「君は今、僕の存在を心の中で乗り越えた。そして一人に特別な男

性を理由に、僕と敵対することさえ決意した。それは君ん心の中で、僕よりもキンジ君のほうが大きな存在になったという意味なのだ。まだ、愛の量は僅差のようだがね。…君たちは子供だが男と女だ。女心は僕の不得意分野ではあるが、あえて語るなら、女というのはどんなに男から酷くされてもことんまで男を憎みきれものじゃない。たとえそれが銃を向けられるようなことになってもね。『雨降って地固まる』という諺のとおり、君たちは戦いを経て強く結びついたということだろう」

「つまり、何もかも自分の推理どおりことが運んでるといいたいのか。シャーロック」

「ハハッ、こんなのは推理の初歩だよ君」

「じゃあこれも推理できたか」

キンジが瞬時にアリアの側頭部にベレッタを突きつける。

シャーロックは黙ってパイプを加えなおした。

「君、それは、人質をとったつもりかい？」

キンジは銃口をそのままアリアの背後に回す。

「シャーロック。お前の目当てはアリアなんだろう。それに、アリアがいなくなれば、イ・ウーは仲間割れを起こすって兄さんに聞いたんでね」

「でも、君は撃たない」

「いつとくが俺はもうヤケクソだぜ」

キンジはアリアの紙と耳の間からシャーロックの方向を盗み見た。

「そういえばシャーロック。あんたにプレゼントがあるんだ」

キンジはさらに注目させるため少し声を大きくする。

「兄さんからのなッ！」

叫んで、ピンッ！と白い銃弾を投げる。金一がキンジに託した武偵弾の一つ。手投げでも使える眼くらましの閃光弾。俺はその一瞬のうちにICBMの陰に隠れる。

キンジ達とアリアの間で小さな太陽が出来上がる。

「キンジ、・・・い、今よ！」

「あ、アリア。お前、目を、隠さなかったのか!？」

「あんたはあたしの背後で隠せても、あたしが眼をを隠したら、曾お爺さまにばれる! キンジ、早く曾お爺さまを! あたしは見た、曾お爺さまは閃光を直視していたわ!」

そう叫んでキンジはアリアから借りていた超偵用の手錠を手に、駆け……足を止めた。

「うん。今のは知恵をまわしたほうだと思つよ。人質をとるフリをして、実際には閃光^{フラッシュ}を使う作戦だったんだね。しかい、君たちは推理不足だったようだ」

悠然と語るシャーロックに、俺達は愕然とする。

「そうか! そうだったのか! シャーロックは、盲目だ!」

ブラッドが叫ぶ。

「そう、僕は盲目なのだよ。60年ほど前、毒殺されかけたときからね、でも、それを知るものはいない。なぜなら僕は眼が見えるように振舞つてたし、実際に視覚に頼る君たちよりも、自分の周囲で何が起きているのが良くわかってるのだからね。初めのころは推理力が助けてくれたものだが、今は音や気流で分かるんだよ。たとえば今、君の心拍数が驚きのために上がつてることも、手に取るように分かる」

プツリ、と俺の中で何かがキレた音がした。

ああ、もうここまでいくと笑いがこみ上げてくる。

「…フフファ、シャーロック、お前は実に面白い。面白すぎて笑ってしまった」

当のシャーロックは、何か面白いことを言つたかね? というような顔でこちらを見ている。

「キンジ、京助、逃げなさい! 曾お爺さまはあたしが説得を……!」

「できるあいてだと思つてんのか。アリア、引つ込んでろ」

「ああ、今回ばかりはキンジに同感だ。シャーロック!」

「なんだい?」

「ここいらで決めるか」

「何をだい？」

「探偵と武偵、どっちが強いか」

キンジは右のベレッタを抜き仁王立ちをする。俺はD・Eと高周波ナイフを持つ。一剣一銃という持ち方。ガン・エッジ

「キンジ君。僕は150年以上世界中で凶悪かつ強靱な怪人達を数多しとめてきた。一方君は、ただか17年平和な島国で生きてきた子供だ。京助君は一時期ここに居たといっても本質は子供。その未熟な君達が僕と決闘しようというのかね？」

「そいつらだけじゃねえぞ！一人忘れてねえか教授」プロフェッショナル

ブラッドも出てくる。これで3対1で数では有利。あまりゴリ押しというのは好きではないが、この際文句は言わない。

「たしかにどこぞの偉大なるクソ忌々しい名探偵様からすれば俺達は未熟だろうよ。こいつなんかEランク」

「だけどな、自分のパートナーに手え出したヤツを放っておけるほど腐っちゃいねえつもりだぜ」

からかうような表情をしたシャーロックはコートを脱ぐ。

「僕は強者として警告したが、君達はそれを受け入れなかった。理解できるね？」

『魔笛』をBGMにシャーロックは手にしていた大きな目のステッキを落ちあげた。

「いいのか、銃じゃなくて。俺は年寄り相手でも油断しないたちだぜ」

言ってキンジは弾倉をマガジン確認してベレッタに差し込む。

「銃も、後で一度だけ使わせてもらうよ。そしてそれは僕の『緋色の研究』にピリオドを打つ、極めて重大な一発になると推理している。おいで、君の言うとおり、決闘に敬老精神なんて不要なのだ。遠慮は要らないよ」

「心配するなシャーロック。俺達は武偵だ。武偵の任務は無法者を狩ること」

言ってキンジはシャーロックに狙いを定める。俺もD・Eを向ける。
「任務は、遂行する」^{ミッションスタート}「任務開始」

キンジと俺は叫ぶと同時に、シャーロックめがけて発砲する。
ガウン

キンジの銃弾はシャーロックにステッキで衝かれキンジの銃口へ戻
っていく。その弾はキンジが弾丸撃ちで弾く。

俺の弾はステッキの側面に当たり、起動を反らされシャーロックの
横を飛んでいく。

「シャーロック！」

キンジが叫び3発目の、金一がキンジに渡した黒い武偵弾、炸裂弾
が撃たれる。シャーロックはその弾をステッキで突いたとたん眉を
寄せ、

ドウウウウウ！

と、炸裂弾が紅蓮の炎で室内を照らす。

キンジは両手で顔を覆う。

炸裂弾の威力は対戦車砲弾にも匹敵する。^{RPG}それをシャーロックはま
ともに食らった。

キンジはシャーロックの様子を伺おうと近づいたそのとき、俺の中
でなきかが疼いた。それは、ヒステリアモードの変化。

「キンジ！まだだ！まだ終わってない！！」

俺の体に、ビリッという悪寒が、全身を走る。おそらくキンジも、
ブラッドも。

もうもうと上がった煙の中で、奴は立っていた。

「ここまでが『復習』だよキンジ君」

まさか、と俺は思う。奴は寿命が近づいている。つまり、常時死に
際。奴はいつでも『ヒステリア・アゴニザンテ』になれる。

「ここからはこれから君たちが戦うであろう難敵の技を、『予習』
させてあげよう。何しろ僕は、古い仇敵と同じ名前、『教授』^{プロフェッサー}だからね、
ここでは」^{イ・ワー}

T
h
e

a
r
i
a

c
o
n
t
i
n
u
e
s

始まりの終わり

武偵弾で破けたジャケットとシャツをシャーロックが脱ぎ捨てると、露になった上半身は、恐ろしく筋肉質だった。そしてその肌は、古い傷跡だらけだ。

直後、ブラッドの身体が10メートルほど吹き飛ばされた。否、正確には押された。姿を現した敵により。敵は剣でブラッドに奇襲をかけたがブラッドはそれを受け止めた。

「・・・・・・・・」

敵は何も言わない。

「奇襲か。忍びの者か？まあいい。この俺に奇襲をかけたってのはどうということか、分かってんだろぅなっ！！」

ブラッドはその敵を弾き飛ばし、自分の腕を罪果で切る。そして罪果は液体化しブラッドを包む。再び姿を現したブラッドは純白の鎧を纏ったさつきと同じ姿。

そして、俺の真横にも殺気を生み出す者がいる。それはやはり敵。

武器はクナイと手榴弾と思われる爆発物。

その敵は俺に向かってクナイを向け、突っ込んでくる。

「京助！」

キンジが叫ぶが、俺は大丈夫だと答えておく。

「その二人には少しの間ご退場願うよ」

シャーロックが言う。

俺は高周波ナイフでクナイを切り裂き、D・Eを撃つが新たに出されたクナイで弾かれる。さらに敵は腰に巻いてある手榴弾のピンを抜き、投げつける。俺は距離をとるが、敵は手榴弾を無視し突撃してくる。手榴弾は、爆発しない。

ブラフ！？と思ったときには時すでに遅し、キンジとアリアから距離を取ってしまう。

「（なるほど、目的は距離を取り時間稼ぎ、隙あらば殺せ、か）」

そんなことを考えている間にも敵との交戦は続く。

クナイで突きかと思わせ、手を一瞬にして引き、そのベクトルを使い、バック宙で攻撃してくる。その足には爪を付け、ご丁寧に毒まで塗ってある。

そのバック宙を間一髪で避ける。

「なあ敵さんよ、名前ぐらい名乗ったらどうだ？」

俺が言うとその敵は人口声帯でも付けているのか、発せられた音声は合成音声で、愚牙グガと名乗った。

愚牙はクナイを右手で投擲すると同時、左手で手榴弾のピンを抜き、こちらに投げる。

着弾した瞬間、まばゆい光りが発せられた。

フラッシュ・グレネード
「閃光手榴弾か」

俺は瞬時に左目を瞑ったことで両目の失明を避けたが、右目は数分は使い物にならない。

愚牙グガはさらにピンを抜き、真上に投げる。

ピンを抜いてから約1・5秒後、ドォン！という轟音が鳴り響く。

フラッシュ・カノン
閃光から響音の5感の内、視覚と、聴覚を奪われれば相当戦局は不利になる。主に強行手段で用いられる戦法。

愚牙は武器をクナイをこちらに投げると右に右に逃げるようにして次に視界に入ったときにはクナイから爪に武器を変えていた。

爪という武器は威力こそ劣るものの、素早い連続攻撃で敵を翻弄することに長けている武器の一つ。

その爪にもおそらく毒が塗ってある。

「姿通り、忍者というわけか」

俺はD・Eをしまい、得意の高周波ブレードとナイフの双剣ダブルに切り替える。

その瞬間、シュン！と空気を切る音と共に一線の斬撃が愚牙グガを襲う。

|| || || || ||

ブラッドが剣を振るう。ただそれだけで敵の一人が吹っ飛び、壁に激突し意識を手放す。

「呆気なかったな」

ブラッドが言った次の瞬間、後ろからの攻撃が来た。

「甘いわあ！」

ブラッドが振り返りざまに剣を振るう。やはりそれだけで敵は壁まで吹っ飛び気絶する。

さらに2人3人と束になってブラッドに集るが、全てたった一振りでも倒される。

突撃が無駄と分かったのか、敵は手榴弾のピンを抜き、投げってくる。ドドドドオオンン！！という音と共に手榴弾は全て爆発する。

普通ならば骨も残らず即死。が、立ち上る煙の中でブラッドは立っていた。

「甘い、甘すぎる。何たらシュガーの10倍は甘い」

ブラッドは床に手を突く。すると、床にブラッドを中心とした魔方陣らしき紋章が浮かび上がる。その魔方陣はとにかく大きく、全ての敵を内に収める。魔方陣からは無数のナイフが飛び出す。ブラッドが腕を上げると、ナイフはブラッドのほうに向かい、ブラッドがその手を前に倒すとナイフはいつせいに敵に向かいやすり傷をつける。

「その刃には毒が仕込んである。なに、身体が動かなくなるだけの毒だ。生死に害はない」

そこで、小さな太陽が一瞬で生まれ、一瞬で消える。さらに数秒後、轟音が鳴り響く。

そこに見えたのは、敵と対峙している共闘関係の人物。その敵に向かってブラッドは剣を振り下ろす。その剣からは何もでない。ただその剣の周りの空気がその敵に向かって飛んでいく。

「ずいぶんてこずってるな」

「俺にそこまでの力はないからな」

「言ってる」

ブラッドは新たに沸いてきた敵に向かい剣を構える。が、俺はそれを制止する。

「ここはやらせてくれ。ちょっとやってみaitことがあってね」

そういつて俺は高周波ブレードとナイフをしまい、村正を出す。

村正には水滴がついている。液体酸素と液体窒素という水滴が。

その水滴は付いては蒸発し、付いては蒸発し、それを繰り返し返している。

俺はその村正を下に構え、敵に向かっていく。敵との距離が10メートル程度になったら俺は一気に村正を敵に向かって振り上げる。

村正の起動からは無数の水滴が敵部隊に向かって飛び、それが付いた瞬間に水が氷になり、やがて一つの巨大な壁となる。

「『氷点下の壁』」
ヒロウ・ゼロ・ウォール

その巨大な壁に腕を挟まれたものもある。後ろではブラッドが、ククと笑っている。

「いやいや、たいしたネーミングセンスだ。そのままじゃないか」

俺はほっとけ、と一言。

「そうそう、その刀ちよつと見せてくれ」

ブラッドがそういうので見せることにした。ブラッドは村正と罪果を見比べ、村正を返してくれた。

「その刀、眠っているが間違いない妖刀だ」

その言葉に俺は啞然とする。

「九州のえつと、薩摩じゃなくて・・・えつと・・・」

「鹿児島？」

「そう、鹿児島。その『46103C』の学校に、未来美気みらいみけというヤツがいる。そいつの父親に会えば、そいつの眠りをといてくれるかもな」

未来家。たまに聞く名であり超能力関係で有名な家だ。が、その未来美気が超能力を嫌がっていて超能力ちからを使おうとしない。そして、未来美気が家を継がなければ未来家は終わるとも言われている。

そこで、キンジ達のほうから一発の銃声が聞こえてくる。

「行こう」

俺がブラッドに言うと、縦にうなずくブラッド。

俺達がキンジ達のところに戻ると、キンジはシャーロックに向かって駆けていた。

「この桜吹雪！散らせるものなら！散らせてみやがれっ！」

キンジがシャーロックに向かって跳ぶ。

パアアアアアン！！！！

とキンジのバタフライナイフから、銃声に似た音が鳴る。それは、バタフライナイフの先端が音速を超えたことで起こる、衝撃波ソニックブーム。シャーロックはそのナイフに左拳を突き出し、バタフライナイフを左拳の人差し指と中指で挟む。

真剣白刃取りーその片手版

「惜しかったねキンジ君」

シャーロックが言う。シャーロックも突き出した剣でキンジも白刃取りをしていて二人とも手が出せない。が、キンジは言う。

「惜しくねえよ。そう来ることは」

言うときンジは頭を大きく後ろに反らし、

「分かってたんだからなッ！」

ガスッッッッ！

キンジの頭突きがシャーロックの頭に炸裂する。

そしてシャーロックは、ぐら、と頭を後ろに倒し、キンジのバタフライナイフを放しながら、倒れていく。

それと同時に、レコードが終わる。

「ブラッド、俺達に味方してくれねえか？」

ブラッドは首を横に振る。

「いや、俺は気ままに世界を旅するさ。テラと一緒に」

そうか、と俺は一言。

「なら、善は急げだ。さっさと出発するぞ。武偵は、しつこいからな」

言い終わると同時、俺はICBMのハッチを開け、やはりな、とつぶやく。

俺はキンジ達のほうを見て、

「キンジ！アリア！」

振り向かせる。

「俺は急用ができた。1、2ヶ月ほど留守にする。また会おう！」

「京助！」

とキンジは叫ぶ。

「行つてこい！」

俺はその言葉に、ああ！と返す。

ハッチから中に入り行き先を鹿児島に設定する。この場所から鹿児島まで約2時間。

行き先を設定し、ボタンを押す。すると、ゆっくりゆっくり機体は上昇し、あっという間に上空に来了。そこで、俺は少々眠りに付くことにする。

|| || || || ||

「曾お爺さま・・・いいえ、あえてこう呼びます。シャーロック・ホームズ」

ジャキンと手錠をかけるアリア

「あなたを、逮捕します」

ふう、と息をつくキンジ。これにて、一件落着・・・・・・にはならなかった。

「素敵なプレゼントをありがとう。それは曾孫が僕を超えた証に、頂戴しておこう」

頭上からかけられた、シャーロックの声に、キンジとアリアは顔を上げる。

ICBMの一機、その先端に開け放たれた扉につかまって、額から流血しつつも、笑顔で小さく手を振る、白髪交じりのシャーロックの姿があった。

「キンジ君。さっき君にもらった一撃は、僕にも推理できなかったよ。さっきまでの若い僕なら、とっさに推理できたんだろうけどね。まあ、歳には勝てないということかな」

倒れているシャーロックを見ると、それは砂金になって流れる。

「シャーロック、どこへ行くんだ！お前はもう今日までしか生きられないはずじゃないのか？」

「どこにも行かないよ。昔から言うだろう。『老兵は死なず。ただ消え去るのみ』と。さあ、卒業式の間だ。花火で彩ろう」

ICBMの中に入るシャーロック。

「曾お爺さま、待って！」

アリアが白煙を書き分けるようにしてICBMに駆け寄る。

「行かないで・・・いや、いや！あなたのこと、ママのこと、もっともっと、話したいことが！」

「アリアもう追うな！あれはもう飛び立つ！危険だ！」

後を追うキンジの声を無視し、アリアは背中から取り出した小太刀を逆手で2本抜いた。アリアはジャンプし、ICBMの表面に刃を突き立てる。

「アリア！」

「...曾お爺さま！」

左右の刃を交互に突き刺しながら、アリアはロッククライミングのようにICBMをよじ登る。

「アリア君、短い間だったが、楽しかったよ。何か形見をあげたいところだが、申し訳ない。僕は...もう、君にあげられるものを何も持っていないのだ」

「曾お爺さま」

「だから、名前をあげよう。僕は『緋弾』という英訳した二つの名を持つている。『一緋弾のシャーロック』《Sherlock The Scarlet Ammo》——その名を、君に」

「名前……」

「さようなら、『一緋弾のアリア』《Aria The Scarlet Ammo》」

その言葉を最後に、シャーロックはハッチを閉じ、振動するICBMが、ゆっくりゆっくりと、その巨体を持ち上げる。アリアはまだICBMに張り付いたまま。そしてICBMはもう飛び降りれない高さまで上ってしまったている。

クソッ！とキンジは吐き捨てる。

キンジは腕の痛みに耐えながら、砂金になった偽シャーロックが持っていた剣を拾い、ナイフ共々、ザクッ！とICBMの壁面に突き立てる。

「アリア！降りて来い！」

「いやよ！曾お爺さまが、どこかへ行っちゃう！」

「もうだめだ！降りろ！」

キンジはアリア同様、ナイフと剣でICBMを登っていく。

そして、ズズ……ズズズズ……とICBMが浮き上がり始める。

このままだと戻れなくなる。そうキンジが思ったとき、ICBMはキンジとアリアを張り付かせたままイ・ウーの背から、外へとせり出していく。

ここで手を放せば甲板にたたきつけられて重傷になるだけですむだろう。だが、アリアはシャーロックがどこか死出の旅に向かおうとしていることを察して、我を失っている。

「（アリア！あのバカッ！絶対に引き戻してやる。あの世だかどこだか知らねえが、そっちにつれて行かせはしない！）」

甲板の発射口から撃ち出されたICBMは、みるみるうちに加速していく。まっすぐまっすぐ天を目指して。イ・ウーはもう掌で隠せ

る程度の大きさに見える。

キンジはもう少しでアリアの足を掴めそうなところまで来て、身動きが取れなくなった。

ジェットコースター程度のレベルじゃない風圧を受け、息ができなくなり、突き刺したナイフと剣を放さないようにするので精一杯である。それはアリアとて同じ。ピンク色のツインテールが風に引きちぎられそうになびいている。速度だけではなく、ICBMは高度も上がっていく。

そして、ボン！という音と共に、ICBMは雲の上に突っ込む。

一気に視界は真っ白になり、顔面には微細な氷の粒がぶつかるため、目を開けていられない。

雲を突き抜けて飛び出した青空は凍てつくように寒く、空気が乾燥しきっていた。

地平線が丸く弧を描いて見え始める。

空気すら薄れいく高高度の世界で、キンジは凍りついた自分のまっげの向こうに、まるでハク流が天に昇るような雲の傷跡を見る。1、

2、3、――8つ。

それは、ロケット雲。イ・ウーから発射されたであろうICBMがいま、全て空をかけている。4方8法に向けて。

それは乗り物、つまり誰かが乗っている。

そう――イ・ウーの残党が

それに気づいたとき、シャーロックの刀とバタフライナイフがICBMから外れる。

「（あつ！）」

と思ったときにはもう投げ出されていた。そして、アリアの小太刀も限界を迎える。キンジは背を下に向け落下していく。ICBMはほんの数秒で視界から遠ざかり、みるみるうちに小さくなり、ただ、その噴射炎が星のように見えるのみとなった。その星からは代わりにアリアが落ちてくる。

——空から女の子が降ってくると思うか？——

アリアはICBMに背を向け、キンジに手を伸ばす。同時に、目測
だがあり後の距離は30メートルほど。

キンジは背中を下に向け、空気抵抗を増して減速、アリアは頭を突
き出して加速してくる。

——それは不思議で特別なことが起こるプロローグ——

アリアが降下しながら近づいて、その右手をキンジに必死に手を伸
ばす。

キンジも血まみれの右手を伸ばしながらバランスをとる。

そして、あと1メートル。

あと、50、30、10

「……キンジ……！」

「……ア……リア……」

手と手がつながる。

ぐっ！とキンジはアリアを空中で引き寄せ、アリアは空を滑るよう
にして近づく。上下互い違いの状態で思いつきりしがみつく。

あの、いつかのチャリジャックの時ように。

次の瞬間、ぼふっ！と、キンジたちは流れ雲に穴を開けるようにし
て突っ込んだ。

——現実のそれは危険で、面倒なことに決まってるんだ——

そして、再び視界が開ける。

雲に揉まれた姿勢の変わったキンジとアリアは、頭を下にして抱き
合い、遠い海面めがけて落ちている。当たり前だがこの高さでは助
からない。人間の自由落下速度は大体時速200KM程度で安定す

る。

その速度でたたきつけられると、水面はコンクリートのようになる。

——だが俺遠山キンジは——

こいつのためになら、この身を危険に晒してやろうと思う。

おそらく、世界中の男達、世界中の主人公達と同じように——

——！

「キンジ……！こんなことにつき合わせて、ごめんね」

「ハッ！何を今さら」

「ありがとう。ありがとうあたしのパートナー。あたしは、あんたを誇りに思う」

改まった顔で言ったアリアは、その赤紫の瞳でまっすぐキンジを見つめる。
カメリア

「曾お爺さまが言った通り、これは『序曲の終止符』フイーネ。終わりで始まり。今、探偵の時代は終わって、これからはあたし達武偵の時代が始まるのよ。」

そして、武偵憲章10条——『諦めるな。武偵は決して、諦めるな。』——キンジ、正直に言うわ。あたしはイ・ウーで……

……何度も諦めかけた。あんたと戦うときは、もう何もかも諦めかけていたの。でも、あんたが前を向かせてくれたから、あんたが諦めなかったから、あたし達は、今！まだ！生きてる！！」

言うとアリアはキンジの体をひときわ強く抱き、眼下の海面に後10秒で衝突しそうな距離になって

「曾お爺さまはきっと、この瞬間が来ることも推理していたんだわ。だからホームズ家の女に、代々この髪形をさせた」
カメリア

アリアは赤紫の瞳を閉じ、なにか、集中するような表情をした。

「理子にできるんなら、きっと、あたしにも！」

すると、そのツインテールが、大きく大きく翼のように広がって、

キンジ達の姿勢が、アリアのツインテールがはらんだ風圧に引かれるようにして反転した。

両足が下に向き、落下速度がみるみるうちに和らいでいく。

「アリア・・・」

「あ、あんまないで。なんかこれ、すごく恥ずかしい」

抱き合うキンジ達の落下速度はただの飛び込み程度の速度になる。

眼下では救命ボートから白雪がこっちにあっけに取られたような顔をしていた。

そのボートのふちには、パトラ、金一、ブラッドと黒装束の女がいた。金一は一命を取り留めている。

「き、キンジ。やっぱりあたしにもあんたが必要だわっ。ぶ、武偵憲章1条！」

「1条？『仲間を信じ、仲間を助けよ』か？」

「そ、そうよっ。だからキンジ！」

ザブン！と着水。

「と、とりあえず浮き輪になりなさい！」

「泳げる用になったんじゃないのか？！」

「うるさい！！」

空でアリアが言った通り、これは終わりではなかった。

イ・ウー事件を機に、アリアは新たな強敵や仲間と出会い、今まで以上に過激な日常へと飛び込んでいくことになる。そして、残念なことに、パートナーの、俺、遠山キンジと雛菊京助も。

そう、俺達はこれから思い知らされる。

ここまででは、ほんのプロローグに過ぎなかったことを・・・

THE END OF JUST A PROLOGUE

宣戦布告

イ・ウーから約2時間程度で、鹿児島のとある山中に着いた。幸いにも付近に人はいない。

ICBM内で『46103C』という学校を検索したところ、鹿児島中央高等学校にヒットした。

「（まずは、書類を偽装して入学、後、未来美気に接近するか、それとも・・・いや、探りを入れすぎるのは不味い。まずはICBMを隠すか。でもどこに？）」

と考えると、ICBMは自動偽装機能が付いていた。

なので俺はとりあえず街に出ることにする。武器を持って。

〓〓〓〓〓〓

東京武偵高 マスタイズ
教務課

「へええ、ずいぶん舐めてくれるじゃないか」

蘭豹がとあるメールを見て言う。

そのメールの内容は、

『8月30日、我々デストロイは、東京武偵高を襲撃する。今の内に戦車などをそろえておくといい』
という文面だった。

蘭豹が言った言にもうなずける。

「どおやら、そおとおここを甘く見てるなあ」
ダギョウ

尋問科の綴が言う。

30日までには後1ヶ月ほどある。

〓〓〓〓〓〓

鹿児島

俺が山を下り、街に出てとりあえず、『ウイウオ』という服屋に向かう。店内では、冷房が効いていた。俺はとりあえず、服を一枚ズボンを一枚買う。さすがに武偵のごつい装備では目立つ。

未来家の住所は分かっていたのでタクシーでそこまで向かう。タクシーに乗っている途中で顔が青ざめた。タクシー料金、1万円は今は少しきつい。

未来家に付くと、少し広い洋風の屋敷だった。俺はインターホンを押す。

『どなたですか？』

スピーカーから女性の声が聞こえる。

「ここのご主人に会いに着ました。武偵です」

俺がカメラの前に武偵手帳をかざす。

『どうぞ』

すると、門が左右に開き、俺が入ると閉まる。

玄関と思わしき場所に来ると、この屋敷のメイドによる出迎えがきた。

「どうぞ」

俺はそのメイドに従って屋敷を歩く。歩を進めると、一つの大部屋に来た。

扉が開く。

「…キミが、私の頼んだ武偵かい？」

その人物は、十中八九この未来家頭首、みらいかいと未来来斗。

が、俺は受注した覚えはない。

「いえ、違います」

「そうか・・・」

相手は小さなため息を吐く。

「では、用件は何だ？まさか、ただの暇つぶしできたわけではなからう」

「その通りです。…一つ、やっていただきたいことが。コレです」
俺が村正を渡すと、相手は手にとって観察する。

「ふうん。なるほど、眠ってるな。コレを私に起こしてほしい、と？」

俺は、はいと言う。

「では、一つ交渉と行こう」

「分かりました。内容は？」

相手を取り出したものは、一枚の写真だった。

「私の娘だ。娘を、護ってほしい。なに、たった2週間でいいのだよ。必要な書類はこっちで準備しよう。引き受けてくれれば、前払いとして起こしてやるし、成功報酬には、そうだな、2000万でどうだ？」

2000万か。いい払いだ。

「分かりました。引き受けましょう」

交渉成立。

「そうだ、私のことは、『クライアント依頼人』と呼んでくれ」

クライアント依頼人が村正に何かを念じる。

「さあ、これで起きたはずだ」

クライアント依頼人が村正を渡してくるので俺はそれを受け取る。

「（なにも、かわらない）」

「次期に目覚めるはずだ。さて、依頼の話だが、君には鹿児島中央高等学校の2年Eに入ってもらおう。そこには、娘もいるからな」

「娘さんは、命でも狙われてるんですか？」

うむ、とクライアント依頼人は頷く。

「実はな、デストロイ、と言う奴らから手紙が来て、そこには『あさってから2週間、未来美気の命を狙う』と」

「そのあさってが、明日なんですな」

「その通り。その間、娘には、武偵として接しないでほしい。娘は、武偵が嫌いだね」

まあ、武偵が嫌いな奴はこの世界にゴマンといる。

「わかりました。では、書類などはそちらに任せます」

俺はその言葉を後に、この屋敷を出た。

The
aria
continues

翌日AM8時

鹿児島中央高等学校の2年Eは少しざわついていた。

それは、転校生が来るからである。

「転校生」

「俺に聞くな」

「まだに名も言っておらんだろ」

このクラスではいくつかのグループがある。いま俺が所属しているグループは、所謂あまり物グループである。

「まあ、どんな転校生であろうと、お前に寄り付くはずがなからう。あきらめろ」

この口が悪いのは成田巴。なりたともえ髪は茶髪がかかった黒で、目には赤いカラーコンタクトを付けている。

「黙れ。貴様に言われる筋合いは無いわ。そういうお前こそその口と顔を何とかしなければ虫1匹寄り付くわけがない」

言い返しているのが、未来美氣。みらいみけ髪の色は真紅。巴との仲はまだいいほうだ。

「ふん。虫一匹よりつかぬのは、お前だ赤」

「黙れ青。死ね！」

青と呼ばれた女は髪の色も目の色も美氣と対立するかのような青。名前は蒼井翔。あおいしょう俺の幼馴染で、力も態度も並みの男以上。

「まあまあ、3人とも、落ち着いてくだ」「」「黙れ！」「」「」

この喧嘩を止めようとしているのは俺の2人目の幼馴染、井藤祐樹。いとうゆうと髪は母親がクウォーターで、その影響で銀髪である。目は父親譲りで黒だ。ついでにテストではいつも上位で、顔も整っているほうだ。なぜこいつが余り物なのかはまったく分からない。

「どうしましょうか？」

「ほっとけばいいんじゃないか」

そして、予鈴がなると同時、担任が入ってくる。

担任の名前は、葛木琉璃^{かつらぎるり}。本人は完全に染めてるつもりだろうが、髪^{かみ}の先端が若干黒^{くろ}だ。

おっと、俺の名前は永谷永徳^{ながたにえいとく}。目つきが悪いせいか、誰もよってこない。

俺は外をぼんやり見ていると、ホームルームが始まった。

「んじゃ、今からホームルームをはじめる！まず早速、転校生を紹介しよう！転校生、どーぞ！」

入ってきたのは、茶髪の、一度だけ見たことある男。

「雛菊京助、よろしく！」

「……ああー！」

思い出した、去年鹿児島で、俺の家の目の前でなぜか倒れていた人物。

するとチヨークが飛んできた。まっすぐ額に向かつて。

「イテッ！」

「うるさいぞ永谷。んじゃ、ホームルーム終わり！転校生は開いてる机に座って」

早ッ！いいのかそれで・・・

転校生が座ると、そこには人が押し寄せる。質問攻めだろう。ま、俺達『グループ』が勧誘しても、来るわけがないが。

|| || || || ||

放課後

俺達はグループの部室らしき所にいた。

グループ、というのは所謂取り込み合戦。ルールは交渉で相手をもらうか、戦争で相手を奪うか。もちろん武器は使わない。やる内容を戦争を受ける側がえらんで、それに勝ったら好きな相手を一人、もらう。1対1または2対2でやれるゲームに限るが・・・

それで最終的に自分の学年全て取り込んだチームの初期メンバーは、

名誉賞状と、トロフィーと最新ノートパソコンがもらえる。

まあ、俺達『グループ』は今何をしてるかというところ、PSPで剣と魔法のファンタジーアクションゲームをしていた。この学校は基本危険物以外なら何でも持ち込んで良いのだ。

「死ね青！」

今ちょうど、未来美気操るキャラクターが蒼井翔操るキャラクターに真後ろから神経を侵す毒をボウガンで打ち込んだ。

「てめっ！回復魔法詠唱中に攻撃すんじゃねえ！」

「のけぞり防止スキルを組まなかった貴女がいけないのでしょうか。」
青

「詠唱終了！青も赤もくたばれえ！！」

ゲーム内で、究極魔法の詠唱が終わった成田巴操るキャラクターが空から超巨大な大質量隕石を落とす。が、究極魔法は発動終了後、5秒ほど硬直するため、その隙を突いて俺は遅効性の毒を打ち込む。遅効性の毒はグラフィックに表示されないため一々ステータス画面を開いて確認する必要がある。

俺が打ち込んだ毒は、フグの毒。コレが全身に回ると死ぬという超レア毒。

そのとき、コンコン、とノックの音。それに井藤祐樹こと、祐が出る。

「はいなんでしょう？」

「入団希望者です」

そのとき、その場の全員が固まった。

「転校生か、いいだろう。入れてやる」

未来美気が言う。ここの実質的なリーダーだ。

「ただし、コレで勝ったらだ」

見せたのは、今さっきまで対戦していた剣と魔法のファンタジーアクションゲーム。

「ファンタジー・ファンタジーか。まあいいか」

すると、転校生こと雛菊京助はどこからかPSPを取り出した。

「まだ135時間程度しかやってない初心者ですが、お手柔らかに」
135時間。俺なんかまだ80時間もプレイしてねえぞ。

言っと、電源をつけ、通信を開始する。

スタート、という字が出た瞬間から動ける。

開始直後に、バン！という音がする。ゲームで。

それは狙撃銃という超激レア武器。

「な、狙撃銃って、どんだけプレイしてんのよあんた！」

「135時間」

言ってる間にも、的確に武具の弱点部分だけを狙って撃つ。

弾切れになると、再装填リロードをする。

バン！バン！バン！

と少し置いてから撃ち続ける。

コレは、ハメ、という技法。麻痺効果のある武器はハメ易い。が、狙撃銃の麻痺弾は高額で作るにも、作業レベルは最大の5必用で、鍊金レベルも5必用で、それらをレベル5にするには相当時間がかかる。

そして、美気の操るキャラクターはみるみるうちにHPを減らし、ついにはなくなった。

「はい、俺の勝ち」

こうして、雛菊京助（のち京助）は『グループ』に入った。

転校生——永谷永徳視点——（後書き）

永徳は新主人公になるんだろうか？

AM 8 時

俺は鹿児島のとある高校の校門にいた。

「ここか」

この学校はでかい。武偵高^{あれ}には及ばないが。

「いよつ、転校生」

制服ではない服を着ているからたぶん、いや、絶対教師か何かだ。首からは名札がたれている。『葛木琉璃^{かつらぎり}2年E担当』と書いてあるから今日から通うクラスの担任だ。

「えつと、『雛菊、みやこだすけ』？」

「『きょうすけ』です！あからさまな間違いはやめてくださいな」

「まあまあ、怒らない怒らない」

俺達は教室に向かって歩き出す。

「そうそう、グループって知ってる？パンフに書いてあったと思うけど・・・」

「グループ・・・あれか。人を奪い合うという」

「まあ、そんなもんね。ルールは分かるわね」

俺はええと答える。

「あ、そうそう。これ全校生徒の所属グループ」

そういうと葛木はどこからか紙を取り出す。

「『グループ』、そのまんま」

「ああ、そのグループはあまり者のグループだけど、少しばかり優秀なグループよ。でも、あまりお勧めはしないわね」

少し歩いたらすぐに教室に着いた。この学校は1学年校舎、2学年校舎、3学年校舎とあり、2学年校舎は校門からわりと近いところにあるためすぐについた。

葛木は少し悪戯っぽい笑みを浮かべて、覚悟しときなさいといったが、何にだ？

そして鐘が鳴る。

「んじゃ、今からホームルームをはじめる！まず早速、転校生を紹介しよう！転校生、どーぞ！」

「雛菊京助、よろしく！」

こんなもんでいいだろうか？

俺がそんなことを考えていると、少し目つきの悪い男が

「……ああー！」

と叫んだ。

あの顔、どこかで……

葛木は、教卓のなかから真新しいチョークを取り出して、投げた。

蘭豹かよ……

もちろんそれは目つきの少し悪い男の頭に直撃。

「イテッ！」

「うるさいぞ永谷。んじゃ、ホームルーム終わり！転校生は開いてる机に座って」

葛木は窓から3つ離れている最後列の空いている席を指して言う。

俺がそれに従い座ると、人が、主に女子が押し寄せてきて質問攻めをされたが軽く流しておく。

〓 〓 〓 〓 〓

昼休み屋上

俺は屋上でフェンスによっかかりながら耳にケータイを当てていた。屋上に来るまでには人の大群に追いかけられた。そんなに転校生が珍しいものだろうか？幸いにもこの学校は屋上に出入り禁止だ。

「キンジの様子はどうか？」

『キンちゃん？うん、大丈夫。傷の治りも順調だから一ヶ月くらいで退院できるって』

「そうか、なによりだ。…あ、そうそう。俺が勝手に使ってる部屋に諭吉が5枚ほどドアに張り付いてるはずだからそれで見舞いでも

買ってやってくれ」

『でもわるいよ』

「ま、俺からの見舞いってことで。じゃな」

『うん、わかった。じゃあね』

俺はケータイを切ってポケットにしまうと、ふと気配があることに気がついた。

「彼女に電話？」

「…ここは屋上に出入り禁止だよ？」

とりあえず俺は会話を反らす。

「それはこっちが主に言うせりふだと思うけど…」

俺は、じゃ！とだけ言ってフェンスから飛び降りると、下の階のフェンスに飛び移る。幸い下の階は準備室で誰もいなかった。

「ちょッ！て、転校生！？」

俺は針金を使って鍵を開け中に入って逃亡することにした。

昼休みが終わり、転校生は運動神経がスゴイ！という記事と画像が学校中にばら撒かれていたのはただの余談だ。

|| || || ||

放課後

俺は先生に『グループ』の部室はどこだ？と訊くと少し意外そうな顔をしていた。

『グループ』の部室は3学年校舎のはじっこにあった。

部室からは「死ね青！」と、ここは強襲科^{アサルト}か？まあいいや、と思いながらとりあえずノックをする。中から扉を開けて「はいなんでしよう？」と問うて来る銀髪の少年。俺は入団希望の紙を見せながら入団希望者です、と答える。

そのとき、部屋の空気が若干固まったような気がしたが気のせいだろう。

「転校生か、いいだろう。入れてやる。ただし、コレで勝ったらだ」

真紅の紙と目をした少女、未来美気がPSPを見せて言う。

「ファンタジー・ファンタジーか。まあいいか」

俺をそういつてカバンからPSPを出す。パンフに書いてあったがここは危険物以外なんでも持ってきていいということ。

「まだ135時間程度しかやってない初心者ですが、お手柔らかに」世の中にはファンタジー・ファンタジーを300時間以上やっている人もいる。ついでに最大レベルは1000だ。俺はまだ498で大体半分くらいだ。

俺はPSPの電源をつけ通信を開始する。

今の武器は、狙撃銃。狙撃銃は超激レア武器だ。

そして、開始直後に、バン！という狙撃の音。

「な、狙撃銃って、どんだけプレイしてんのよあんた！」

未来美気は言う。もちろん何度言おうと135時間だ。

そして、弾切れになったので俺は再装填リロードをする。弾倉マガジンの中身は麻痺

弾。一番ハメ易いとも言われる弾だ。

そして、バトル終了。俺のキャラも相手キャラも一歩も動いてない。

「はい、俺の勝ち」

かくして、俺は『グループ』に入ることになった。

転校生——離菊京助視点——（後書き）

この学校は名前だけを借りた別物です。

訪問者襲来

リリリリリ、リリリリリ

とケータイが鳴る。理子からだ。

俺は『グループ』の部室から出て中庭に移動する。

「何だ理子？」

「きょーくん。教務課マスタースからの周知メール見た？」

周知メール？そつえば今朝方にそんなものが来たような気がする。

『デストロイ』

理子の言葉に俺は反応する。

「デストロイか。まったく厄介な犯罪者グループだ」

「何か心当たりはあるか？」

男口調になつた理子に問われる

「ん、まあな」

『で、女との約束ほつたらかして鹿児島見物か』

「・・・間違いじゃないけど正解でもないな、30点」

『威張るな！』

「まあまあ、ちよつち依頼受けてな報酬が良いもんだか」

ブチッ、と電話が切れる。

「どうやら機嫌を損ねたらしいな」

俺は『グループ』の部室に戻る。そこには一人増えていた。

「ああ、紹介する。1年のリミだ、苗字は誰も知らないらしい」

そのリミは緑髪で緑の眼、言ってみればレキそっくりだ。

「リミです。よろしく」

少なくともレキよりは喋るらしい。

「ああ、こちらこそ」

「来て下さい」

リミは俺の手をとって中庭に連れて行く。もちろん他の奴らは付いて来ていない。

「風は言っています。あなたに協力するように、と」

「やっぱりな。お前、ウルスカ」

「はい。わたしはウルスの44番目の女。…風は言っています。近くに敵がいると」

「風、琉璃か。こちら辺は琉璃の濃度が高いな」

突如、ピシッ！という音が足元から沸いた。発砲音が聞こえなかったから多分サイレンサーを着けているだろう。当たり前か、こんな街中、しかも学校内で銃バンバン撃ったら周りがパニックって動きにくくなる。

俺はガバメントにサイレンサーを着け、相手の場所を確認しながらリミに銃を渡す。

「使えるか？」

「はい」

簡潔な答えがすぐに返ってくる。

「7時の方向に敵がいます」

「7時だあ！部室じゃねえか！」

俺達は『グループ』の部室に駆け出す。

室内には気絶させられた成田巴、蒼井翔、井藤祐樹と、銃で足を撃たれた永谷永徳がいた。この部室には爆弾の仕掛けられたとのこと。時間稼ぎにはもってこいだな。

「大丈夫か永谷」

「ああ、何とか。つてお前、そんなもんどつから！？」

永田には俺のガバメントを見え言う。

俺はその言葉を無視して爆弾を超能力で凍結させる。

「おい雛菊！なんなんだこの状況！それにお前！まさか！」

「ああ、そのまさかだ。このことは内密に。行くぞリミ」

やはり帰ってきたのは、はい、という簡潔な答え。

「そうそう、リミのことも内密でよろしく」

俺はそう言って窓から飛び出る。幸いにも敵はまだ目視できる距離にいた。

ピュン！、ピュン！とガバメントから銃弾が出る、が、あたらない。俺達はその敵に走り出す。

そして、パン！と音と共にその人間は爆発し、中から大量の煙幕が出る。が、突如として現れた突風に煙は全て払われる。

50メートルほど離れたところでは一台のバイクのサイドカーに未来美氣を乗せてる覆面がいる。

俺は高周波ナイフを右手に駆け出す。が、どう考えても間に合わない。

そのとき、雪が降ってきた。

「雪・・・そうだ！」

俺は地面に氷を形成し、その上をすべるように移動する。これならば普通に走るよりも早い。

あと20メートル

右手の高周波ナイフをしまう。

あと10メートル

バンツ！バンツ！と撃ってくるが全てかわす。

あと5メートル

右手に力をこめて

あと1メートル

おもいつき殴った。

「グワアアツ・・・！」

相手は悲鳴を上げながら後方に4メートルほど吹っ飛び、気絶した。だが、これで解決ではない。今回の敵はどう考えても素人だ。脅迫か取引かで無理やりやらされたんだろ。だが、

「誘拐はどんな事情があるうと犯罪には変わりないからな」
言いながら手錠をかける。

幸いにも美氣は薬が何かで眠っていた。それにしても、あの雪はいつたい・・・。
ピシュンッ！

と、銃声がしたと思ったら、足に激痛が走った。どうやら撃たれた

らしい。

「グッ・・・」

そして、それ以上の銃声はなかった。

大丈夫ですか？と平坦な声をかけてくるリミに、俺は大丈夫じゃないかもな、と答える。足からは多量の血が流れていて足の感覚がなくなっている。

「俺のカバンに止血剤があるから持ってきてくれないか？」

「わかりました」

リミ取りに言ったかと思うと、もう戻ってきた。俺は止血剤を降りかける。沁みるんだよなこれ。

止血剤の沁みに耐えすべてふりかけ終わると未来美氣を抱いて、部屋に戻る。

「大丈夫か？永谷？」

「大丈夫だ、と言いたいが、大丈夫じゃないな」

永谷の血は止まっていた。横に止血剤の袋があることからリミが渡したのだろう。

「止血剤って、沁みるんだな」

「ああ、はあ、初日からついてないな。いきなり正体バレるわ、足撃たれるわ。防弾性発注するか」

「おい、こいつら大丈夫なのか？」

「ああ、気絶してるだけだ。じきに目が覚める。ま、それまで待つてるとするか」

俺は武器と止血剤が入っていた袋をカバンの中にしまう。

それから30分後

「う、ううーん、はっ！」

蒼井翔の目が覚める。

「よッ、起きたか」

俺が話しかける。が、返事は返ってこず。蒼井は何かを探して部屋の中を回る。

「あつた」

とあるダンボール箱から取り出したのは、拡声器。それを成田巴の耳元にもっていき、

「雛菊、耳塞いだほうがいいぞ」

「ああ、分かった」

俺達は耳を塞ぐと、蒼井は大きく息を吸って、

「スウウー、起きんかこのアホオオ！」

窓が割れるんじゃないかと思うほどの音量で、成田巴を起こす。

「うううえええ！？？」

意味不明な悲鳴を上げて成田は起きる。蒼井は腹を抱えて大笑いして床を転がっていた。

「あハハハハ！ハッハハハハ！笑い死にしよう！」
当の成田は耳まで真つ赤だ。

「こ、こんの…お前なんぞ、地獄に落ちろ！」

成田は蒼井を殴りかかるが、俺がその腕をとって止める。

「まあまあ、落ち着いて」

「落ち着いていられるか！死ね！」

そこで祐が起きる。

「ううう…頭が痛い…」

「祐！抑えるの手伝ってくれ」

寝ぼけ眼でこつちを見ると、ハッ！と気づいたように加勢する。

「雛菊さん強引ですね」

「「ちがアアー！うー！」」

ぴったり声が重なる。

「冗談です」

「あハハハハ、ハハハ！」

まだ笑っている蒼井。

「いい加減にしろ」

永谷が蒼井の頭にチョップを落とすと、反撃と言わんばかりに殴りかかる。

「何すんのよ！」

「そりゃこつちのセリフだ！」

「うるっさいわねあんた達！！」

起きたのは未来美気。

「黙れ赤！！」

蒼井が言う。

「黙るのはあんたよ青！死ね！10回死ね！」

「ならお前は100回死ね！」

「ならあんたは1000回死ね！」

「うっさい！二人とも1万回死ね！」

「「お前は（あんたは）10万回死ね！」」

俺は永谷に向き、帰るか、と提案をすると、ああ、と答える。

と言うわけでリアルファイトが始まったので俺達4人は帰路に着くことにした。

The aria continues

一日目の終わり

19時、俺は当てもなく歩いていた。

金はあるが家がない。そんな謎の状況でコンビニからおにぎりと水を持って俺は出てきた。

「おい兄ちゃん、金持ってそうじゃん。少し分けてくんねえかな？」

「だが断る！」

即答で答えた。制服から見るに俺と同じ高校だ。

「ああ？ちよつとでいいって言ってるだろ」

俺の周りにはなぜか10人ほどのチンピラが集る。その仲の数人は^{拳銃}チャ力装備だ。おまけに形式がまったく分からないほど汚い。

「おい！その男子生徒！」

俺とチンピラ達はその声がた方を向く。そこにいたのは買い物帰りか何かの女子生徒。

「うちの制服着て金巻き上げようとしてんじゃ、ねえ！」

ねえ！の言葉と同時にチンピラ一人を殴って倒す。

「おおお、パチパチ」

これぞチンピラと言うような格好の男が舐めた口調で賞賛する。その言葉に女子生徒の頭に青筋が浮かぶ。

俺はというと隙を見て逃げようとしたが、3人ほどに取り囲まれた。

「おいにいちちゃん、逃げようなんて考えるなよなあ」

「俺達とあそぼおぜ兄ちゃん」

「それとも、怪我しねえうちに有り金全部よこすか？アッヒヤッヒヤ」

とりあえず鬱陶しかったので、真ん中のチンピラAの顔面を鼻が折れない程度に殴る。

「アベシッ！」

「一つ言っぞチンピラ」

俺はチンピラの中の一人をさして言うと同時にもう一人の鳩尾を殴

る。

「そういう三下のセリフは」

言いながら足払いをかけ、

「死亡フラグだ」

地面に叩きつけるようにしてチンピラCを殴る。

「ヒュー、カッコいいー！」

チンピラのリーダー格と思わしき男が言うと同時に指を向けてくる。

「やれ！」

言うとはかのチンピラがチャカを向けてくる。どう考えても暴発しそうな拳銃を。

「クッ、卑怯な」

俺は女子生徒に向き直りお姫様抱っこをすると、顔を真っ赤にして言う。この赤面の速さはアリア並みか？

「な、ななな、何をする！」

巻き込まれない程度の場合に連れて行って、下ろす。

「こっちの女の子を巻き込むのはあまり趣味じゃなくてね」

言うのと近くにあった木の棒を拾い、向かうと、当然ながらチンピラは笑う。

「おい、そんなもんで勝てると思ってるんですかああー？」

「勝てなきゃこんな武器誰が使うか。なんだ？もっとハンデがほしかったか？」

「ナメやがって。やっちまえ！」

それと同時に、チンピラたちは俺に銃を向け、発砲してくる。俺はそれを全て回避し、一人のチンピラのチャカに木の棒を突っ込み、二人目のチンピラには回し蹴りを食わせる。また撃ってきたが俺はその弾の内一発を手を持っている時計で跳ね返し、3人目無力化。さらに壊れた時計の破片を4人目の手首に投げつけ無力化。そのチャカを奪い取り5人目の銃口に打ち込む。暴発の危険があるので自分の持つチャカは簡単に分解する。6人目は鳩尾を殴って無力化。
「残ってるのはお前だけだぞ」

「それがどうした。俺は柔道全国大会まで行ったことがあるんだぞ」
「それがどうした？お前はアホだな。そんなん俺に勝てるんでも？」

「・・・チツ！興が冷めた。今日のところは引き上げだ」

チンピラは脅威の回復力で立ち上がり、逃げていった。そのうち数人は覚えてるよ！などと叫んでいたが無視することにした。

「さて、メシメシ」

「ちよつとあんた。あたしのことを忘れてない？」

「ああ、ゴメン、すっかり」

「あんた、何であんなに強いのに最初ッから倒さないのよ」

「ううん、禁則事項です、とだけ言っておこう」

俺はまたコンビニに入り、おにぎりを買う。もちろんチンピラたちから盗つておいた財布の金で買った。外にはまだあの女子生徒がいる。

「で、何のよう？」

「・・・思い出した！あんた、今日転校してきた雛菊京助！」

俺はおにぎりの袋をはずしながらそうだけだと答える。

「礼は言わないわよ！」

「要らない」

「即答ッ！・・・まあいいわ。あたしの名前は森井里奈。3年C」

「ということは先輩か」

「だからあたしには敬語を使いなさい！というか女王様と呼びなさい」

「断る」

「また即答ッ！あ、ちよつと待って！」

俺は右手にコンビニ袋を二つ持って歩き出す。そういえば財布どうしよ・・・それ以前に寝るところどうしよ。

「あ、そういやちよつと」

「な、なによ」

「2週間ほど泊まらせてもらっていい？」

「は？.....はああー！？」

「いやあ、まだアパート借りてなくてね」

森井は顔を真つ赤にし名がら言う。

「あ、あんたね。ふざけてんじゃないわよ！何で初対面のあんた泊めなきゃなんないのよ！」

「料理、皿洗い、洗濯、一週間5000円の家賃でどうだ」

「まあいいわ。来なさい」

うつし！とガッツポーズをする俺。

「た、ただし！」

「ただし？」

「そ、そういうことしてきた場合は、警察呼ぶからね！」

「ああ、ご心配なく。基本的に19時から7時30分の間以外は居ないから。それに多分警察じゃ俺には勝てないと思うよ。武力では」

「それと！洗濯はしないでいい！」

「おっけー。交渉成立」

そんなこんなで泊まる家が決まった。話を聞くとところによると、家族は母親と父親は世界中を遊びまわって、姉が居るけど今は会社の寮で寝泊りしていて3ヶ月に一回くらいしか帰ってこないらしい。

|||||

太平洋上空9000メートル地点

「もうすぐアメリカ・ロサンゼルス上空です」

「わかった。オートカモフラージュ自動迷彩機能とレーダー妨害電波をつける」

「はっ！」

指揮官と思われる男は液体の入った入れ物を見て笑う。

「もうすぐだ。あと少しの我慢だ。あと少しでお前をそこから出してやる」

その入れ物の中には胎児のようなものが入っている。

＝ ＝ ＝ ＝

鹿児島 森井卓

「う、美味しい」

森井里奈が料理に賞賛の声を上げる。

「まあな。即席にしては良く作れたベジタブルスパゲッティだと思うよ」

このスパゲッティは即席とはいってももろもろの時間合わせて20分程度の時間はかった。

「いったいどうやって作ったのよ？」

「なに。簡単だスパゲッティをタイミングよく湯からだし少量のオリーブオイルを絡ませその上に付け足して野菜や肉を入れちよつと黒コシヨウと塩を振っただけだ。でも、塩と黒コシヨウの比率がおかしいと辛くなったりしょっぱくなったりとなるわけだ」

「なるほど」

「いや、これ普通の家庭ではたまに食うと思うが・・・」

「そうなのか！？わたしはあまり麺類は食べないからよく分からん」
ガチャリ、と玄関から音がする。

「「ただいま」」

と、陽気な声。

「「「「・・・」」」」」

と、4人の顔が会う。

「おお里奈、ついに彼氏を作ったか」

「はじめまして、里奈の母、見波みなみです。よろしく」

「同じく文夫ふみおです」

「と、父さん！なんで！？てか違う！彼氏じゃない！」

「はじめまして」

「あんたもなに返事してる！」

「はい、おみあげ」

文夫さんが紙袋を出しながら言う。

「それじゃ、僕たちはこれで」

「里奈、ちゃんと手に入れるのよ」

「あああもう。違うつて言ってるでしょ!!」

「じゃあねえ、と笑いながら出て行く森井家夫婦。

「で、俺はどの部屋使えばいい?」

「あたしの隣の部屋!以上!寝る!」

そのまま、階段を上った里奈はバン!と扉をあけてからドン!と閉める。俺はしょうがないので使用許可をもらった部屋を使わせてもらうことにする。

T h e a r i a c o n t i n u e s

不良と帝

翌日

午前の授業が終わり、昼休み俺は教室にいた。

「転校生、事情聴取させろ」

武藤みたいなことを言ってきたのはこのクラスでの一番のお調子者伊東重人^{いとうしげと}。こいは理科の時間のときに教師がナノって名前がつく人物っているのかねえ、と軽く言ったときに真っ先に手を上げて知ってる知ってる！といった奴だ。名前は忘れたがとある魔法少女の名前だ。

「なんのだ？」

ついでに一番最初にここであつた友人だ。

「おまえ、ここのチンピラ数人をボコボコにしたんだって」

伊東は買ってきたサンドイッチの包みを開けながら訊いてくる

「相手が絡んできたから撃退しただけだ。最後には逃げてったけ」

「んなことはどおだつていい」

「じゃあ訊くなよ・・・」

「問題はその後だその後。お前、三年の森井先輩に手え出したんだって？」

その言葉を後にクラス中の男子達が、数人を除き集まってくる。皆顔は笑っているが目が笑っていない。

「へええ、転校生早速この学園の美女トップテンの者に手を出したか」「いきなりは早すぎるでしょ」「よおおし、俺達で天罰を加えてやろう」「それがいい」「そうするか」

「ま、なんて物騒なクラスだ・・・」

「ま、あきらめる転校生。とりあえず訊いといてやるが、おまえ、どこまでいった？」

「どこまでって？・・・ああ、家借りてるぐらいだ」

その言葉を言ったとたん、顔の笑いが全てなくなつた。正直言つて

怖い。

「あ、あの、皆・・・様、いったい何を怒っているんで、ごさいましようか」

「みんな！やっちまえ！」

大体二十人くらいの男子達がおう！といいながら襲い掛かってくるのを俺は弁当を持って逃げ始める、が、教室の出入り口とベランダへの窓が塞がれていて、逃げられない。

俺は弁当をロッカーの上においてしようがないから戦闘を始めることにする。いくら強襲科アサルトにいたからと言ってもこんな大人数の敵と戦うのは少々キツイ。

「おい転校生。ちよつと顔貸しな」

その声がした教室出入り口見ると、声の主の隣に昨日のチンピラがいた。

「メシ食いたいから放課後にも。場所としてはこういう場合は体育館裏つてのがお決まりだな」

「ナメてんのか」

場がある程度落ち着いたのでロッカーの上から弁当を下ろして席に着き、弁当のふたを取る。

「メシ食ったら相手してあげるからそれまで待つて」

「お、おい、転校生、まさか、あの人誰だか知らない、なんてことはないよな」

伊東は俺に耳打ちして言うが、俺は知らないと答える。

「あの子は3年の、東裡郷野介先輩。ひがしうちのすけこの学校で体育教師を倒したつて言う噂もあるくらい強い人だぞ」

俺は弁当を食べながら、それが？と答えると、わかった、俺はしらん。と言って伊東は後ろに下がった。それと入れ替えに東裡が入ってくる。

「今すぐ顔貸しな」

バン！と弁当箱を払う東裡。

「あつ」

「あつ、じゃねえよ、今すぐ顔かせつつてんだろ！」

俺の胸倉を掴んで引つ張り寄せる東裡に、その勢いを使って頭に頭突きをかます。

「・・・テメツ！・・・よくもやってくれたなッ！」

殴りかかってくる東裡の腕を掴み、背中に回りその背中を蹴る。東裡はバランスを崩し、机に突進する。が、謎の回復力ですぐ起き上がり、攻撃を再開する。俺は東裡の右手を掴み、足払いをかけ、勢い良く床に叩きつけ、重心を踏む。

「お、起き上がれない」

「そりゃ重心踏んでるんだから起き上がれないだろうな。それよりも昼飯奢ってもらうぞ」

俺は言うのと東裡の財布を取り出し、1000円札を一枚引っこ抜く。
「おい、そこのお前」

昨日襲ってきたチンピラを指差し、落ちた弁当を指すと、ハ、ハイ！と言って掃除にかかった。その間の俺はと言うと、抜き取った1000円札で学食にいた。

その後、職員室に呼ばれたのは言うまでもない。

|||||

東京武偵高

ここには一つのチームがあるとある寮に逃げ込んでいた。

そのチームは『帝』と呼ばれる者たちが集まったチーム。

そして、帝はこの世に5人確認されている。

炎帝、水帝、地帝、風帝、空帝

この五人で構成されたチーム。

名は、炎帝ガイエス・バーン、水帝ジョン・ジェイ、地帝奈落、風

帝隼、そして、空帝、雛菊輪廻。

ガイエスとジョンは今かなりのダメージを受け気絶している。

「隼、ガイエスはどうか？」

奈落が隼にガイエスの状態を問う。

「無問題」

という簡潔にして素っ気ない答え。が、ジョンのほうは尋常ではないくらい血が出ている。

「すまん、この部屋の者。輪廻、あとのくらいで直りそうだ？」

「いま私が使っている能力は空間の進みを早め、自然治癒を促進させるだけです。なので、あと1時間ほどで完治します」

彼女の能力はいわば老化。使いすぎれば寿命が早く縮む。そのときガチャリ、と玄関で音がする。それはドアが開けられる前の儀式のような音でもあり、ドアが開けられる前触れでもある。

奈落は武偵ならば良ければ話せば分かるだろうと思いつながら身構える。入ってきたのは、緋色の髪をして髪を左右で二つに縛って後ろに垂らしている150センチもないであろう、少女。

「あんた達、誰?!」

その少女から発せられているのは、明確な殺気。

「ああ、俺たちは決して怪しい者ではなくてな、その、ええと、休ませて貰ってるだけだ」

「殺?」

「いや、隼、殺さなくていいから」

「あんた達なにグジグジいつてるのよ!」

アリアはガバメントを向けながら威嚇する。

「待ってアリア。……ここに入っているっていうことは少なくとも犯罪者ではないと思う」

「……分かったわ」

「一時間ほどしたら出て行こう」

「あんた達名前は」

「俺は奈落、横になっているのがガイエス、そこにいるのが隼、出血しているのがジョン、瞑想しているのが、雛菊輪廻」

アリアと呼ばれた少女は最初俺達の名前を聞いたとき少し黙ったが、はッ!と気づきガバメントをしまう。

「あんた達、もしかして、『帝』？」

「・・・ああ」

「ならちようどいいわ」

俺たちはアリアから体外のことは聞いた。デストロイが1ヵ月後にここに来ること、強力な戦力が一人いないこと。

「わかった、そういうことなら協力しよう。ただし、その一ヶ月間は俺たちはここにいない。凶悪グループを逃がしちまったからな」

T h e a r i a c o n t i n u e s

指令 食材を手に入れる！

ザバァーン、ザバァーン、と波の音

「釣れねえな・・・」

「そうですね」

俺のつぶやきに返事をしたのは伊藤祐樹と祐だ。

今俺達がいるのは防波堤。そこで釣りをしている。なぜかと言うと、そもそもなぜ海なんかにいるかと言うと話は3日前に遡る。

〓 〓 〓 〓 〓

3日前

成田がゲームで海関係のゲームをやっていたのか突然、『そうだ、京都に行こう！』見たいなノリで、海に行こう！と高々に宣言したのを、未来が、そうだな、暑いからちようどいい。それに海辺に別荘がある！とつぶやいたのを謎の地獄耳の教師こと2年Eの担任葛木が、ならば私もついていこう！と、ドアをバンと開け放ちながら叫ぶ。

それから次の日

この日は始業式のためすぐ終わり、今は部室にいる。

「で、結局何持ってたんだ？」

長谷が未来に問うが、ああ、何も持ってたなくていいわよ、という全部ありますよ発言。

「でも着替えとかは持って来たほうがいいかもねあと葛木のビール」「ビールは自分で持って行くからいいわよ」

もってくんないよ、と俺は心の中でつつこむが、そんなものはもちろん葛木には聞こえない。

「で、どこで待ち合わせをする？現地集合か？」

「いや、この学校だ。ここからリムジンで行く」

「り、リムジン!？」

「なんだ、永谷はリムジンも知らんのか。これだから庶民は」

「喧しい!知ってるわそんくらい!」

「じゃ、異論はないわね。……決定ね」

その言葉を後に俺たちは解散した。

が、帰宅路で長谷が追いかけてくる。

「なんだ永谷。ようか？」

「いや、何でお前武偵なんかやってんのかなって」

「おまえは、人の傷に塩を塗るのが趣味か？」

「い、いや、……わるい」

俺は気にするな、と言ってそのまま帰宅する。といっても、いまは森井家に仮住まいしてるが。

俺が森井家につくとなぜか里奈はなぜか怒っていたので、とりあえずどうした?と訊く。

「ほおう、どうした?ねえ、お前、海に行くんだってな」

「ああ、それが？」

「ならあたしもつれていってもらおうか」

俺は台所に向かいながらいいんじゃないかね、一緒にいくか?と提案したところ、行ってもいいぞ、といかにもツンデレみたいな台詞を言う里奈。

そして、次の日俺たちは出発した。

|| || || || ||

「京助さん。今の説明では何で僕達が釣りをしているのかがまったく説明できていませんが」

「お、釣れた。……クサビか。塩焼きだな」

「まったく人の話を聞いていませんね」
俺は釣った魚を小さな生簀に放り投げながら回想を始める。

|||||

未来家の別荘

その別荘は普通の家一見程度の大きさだが1週間程度過ごすにはちょうどいい大きさだった。ついでに二階建てだ。
中に入ってみるとある一室にはつり道具やら銚やらバーベキューセットやらが置いてある。

「おい。こっちに置き手紙みたいなものがあるぞ」

永谷がキツチンのほうで置手紙らしきものを見つけたので、俺たちはそこに集まる。

永谷が読んでる手紙を蒼井が強引に奪い取って読み始める。

「えーと、『これから来る美気とそのお友達へ。今冷蔵庫の中身も倉庫の中身も空っぽです。なので自給自足してね。P.S. がんばれーノシ』って書いてあるけど」

「つまり遊ばずにメシ食うために働けって訳か。・・・仕切る人^{リーダー}やりたい人」

俺はみんなに聞くが、誰も手を上げない。結局誰がやるかという口論になって言いだしっぺの俺がやることになった。

「じゃありーダーとして指令を出そう。命名、食材を手に入れる！」

「センスが普通ね」

俺は成田からのいやみを無視して続ける。

「成田と蒼井が、いや、成田と蒼井と里奈で買出しよろしく。俺と未来と祐で魚釣り」

「まてまてまて、俺は何をすればいい？」

「じゃあもぐって採ってきて」

俺が指令を与えると近くにあったウェットスーツを祐が永谷に渡す。

「じゃあ、行動開始」

|| || || ||

今に至る。

ついでに未来は飽きて寝ている。テントの中で。

「お、アラカブがつれました」

「こっちは小あじがつれたぞ。から揚げだな」

それから、否、未来が寝てからはさっきまでのが嘘のように釣れる。

「京助、祐、つれてるか？」

波を立てながら海から永谷が出てくる。その手の網にはサザエとアワビとタコとイカとその他もろもろの魚や貝が入っていた。

「す、すげえな……………」

「まったくですね」

「潜るのだけは得意だからな」

自慢げに言う永谷。

「そろそろ買出し組みも戻ってきてるころだと思っし戻るか」

俺が提案すると祐は片付けを始め、俺は未来を起こしテントの片づけを始める。

|| || || ||

東京武偵高

「盗^とられた！？また！？」

アリアが声を張り上げ白雪に聞く。白雪は申し訳なさそうに語り始める。

それは前の日の夜のこと。

一人で買い物をしていた白雪は、後ろから襲われたが、白雪は何者かが自分を狙っていることに気がついていたため初撃による一撃は避けた。が、その敵には封じ布を解いた白雪の技もまったく通用しなかった。そこに二人目が後ろから現れて眠らされた拳句、イロカネアヤメを盗られた。

「で、敵はあんたに何もしなかったところを見ると」

「狙いはイロカネアヤメ」

「そうなるわね。やっぱり敵はデストロイ？」

「でも、仮に相手がデストロイなら私はもうこの世にはいないはず白雪のいうことはもっともだ。それに相手がデストロイならランク相当とはいえSランクの武偵を殺^やつてるはずだ。

「そうね。でも分からないわ。相手が星伽の力を欲するなら白雪は拉致されてるはず。あんたはここにとつては重要な人物だからやっぱり拉致されて身代金要求する線も簡単に考え付く話よ。なのに敵はそうしなかった。……白雪、そいつの特徴は？」

「特徴？……あ、そういえば刀が変化した」

「刀が変化！そいつ、刀を変化させる前に刀の名前言ってなかった？」

「ううん。言ってなかったと思う」

「そう、ならいいわ」

The aria continues

罪喰

俺たちは採った食材を別荘に持ち帰ると、すでに買出し組みは戻ってきていた。聞くと買出し組みは2分前に帰ってきたとのこと。

今の時間は午後5時ちょっと前。今から晩飯を作っても少し早い。かといって海で遊ぶほどの時間もない。どうするか？と考えてるとグウウウと言う音が里奈から発せられると里奈は顔を赤くしておなかを抑える。

「メシ作るか」

異議を唱える者はいなかった。

俺と里奈は台所に向かって米を炊き、そのほかは炭に火をつけ魚を焼き、永谷は魚をさばいているところだ。皿などの問題は特になかったので遠慮なく皿は使わせてもらうことにした。そしてご飯が炊き上がり、魚も焼きあがって後は食べるのみ。

俺たちはいただきます、と言って食べ始める。テーブルの上には、ご飯、味噌汁、イカやサザエの刺身、サラダ、とその他いろいろが所狭しと並んでいる。所要時間は約一時間とそれだけの時間でよく作れたものだ。

「そうそう、コシヨウ有るか？」

俺が訊くと、聞きなれた声で返答が帰ってきた。

「はいキョーくんコシヨウ」

俺はそこでコシヨウを貰い、ん？と違和感を覚える。

この中で俺を『きょーくん』と呼ぶ奴はいたか？

答えはノーだ。

俺が恐る恐る振り返ると、ナニ？という顔で理子が魚を食べていた。

「……………なんで理子がここにいる！！」

「それはキョーくんは理子の嫁だからです」

こっちの奴らは驚きながらもドン引きしている。

「頼むから真顔で大嘘つかないでくれ……」

くふふ、と笑いながら参加する理子。なぜここが分かったんだか・とか思ってたらずでに意気投合してる。ついでに今の理子は私服だ。多分防弾性の。

俺はとりあえず飲み物を飲もうとしてコップを持つと、割れた。銃弾によって。

その銃弾はコップを貫通し地面に小さな小さなクレーターができるが、他の面々は気づいていない。

「（理子）」

「（違う、アリアじゃない）」

「（そうか）」

俺が魚を手にとろうとした瞬間、バタリ、と祐が倒れ、成田が続くように倒れ、俺と理子以外はパニックである。一瞬頭にシガテラ中毒という言葉がよぎったがあれは発症までに1時間以上かかることが多い、それにシガテラ中毒はめまいや吐き気を催すものであり倒れる人もいるが今の祐と成田の様子は”眠っている”に近い。となると、

「睡眠薬か！みんな、もうこれ以上食べるな！」

「どういうことだ！何だ睡眠薬って！」

「睡眠薬とは」

「そんなことを訊いてるんじゃない。何で睡眠薬なんか降りかかってるんだ！」

永谷が混乱したまま訊いてくる。

「分からん！……永谷、皿使ったか？」

「いや、使ってない」

「眠気は？」

「ない」

「なるほど、睡眠薬はさらにかかっている可能性が高い。皿を使うな」が、またバタリと倒れた。今度は未来と蒼井が。

そして林のほうからコロコロコロ、と手榴弾が転がってきた。それ

はきつと非殺傷の手榴弾。

プシュユユという音と共にガスが噴出す。ガスはおそらく目くらまし、倒れていなかったのは永谷と里奈だけ、理子は髪の毛を操り風を起こし煙を吹き飛ばす。

煙が晴れると、一里奈と未来がいなかった《・・・・・・・・・・・・・・・・》。

「くそッ！やられた。行くぞ理子！」

「ラジャー」

「永谷、そいつらの中に入れておいてくれ」

言つと足跡を辿り追いかける。敵はおそらく、否、敵は確実に里奈。そうでなければ全てのつじつまが合わない。俺を家に泊まらせたのは油断させるため、あの夫婦も偽者で、全てが演技。おおよそあのチンピラも。

「理子、多分大戦が起きる。覚悟と銃弾は？」

「問題ない」

理子は男口調になって言う。

「上等だ。理子、背中^{デザートイーグル}は任せた」

俺は言つと同時、D・Eで木の根っこ付近を撃つと、グワァ！という叫びと同時に人が倒れた。もちろん防弾だろうが急所ははずしてある。

「つまり、理子はいつでもお前を斬れるってことだぞ」

「お前はそんなことしないだろ。俺が背中を負かすのは、一定値以上の信頼を置いてる奴だけだ」

俺たちは言いながらも足跡を辿る。まだそう遠くへは行ってないはずだ、と思いながらも隠れている敵を撃つ。

数十メートル進むと敵の、正確には『未来を背負った里奈』の後姿が見えてきた。

「里奈！」

俺は叫ぶが軽くこつちを向いて、フンと鼻で笑われただけ。威嚇射撃で足元を撃つが怯まない。突如、ビュン！という音と共に激しい

向かい風が襲い掛かり、それが断続的に続く。

俺は次の突風が来る前にワイヤーを木に放ち、もう片手のワイヤーで次の木にワイヤーを放ち、どこぞの蜘蛛男のように木と木の間を移動する。

理子は髪を翼のようにして浮遊し、うまく風に乗リ移動している。

あと20メートルで俺は追いつく、俺はワイヤー移動しながらもう片方の手で里奈に向かって9mmパラベラム弾が飛ぶ、が、里奈は右に一歩行くことで回避。

理子は上空からワルサーで撃つが、同じく華麗なステップで回避される。

が、里奈は立ち止まる。

「鬼ごっこは終わ里奈」

「里奈？ちがう。組織のものは私をこう呼ぶ」

ニヤリ、と悪戯な笑みを浮かべてから、

「『切り裂きジャック』と」
ジャック・ザ・リッパー

上空から降りてきた理子は脂汗を額から流しながら反復する。

「ジャック・ザ・リッパー、だと」

ジャック・ザ・リッパー、かつてロンドンを騒がせた殺人鬼。殺された者は皆、臓器を何かしら抜かれている。

「まさか、お前も」

俺は、4世か、と訊こうと思ったが、本人の言葉によってさえぎられる。

「笑止、あれと一緒にするでない。あ奴は金のために人を殺し、臓器を売りさばいていた。だが、私は違う」

言っと、背中に隠してあった刺突剣らしきものを抜く。
レイピア

その刺突剣には、不思議な雰囲気漂っている。俺はにたような物を見たことが、より正確には、今似たような物を持っている。

「貴様はまだこの妖刀という物がどういふものか知らないであろう」

里奈は言っと刀の名前を叫ぶ。

「『罪喰』！」
さいじつき

すると、刺突剣^{レイピア}はやはり液状化し、右腕と同化^{トウカ}した。

全てを喰らい尽くすような黒い籠手。

その籠手からは10センチ程度の5本の爪が生えており、その全ての爪からは50センチ程度の鎖がついていて、その鎖の先には直径30センチ程度の鉄球がついている。

それはまさに小型の『モーニングスター』

ニヤツ、と里奈は小さく微笑み、右腕を振るった。

現れたのは刃のように鋭い風。

「クッ！」

俺は氷の壁を形成し風を防ぐが、飛び散った氷が風に取り襲い掛かってくる。理子は髪を操り氷による攻撃を防ぐ。

「サンキュ」

どういたしまして、と言った理子。

「里奈！」

「愚か者めまだ私をその名で呼ぶか。滑稽だな」

言うと右手を振りかざす。

中距離は分が悪いな、どうやって接近戦に持ち込むか避けながら考えていると、不意に攻撃の手が止まった。

その瞬間俺は高周波ナイフを持って駆け出す。

あと2メートルという距離で、ニヤリ、と笑う里奈。

「喰いちぎれ『グラトニー』」

突如、爪のモーニングスターが五角形の頂点の場所に移動すると、その鎖と鎖の間に膜ができた。

連想されるのは、巨大な『口』

そして、叫んだ『グラトニー』という言葉。それは原罪の一つの英訳。

意味は、『暴食』

やばい、喰われるッ！

五角形の辺に歯のようなものがでけると同時、俺の腰に髪の毛が巻きつき、引っ張る。刹那、ガンッ！という音と共に口が閉じる。

「なにをしている！」

「すまん、助かった」

罪喰と呼ばれた妖刀の口が閉じてもとのモーニングスターに戻ると、
「あーあ、喰い損ねた。貴様強そうなんだけどな」

俺はガバメントを取り出し、弾倉マガジンの中の弾が切れるまで撃つ。が、
全て爪によつて弾かれる。

「（何か手は・・・まてよ、ブラドのような奴なら銃弾を弾く必要はない。・・・突破口が見えた）」

俺はガバメントをポケットに収め、そのポケットからシングル・ア
クシオン・アーミーAをホルスターに収める。

「なんだ、降参のつもりか？私の足をナメながら命乞いをすれば四
肢を喰らうだけで済ませてやろう」

そりゃゴメンだ、といいながら右手の爪をピクと動かし、構えを取
る。

「そうか、なら仕方ない。貴様を喰ろうてやる！」

バン！と俺の胸の中心あたりから銃声とマズルフラッシュがでる。

そして、それは止まらない。

シングル・アクシオン・アーミーAに入っている弾をすべて、『不可
視ヴァイジビレの銃弾』で撃つ。

「勝った、と思った一瞬の油断が命取りだ」

俺は里奈の両足と両腕と右腕の腱を撃ちぬき、鳩尾に一発食らわせ
た。

「な……に………ッ！」

里奈の右腕から妖刀『罪喰』が離れ、里奈はその場にバタリと倒れ
る。

俺は近づき、手錠を理子から貰う。

「く、負ける、訳には………いかな………いん、だ」

ガチャリ、と手錠を右手にはめる。

「負ける訳には、いかないんだ……！」

里奈は立ち上がり罪喰を取ると、

「罪喰！」

里奈が叫ぶと同時に、罪喰は液体化し中から一匹の生物が現れる。

それは、蛇のようであり獅子のようでもある。また、熊のようでもある。蝙蝠のようでもある。

合成獣^{キマイラ}という表現が最も合う。

その生物は腕を振るうと突風が起こり空中に真空ができ、その真空が木を切り倒す。

所謂、『カマイタチ現象』

「は、はは、私は、とんだものを創ってしまったな」
創った、これを、まさか、

「まさか、禁術、『壺毒』か！」

The aria continues

不可視の斬撃

「壺毒!？」

「ああ、壺毒。おまえも壺毒は知ってるだろ」

俺は理子に言葉を返す。

「壺毒、一つの壺に毒蟲を何匹も入れて、食い合いをさせ、最後に残った毒蟲を壺から取り出しその蟲から毒を抽出し、その毒を使い人を殺す。最悪で最恐の『禁術』だ。星伽のある程度優秀な奴らが10人で協力してなせるかどうか」

が、目の前の里奈は一人でやりのけた。

グオ、オ、オオオオオ!!

という獣の雄たけび。

「だがな理子、勝機はあるぞ」

「お前は勝機がなくても向かうだろ。こんなもの野放しにしておいたら、最悪県が一つ潰れる。で、勝機とはなんだ」

「『壺毒』の完成品は知能があるらしい。が、どう見てもこいつに知能はない。つまり、こいつは不完全品な訳だ。不完全品は放置しても勝手に死ぬらしいが、期間がな、2日から約1095日間、3年間だ」

ビュン!と壺毒は腕を振るうと真空の刃ができ、俺や理子、主である里奈までも殺そうとする。まさに化け物。

ブラド以上の怪物だ。

俺は襲ってくる真空の刃を避けながら話を続ける。

「3年も放置してたら県どころか九州が壊滅する。その前に俺達で何とかするしかない」

俺は未来を気にしないで戦えるようになったから高周波ブレードを抜く。

「悪いが、お前達の出番はこれでお仕舞いだ」

上空から銃弾が降ってくる。その銃弾は壺毒の頭に生えている触角を的確に打ち落とすと、人が地面から出てくる。

その人物は鎖帷子くさりかたびらを着け、鼻から上だけを覆う鉄仮面を着けている。腰には日本刀と思われる刀が一本。見た目だけなら『忍者』と言う言葉がもつとも合う。が、この人物は地面から出てきた。

俺は本物か、と疑うとドン！と音を立てて空から人が降ってきた。

人物は腰にAK47を2丁装備しており、手にはD・Eデザートイーグルが一丁。

「見てなボウズ」

空から降ってきた男が俺に向かって言う。

突如、ピン！と音と共に壺毒の腕が一本落ちる。

「今のが本物の居合い切りだ」

俺は啞然とする。

何も見えなかった。ただ、音がしただけ、そうだと思った。

その男の刀にはかすかな血痕が付着していたのを見て俺は確信する。

『インヴィジブル
不可視の銃弾』

その言葉が頭に浮かぶ。『インヴィジブル
不可視の銃弾』を日本刀でやったと言うのか。

ピンピンピン！と連続して空を切る音と一緒に、壺毒の腕、足、頭、胸、と全てがばらばらになっていく。

その技、名付けるなら、『インヴィジブル
不可視の斬撃』

そんなことができそうなのは俺は右手の指で数える程度しか知らない。

一人はカナこと遠山金一

一人は遠山キンジ

一人は帝と呼ばれるグループの一人の隼

「まさか！？」

「そう、こいつは隼だ」

空から降ってきた男が言う。

「俺の名前はガイエスだ」

ガイエス、帝と呼ばれるグループのいわばリーダー格。

そつだ、未来は？と辺りを見回すと、里奈は観念したように座り込む。

犯罪者グループで帝を知らぬものはいない。それほど有名なのだ、帝は。

〓 〓 〓 〓

その様子をモニターで観察しているものがいた。

その人物は声に出さなかったが確実に「計画は順調だ」と言った。

「もうすぐだ、東京の武偵共を皆殺しにすれば、お前は、生き返る。ホムンクルスとなって」

この部屋を覗いた者は、この人物以外誰もいない。

この部屋には巨大なビーカーが20以上並んでいる。そのビーカーの中には、全て人が入っている。

「さあ、そろそろ、お前らにも働いてもらうぞ」

〓 〓 〓 〓

ガイエスは里奈に向かっていくつかの質問を投げかける。

「おい、お前の目的はなんだ」

里奈は涙目になりながら答える。

「……………未来美気を、基地に連れて行くこと」

「基地とはなんだ」

「……………言えない」

「お前は何者だ」

「……………」

「お前はどこの組織に属している」

「……………」

それからほとんどが続き。

「おい、そのボウズ、お前んとこの武偵高に優秀な尋問科いたよな」
ダギョウ

俺は里奈に手錠をかけながら、綴が優秀なことを教える。

「じゃあこいつをその、綴って奴のところに連れてくぞ」

「そのまえに、少しこいつと話をする時間を貰う」

俺は言う、ガイエスは了解してくれたため、俺は里奈を引き連れて少し奥に行く。

念のために高周波ナイフを手を持つ。

「なぜこんなことをする。あたしは貴様らの敵だぞ」

「太陽はなぜ昇る、月はなぜ輝く。推理してみろ。ま、こっちの質問に答えたら回答してやるよ」

フ、と里奈は鼻で笑う。

「第一の質問だ。お前の目的はなんだ」

「またその質問か、何度も言わせるな。未来美気を基地に連れて行くことだ」

俺は変声術で里奈の声する。

「『負ける訳には、いかないんだ』お前がさっき放った叫びだ」

「それがどうした」

「推理してやろう。なにか、人質をとられてるな」

俺が言う、と里奈はカツ！と眼を見開くと、里奈はおろおろと動揺し始める。

眼の焦点は合っていない。

やがて、ポツン、と涙がたれると、ひつくひつくと泣き始める。

「全てを話せ、ムシヨに入れられたいかなければな。……………もう一度

問う、お前の目的はなんだ」

「あたしの、目的……………それは」

里奈の頭の中でフラッシュバックが始まる。

デストロイと呼ばれる組織に自分と妹が捕まったこと。

妹を人質にされて駒にされてること。

妹は今暗い牢獄の中でビーカーに入れられて生かされているということ。

妹は昏睡状態であること。

母と父はそこで働いていて自分達が捕まったと同時に銃殺されたこと。

母と父を生き返らすには罪を全て集めるということ。

「つまりだ。親二人が殺されてその二人を生き返らすには罪を全て集めなければいけないが今のお前は雑兵同然だ、と」

コク、と力なくうなづく。

「でもおかしい話だな。お前の親がいたほうがその罪とやらを集めるのには効率がいい、殺す必要はない」

みるみるうちに顔が絶望に染まっていく里奈。

「妹が人質にとられたのはお前の反乱を防ぐため。親を殺したのは罪とやらをお前に集めさせる決意を作るため。そしてお前が全ての罪を集めて持っていたとしても、親と同じ運命を辿るよ」

もつとも、俺に負けた時点で全て集めるのは不可能だがな、と付け足す。

「壺毒は俺と理子だけじゃどうにもならなかったけどな」

「それで、なにが言いたい」

ものすごく暗い声で言う里奈。目は完全に光を失っていて、正直少し怖い。

「第二の質問だ」

俺はこれ以上精神的ダメージを与えないために話を逸らす。

「本名を教える」

「……………」

「お前の血を無理やり採って調べること可能なんだがな」
さらに暗くなる。

余計に傷つけてしまったか？

「……………楓奈、楓」
ふつな かえで

楓奈、台風のように現れて、いつの間にか消えた家族。

一説では、何者かに闇に葬られた、と説があつたが本当だとは思わなかった。

「すまん。辛いだろうが、もう一つ聞かせてもらう。いやとは言わせない」

コク、とまた力なくうなづく。

「では最後の質問だ。お前は、妹を助けたいか？」

「助けたい。でも、あたしには、貴様らのような力はない。ムリだ」
ムリ、か。アリアがいたらきつとこう言うだろうな。

「ムリ、いや、めんどくさい。この三つは人間の才能を、可能性を押しとどめる、いや、ゼロにする力がある。そして、あいつが一番嫌いな語群だ」

俺は手錠の鎖を高周波ナイフで斬る。

「……………なにを…………？」

「今のお前にここから逃げきるだけの力はないし、気力もない。妖刀も没収した。逃げたれば逃げるが良い」

ただ、と付け加え続ける。

「逃げたら迷わず斬る。死なない程度に痛めつける程度のことはするだろうな。足の骨を折る、が一番軽いな。四肢を切断するってのもあるが、俺はそこまでの残虐性はないし、いくら現実リアルの女と言ってもそんなことする奴は俺が止める。ま、お前とこれから東京に行くことは確定事項だな。そうそう、東京にキンジって奴がいるんだが、そいつに口付けの一つや二つすれば何でも言うこと聞いてくれるぞ」

「……………ハレンチな…………」

軽く、もしかしたらレキより分かりにくいほどの微笑を出す。

「そうそう、女性と言う性別は笑ってるほうが良い」

頬を少し——今はかなり暗いせいかなの不の感情意外はレキ並みだが

——朱色に染める。

そして、後ろから来るタツタツタツ！という誰かが走ってくるような音。その人物に、今は一人だけ心当たりがある。

理子だ。

後ろを振り向くと、理子が作り笑いを浮かべて走って来ている。理子は俺の3メートルくらい前でジャンプして、とび蹴りを放つてくる。俺はそれをさも当然のように避けようとするが、シュルルルと髪が伸びて俺の右足を捉える。

「あの、理子よ、何でそんな邪悪なオーラを放っているのかたずねる権利は？」

「クフフ、今のキョーくんにあると思う？人との約束すっぽかしてハーレム作ってるキョーくんに」

「いや、ハーレムじゃないぞ。少なくとも『グループ』で俺に恋愛心もってる奴はいない。キリッ！」

「キリッ！じゃなくて、キョーくんはドライバーと金槌、どっちが良い？」

「あえて言うなら髪で、と言いたくはないな、俺にエム属性はないし目標は中立かエスに近い中立だな」

俺は『里奈』改め『楓』をガイエスのところに連れて行くと、俺はガイエスにどういふつもりだ？と言われたのは言うまでもない。

未来はもう目が覚めていた。どうやら、いままで意識が少しあったらしく、全部見ていたとのこと。

The aria continues

俺は未来、理子、楓と共に未来邸にいる。

対面しているのは未来家頭首こと未来来斗。

対面している人間は頬を若干引きつらせていて、目の下には隈がある。

「それで、君がここに報告以外で来たってことは……」

「ま、その通りですね。お察しの通り、バレちゃいました」

「……………胃に穴が開きそうだ」

「それは大変。病院行きますか」

「君は私をおちよくっているのか？」

ついでにかなり不機嫌そうだ。

「それは置いといて、本題はこれからのことです。まず、これが今回の犯人」

俺は楓のことを指す。

いまだにまだうつむいているがあの後よりはまだ明るい。

表情はレキよりは見分けやすくはなったが、真っ赤な他人にはまだ見分けられないだろう。

「東京に連れて行きますが、異論はあるか？」

無い。と簡潔な答え。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

呪文のようにつぶやき続ける楓。

それを可哀そうに思ったのか美気は口を開く。

「もう良いんじゃない。事情は全部分かったし、結局私は助かったし、それに、私は決めたから」

「なにを？」

「東京の武偵高に入学するってこと」

……………とこの場の全員が沈黙する、楓を除いて。

これはまた大変なことになりそうだな。

「……じゃあ、善は急げだ。おっちゃん書類と色々よろしく」

俺はこの部屋から楓と一緒にでようとすると、まちなさいと引き止められる。

「今日は泊まっていきたい。部屋もある」

「では、お言葉に甘えるとしよつか、な理子」

部屋を出てエントランスに向かう。そこにはグループの面々がいた。みんな全てを説明しろ、と言う顔をしている。

「わかった、分かったからそんなに睨むな。全部説明すっからそんな睨むな」

俺が言っていると説明しろオーラは薄れていった。

美気は付いて来て、と言い歩き出す。

エントランスから廊下に出て右に3つ目のドアのノブに手を掛け、開けると、中には長方形のガラステーブルと長いすが4つ。

俺は永谷、蒼井、成田、井藤と対面するように、俺、美気、楓、理子が座る。

「じゃあ、まず俺から」

言いながら俺は武偵手帳を出す。

「東京武偵高2年強襲科所属、^{アサルト}雛菊京助。武偵ランクは、いろいろあつてさだ」

言い終わると俺は武偵手帳をしまう。続いて理子が話し始める。

「東京武偵高2年探偵科所属、^{インクスタ}峰理子。武偵ランクはA」

俺は理子が言い終わってから、ま、こんなもんだ、と言って話を閉める。

「わかった、他の奴らとは雰囲気が違うのはなんとなく気付いてたし、別にあんたが武偵だからと言って『怖がる』なんてことはただのアホのすることだし、そもそもあの学校に武偵がいたら私の仕事なくなるし」

「いや、俺たちは明日、帰るぞ」

なッ！と言ってガーンという謎の効果音つきで若干落ち込む。

「そつえば来なかったな葛木とリミは結局来なかったな」

永谷がつぶやくと、いきなりバリーン！とガラスの窓が割れる。

俺と理子とはつさに銃を構えるが何も無い。床には割れたガラスの破片と、銃跡が一つ。

まどに近づく、シュルルルとロープが振ってくる。ロープには爆弾がいくつかくっ付いていて、そのロープから臭うのは

「ガソリンだ！みんな伏せろ！」

俺が言った刹那、ボウ！と音と共にロープに火がつき、爆弾の導火線に火がつき、轟音と共に一個ずつ連鎖的に爆発する。

部屋のドアは吹っ飛び、ガラスの机は割れ、ソファは燃えている。
「クソ！みんな大丈夫か！」

俺は爆発の一瞬前に窓に厚さ1センチ程度の氷の壁を3重に張ったが、連鎖的に爆発したため氷の壁は吹っ飛ばされ俺達も部屋の隅に飛ばされたが、幸いみんな生きていた。

俺は追撃に備えて窓に氷を張りそれを錬金術で金に変えると、みんなを診始める。

俺と理子と楓は辛うじてかすり傷ですんだが、成田は右足を骨折、蒼井は脳震盪で動けず井藤は衝撃で気絶している。永谷は右腕を打撲しただけだ。

問題は美気だ。

俺が口元に手をやると、息が無く、脈を測るも止まっている。

「心配停止！要救命処置ABC！理子早く！」

俺が指示すると理子は的確に動き始める。

理子は美気の口に口をつけ息を吹き込む。

俺は腕時計で時間を確認する。心配停止から約1分、そろそろ蘇生してくれないと、かなりやばい。

理子は心臓マッサージ、人工呼吸を蘇生するまで交互に繰り返す。

俺は成田のところまで行く。

「痛いけど我慢しろ」

俺は成田の折れた足を元の場所に戻す。

「いッ！……くッ！」

俺は一時的処置が終わったため錬金した金の棒と包帯で即席ギブスをつくり錬金術で金の杖を作る。

「蒼井、井藤、永谷、こっちに来い」

俺はみんなを一箇所にまとめる。

「いいか、第2波があるかもしれないお前らはここにいろ。

俺は言うど氷のドームを作り、4人を中に閉じ込めると、錬金術でそのドームを強化し、空気を入れ替える穴をいくつか作る。

「キョーくん、とりあえず一命は取り留めた。でも、早く病院に行かないと」

「わかつてる。……理子、鹿児島^{アサルト}の武偵高までどのくらいで着く」

「大体20分くらい」

往復40分、こっちから行っても20分、ヘリで約15分、打ち落とされたら終わりだな。

俺はケータイで鹿児島^{アサルト}の武偵病院に電話する。

「依頼^{クエスト}。衛生学部^{メディカ}につないでくれ。俺は東京武偵高2年強襲科^{アサルト}所属Sランク、雛菊京助。報酬金400万で強襲科^{アサルト}S2人、A3人、衛生科^{メディカ}SかAを1人、ヘリは使わないでほしい。40分以内で。場所？場所はここの辺りなら未来家と言えれば分かるか？」

「わかった。すぐに派遣する」

襲撃に備え、美気をドームの中に入れる。

俺はドアから顔だけを出して廊下を見ると予想通り敵がいた。全員全身防弾装備、武器はMP5とD・Eだ。^{デザートイーグル}

「まったく、SATやSWATじゃないんだから。そんなに美気の首がほしいのか・・・」

手榴弾を抜き投げると、轟音と共に強烈な光が出る。さらに発煙手榴弾を投げて目くらまし。相手が目をくらましている間にD・Eで^{デザートイーグル}撃つ。

タッタタッ！と一人近づいてきた。

俺は一度ひきつけて高周波ナイフでMP5を切断し、D・Eで肩を^{デザートイーグル}撃つと、

錬金術で廊下を塞ぐ。

さらに今の敵の防弾服を脱がして俺が装備する。ついでに予備装備のD・Eを貰うと、その敵を錬金で作った手錠と足かせをつける。

「理子、こいつを頼む」

ついでに防弾服には手榴弾もついていたのでもらっておいた。

俺は錬金で作った壁を崩し、手榴弾のピンを抜いて投げる。

ゴオオオ！と言う音と共に爆発が起こる。さらに迫ってくる敵にD・Eを撃ち込む。俺はその敵からMP5とD・Eを拝借し、さらに撃ちまくる。

俺はピン！と手榴弾のピンを抜いて投げる。

爆発すると3人程度は退却する。

ドン！と窓側の壁が崩れる。

「万事休すか……いや」

俺は理子をドームの中に無理やり入れる。

「悪いな理子、ここではそこが一番安全だ」

「京助！？」

理子の口調が変わる。

「今日は月が出ないな。しかも今は午後5時57分」

「それがどうした」

理子は内側からドームを壊そうとするが、叩いても切っても撃つても傷一つ付かない。

「現代に存在する吸血鬼はなにもブラドだけではなかった」

「なぜここでブラドの名前を出す！？」

「そして、これが最後の俺の能力」

徐々に俺の身体が変化していく。耳は伸び、爪も伸びる。背中からは黒い羽が伸び、眼は赤く染まっていく。

「ブラドやヒルダ以外の吸血鬼であり、人間との混血の吸血鬼、それが、俺だ」

姿は十分化物だがブラドのようにひどいことにはならない。

「この姿は新月の間しかなくてな、お前は俺が恐ろしくなるだ

ろうよ。過去が、あれだしな。騙していたと思ってくれてかまわない、ただ、俺はお前の味方だ」

俺は言い終わると同時に飛び出す。

敵数は10人程度。

その全員は俺に向かって撃つが、その弾はすべて俺に到達する前に勢いをなくして落ちる。たった10メートルもないと言っのに。

バチバチ、バチバチ、と俺の周りで小さな電流が流れる。そしてその電流は敵に向かって飛ぶ。

「わりのが、こつから先は一步たりとも入れねえ牢屋に入りたくないければ、このまま退却しろ」

が、忠告したにもかかわらず敵は迫ってくる。

俺は手から黒い炎を出して投げつけるとそれは爆発せずに床だけを溶かす。そして溶けた床からは二首の竜が姿を現す。その竜は右半分が氷でできていてもう半分は炎でできている。

「あと20秒でその竜の半分は水蒸気となり巨大な水蒸気爆破を起こすそれまでにお前らはこの家からでられるかな」

俺は言い終わると来斗のいた部屋に向かう。

そして、その部屋は、すでに血の海となっていた。

後5秒

俺は強固なドームを作りその中に来斗と一緒に入る。

後0秒

この屋敷は強大な轟音と共に熱と光に包まれた。

俺はドームごと移動する、みんなのところまで。

「理子、無事か」

「パパ！」

最初に叫んだのは三気だった。俺はドームを合体させる。

「俺が着いたところにはもう、でもな、一つだけ生き返らす方法がある」

その死体はまだきれいだからな、と付け足すと、大粒の涙を流しながら俺に叫ぶ。

「ムリよ！死んだものを生き返らすなんて」

「では、問題1、今の俺はなんでしょ。……答えは吸血鬼、吸血鬼は吸血するだけしかできないわけじゃない、吸血鬼は、死人を吸えばその者を生き返らすことができる。自分の人形として。生きている者も人形にすることもできるがな。ただ、俺がその人形に生前と同じように生きろ、と命令すればさっきまでと同じように生きる」

「生き返るの、お願い、生き返るなら生き返らせて、何でもするから」

「なに、俺にこう依頼すればいいんだよ、『生き返らせろ』と。そうだな、報酬は3000万のところを、血を一滴貰うにしておくか」
「……………依頼するわ、パパを生き返らせて」
御意、と答えてから首筋に牙を立てて少しだけ血を吸う。
すると、来斗はムク、と起き上がる。

「生き返りはした。ただ、今まで通りにはならない。多かれ少なかれ異変があるはずだ。そうそう、報酬の件だけど、首にはかぶり付かんぞ、指をカッターで少し切ったときに出るくらいの血でいい」
美気は分かったと言い落ちてたナイフで指を少し切ると、血が少したれる。

その血を爪で採って口に入れると、美気は顔が赤くなる。

俺はその血からいろいろな情報を感じ取る。美気は凄い力を秘めていること、成長すればRになるかもしれない。そう思いながら俺は美気に絆創膏を渡す。

俺は理子に近づく。

「黙ってて悪かったな……………怖い、俺が」

「キョーくん、理子はこれ以上のものを見てきた。……………お前が怖い？何を今更」

「そうかい、それは嬉しい限りだ」

とりあえず美気の血は取り込んだので変化を解く。

すると、救急車の、正確には武偵が乗っている防弾救急車の音が近

づいている。

救急車には美気と成田と蒼井が乗り込む。俺と理子と楓と永谷と井藤は悲しいことに歩きた。

俺は来斗に今まで通り生活するように命令する。

|||||

次の日

美気は検査だけして病院から出る。成田は1週間入院後、退院、退院後も直るまで他の病院に通うらしい。

ここの生徒から聞いたが美気が検査だけでよかったのは的確な応急処置が行われたからだ。

俺は車輜科に頼んで空港まで送ってもらう。

空港に入ると席はとつてあるので金属探知機の前で武偵手帳を出す。余談だが荷物はほとんど持っていないのでスルー同然だ。

「それにしても、何か忘れてるような・・・」

「キョーくん、お土産だよ」

「……………しまった、忘れてた。そうだ、アリアにはももまんを10個ほど向こうで買うか」

と適当に考える。

東京まで約2時間。

「理子、ハイジャックはするなよ」

「分かってるよキョーくん」

「は、ハイジャックって、なにやったことあんのよあんだ」

「ああ、言ってなかったっけ？峰理子はもと重犯罪者『武偵殺し』の異名を持つお方だ」

「ふっふーん！」

だめだこいつら、と美気が思った瞬間だった。

The aria continues

混血の吸血鬼へVampire of the mixed blood《後

気道の確保airway

人工呼吸breathing

心臓マッサージcardiac massage

頭文字をとって『救命処置のABC』と言う。

最近どんどん厨二路線に行ってるような気がする……

武偵高に帰ってきた

飛行機で約二時間飛んで戻ってきた東京。

今俺たちは成田空港にいる。

「ここが東京？飛行機の中で見下ろしてたけど、ビルばっかね」

「ま、東京だからな。そういえば葛木とリミには言ってなかったけど、まああいつらがどうにかしてくれるだろ。タクシーでいいよな」
コク、とうなずく理子と美気。楓は俺と手錠でつながれているので否応なし。

俺は適当にタクシーを捕まえて乗り込む。俺、理子、楓は後部座席。美気は助手席だがなぜか少し機嫌が悪い。

「キョーくんまたフラグ立てた」

「俺は『この戦いが終わったら結婚するんだ！』なんていった覚えは無いぞ」

「それは死亡フラグ。キョーくん分かってるくせに」

「ま、片足でもこっちの世界に突っ込んだらいやでも分かるだろうよ」

俺は運転手に行き先を告げる。

武偵高まで約30分。その間俺は寝る。

|||||

そして約30分後、午後7時30分

やっと着いた東京武偵高探偵科寮前。
インクスタ

かかった費用は約5万円。

必用な物はあらかた頼んでおいたし、入学に関しても問題ないだろう。今頃キンジの部屋に届いてるはずだ。

俺たちは階段を上りキンジの部屋のカードキーで鍵を開け、入る。

俺が見たものは、風呂上りで服を着てないアリア。

「か、か、か、かざ」

ボタン！と勢い良くドアを閉じる。

中からは言葉の続きと、オプシヨンとして銃声が聞こえる。

「理子、美気、楓、逃げるぞ、死にたくなければ」

「え、は？」

「まあまあ、いつものことだから」

と困惑している美気に説明になってない説明をする。

そして、いきなり銃声は止むと、サクツ！とドアからアリアの小太刀が生える。耳の2ミリほど横から。

「か・ざ・あ・な！」

「あ、あのお、交渉の余地は」

「ない！」

「よな。なあアリア」

「なによ」

俺はももまんが入ってる袋を上げながら交渉を始める。

「俺を殺すと、ももまんがアスファルトに真っさかさま。俺とアスファルトどっち採る？」

すると、小太刀はスウーと引かれ、中からはタッタッタと服を着たアリアが出てくる。

「久しぶりね京助」

「感動の再会で第一声が『かざあな』だもんな。どこぞやの某犬の半妖の出てくる戦国時代アニメなら俺はもう約700キロの力で吸われてもう死んでますよコノヤロウ」

俺はももまんを渡しながら愚痴る。

アリアは指で手錠で俺とつながれている楓と美気を指しながら、誰？と訊いてくる。

「ああ、手錠で俺とつながれてるのは楓奈楓。とりあえず犯罪者、誘拐未遂と殺人未遂とその他の犯罪者。理子の隣にいるのが未来美気」

「未来家！？あの未来家！？」

俺はあの未来家だと言う。

「説明終わり。つー訳で少なからず数日間はこちらで仮住まい」

俺は楓の手錠をはずして部屋を見て回るが、いるはずの人物がいな
い。

「キンジは？」

病院、と言う簡潔で分かりやすい返事。

俺は1秒ほどキンジの心配をしたが、まあ問題ないな。あの白く黒
い人がいるから。

さて、問題は晩飯だな、冷蔵庫の中は？と見るが、案の定と言うか
なんと言うか、すっからかんである。これも白雪の仕業か？

今は大体8時。この時間ならコンビニの惣菜なども無いであろう、
ロシキーは混雑してるだろうし。

カロリーメイトで今晚は我慢してもらおう。

The aria continues

ハレルヤ

美気がこつちに来てから2週間が過ぎた。

キンジはあと3日で退院する。

俺はここ3日間部屋に引き込んでいる。何をしているかと言うと、ハッキングだ。

「クソッ！ブロックが硬い！」

『京助、焦ってはいけない。ボクもなかなか侵入できないほどに硬いんだ。でも、必ずどこかに抜け道はある。そこを探すんだ』

「だが、敵が来るまでもう2週間しかないんだ。3日間やって抜け道一つ見つからないほどに硬い、……………少し席をはずす」

分かった。と言う若い男の声が無線越しに聞こえる。

俺は冷蔵庫の中から『飲むヨーグルト』を取り出して探偵科寮屋上インケスタに向かう。

どうやったら、あの硬い守りを突破できるか。やはり情報科インフォルマに依頼するか、しかし。

ふと時計を見ると午後6時、夕日がきれいな時間だ。

屋上に着くと貯水タンクに背中を預けオレンジ色に染まった夕日を眺める。

綺麗だ。

そんな小細工なしの言葉が一番似合う、そんな夕日。

俺は飲むヨーグルトのストローを取り出し突き刺し、飲む。

どうすればあの壁を越えられるだろうか、どうすればアレだけの壁を作るのだろうか、そもそも相手の情報を知ってなんになるのか、相手の情報を知ったからって勝てるのか、とそんなマイナス思考が頭をよぎる。

そのとき、俺と反対側のほうから鼻歌が聞こえてくる。

その曲は、メサイアのハレルヤ。

「歌は良いね」

唐突に話しかけられる。

「歌、か。……ハレルヤ、好きなのか？」

「これはヒントだよ、がんばってくれ、ヴァンパイア」

その人物は瞬きをした、コンマ1秒未満のわずかな時間に消えていた。

まるで、元からいなかったようなそんな感じだ。

「ハレルヤ、主をほめ賛えよ、どういうことだ。それに、なぜ俺のことを知っているんだ」

俺はなぜか、なぜかと考えていくが、疑問がまた疑問を呼びいくら考えても分からない。

ま、今度考えればいいかと思考を変え、部屋に戻ることにした。

The aria continues

新たな武器

俺は部屋に戻ると、パソコンの画面が変わっていた。どうやら、あつちで少し進めてくれたらしい。

「この画面は？」

『だめだ、パスワードが分からない』

パスワードか。厄介だな。

これはヒントだよ。

さっきの男のその言葉が頭にこびりつく。

まさか、と思い『主を褒め賛えよ』と打つが、エラーがでる。

『京助、そっちで何か分かったかい？』

「いや、何も。……………」

「ただいまー」

アリアが帰ってくる。アリア、以前、いや、今も俺を奴隷と認識している緋色の髪の女性。

「まさかな」

これなわけがない、と思いながら『ARIA』と打ち込む。

「そんな、バカな、なぜ」

開いた、硬かった扉が開いた。

だがなぜ『ARIA』で開いた。

『京助、良くやってくれた。それにしてもどうして分かったんだい？』

「ハレルヤ、その意は『主を褒め賛えよ』。その主が、『ARIA』つまり、アリア。緋弾のアリア」

不意に呟いてしまう。以前シャーロックがアリアにささげた名を。

そして見てしまう。その扉の中に書かれていたことを。

理解してしまう。その扉の中に書かれていた文字を頭で。

分かってしまった。デストロイがしようとしていることが。

絶句する。ここに書いてあることが実行されれば、世界は、終わる。その目的は、デストロイの長が、神になること。世界の創造主になること。

そのためには、緋緋神を覚醒させなければならぬ。
そのためには、アリアが死ぬしかない。

殺させるものか、そう決意する。

「ざけんな。そんなこと、させてたまるか」

『これは、ボクは今すぐそっちに向かう』

「来るな！……来てはいけない。お前たちは、まだやるべきことが残ってるはずだ」

『ああ、だけどボクたちは死ぬつもりは無いよ。それに、世界の危機に出し惜しみ話だ。そうだろ、京助』
確かにその通りだな。

「……………分かった。こっちで書類の偽装なんかはやっておく。ただし、無茶はしないでくれ。オタコン」

ブツリと切れ、閉じられるテレビ電話ウィンドウ。

俺は来るなら色々買いだしに行かなきゃなと思い、購買に行く。

そうだ、平賀さんに色々頼まなきゃな。

「それならあたしに頼んでくれれば10パーセント引き、いや、出血大サービスの40パーセント引きで引き受けますぜ兄貴」

「誰が兄貴だ、それと人の心を勝手に読むな江梨。あ、そういえば戦兄妹契約してなかったな」
アヒカガ

「（チッ、余計なこと思い出しやがって）」

「なんか言った？」

いえなにも、と澄ました顔がさらに怪しいがこの際なにも聞かないことにする。

「えーと、ガバメントの改造を頼む」

俺が言っていると電卓を取り出しててきばきと数字を打っていく。

「給弾不良を起こさないためにフィーディングランプを磨いてくれ。スライドは強化スライドに変更し、フレームは徹底的に精度を上げてくれ。フロントストラップにはチェッカリングを施して手に食いつくように。サイトシステムは3ドット、フロントサイトは大型で認識性を良く。ハンマーはリングハンマーに変えて。グリップセフティはハンマーに合わせてくれ。サムセフティ、スライドストップも延長してくれ。トリガーガードは削ってハイグリップで握りこめるように。トリガーはロングタイプ。弾倉導入部も入れやすいように広げてくれ。マガジンキャッチボタンは低く切り落として誤動作の無いように。メインスプリングハウジングもフラットタイプに変更、スプリングも施してくれ。スライド前部にはコッキングセレクションを追加してくれ。それとベレッタM92Fを麻醉銃に改造してくれ……ざっとこんなもんだな。いくらだ？」

出された電卓を見て桁が1つ違かうが払えないことはないので払うことにした。あの人があるなら最高品を用意しないとな。

|| || || || ||

アムト
装備科

ガチャリ、とドアを開ける。

「やあやあ待つてましたのですだ。まいどまいどありがとうございますのだ京助君」

それはこちらと同じだ、いつもめんどくさい武器ばかり作ってもらってな。

平賀さんは机の上においてある箆手のような武器を渡してくる。

「すまないな平賀さん」

「いえいえ、京助君はお得意様なのだ、このくらいはお安い誤用なのだ。それに京助君はお金をケチらないからいい人なのだ」

「それはどうも、さて、次の依頼だが」

俺は言いながらキンジのバタフライナイフと俺の持ってきたサバイバルナイフを渡す。

「バタフライナイフは良く斬れるように研いでくれ。サバイバルナイフは放電して敵を感電させられるように。もちろん破壊峰ソイドフレイカーを付けて、良く斬れる良く刺さる」

「このくらいなら誰でもできると思うのだ。それに仕事が詰まっているのだ」

チップだ、とチップを渡すと凄い勢いで仕事に集中し始めた。扱いやすい人だ。

俺は仕事の邪魔をしないように部屋から出てく。

The aria continues

やってきた協力者へC o o p e r a t o r

8月25日 0319

決戦まであと5日

キンジはすでに退院し、今は部屋で寝ている。
ガチャリ、と開くドア。

俺は階段を下っているときに、ふとした視線を感じる。

「（夢ヒスカ）浅いな、もっと深くヒスらないと、おまえ、死ぬぞ」
柱の陰からキンジが出てくる。

「分かってたのか」

「俺を誰だと思っている」

しょうがないのでキンジも連れて行くことにする。行くところは、
武偵高を繋ぐ橋。

もうあいつ等がやる気なら、俺に止める権利はない。

俺は少々眠い目をこすりながら歩く。寮を出るころにはもうキンジ
の夢ヒスのメザヒスは解けていた。

「キンジ、お前は鍛えてもらうといい」

そうつぶやくと、あらかじめ量の近くにおいておいた車に乗り込む。
キンジは助手席だ。

「免許は？」

「ない」

「おい」

「気にするな」

短いやり取り、無免許運転もバレなければどうてことはない。武偵
が言つと正しいように聞こえなくもないが、バレなくても犯罪だな。

車を走らせること約3分

俺たちは端の真ん中辺りに到着する。

そこには白衣の男と、無精ひげを生やした男がいる。
その男たちがこの車に乗り込むと、車を発進させる。

「こうして、対面するのは何年ぶりかな」

「忘れた。それよりも今の内に寝ていてくれ。あした、正確には今日は忙しいぞ。それとタバコは止めてくれ」

俺が言うが無精ひげを生やした男はタバコをポケットから取り出したポケット灰皿に入れる。

「よろしい」

「京助、誰なんだこの人たち」

「ま、後で話すよ」

俺はそのまま寮に戻る。

|| || || || ||

ワアアアーーーー!!?!

キャーーーー!!!?!

と、二つの悲鳴が重なって聞こえる。

今は午前9時、アレから眠りについた俺はその悲鳴によりたたき起こされる。

「な!なんだ!?!」

飛び上がって起きた俺は悲鳴のしたほう、すなわちリビングに向かう。

「きよ、京助!誰なのよこいつら!不審者?!」

「京助、このホームズの末裔はなぜボクを見るなり撃ってきたんだい?」

無精ひげの男に抑えられているアリアと、顔を青くして銃弾を避けたオタコンが一度に問いかける。

「え、えつとな、メンドイから全て省くが、アリア、こいつらは協力者だ。だから撃つな」

「じゃあ何であたしは取り押さえられてるわけ!?!」

「それはお前がいきなり撃つからだろ」

「ふわああ、あんた達少しうるさいわよ」

騒ぎで目が覚めたのか美気が起きてくる。それに続くように楓も起きてくる。

「あれれ、キーくんの部屋に見知らぬ男が二人も増えてる」

続いて理子も玄関から侵入してくる。

「き、きんちゃん！どうしたの今の！って、な、なんで見たこともない人が増えてるのきんちゃん！？」

武装巫女こと白雪が、完全装備で部屋から出てくる。

「何が起こりました！？」

と、あわてた様子で寝巻き姿、正確には下着だけのクリスが出てくる。

アリアはそれに赤面する。

「あ、あんた、何でそんな格好で出てきてんのよ！」

「ふえ？」

まだ寝ぼけ半分のクリスは自分の格好に気付いていない。

俺が指すと、はっ！と気付いて急速に赤くなり部屋に戻る。

少しするとちゃんと服を着たクリスが出てくる。

俺は全員を見回してから話を始める。

「さて、全員そろったから始めようか。まず、白衣の男だが、彼の名前はオタコン」

「それはニツクネーム、本名はハル・エメリツヒ。それと」

「スネークだ」

二人の自己紹介が終わるとアリアが凄い勢いで立ち上がる。

「なんですって！？それ、ほんとうなの！」

俺は、本当だ、とうなずく。

「コードネームソリッド・スネーク、『不可能を可能にする男』ともよばれるシャドーモセス事件の英雄。ハル・エメリツヒ、工学博士でありハッキング、プログラム、どちらも天才の域を超えている

人物。まさか、京助の知り合いだったとは知らなかったわ」

俺はコホンとわざとらしく咳払いをして話を再開する。

「シャードーモセス事件については各自気になったらググッてくれ。ないと思うが。まあ、それは置いて、この二人は作戦の協力者であり、一時的に教務課になることになった」

「そ、そんなの聞いてないけど」

「言つてないからな、とうぜんだ。スネークは強襲科担当、オタコインフォルマンは情報科担当。あとスネークにはこれを渡しておく」

俺が言つて渡したのは、この前頼んでおいたガバメントと麻酔銃とスタンナイフ。

「これは！」

「うん、これは凄い」

「凄いなんてもんじゃない。徹底的な改造と強化が施されている。これほどのものは軍でもお目にかかれることは少ないと思うぞ」
さて、と前置きして話を再び再開する。

「推測だが、いまのキンジの力では5日後の戦いに勝てない。そのためのスネークだ。スネークはアリアとキンジの相手をしてくれ」
「わかった」

「オタコンは教務課マスターズに行つてこの紙を渡した後、指示に従つてくれ。あとは各自訓練。以上、解散」

俺はオタコンに紙を渡したあとすぐに部屋を出ると、屋上に向かう。そしてケータイを取り出してある番号に掛ける。

ピリリリ

『はい』

とワンコール目が出る。

「強力な武器を東京武偵高にすぐに手配してくれ。特にMP5、M4カービン、それと多種の手榴弾グレネード」

『では、これが3つ目の願、でいいですねぼっちゃま』

「ああ、これで貸し借りチャラだ、と伝えておいてくれ」

ブツリ、と切れるケータイ。

決戦は5日後、俺たちは、なんとしても勝ってみせる。

The aria continues

やってきた協力者へC o o p e r a t o r 〱（後書き）

なんかもう、やっりたい放題やります（キリッ！

ロリハーレム？

26日

決戦まであと4日

「京助、今日は萩原家の頭首が来るらしい」

言ってきたのはオタコンだった。

「ああ、萩原願、Fユニットの指揮官、日本の首領ドンとも呼ばれているアイツか。何でまた」

「たぶん、デストロイ関係で看過できないことが起きたんだと思うけど」

「早い話『仲間が増えた』と考えればいいんだろ。オタコン、俺はアサルト強襲科に行くてくるから。オタコンは情報科でインフォルマハッキング講座でも開いてたらどうだ？」

「じゃあ、そうさせてもらう」

俺はオタコンにこの部屋のカードキーを渡すと、部屋を出て行く。

（萩原願か、手合わせでもしてもらうかな）

ガチャリ、としまるドア。

俺はワイヤーを使い一階に降りる。

|| || || || ||

数分後、場所は変わりアサルト強襲科

俺はスネークを探しに來たわいいが、どこにいるのかが見当もつかない。

と、思いながらアサルト強襲科の中に入ると、見つけた。

スネークは館内の真ん中で模擬戦をやっている。その相手ざっと50人。

「なにやってんだか」

と、呆れ気味にため息を突く。

本人は俺に気付いたのか手招きをする。

「で、俺は仮パートナーか」

「そんなところだ」

俺は銃を持っている武偵高生徒に村正一本で向かう。

スネークはガバメント一丁で飛んでくる弾丸を回避しながら相手の防弾服の上の的確に弾丸を打ち込む。

戦場で余所見はタブーだが壁にもたれかかっているアリアをちら見すると、興味津々に観戦している。

バババババ

とフルオートで撃たれる銃弾。

その銃、マイクロUZIから放たれた9mmパレベラム弾は俺の頭に向かって飛んでくる。

「（ありかよ）」

俺はそれを村正の刀身で弾くと、そのマイクロUZIの持ち主を見る。

その持ち主は栗色の髪の子。

ピシュ！

と俺はナイフを投げる。

そのナイフは防弾服の上に当たり、そのまま足元に落ちる。
ダン！とスネークのガバメントから銃弾が飛び出す。

その銃弾は不知火の防弾制服に当たり、スネークは不知火を掴み、倒す。

「さすがだな」

俺はさっきの栗色の女の子に走り、村正で斬りつける。

その刃は届いたが俺は違和感を覚える。

その違和感の正体は服の重さが変わっていること。

俺は右ポケットに手をいれると、そこにあるはずのものがなかった。
ピン！と言っ手榴弾のピンを抜く音。

その手榴弾は栗色の女の子が持っていた。
その女の子は手榴弾をこっちに投げる。

「しまッ！」

た、と言おうとして、手榴弾は激しい光りと音をあげる。
が、投げた本人は突然のことに気絶した。

「おいおい、まあいいか」

数はスネークがほとんど倒し、10人程度に減っていた。
俺は近くにいた一人に近づいて峰で鳩尾を殴り倒す。

スネークはスタンナイフの放電で感電させ一人倒す。

そんな感じでどんどん数は減り、最終的にはみんな倒した。

俺とスネークはイエイ！と言う感じで手をパン！とあわせる。

30分後、さつき気絶した栗色の女の子は眼を覚ます。

俺は少し話をしたいと言うことで眼を覚ますのを待っていた。

「やつと起きたか」

と、黄色のポニーテールの1年、火野ライカが声を掛ける。

「あれ、あたし・・・」

「お前はいつの間にか俺から奪った閃光響音手榴弾を自分でピンを抜いて拳句勝手に気絶した、と、雛菊京助こと俺が説明する」

「だめねえ」

「模擬戦に参加すらしてない奴が言うな」

「あ、あの」

と栗色の女の子のこと『間宮あかり』が恐る恐る声を出す。余談だが
名前はさつき火野に聞いた。

「アリア先輩とはどんな関係ですか!？」

「えっと、マイクロUZI向けながら訊く質問じゃないと思うんだ
けど、それどう見ても『返答しだいでは殺すぞコノヤロウ』って言
う姿勢だよな」

俺は手を上げながらUZIをしまうように促す。

「よし、では答えてやろう。ボーイフレンドだ!」

バババババ
ダダダダ

と、マイクロUZIと白と黒のガバメントから幾弾もの鉛球が飛び出す。

「な、ななな、何言ってるのよ!」

「落ちて着けアリア、ボーイフレンド、すなわち男のトモダチと言う意味ではないか。何を勘違いしている、アホか」

「風穴!」

ダンドンダン!

と撃たれる。45ACP弾が飛んでくる。

俺はさっき間宮が使った業を見様見真似で使い、アリアのガバメントを奪い取る。するとアリアは小太刀に変え、斬りかかってくるが、俺は日本の刃を左手の人差し指と中指で、中指と薬指で二本の刃を受け止める。もちろん保険で指は金でコーティングしているが。

「か・ざ・あ・な」

「こ・と・わ・る」

「おお、キョーくんがハーレム?しかもロリハーレム」

そこに理子が、なぜか理子が現れる。

「こんな物騒なハーレムは要らん。願い下げだ」

「それは別の意味でム力つくわね。だから風穴!」

「お前がどこぞの法師さまじゃなくて良かったよ」

このあとアリアから逃げるのに30分かかったのは完全な余談だ。

The aria continues

対決4 《Confrontation 4》

俺がアリアを振り切つてから15分して強襲科アサルトに戻つてくると、中から物理的質量を持つてもおかしくないほどの殺気ブレスチャーがその場を包む。なかの奴らは皆その威圧感に半泣きでいる。蘭豹でさえ。

ザク、とアリアは床にその小太刀を突き刺し、杖にして体を支える。
「く！……はあ、はあ」

とアリアは息を乱し後退する。

俺はその威圧感を放出している奴にめがけてナイフを投げる、が、左手の中指と人差し指で掴まれる。

――後ろを向いたまま――

そして、さらにゴツツ！と殺気が襲ってくる。

俺は高周波ブレードを構えて駆け、斬りつける。が、それは黒い短剣により防がれる。

「（高周波の刃を、防いだ！！？まさか）暗黒物質！？」
ダーク・マテリアル

ガキーン！と弾かれる高周波ブレード。

「高周波ブレード、いい武器持つてるな」

「そりやどうもッ！」

再びガキイイ！という金属音。

ギギ、ギギギギ！とつば競り合いをしてもその短剣を斬ることはできない。

ならば、と相手の足と手を凍りつかせようとするが、
「『シャットダウン
能力強制終了』」

一言、たったその一言で氷は水になり、元の水蒸気となる。

「ダアアアア！」

俺は叫びながら斬りつける、が、

「『シンクロ
スタート
完全同調開始』」

またも一言、その一言で俺の剣は当たらなくなった。
俺が高周波ブレードを右薙ぎに振れば、相手は、はぎわらげん萩原願は振られた
剣と同じスピードで、同じ距離を、同じ角度に移動する。

平行

平行する2本の線は決して交わらない。宇宙の端から端までの間、
絶対に。今の奴の動きはそれに似ている。

俺が蹴りを入れても、拳で殴ろうとも、決して当たることはなくな
った。

俺は氷で足を止めようとするが、またも一言呟く、『カレンス能力操作』と。
その瞬間から俺の超能力は発動しなくなった。

ピン、と俺は手榴弾のピンを抜く。

手には右手に5個の手榴弾、左手に5個の手榴弾、合計10個の手
榴弾。

オールボム
「全手榴弾」

俺は手に持った全ての手榴弾を空に投げる。

2つは発煙、2つは閃光、2つは響音、2つは焼夷、2つは破砕
そして、全ては同時に爆発する。

辺りは燃え、床や壁には無数の破片が飛び散っている。

が、相手は、萩原願は無傷。

「『コピー模写』」

瞬間、萩原はパチンと指を鳴らすと、炎は一瞬にして収まった。

俺は響音にやられて頭がくらくらする。

負けか。

伊達にFユニット指揮官を務めてる訳じゃないんだな、と改めて思
う。

「おいおまえ、最後の殺す気だったろ」

「生きてたんだから結果オーライだろ。Fユニット指揮官、萩原家
頭首でもいいか。萩原願」

萩原は座り込んだ俺に手を伸ばす。

俺が掴むと、引き上げる。

「まあまあだな。今度は俺に一傷くらい浴びせて見せろよ」
言い終わると萩原は強襲科アサルトを出て行く。

「（クソ、暗黒物質ダーク・マテリアル。厨二なくせにクソみたいに強いな）」

The aria continues

四魂のかげら

次の日 正確には27日 決戦まであと3日

俺がケータイを開くとメールが二件。

武偵高の周知メールだ。

内容は

『デストロイとの戦いに向けて東京武偵高の指揮官が決まった』

画像ファイルを開くと、それは昨日戦った、萩原願の顔だった。

さらにもう一件を開くと、細か……とは言えずとも大体の配置、巡回ルートが示されていた。

「（アリアやキンジ、白雪たちと一緒にか。お、理子も同グループか）」

配置は武偵高へと通じる橋、そこで足止め、あわよくば全てつかまえて知っている情報を全て吐き出させる、とのこと。

メールにはそれしか書いていない。

「（よくこんなんで指揮官が務まるな）」

と、若干呆れながらに思うが実力は確かで、もしかしたらRなのかもしれない。実際R相当の実力はあるだろう、と京助は推測する。

「（しかし、あの殺気はかなりのものだ。戦闘中でなければ俺も蘭豹と同じような顔をしていただろう。そしてあの呟き、『シャットダウン』。あれを呟いたとたん、氷が消えた。『コマンド』。それを呟いたとき、能力が使えなくなった。『コピー』。そう呟いたとき、アイツは俺の力を複成しやがった。そして一番厄介だったのが、『シンクロスタート』。面白れえな、これが終わったら」

バン！と射撃訓練場的に向かつて、45ACP弾を撃ち込む。

「もう一度、戦^やるか。見ている萩原、いや、あえてこう呼ばせてもら^{げん}う。願^{げん}」

またも射撃訓練場に銃声が響く。誰もいない旧強襲科館^{アサルト}で。

「（だが、勝つためには、奴の動く以上のスピードで動く必要があ

るな。どうすれば……）」

こつ、こつ、こつ、と足音が響く。

「お困りのようですね」

その声は低い合成音声。機械的な声だ。

そいつは仮面をかぶってるため男とも女とも老人とも、子供とも分らない。

「何者だ」

「そんなことはあなたが気にする必要ありません」

言つとそいつは手のひらから石のかけらのような物を出す。

「これは四魂のかけら」

「厨二病もそこまでいくと笑えねえな。仮に本物だとしてもそんなものは受け取らない」

俺が銃口をそいつに向けようとした瞬間、そいつは消えていた。奴がいた場所には四魂のかけらと呼んでいた石が置いてあった。

それを放置するわけにもいかず、仕方なしに四魂のかけらを拾う。

チツ！と舌打ち。

結局これは、受け取ってしまったということだろう。

ギリ、と齒が軋む。

その瞬間、俺の中に力が流れ込む。

京助はこの力があれば願を倒せると思った、が、その考えはすぐに捨てた。

「（よく考えろ、なぜアイツは俺にこれを渡した。それは願が邪魔だから。アイツは多分、破壊軍^{デストロイ}。そう考えればつじつまが合う。捨てろ、これを破壊しろ）」

が、身体が思うように動かせない。

「呪いか！小癪な！」

俺は思うように動かせない体に精一杯の力を入れ、手を開ける。そして、手を下に向け四魂のかけらを落とす。

再びバン！という銃声。

そのあとに続くパリーン！と言う音は四魂のかけらが砕ける音。

「白雪を探さなければ……呪いが体に少なからず移ったか。小癩なマネを、しゃ、がつ……て」

バタン、と倒れる体。

音は何回、何十回と館内を反響する。

ピリリリ、ピリリリ

と俺は電話を掛ける。

白雪にだ。

『もしもしきょうくん。なに？』

アサルト

「しら、ゆきか。すぐに、強襲科旧館に、きて、くれ。用救急。どうやら、限界……だ……」

『もしもし！？きょうくん！？きょうくん！？何があつたの？もしもし！もしもし！』

そこで京助の意識は手放された。

京助の意識がなくなってから2分後、そこには狼、正確には『コーカサスハクギンオオカミ』を連れた緑色の髪と瞳を持った女の子が床に横たわり意識を失っている男の傍らにいる。

その女は、レキは『コーカサスハクギンオオカミ』ハイマキに意識を失っている男、雛菊京助を乗せる。

「ハイマキ、星伽の巫女のところまで」

コク、とうなずくハイマキ。

レキは四魂のかけらのかけらを手に取り、ポケットにしまう。

|| || || ||

「う、うう」

「あ、きょうくん、ゴメンね。起こしちゃった？」

「いや、気にしないでくれ」

俺は身体が楽になっていることに気付く。白雪が呪解をしてくれたらしい。

俺は顔を洗いにいくためベットから起きよつとするが、
「あ、だめだよまだ寝てなくちゃ」

と、白雪に静止させられる。

「キンジとアリアは？」

「キンジ？アリア？誰それ？」

なッ！キンジとアリアを知らない、白雪が・・・ありえない。少なくとも忘れているフリをしているようではないが。

「本当に知らないのか、遠山キンジも、神埼・H・アリアも」

「少なくとも私に心当たりはないよ」

バカな、と俺は思う。星伽が、遠山とかかわっていない、それとも、

「白雪、お前の名前は、星伽白雪だよな」

「？ちがうよ。私の名前は、洞木白雪。忘れちゃったの？幼馴染なのに。ヒドイ」

ほらき？幼馴染？何を言っている。

「悪い夢でも見てたの？汗びっしょりだよ。それに病み上がりなんだから」

「……………なあ白雪、ここは、どこだ」

The aria continues

四魂のかげら（後書き）

四魂のかげら、思いつきりパクリですね（笑）

つかめた最初のヒント

は？と俺の問いに白雪は首をかしげている。

「な、まさかきょうくん、記憶喪失？たいへん、お医者様お医者様！」

すぐに電話機に駆け寄る白雪。

「い、いや、そんなんじゃない。そう、寝ぼけてんだアハハハ」

「そ、そう。なら良かった」

「良かった良かった。アハハハ」

時刻は推定午後6時。

まずは状況整理だ、と軽く頭を動かすが、おかしい。

なぜか、思い出せない。思い出そうとすればするほど、あいつらのことを忘れそうで、怖い。

「じゃあきょうくん、今日は帰るね。お父さんたちが心配するし。」

そうそう、明日は学校あるからね」

じゃあまたね、と言って去っていく白雪。

俺は氷を出そうとするが、出ない。

^{ステルス}超能力が、消えた！？否、使えなくなった？

さらに机の中を、ベットの下の、家中を探しても、銃どころか薬莢一つ出てこない。

なんなんだ、ここは。今までののは、夢？それともこれが夢？

答えは、『分からない』だ。

「（まさか、α世界線からβ世界線に、行ったというのか。シユタゲじゃあるまい。だが、αからβに移動しただけでここまで変わるものか。だとすると、これは夢、もしくは、四魂のかげらの呪いに取り込まれた。いかん、記憶が、あいつらの名前が、記憶が消えてきている。3日。それまでに元に戻る方法を考えなければ）」

〓 〓 〓 〓 〓

バタリ、とハイマキは京助の体を地面に落とす。

「京助！？どうしたんだ！おい京助！京助！」

バサバサ！とキンジが京助の体を揺さぶるが、目は覚めない。

「キンちゃん、きょうくんには触らない方がいい。強力な呪いがかかってる。多分きょうくんは、その呪いに意識を駆られてるから目が覚めない。キンちゃん、部屋に運んで！」

わかった！と言ってキンジは京助を担ぐと、部屋に連れて行った。

〓 〓 〓 〓 〓

京助は考えていた。

どうすれば元に戻るか。

が、いくら考えても答えは出てこない。

が、必ずどこかにヒントがあるはずだ。そのヒントを探し当てれば元の世界に戻る可能性がある。

「クソッ、つっても、ヒントなんかどこにあるんだよ。………さて

よ、白雪は居たんだ。否、存在していたんだ。だとすれば」

——キンジやアリアたちも存在していると考えていい——

ならば、今は時を待つしかない。白雪が言っていた、『明日は学校』、ならば学校に行けば何かヒントが得られるはずだ。

〓 〓 〓 〓 〓

「白雪、京助の様子はどうか？」

「だめ、呪いが強力すぎて私一人では力不足。せめて、粉雪がいれば」

白雪は無い物を強請るが、それは全くの無意味。

「あと2日で解けるかどうか」

「そう、でもなるべく急いで」

アリアはそれだけ言って京助の汗を拭く。

だが、その顔には困惑と怒りの色が混じっていた。

それは本当に京助は目覚めるのか？という困惑であり、京助をこんな目に陥れたデストロイに対する怒りの色だ。

〓 〓 〓 〓

次の日

決戦まであと2日

午前8時

「きょうくん、おーはよ」

京助の意識はこの偽白雪と対面している。

今日はこっちの世界での学校らしい。

「ああ」

「ねえきょうくん、今日は転校生が来るんだってさ。楽しみだね、仲良くなれるかな」

……と俺は沈黙する。学校にいけば何か分かるかもしれないが、同時にそれは何も分からないかもしれないと言うのだ。

「（武偵憲章10条、諦めるな、武偵は決して諦めるな）」

「10条？」

「いや、なんでもないんだ。早く行かないとチコクするぞ」

とごまかし玄関から外に出る。白雪は合鍵で鍵を閉めると急ぎながらよってくる。

そういえば、アリアとであつたのも、こんな晴れた日だったな。

俺と白雪は自転車に乗り通学する。そういえば、白雪って自転車乗れたっけ？

白雪を先頭に雑談しながら進めていくと学校に着いた。なぜか分か

らないがちゃんと学校の記憶がある。その代わり、何かの記憶が抜け落ちたような気がするが。

教室に入ると、友人らしき男が寄ってきて話しかけてくる。

「おい京助、大丈夫か？3日も寝込んだんだって？いいなー、その間美人さんに看病してもらえて」

「……………なあ、お前は、武藤だよな？乗り物オタクの、武藤剛毅だよな？」

「ああ？何言ってるやがる。この俺ほど珍しい名前の奴忘れるとは。忘れたなら今一度言おう。俺の名前は、この姓を一一だ」

「なん、だと」

俺は同じ顔の奴を見つけては名前を聞き、違うと言われる。が、みんな名前の原型は辛うじて保っていた。そこで、ハッ！と気付く。唯一原形をとどめていなかったのは、武藤もといーだけ。

そこで鐘が鳴る。

S H R の時間だ。

俺は自分の席と思われる場所に座ると、担任が入ってくる。

「じゃあホームルームかいしい」

それは、綴だった。

「てんこーせー、入ってこーい」

ガララとドアが開き、入ってきた人物は、金色のような亜麻色のツインテールで、紺碧の眼を持った、髪と目の色こそ違うが、それは、アリアだった。

そしてもう一人。

そのもう一人は、キンジと瓜二つだ。

俺は目を見開き、驚愕に身体が震える。

「神崎亜理亜よ。かんざきありあよろしく！」

アリアは向こうとは違い、すごく友好的な態度で挨拶をする。が、反面キンジは

「遠山金示だ」

素っ気も何もない。ただの文。

「じゃーホームルーム終わりー」

綴は心底ヤル気なさそうに告げると、出て行った。

The aria continues

自ら飛び込んだ者

放課後

転校してきたばかりの金示には痣など一つもなかったが、見てみると、顔には3つほどあざが増えている。

殴り合いでもしたのか？と自然に浮かんでくるような痣のつき方だ。反面アリアもとい亜理亜は早速仲良しにでもなったのか、3人の女子と下校している。

皆歩く方向は同じ。

が、いまだつかめたヒントはこれだけ。

俺、アリア、キンジ、白雪

あと、レキはどこにいる。

〓 〓 〓 〓 〓

同時刻

女子寮の一室

カチャリ、とピンセットを置く音。

部屋の中は緋色と緑の光りによって支配されている。

「……………」

無表情なその顔には、どこか希望が宿っていた。

そしてその少女は緋色と緑の光りを発している物体、四魂のかけらをポケットに仕舞い、部屋を出る。

〓 〓 〓 〓 〓

ん？

と俺は異変に気付く。

「（そういえば、今朝から雲が動いていない気がする、否、動いて

いないんだ)」

雲はどんなに風がなくとも動くはずだ。
それが動いていない。

「（まさか、これは俺が望んだ世界？ありえない、こんな世界など）」

そして、なんとなくポケットに手を入れると、そこには京助をこの世界に閉じ込めた物体、四魂のかけらが入っていた。
なぜ？

分らない

「（これが新たなヒント、なのか？）」

「ねえきょうくん、これなあに？」

と白雪が訊いてくるが、分からない、としか答えようがないのでそう答えると、ふーん、と言った感じで話題を変えようとする。

「ねえねえきょうくん。今日の晩御飯何がいい？」

「お茶漬け」

それだけ言うと、再び考え始める。

「（まてよ、さっきまでポケットの中に入っていたか？いや、入っていないかった。なにか向こうであつたのか？）」

〓 〓 〓 〓 〓

「白雪さん、どうですか様子は」

そういつて入ってきたのは江梨とクリスだ。

「……良いとも悪いとも言えない。でも、着々と良くなってる…」

……けど」

「けど？」

「このまま目が覚めるかどうかは、きょうくんの気力次第」

〓 〓 〓 〓 〓

「（まあ、そんなこと考えても分からない。これは鍵か何かだろう
か？しかし、……………まさかな）」

俺はまずこの世界で何をするかを考えると、自然に浮かんできたの
はレキと理子を探すこと。

京助、アリア、白雪は学園にいた。来たとも言えるが。レキと理子
もここにいるのか？

そんなことを考えていると、マンシヨンの前に着き、オートロック
を開けエレベーターに乗り自分の部屋の前まで行く。

「じゃあねきようくん。何かあったら呼んでね」

手を振る白雪は隣の部屋に入っていた。

俺は部屋に入りベランダへ出るドアを開けると、問題は一つ片付い
たらしい。

「貴方を待っていました。京助さん」

ベランダの手すりには、会いたかった人物が一人。

その人物は緑色の髪と眼をもち、武偵高の制服を着た、レキだった。

「レキ……………」

不意に俺の口からそう漏れるのだった。それは嬉しさなのか、安堵
なのか、それとも怒りなのか、口を開いた本人でも分からない。

The aria continues

守りたいもの

ふわり、と音もなくレキは手すりから降りる。

「あとは理子だけか」

「問題ありません。既に峰さんはこちらに着いています」

え？と聞き返す前に扉が開けられる。

その扉を開けたものは、蜂蜜色の綺麗な髪をした武偵。その武偵は髪を自在に操る。その名を

「りっこりんでーす。ゆきちゃん連れてきたよー」

「む、むぐぐむぐむぐ（だ、誰なのこの人たち）」

白雪は理子に髪で口を塞がれているため声を出そうにもうめき声しか聞こえない。

「むぐぐぐん！むぐぐ！（きょうくん！逃げて！）」

「悪い白雪、全く分からん。とりあえず落ち着け」

「京助さん。もう時間はあまり残っていません。まずは――と言う人物を探さなくてはなりません」

「――？ああ、アイツか。……………まさかアイツが扉なのか」
コク、とうなずくレキ。

ついでに理子は亜理亜と金示も髪で口と手と足を塞いでいる。便利だなその髪。

俺がそんな感想を考えると、突如としてハーモニカの音が聞こえてきた。

曲は、

「『ロンドン橋落ちた』なぜこの曲なんだ。……………」

「やっとそろいましたね」

言ってきた人物は、――だった。

「京助さん、四魂のかけらを」

ハーモニカを吹いていたのも、――だ。

「四魂のかけらを、どうすればいいんだレキ」

「取り込んでください」

すなわち『食え』と言うことだろうか。

「おやおや、話の分かるお嬢さんで」

パチン、と――は指を鳴らすと、一つのかけらが三つに分かれる。同時に一も三人に分かれる。

「ここから脱する方法、すなわち、私を取り込むこと」

「私を取り込めば向こうの世界の貴方達は目を覚まします」

「しかし、それは体に毒を入れるのと同じ」

「が、毒と薬は紙一重の存在」

「毒を取り込んでも精神さえ保てば自然とその毒は薬へ変わる」

「保てなければ死ぬ」

死ぬ、か。

ゴクリ、と俺は四魂のかけらを飲み込む。

「笑止、俺はまだ死ねないんだよ！武偵検証二条『依頼人との契約は絶対守れ』！」

突如、ドン！とGと共に浮遊感に捕らわれる。

なるほど、これが毒か。

突如として前からクリスが現れる。

俺は声を出そうとするが、声が出ない。クリスは目の前まで来る。

そして、ガハッ！と血反吐を流す。

クリスが刺したのだ。京助を。

京助の背中から伸びるクリスの腕。京助の中に侵入しているクリスの腕。

履かれた血反吐はクリスの顔を汚す。

腹から永遠とで続ける血。

その血はクリスの服に垂れて行き、服を、足を、その血の色で汚す。再びガハッ！と血反吐を吐く。

クリスは刺さっていた腕を一気に引っこ抜くと、辛うじて蓋になっ

ていた腕を失い多量の血が湧き出る。本来ならば既に死んでいるだろうな。

京助は辛うじて耐えながら倒れないように足に力を入れる。

気付くとクリスは胸まで消えかかっている。

これが俺の残りの精神なのか、タイムリミットなのかは分からないが、何十時間掛かろうと死んでたまるか、と京助は決意を固める。すると、胸まで消えかかっていた身体は、一瞬にして首元まで消える。

クリスはこれで最後だ、と言わんばかりに腕を引き、腰を低く落とし、京助の左胸にその腕を突き刺す。その腕は肋骨を突き壊し、心の臓を突き破り、背中から貫通する。

再びスウッと抜く。

その穴からは体中の血が流れ出る。

常人には到底耐えられないであろう痛みが襲う。

危うく意識を手放しかけるが、何とか保つ。

そして、ついに頭までクリスの身体は消える。

|| || || ||

「……………ッッ!!?…………ハア、ハア、ハア!」

バサリ、と落ちる掛け布団。俺の口からは血が一筋流れているだけで胸に穴などは開いていない。

「き、きん、きんちゃん! きんちゃん早く来て! きょうくんが! きょうくんが目を覚ました!」

ダンドンダンドン! と音を立てながら金示、ではなくキンジが走ってくる。その隣にはアリアも。

「京助!」

キンジは俺を見るなり狂ったように笑い出す。

「アリア、今はいつだ!」

「今は30日0015。病み上がりで悪いけど、京助、戦ってもら

うわよ」

ああ、と答えて俺も笑い始める。

ボタン！と突然のドアの音。

「先輩！」

「京助さん！」

入ってきたのは江梨とクリス。もちろんクリスは半透明でもない。

「いよっ！」

「『いよっ！』??」

ブチリ、とクリスの中で何かが切れた音がした。

「『いよっ』っじゃないでしょ！」

クリスは涙目になりながら俺の襟首を掴み、思いつきり引つ張る！

「あんたね！人が！人がどれだけ心配したと思ってるの！！！」

「あ、ああ悪い」

「『ごめんなさい』でしょ！」

「ごめんなさい……………」

その瞬間、キンジ、アリア、白雪、江梨は笑い始める。

「よろしい」

その刹那、

ダアアン！！！！

と爆発が起こる。

どうやら戦闘と言つものは俗に言つ『KY』と言つやつらしいな。

「みんな、開戦だ」

俺は起き上がり、みんなC装備に着替える。

着替えている途中に俺は考える。

なぜ、戦うんだろうな、と。

それは人によりきりだろうが、少なくともこれだけは言える。

俺は、守りたいもののために戦うんだ、と。
守りたいものとは何か？それは人であり、物であり、居場所であり、
何より絆であり、仲間だ。

ガチャリ、とガバメントのスライドを引く。
そして、ありったけの武器を装備し、いざ、戦場へ。

The aria continues

開戦〈The outbreak of war〉

遼を降り、玄関前では理子とレキが待っていた。

俺たちは円になってお互いに向き合う。

「健闘を祈る」

ガン、と腕を円の中心に突き出す。

「お互いに、な」

キンジは自らの右腕を突き出し、俺とキンジの拳を合わせる。

そして、みんな腕を突き出して、うなずく。

〓 〓 〓 〓 〓

俺の配置は武偵高への陸路の一つ、橋だ。

が、

「まさか、Eランクが来るとはな」

「あたしだって、来たくなんか」

「ごちゃごちゃうるさい」

Eランクとは、間宮あかりだ。

「俺からお前に言うことは一つ、死ぬな！これだけだ」

そしてもう一人はAランクの不知火。

「不知火！俺はできるだけ間宮に近づけないようにする！お前はお守りを頼む」

了解、いつものスマイルでにこりと笑う。

そして、来た！

俺は『バーサーカー殺人狂』としての能力を90%ほど開放。

地面に両手を着き、その地面からは数多のナイフ、剣が出てくる。

「無敵の5番隊！イクゼエエエ！ガキ共に怯むな！ぶっ殺せエエ！
！」

敵の先頭にいる奴の叫びと思われる。

武器は斧だの剣だのと基本的に接近が多い。

俺は数多のナイフ、剣を投げ、不知火はソーコムでの確に打ち込み、
間宮はUZIで弾幕を張っている。床においてある弾倉はマガジン
が持つてきたものだ。

チツ！と舌打ちしてから俺は薬を飲む。

その薬は超能力を一時的に強化する特殊なものだ。
ステルス

敵の群れの上に大量の氷柱を生成し、それを落とす。

何人が死んだかもしれんが、諦めな。

〓 〓 〓 〓 〓

始まったな、とキンジは考える。

ガシヤリ、ガシヤリと金属のこすれる音。

キンジはあらかじめ萩原から送られてきたメールを開き、成った。

「はあ、やっぱり知っていたか」

「キンジ！気を抜かないで！奴は、相当できるわよ」

ガシヤリ、ガシヤリ、と霧の向こうから敵が見える。敵数は一人。

が、その格好が異様だ。

鎧に兜に鬼の面。それに日本刀。

まるで武將じゃないか、とキンジは思う。

〓 〓 〓 〓 〓

理子とジャンヌは一步後退し、背中を合わせる。

「理子、お前は右半分を、私は左と舌をやる」

「わかった」

ガン！と振るわれる長さ3メートル、重さは軽く一トンはあるであ
ろう金棒が振るわれる。

「ゲババババ！あのガキ共がいらないか、好都合だゲババババ！」
「フ、3代前は引き分けたが」
「今の私たちは勝つ、ブラド」

|| || || ||

「さて、そろそろ始めるか」
一振り、その一振りで誰もが怯むであろう殺気を放つ。
そして、敵軍はは一步後退する。

萩原願は脳内イメージでアレをああしてああすることを妄想し、成る。S・HSSに。

一瞬、一瞬で20メートルはあろう距離を詰め、先頭の3人を切り倒し、倒した人間を掴み、別の人間に投げ、その人間が倒れ後ろの人間が倒れる。ドミノが完成した。

「クッソ！やつちまえ！」

空から降ってくる無数の炎、氷、真空波、雷、が、それらの超能力は暗黒物質ダークマテリアルの前には意味をなさない。

「『強制終了』」
シャツダウン

呟いた瞬間、全ての超能力は消える。

願は背中に収めていた日本刀を抜き、地面に刺す。

「『絶』！」
ぜっ

呟きさらに日本刀を深く差し込み、ガン！と日本刀を中心に蜘蛛の巣状にひびが入る。そして、端が落ちる。

願は落ち行く瓦礫や人間を足場に武偵高に戻っていく。

戦争は、始まった！

T
h
e

a
r
i
a

c
o
n
t
i
n
u
e
s

断ち切った過去の因縁

ゲババババ！

と、ブラドの笑い声が響く。

「4世、やはりお前のいるべき場所は檻だ」

4世、その言葉に理子は反応する。

「黙れ！私のいるべき場所はここだ！檻がお似合いなのはお前だブラド！」

「ああ、私も同感だ」

二人は互いにうなずき、笑みを浮かべる。

理子とジャンヌは接近し、ジャンヌはデュランダルで左肩と下を狙う。理子は髪に6本、両手に1本づつナイフを持ち、その全てを使い右脇腹と右肩を狙う。

そして、全ては同じタイミングで狙った場所に刺さった。
3ミリだけ。

「なッ！？」

「そんな！」

大きく振るわれるブラドの腕。

その腕に理子とジャンヌは当たり2方向に吹っ飛ぶ。

「グッ！」

とうめき声をジャンヌが上げる。

「ゲババババ！所詮お前らはこの俺には勝てない！ゲババババ！」

が、ジャンヌと理子は立ち上がる。

もう一度！と胸に決意を固めて。

そして、再び駆け出す。

「ハアアア！」

振るわれるデュランダル。

ブラドはそのデュランダルめがけて金棒を振るう。ガン！と言う金属音。ジャンヌはその衝撃に耐え切れず後方に飛ばされ、橋の鉄骨

に当たる。

「ジャンヌ！ウグッ！」

ブラドは理子の髪を掴み放り投げる。

地面に3回ほど叩きつけられてやっとなまる理子。が、10メートル以上飛ばされたため、かなり傷ついている。

それでも理子は立ち上がる。傷つきながらも、初代の無念を断ち切るために。

ジャンヌはデュランダルを支えに体を持ち上げ、そして、笑う。

この笑みは決してジャンヌが戦闘狂だからではない。

「私たちの、勝ちだ。ブラド！」

「アアン！？」

ピキ、ピキとブラドの足が凍りつく。その氷は温度が人間の体温とほぼ一緒の温度の氷。

そして、その氷がブラドの足全体を覆い、やがて胸まで到達する。

「なんだあ！？」

「ある奴が言っていた。雄魚ポーンも頑張れば成長プロポーションし、やがてはクイーンに成ると」
強力な武偵

ガキ！と人体と同じ程度の温度の氷が、一気にマイナス点を下回りブラドの魔臓を凍りつかそうとする。

理子はワルサーP99を舌に標準を合わせ、銃弾が飛ぶ。

「終わりだ、ブラド」

ジャンヌは右腕を左斜め下に、左腕を右斜め下に振り下ろす。

その瞬間、氷はブラドの魔臓を貫く。

「なぜだ！なぜだ！なぜだなぜだ！なぜこの俺が、貴様らのような下等生物などにイイイ！」

ブラドは言い終わると、白目をむいて顔を伏せる。

魔臓は舌を含め、完全に機能を失う。もう復活することもないだろう。

ジャンヌと理子は互いに向き合い、パン！と手のひらと手のひらをあわせ頷く。そして、腰を下ろした。

T
h
e

a
r
i
a

c
o
n
t
i
n
u
e
s

変態伯爵

散らばるのは無数の武器と呻く人間。

ステルス

「やれやれ、まさかこんな大っぴらに超能力を公開するとは。全くばかげた話だ」

ステルス

「へえ、雛菊君は超能力も使えたんだ」

「知らなかったのか？おっと、第二派だぞ、気を抜くな」

刹那、シユン！と音を立てて俺の頭のあった空間を切り裂くナイフ。俺はナイフの飛んできた方向に向かって氷柱を飛ばすが、避けられた。

「せっかちな男は嫌われるヨ」

へえ、最初に手を出してきたのはどのどいつだよ、と口を開こうとしたが本人の言葉によって遮られる。

「尤も、最初に手を出したのはボクなんだけどネ」

またも投擲されるナイフ。

俺はそれをたやすく躲そうとするが、軌道上には間宮がいるため、下手に躲せない。

ならばと思い高周波ブレードで切り落とす。

「姿を現せ！それとも、怖いか？」

「フツ、どうも武偵はせっかちでいけないネ。でも、お望みどり姿を見せることにするヨ」

カツ、カツ、と近づいてくる足音。

そいつは整った顔をしていて、昔のヨーロッパ辺りの貴族が使っているような服を着、髪の色は金髪で腰にはレイピアが下げられている。見た目で言うならば、伯爵。

「ボクはどうもテッポウは好きじゃなくてネ」

「鉄砲か、いつの時代の人ですか？」

「そうだね、21世紀の人間だね。生まれは20世紀だケド」

「それは長生きなことデッ！」

俺は瞬時に駆け寄り高周波ブレードで切りかかるが、サラリと躲される。そして伯爵は間宮に駆け寄り、手をとった。

「おお、なんと美しい。そのモンブランのように美しくサラリとしていて細い栗色の髪。アメシストのように引き込まれそうな眼、女の子らしく笑ったら誰もが振り返りそうなその顔、ボクは、いや、私は一目ぼれしました！」

その場全員が凍りつくような台詞を発した伯爵は鳩が豆鉄砲食らったような顔をしている俺達には気づかずとんでもない発言をする。

「結婚してくレ」

アホだ、何なんだこの伯爵は。

「あの伯爵よ」

ギョリ、とにらまれる俺。敵だからってのは分かるが、なんか、ごめんなさい。

「なんだネ？ボクは今ポーズで忙しいんだ。邪魔しないでくれ」
いや、そういう問題じゃなくてですね…………

「……………そもそも前敵だろ！」

「恋に敵も見方もナスビも猫も関係ないヨ。それともキミは人の恋路を邪魔するのが趣味なのかネ？なんともいやな趣味ダ。大丈夫だヨ。ボクなら必ずこの娘を幸せにできる」

なんだろっ、なぜか凄い正論な気がするが、多分正論じゃないよな。

「ひ、ひ、ひい、せ、せんぱ、い」

当の間宮はと言うと、まあ当然の如く怯えているわけだが、

「伯爵よ」

「伯爵じゃないケドみんなそう呼ぶからいいヤ。で、なに？」

「戦^やる気は？」

「無イ」

なんだろうかこの脱力感は。

「わかった、邪魔さえしなければ間宮の隣にいてもいい。ただし、変な気は起こさないほうがいいぞ」

「そうか。この娘は間宮ちゃんと呼ぶの力。下の名前も教えてくれるかい」

がら、がら、と奥のほうで氷が動く。

「デメエ、裏切りやがったか」

「裏切ル？もともとキミ達のような者の仲間になった覚えは無いケド。間宮ちゃん、少しここで待っててネ」

伯爵はナイフを投げようと構え、俺が静止する。

「伯爵、人を殺す男は嫌われるよ」

そうなの？と首をかしげ、ナイフを投げる。が、そのナイフは足に刺さり敵は倒れ付す。

「伯爵、お前は面白いな。どうだ、武偵高の教務課にでもならないか？」
マスターズ

「ん？間宮ちゃんと一緒のクラスになれるなら」

ビクッ！と背中に悪寒を覚える間宮。

その顔は既に泣きそうだ。

いや、泣いた。

その後不知火が慰めても泣き止まなかったと言う事実は背間話にもならないほどの余談だ。

The aria continues

武者VS雷をまといし者

振り下ろされる刀

その刀は整備されていなく所々錆や刃こぼれがある。

その刀をアリアは間一髪で躲す。

アリアは躲しながらガバメントを放つがその弾は全て弾かれる。鎧によって。

キンジはムラサマ・サスクで降りかかるが鎧武者は振り向きざまにムラサマ・サスクに刀を当て、持ち前の馬鹿力でキンジを吹っ飛ばす。

その鎧武者は一步前進するたびに、ガシャリと音を立てまるで死期を近づかせるかのように物理的に近づいてくる。

一言で表すなら、『恐怖』

奴は歩く恐怖。表情も見れず、言葉も発さない。

銃弾は鎧に弾かれ、刀は刀で相殺させられる。

アリアは接近しながら45・ACP弾を放つが、全ては鎧の防御力により弾かれる。

キンジもベレッタをフルオートで撃つが、やはり弾かれる。

電気さえあれば……とキンジは考えるが、当然の如く電気など出てくるわけがない、
はずだった

「ピンチみたいだね」

そこに現れてたのは、銀髪で銀の瞳を持ち、一本の日本刀を持つ青年。

その青年は武偵高の制服を着ており、微弱ながらも体から電流を発している。

「ま、ここは俺に任せて」

バン！と彼が下げていたFNブローニング・ハイパワーから銃弾が飛び出し、鎧を打ち砕く。

アリアとキンジが傷しかつけられなかった鎧をいとも簡単に。

そして、武者は刀を捨て、鞘から別の刀を抜く。

その刀身は今までの刀とは比べ物にならないほど研ぎ澄まされていて、錆どころか刃こぼれ一つ無い片刃剣。

そしてついに武者が口を開く。

「我……………名……………偽恐」

「俺は成瀬レインハート」

偽恐は刀を頭の隣に刀身を横にして寝かせるように構える。

レインは剣先を偽恐の眼に向けるようにして構える。剣道で言う中段の構え。

「いざ」

「尋常に」

「「勝負！」」

偽恐はこれまでに見せた移動とは比べ物にならない速さでレインに肉薄し、首元から一気に切り落とすべく切りかかる。

対しレインはそれを何事でもないかのように剣を滑らせ受け流す。

偽恐は受け流された刀を半回転させ刃をレインに向け、そのまま斬りつける。

が、レインはさらにそれを受け流し自身の持っている刀で斬りつける。

偽恐もその斬撃を籠手で受け流し、ひざで蹴りつけるもレインは右にワンステップして回避、同時に左足を偽恐の足に絡ませ転倒させようとするが偽恐は刀を振り下ろす。

レインはその斬撃をしゃがんで躲し、自身の能力、すなわち超能力ステルスの雷を纏った拳を鎧に入れるが、偽恐はものともせず右足でレインを蹴りつける。が、レインはバック宙で回避と同時に距離を取る。

即座に偽恐は切りかかるが、レインは自分の刀でその刀を斬る。その刀身は紫に光り、細かく振動している。電気を利用した即席高周

波ブレード。

偽恐はその刀を惜しみなく捨て、右足でレインを蹴りつける。その足に当たったレインは少し呻くがなおも戦闘は続く。

ここまで約一分の攻防戦。

もはや人の域を超えている。

偽恐は籠手で覆われた拳でレインを殴りに掛かるが、レインはそれをしゃがんで回避。同時に地面に手を着き足を持ち上げ蹴りつける。偽恐は紙一重で回避し、立ち上がったレインに足払いを掛けるもレインは地面に刀を刺し、その足を静止させる。

さらに刀を抜き、そのまま偽恐に斬りかかるが、偽恐は籠手でその刀を掴み持ち上げることでレインを中に浮かす。

この瞬間レインは勝ったと確信する。

レインは指を偽恐に向け、叫ぶ。

「『雷砲』！」

レインの指からは電気の弾が放たれ、偽恐を感電させる。そして、偽恐は動かなくなる。

勝者、レイン

The aria continues

死の舞踏会

今の東京武偵高で銃声が止むことはない。同時に、悲鳴も止むことはなかった。

萩原願は海を眺めている。

正確には武偵高に乗り込んで停泊している小船を。

いやな予感がする。

そう思ったとき、願は既にS・HSSに成っていた。
なぜか？とは問うまでも無いだろう。敵が来たからだ。

「私の相手は貴方ですよ？つまらなさそうな男」

金髪で、いかにもどこぞのお嬢様風の女が立っていた。

武器は見る限り戦扇のみ。女はその戦扇で自らの顔を仰ぐ。

「まずは自分から名乗り出るものじゃないか？」

「あら、紳士な男の人は女性より先に名乗るものよ」

やりにくい、それが願のこの女に抱く感想だった。

「まあいいわ。教えてあげるから光栄に思いなさい。私の名前はオルコット、オルコット・リディア・アイス」

「萩原願」

願が虎徹を抜いたとき

「ちょっと待ってください。さっきお食事をしたばかりでまだ口紅を塗っていませんでした」

オルコットがポケットから口紅を出して自分の口に持っていこうとした瞬間、願はとっさに避ける。

「死の口付けか」
キス・オフ・デス

「あら、よく知っていること。でも残念ね。今ので死んでいれば苦

痛を味わうことは無かったのに」

言い終わると同時、オルコットは走り出す。

早く、速い戦扇の攻撃。

が、願には意味をなさない。

S・HSS通称、『二乗のヒステリア』

願は虎徹で空を切る。その空は引き裂かれ、真空波になりオルコットに飛んでいく。

オルコットはそれを右に一步ずれて躲し、同時に線扇で願を斬りにかかる。

シユン！と真一文字に一線。願は後ろに一步ずれて躲し、オルコットは後ろに飛び距離を取る。

「掛かりましたね」

ドン、と願の身体が寮にぶつかる。

「さあ、舞踏会の始まりですわよ」

オルコットは戦扇で空を仰ぎ、舞う。仰がれた空は真空波となり願いに幾度と無く襲い掛かる。

願は避けているものの、右頬と左肩に掠る。

そして、その舞も止まることはない。

「楽しい舞踏会、もっと私のために踊りなさい。踊り疲れ、倒れたときが貴方の最後ですわよ」

願は避け続けるも、多少の傷が着いている。が、願は隙を見て虎徹を振るい、真空波を飛ばす。空気と空気がぶつかり、すり抜け、オルコットは願の右目に向けて真空波を飛ばし、願は左目に向けて真空波を飛ばし、互いに届く直前に紙一重で躲す。

願はXD-9でオルコットの線扇を狙うが、当然の如く躲される。

「（チッ！埒があかねえな、そうだな。アレをやってみるか）」

不意に願の動きが止まり、襲い掛かる真空波。

が、その真空波は願をすり抜けた。

今の願の頭にあるのは、一撃で決めること。

そして、願は更なる高みに成った。

C・HSS通称『三乗のヒステリア』

願は真空波をいったん眼にも留まらぬ速さで避け、また同じ場所に同じポーズで戻る。

「なっ!？」

オルコットは一瞬驚愕に怯むが、それが命取りになった。願は一瞬の内に距離を詰め、戦扇向かって虎徹を振るう。戦扇は粉々に碎け散り、崩れる。

オルコットは新たな戦扇を出そうとするが、その前に願の虎徹がオルコットの首に回る。

「私の、負けですね」

ドン!と願は首を殴りオルコットを気絶させる。

The aria continues

音の無い攻撃

「タアン！と撃たれる銃弾。」

「私は一発の銃弾」

再び狙撃銃の、ドラグノフ狙撃銃の銃口から弾丸が飛び出る。

「銃弾は人の心を持たない」

「タアン！とまた銃弾が放たれる。」

「故に、何も考えない」

「タアン！と4回目の狙撃。既にレキは4人の敵を狙撃して倒している。」

「ただ目的に向かって飛ぶだけ」

そして、5回目。

一撃必殺、これが狙撃による最も有利な利点だ。

レキは百発百中。一撃で人を殺めるそれが、すべて当たる。

飛んでいった銃弾は敵軍の肩に当たり、それが致命傷となってその人間は地に伏せる。

突如後方の、正確には狙撃科部隊スナイプが配置されているレキとは別のビルが爆破される。

レキはハッ！として屋上に上るドアに向く。

そこからはコツ、コツ、と足音が上ってくる。

そして、ドアが蹴破られる。

「あゝあゝ、たつくよ、んなたつけー所に居んじゃねえよ。階段のぼんのメイドイからよお」

その人間は黒い髪の波を打つ剣を肩にかたげ、ショートパンツにTシャツという戦場の銃弾など石ころ程度にしか思っていないような格好である。性別はどこから同見ても女で、左腕が無いと言う異様な敵だ。

レキは無表情でドラグノフを向け、引き金を引く。

が、相手は余裕でその弾を躲す。

「おいおい、反抗せずにさっさと死んでくれればこっちとしては楽なんだからさ、つーわけでさっさと死んでくれ」

が、レキも易々と自らの命をくれてやるほど人生に飽きてはいない。再び後ろの階段がカツカツと音を立てる。

二人眼の敵か、仲間か。どちらにしろ今の戦力から見て不利なことには変わらないだろう。

そして、二人目の頭が見え始め、ついに上り終わる。

「おいおい、何でこんなところに風帝がいるんだよ。聞いてねえよこんなこと」

と風帝こと隼は無言でドアから出てくる。

刹那、目にも留まらぬ速さで敵を掴み、屋上から宙に放り出し自らも飛び降りる。

そのまま地面に叩きつけられれば即死、運がよければ植物人間だろう。が、そんなことにはならない。レキから見れば二人ともプロ、それ以上とも取れる。

隼は自身の超能力^{ステルス}、風を使い、着地によるダメージを和らげ、女はワイヤーを使い隣の寮のベランダにぶら下がる。

「おいおい、いきなり掴むなよ。それともお前は出会った女を片っ端から陵辱する趣味か？ おお気持ち悪。吐き気がするから死んでくれ」

「……………」

女は波打つ剣を隼に向けて接近し振り下ろすがいとも容易く躲される。

そして、はっと気付いたときには隼は既に回り込んでいた。

隼は日本刀を抜刀し、そのまま斬りつける。グッ！とうめき声を上げるがそのうめき声も風の音にかき消される、切断される女の親指。隼は日本刀を鞘に戻さず居合いの構えを取ると、3回風を切る音が鳴り、その回数だけ女の指が切断される。

「うガアッ！…………ッ！」

が、隼はもてあそぶかのように手の指全てを切断していく。
3秒後には女の手の指は全て地面に落ちていた。

「デメエ、よくも」

「……………」

そして最後にシュン！と音を立てて女は倒れる。

周りには血が広がっていた。このままでは間違いなく死ぬ。

が、風帝と言えど腐っても武偵だ。隼は袋から薬を取り出しそれを
飲ませる。

仮死薬

どうやら隼は女をそのまま殺す気は無いらしい。

The aria continues

対人用メタルギア

窓の外で武偵高の制服を着た男子が倒れる。

それを蛇は建物の中に入れ、上に布をかける。

「今の話は本当なのかオタコン」

『うん、間違いないと思う』

「そうか」

蛇は齒に力を入れ、自らに気合を入れる。

「これより任務を開始する」

蛇はガバメントを構えながら呟く。

盲点と言うものは恐ろしいものだ。

そこにあるのに無いように見える。

仲間に裏切り者がいても気付きにくい。

裏切るものは裏切られるものの気持ちなど分らないであろう。

この蛇は市街地や施設への侵入を得意とする蛇だ。

武偵高での活動は蛇にとってはさして難しいものではないだろう。

予め地図を把握し、隠れ場所なども決めている蛇にとっては。それに仲間も多い。

『スネーク、それともう一つ最悪の情報だ』

「なんだ」

『この戦いに、メタルギアが投入される』

「何！」

『対人用メタルギア、月光。気をつけて』

ブチリ、と切られる無線。

蛇は苦い顔をする。が、メタルギアの破壊に付いては『フィランソロピー』の専売特許である。

故に、スネークは対処はできる。しかし、武偵たちはどうだろう？
馬鹿でも分かる。確実に殺される。

スネークはガバメントを手に持ち、建物から首だけを出し周りを見
回す。

数人の敵と武偵が銃撃戦を繰り広げているが、スネークにはやるこ
とがある。

裏切り者を見つけ出し、抹殺すること。

ガチャリ、とガバメントのスライドを引き、スネークは物陰から物
陰に飛び出す。

遠くから聞こえるモー！と牛に似た声が聞こえる。

|| || || || ||

願は気絶させたオルコットを縄で縛り、たたき起こして軽く尋問を
している。その尋問の怖さはされたことには無いものには分かるま
い。

「目的はなんだ？」

3度目の同じ質問。そろそろ願がキレるころだ。

「わたくし、たちにしら、ひつ、されてるのは、ここをみなごろ、
しにしろ、と言うことだけ、ですわ」

ついでに今のオルコットは半泣きだ。なぜかは、あらかた察しがつ
く人が多いだろう。

「ほかには？」

「う、うう、うううあ」

「ほ・か・に・は？」

「もう、これ以上、知らされて、ません、の」

余談だがオルコットが縄で縛られているのはそこに縄があったから、
と本人が言っている。

その姿は腰から上は縄で縛られていて、これを解いたらクラッシュ・シンドロームを起こしそうなほどキツイ、とオルコット本人が言っている。

願は背中から出した縄の一部を持ち、尋問科^{ダギョウ}まで引きずろうとしたが、せめて自分で歩かせてくれと言うことにより願の前を歩かせた。当の願はと言うと靈感のある人なら殺気のオーラが見えるんじゃないかというくらい殺気を出している。それと対等とは言えずともある程度交信を取れるオルコットは少しは凄うだろう。

それに願から逃げることは不可能なのだ、たとえ

「胸に縄が、きつくて」

「だから？」

色気を使っても。

月光《Moonlight》

京助たちにもモーと言う牛に似た音は届いていた。

「へえ、もう投入された力」

伯爵は呟く。

「投入された？何がですか」

不知火が食いつく。

「僕達の間でハ、そうだね、『ムーンライト』と呼ばれてイル対人用メタルギアだよ」

メタルギア、核発射用ではなくて対人用か、これは拙いな。

「伯爵！そのことを詳しく教える！」

京助が伯爵の胸倉を掴んだ瞬間、地面が揺れる。

「来た力」

遠めに見ただけでもこちらに二足歩行で歩いてくる物体は高さは5メートルほどあり、頭部にM61バルカンと装甲前部にはM60がそのM60を挟むようにM4がつけられている。

「化物かよ」

それが5体、本格的に拙いなと京助は思う。

「なあ不知火、どうやってアレ壊す？」

「わからない」

そうかよと返事をし俺はRPG7を橋の中から取り出しメタルギアに向け、放つ。

弾はメタルギアの一体とぶつかる的同时、轟音を上げ爆発する。

「やったか」

「どうだか」

その言葉と同時、俺は驚愕した。

その爆炎の中からはモーと低い牛の声のような音が混じって聞こえる。

即ちメタルギアは依然生きていることを意味する。

「おいおい、マジかよ。勘弁してくれ」

俺が言うとメタルギアの全ての銃口が俺に向く。飛んでくる全ての銃弾を防ぐことは不可能だと覚った京助は錬金術で小型の隠れ穴を人数分創り皆隠れる。

「伯爵！弱点とか無いのか！？」

「弱点かどうかは分からないけどアレの足は生物だとか何と力。憶測だけど足を狙ってみたラ？」

「そうかい。それはどうも」

そして、突如敵機の一体が動きを止める。

『雛菊さん』

レキからの無線通信だ。

『赤く光っている部分がセンサーです』

ブツリと切れる無線。

簡潔に言うことだけ言うつてのがレキらしい。

「じゃ、あいつらぶつ殺してくるよ。不知火は隙を見て援護よろ。」

間宮は顔を出すな、伯爵の影にいる限りは少なからず物理的には安全だと思っがな！」

ガッ！と穴から飛び出す。

その手には高周波ブレードと高周波ナイフのダブル。

京助の眼は確実に殺人を楽しむものの目。

「能力開放100パーセント、ってな！」

|| || || || ||

ガン！と音を立てて輸送機から投下された月光が着地する。

「やれやれ、またこんな忌々しいものを量産しやがって。相手するこつちの身にもなってみろ」

「まあ、ムリでしょうね。そこまで人間のことを考えるならこんな事にはならなかったはず」

炎帝ことガイエスの愚痴に空帝である輪廻が返す。

カツ、と音を立ててガイエスは立ち上がる。ガイエスの右隣には水
帝ジョン、地帝奈落、左隣には隼と輪廻がそれぞれ立っている。
「さて、戦^やるぞ」

ガイエスが言うと同時に、皆はばらばらの方向に散らばる。

T h e a r i a c o n t i n u e s

降ってくる雷

ダダダダ！ともはやダー！にしか聞こえない銃声が宙を舞う。その銃声は日本刀に触れたかと思うとビデオの逆再生の如く銃口に戻っていくが、銃身にたどり着く前に弾は同じ銃弾により砕け散る。レインは飛び、月光の上に乗ると同時、日本刀『五月』の一つ、『水月』を頭部に差し込み一体破壊。

さらに愛銃『FNブローニング・ハイパワー』ことブローウを引き抜き迫ってきた月光に向け、自らの能力を使いローレンツ力を加え発砲、月光の頭部を粉碎する。

キンジはベレッタをフルオートで月光部隊の足を狙い撃ち込むが、月光は一時的に体制を崩しすぐに立ち上がる。

アリアは辛うじて銃弾を避け、時にガバメントで頭部と脚部の連結部分に攻撃を加え、時に足を撃ちバランスを崩させる。今のアリアの実力ではサポート程度しかできないのだ。

「キンジ！頭と足の連結部分を撃ってみて！もしかしたら倒れるかも知れない」

「わかった！やってみる！」

アリアの言葉にキンジは返すと、手にD・Eデザートイーグルを持つが、嵐のように飛んでくる銃弾を掻い潜り、狙った一転を集中攻撃するのは不可能に近い。

そして、飛んできた一発がキンジの足に当たりキンジは倒れる。

「雷砲！」

突如放たれたレインの雷は月光を包み込み中の回路を焼き斬る。

「すまん、助かった」

「それより、あと30体はあるぞ。一体どこからこんなもん」

バツとレインは右方向に動き、キンジは左方向に動く。

キンジとレインのいた場所には小さなクレーターが開き、砂埃が舞

う。

当然のことだが振ってきたのは月光の一体。

レインはその月光めがけ水月を振るう。刃の無い刀はいとも簡単に月光の足を斬り、バランスを崩した月光は地面に倒れ付す。

キンジは倒れた月光に乗り東部のM61を敵月光に向け、すぐに飛び降りその場から遠ざかる。

1秒後、その月光は爆発し塵になる。

「自爆方!？」

「キンジ!アリア!いったん退け!」

「でもお前は」

レインは笑うとキンジとアリアが持っている鉄と武偵高側にある鉄に電流を流し、キンジたちを強制的に退かせる。

「大丈夫だ、問題ない!」

レインは言いつと、身体を紫の電流が奔る。

雷神化、彼はそう呼んでいる。

「それと、退いてくれないと俺が巻き込んだやうだよ」

レインは水月に電流を流し、擬似高周波ブレードにし、自身は音速以上の速さで距離を一瞬で詰め、刹那月光の頭部が真一文字に斬れる。

月光部隊はレインに標準を合わせようとするが、常に音速以上の速さで動いているため捉えられない。

さらにレインは近くにいた月光を水月で切り上げ一刀両断。その月光からM60を奪い取り他の月光に向けて電磁加速を使いながら弾を頭部に撃ちこむ。その弾は頭部を貫通し粉碎する。

が、発生された熱でM60自体が溶けていく。

レインは自身に被害が及ぶ前にM60を捨て、再び水月を構える。その刀身は月光の右足に深々と刺さり、やがては貫通しそのまま切り裂く。月光はバランスを崩し倒れ付す。

そして、レインは自身の愛銃『ブロー』を天に向けトリガーを引く。

「『雷雨』!」

雷雨

ブロウから幾弾もの弾が放たれ、それが空中で散布、磁力で地面に叩きつける技

空に向かった弾は地面に向かい軌道を変える。

その弾は月光の頭部を打ち抜き砕ける。

「種は撒き終わった、あとは種を開花させるだけだ」

言い終わった刹那、レインを中心に電流が蜘蛛の巣状に奔る。

「『雷花』！」

月光の頭部と地面に落ちている銃弾、その全てがレインの周りを花のように囲む。

そして、その全ては一度上空に舞い上がり音速以上の速さで全ての月光に降り注ぐ。

飛び散るのは破片

飛び散るのは月光の血のようなオイル

飛び散るのは砕けたコンクリートの欠片

その中で月光が一体のみ生き残った。それは自爆方。その月光はレインに向かって猪のように走る。

しまった、と思ったときには時既に遅し。

レインはブロウで撃ちこむが、爆発する。その爆風と熱にレインは包み込まれた。

The aria continues

死にたくない

外で銃声が聞こえる。

その銃声は悲鳴と共に近づいてき、通り過ぎていく。

自分は何もできない

彼女はそう思い^{しやへ}蹲る。

が、彼女も実力的にはBランク。ぎりぎり戦力になるかならないかのラインである。が、訓練ではAランクの武偵とは何度も戦い負けている。加えて依頼^{クエスト}も簡単なものしか受けてはいない。銃撃戦などもつてのほかだ。彼女は不意打ちくらいしか芸が無い。あの刀が無い彼女は

自分は、守ってもらうしかできない

確かに彼女は決意した。

自分の手で誰かを守りたいと。

実際は隠れて隠れて逃げて、5分ほど前にも敵に見つかって逃げて、振り切って隠れて、目の前で武偵が脳みそをコンクリートの上にぶちまけて。

死にたくない、でも

でも、自分は生きていていいのか。

彼女は過去に幾度となく人を殺め、首を跳ね、心臓を刺し、時には赤子をつぶし、時には老人の食べ物に毒を塗り人を殺した。そんな自分が、生きていていいのか。

彼ならなんと言うだろうか

彼なら、「生きる」と言うだろうか。

分らない。「死ね」と言うかもしれない。

でも、「生きる」と言ってほしい。

それは我が儘なのかもしれない。人の命を奪っておきながらこんなことを思うのは、許されることではないのかもしれないと彼女は考える。

自分は、死ぬべき人間なのだろうか

彼は「そんなことはない」と言うだろうか。自分はそう言ってほしいと願っている。

彼とは1ヶ月ほど一緒にすごしてきたけど何も知らないことを彼女は思い知った。

自分はやはり死ぬべき人間だろうか

でも

「生きたい、死にたくない」

ポツリと涙が垂れる。

そして呟く

ごめんなさい、ありがとう、と

The aria continues

死にたくない（後書き）

慣れないシリアスを慣れないなりに頑張って書きました。

能力開放100%

飛び散るはオイル、オイル、オイル、オイル。

そのオイルの中には血や塵、コンクリートの破片など、月光による攻撃でできたものがほとんどだ。

「アハハハは！ヒyahハハハ！」

その中で戦いを、否、破壊を楽しんでいるものがいた。

自分が銃で打たれようと足をもがれようと、彼は破壊を、殺しを楽しむだろう。

彼は、雛菊京助は破壊を楽しんでいる。何かを守るために破壊し、殺し、また失う。

以前もそうだった。

彼は以前イ・ウーにいたとき大切な部下を、仲間を失った。このことは後に語ろう。

そしてそのとき彼は決意もした、仲間をもつ死なせはしないと。そのとき彼は『正義』側の人間から『殺し』の人間に変わった。だから彼は思う、自分が死のうとも

——仲間を守ると。

新月ではない彼は無力だ。

だから力を開発した。そして開発は成功した。

それが、『殺人狂^{バイサーカー}』としての顔である。

「ハハハ、ハハハハ！アハハハハハハ！」

|| || || || ||

「どうしたんだろう、雛菊君は」

「わからない、先輩のあんな姿は、見たことが無い。強襲科^{アサルト}でも」

隠れ穴の近くに銃弾が奔る。

その銃弾は辛うじて外れたものの2撃めが来る。

そう思ったが、来なかった。

「おいおい、どこ向いてんだよ。俺の獲物は^{あいて}テメエだぞ、よそ見してつとスクラップになっちまうぜエ！」

風を切る音と共に月光の一体がまたもゴミになる。

「いいねえ、楽しいねえ、こんなのは2年ぶりだよ。こんなクソ忌々しい楽しさはなアア！」

振り向くと同時、京助は月光の頭部のフレームを殴り、破壊しつつ突っ込んだ腕で内側のコードを引きちぎり動きを止める。当たり前だが京助の腕も血にまみれる。

しかしそんなことを気にも留めなく再び破壊を繰り返す。

ときに高周波ブレードでナナメに切断し、ときに頭部にナイフを突き刺し回路を斬る。

「アハハハハハ！ハハハハハ！どうだ機械、怖いか、恐ろしいかこの俺が、さすがに恐怖を感じるAIなんか付いてないだろうけどなあ！」

京助は両手を地面に付き錬金術で地面から金の槍で多数の月光を貫く。

30以上はあった月光部隊は既にあと5体

^{デザートイーグル}

京助は月光の頭部に飛び乗り手に持つD・Eで弾切れを起こすまでトリガーを引き続ける。

あと4体

標準をこつちに向ける月光に京助は肅清を下す。

飛び掛ってくる月光に向かって京助は高周波ブレードを振り下ろす。間宮の背後にいる月光に向かって速く、鋭い槍を飛ばす。

あと1体

京助は飛び高周波ナイフで右足を切り落とし、バランスを崩した月光に向かって切り上げる。

「アハハ、ゼーんぶスクラップにしちゃったよアハハハハハ！」

「正氣に戻れ京助！」

突如叫んだのは不知火でも間宮でもましてや伯爵でもない。
完全なる第3者。

「アア？だれだテメエ」

そこに立つは茶髪がかかった髪で額に青筋を浮かべて、手に日本刀
を持つ青年。

京助の名を知っている青年

そして、京助が吸血鬼だと知る数少ない青年

その名も……………

The aria continues

過去の物語〈Past story〉

「ク、クハハハハ、思い出した」

「忘れてたとはヒドイな。いつもイ・ウーでパートナー組んでたのに」

んなことどーでもいい、と京助は狂気の笑みを浮かべながら喋る。
やれやれ、あのころ、お前はこんな感じになったよな………と青年は回想を始める

〓 〓 〓 〓 〓

それは2年前のこと、京助がイ・ウーを出るきつかけになったこと、雨の日のこと。

その日、京助は一人の女の子を拾ってきた。

「おいおい、誘拐か？」

「まさか」

見た目は8歳前後でいかにもロリコンが喜びそうな体系だ。

が、その体には無数の打撲痕とかすり傷。一番の特徴は右目の白い眼帯。黒い髪には白髪が混ざっている。相当の恐怖か苦勞をした証拠だろう。体は細く、白鳥のように白い。
表情は眠っているため分からない。

「どっから連れてきた？」

当然の質問であろう。

「公園の木に背を預けていたところを俺が拾った」

それは誘拐の一種ではないだろうか。

京助は女の子を近くのソファーに寝かせその近くに座る。

「そんで急に倒れたかと思うとそのまま気絶。それに今は冬で雨だ。最悪凍死するだろと思い連れて来たにいたる。体も冷たいしな。それに栄養失調になってる、こりやまずいだろと言っわけだオケ？」

オケと返事をした俺はとりあえず栄養のあり胃にやさしいものを作ろうと台所へと向かう。

「虐待か」

ポツリと京助は呟き頭をなでる。それで女の子は起きてしまった。

「わるい、起こしちまったか」

「……………ここ、どこ……………あなたたち、だれ」

「ここは俺達の隠れ家のひとつで俺は雛菊京助」

「俺は美空勇次^{みそらゆうじ}。みゆでいい」

といだ米と水を土鍋の中に入れて火をつける。作るのは病人におなじみのお粥だ。

それとお供にはキュウリやカブの糠漬けだろう。

「ま、ちつとまっててな」

俺はラジオをつけイヤホンに当てる。手には新聞と赤ペン。

『おつと、ここでダル抜くか？それともガーリックが逃げ切るか！そして後50メートル！ダル抜けない！ガーリックが引き剥がしてきた！だがダルも追い上げる！少し離れて牛が牛が脅威の追い上げを見せる！牛、ダルを抜いて2位に！ここでガーリックがさらに加速！ダル、ガーリック、牛が並ぶ！そしてそのまま行くか！行くか！いくかああアアアア！』

俺は倍率2・2の牛に50万かけたんだが、いけるか？

『なんとこれは凄い！写真判定により、前代未聞の3馬同時！3馬同時にゴール！』

ブツ！と飲んでいた麦茶を噴出す。

こんなことつてあるのかよ。

「どうした？」

「いや、3馬が同時」

「マジかよ、で馬は？」

「牛とガーリックとダル」

ついでに京助はガーリックに50万かけている。後で行くか。

とまあそんな会話をしている内にお粥が出来上がりぬか漬けと一緒に

に持っていく。

「……………私に？」

「それ以外に誰がいる？」

彼女はスプーンを子供のように握り口に持っていく。

「おいしい」

「そりゃどーも」

「ところで名前は？」

「なまえ？番号なら8番」

番号か、まさか奴隷だったか言うんじゃないだろうな。

「そうか、なら俺が名前をつけてやる。そうだな、友香ってのはどうだ？」

「ゆづ、か？」

友香か、京助にしてはいい名前だ。以前は拾ってきた犬やら猫やらにギロチンやらフェザーウィルスやらハイパーコマンダーDXやらひどい名前ばかりだったからな。

いや待てよ、どこかで聞いたような名前だ。

その後お粥を平らげた友香は疲れのあまりかすぐに寝た。

「京助」

「分かってる。潰しに行くぞ。少なくとも今週中に」

「ああ」

友香から一筋の涙が垂れたことに京助も勇次も気づいていなかった。

次の日

友香は昼過ぎまで寝ていた。

体の傷から見ても相当外道な場所だったのだろう。ろくな食べ物も与えられず、睡眠時間に反比例している強制労働。

まさに昔の俺じゃねえか。

ついでに友香は京助の肩によっかかって座っている。誰かに甘える

なんてこともしたこともなかったんだろうな。

俺もそうだった。ま、ゆつくり休めばいいさ。俺たちは追い出した
り労働を強制させたりしない。あえて一言言うならば、なぜお前は
いつもフラグを、しかも恋愛フラグを立てるのだ。

「そういえば友香、年齢は？」

「14」

14歳ってことだな。うん？京助の一個下か。

しかし、まだ日の丸の国に奴隷がいたとは。俺で最後だと思ったん
だけだな。

「何か食べたいものはあるか？」

「あ、俺久しぶりに寿司食いたい」

「お前には訊いてない。友香に訊いてんだ」

突然話を振られた友香は少し戸惑ったがすぐに返した。

「昨日の……あれ」

「お粥か？」

コクンと首を振りおろす友香。

「そんなものならお安い御用だ。ちっとまってる」

俺は米をとき、昆布でだしを取るとその汁に米を入れて炊き始める。
もちろん土鍋で。

米だつて保存には気を使ってるしうまいはずだ。

そして30分後にはお粥は出来上がっていた。

友香は一口、二口、と昨日のように口に運んでいく。

次第に残りはなくなっていく、最後の一口――

――にはいかなかった。

突如外で起こった爆音。

聞き慣れた爆音。

言い方を変えれば銃声という爆音。

俺はモーゼルを手に持ちベランダから外を見下ろそうとした瞬間、カチ、と音が鳴りベランダが吹っ飛ぶ。爆発に巻き込まれたが何とか俺は生き残った。

「クソ、友香は無事か!？」

「ああ、無事だ!」

友香は京助がとっさにかばったことで無事だった。

ダン、とドアが蹴り開けられ一人のチャイナ服の女が入ってくる。

「ここに8番イルネ？」

8番、友香を狙ってきた追っ手か。

「悪いが、ここに8番なんてやつはいねーよ、他あたりな」

「隠すと体によくナイヨ」

突如シュン!と音を立てて飛んできた龍形刀を京助が横幅30センチほどの西洋剣で落とす。

「だから8番なんて奴はいねーつつてんだろ」

ダン!と京助がガバメントを放つ。が、それはもう一本の龍形刀で弾かれる。

「なんかヤバそうだから退却スルネ。再?^{ツァイジエン}」

「まて!」

ヒラリと中国服を翻しバツク宙で下に飛び降りる。

チッ!と京助は舌打ちをしてから部屋に戻り、友香の無事を確認したのち西洋剣を仕舞う。

数時間後

「契約違いネ。聞いてナイヨ」

女は龍形刀を男の首に当てながらしゃべる。

「まて、契約違いってどういうことだ」

男は無抵抗の意思を示すために両手を挙げ、額には脂汗が垂れている。

「あんな敵居ル聞いてナイヨ。受けた依頼8番殺す。でもあいつ等

やばソウ。200万じゃタリナイ。1000万ダセ」
「わ、わかった。出す。出すからおろせ」
言うと女は刀をおろす。

The aria continues

友香

ガン！と金属と金属がぶつかり合い音を立てる。

「どうしたんだ！お前、忘れたわけじゃねえだろーな！」

「アハハハハハハ！」

依然京助は笑ってばかり。会話が成立しない。

京助は刀を両手持ちに直し、そのまま勢いよく振り下ろす。相手は、勇次は刀で受け止めようとする。が、それがいけなかった。受け止めようとした刀はいとも容易く切断され、勇次は間一髪でその斬撃を躲す。

しかし京助の攻撃は止まらない。頭上に氷を降らせたり、金の刃を投げてきたり、高周波ブレードで斬りつけてきたり。

「目を覚ませ！また繰り返す気か！」

「……………せえ。せえんだよごちゃごちゃよお！」

刹那、京助は後ろに飛ぶ。

「そーか。ならしよーがねえ。無理やり思い出させてやるよ」

勇次は後ろに斬られた剣を放り投げ、腰に挿してある刀を引き抜く。これを見せるのは、お前が始めてだよ京助。

刹那、何の動きもなしに京助のいる場所に傷が入る。それは斬撃による傷。

京助はそ斬撃を後退するという最小限の動きで躲す。

「『罪^{ざいたい}怠』」

そして、この技を躲したのも、お前が始めてだよ。

京助は右手に持ったD・Eで俺を撃ち抜くべく引き金を引く。銃口から出た弾丸は俺の鳩尾に当たった。

「デメエ、なんで躲さねえ？アア？ナメてんのか」

さあて、どーだろーねと挑発雑じりに応答し、剣先を京助に向ける。

「この意味がお前なら分かるだろ？」

「クハハハ、この俺を殺^やろうってか？面白いなあ！」

先に動いたのは京助。恐るべき速さで勇次に肉薄すると同時、村正を振り上げる。勇次はそれに罪咎を添わせ、剣筋を変える。京助は幾度も振りかざし、勇次は幾度もその刃を回避する。何度も何度も金属同士が擦れ合う音が響く。そのたびに火花が散る。市販のものならとつくに折れているであろう。出た火花の下に木があればとつくに火が出ているだろう。そして京助の顔は、笑っている。ただ喜びのために笑っている。嬉しさのために笑っている。殺しに笑っている。その笑顔に勇次はキレた。

2年前にも、同じことがあった。

〓 〓 〓

時は遡り2年前

チャイニーズ
中国女を退けたあの日、次の襲撃に備えて隠れ家を変えるべく荷物をまとめている。

といつても荷物などはほとんどなく持っていくものは銃程度のものだ。あと土鍋。

友香は京助がおぶり、俺は土鍋を持つ。当の友香は寝ている。しかしほんとによく寝るな。

「なあ京助」

「なんだ」

「いや、ちよつとな。あまりにも寝すぎなんじゃないか《・・・・・・・・》、とな」

たしかにな、と相槌を打つ京助。

車に乗った俺たちはエンジンを着け、発進。20分走った後次の隠れ家に着く。はずだった。

突如としてこの車の横に他の車が接近、窓からは銃が伸びている。

うそだろ、と呟いた直後、急発進する自分と相手の車。

「援護！」

「オーケー！」

短い合い方とのやり取り。京助は窓から身を乗り出し少し遅れて発進した敵車に向けてトカレフTT33を向け発砲。フロントガラスに当たりそれは易々とちび散る。

「チッ！勇次！もっと早く！」

わかってる！と返事をしたものの速さゆえにハンドルが重い。俺はハンドルを右に切り国道235線に出る。

ギリギリ曲がりきるが、車内がめちゃくちゃだ。土鍋も割れちゃった。

「もっと安全運転できねえのかよ！？」

「んなことしてたら蜂の巣だ！」

京助は再装填したトカレフTT33を再び敵車に向け撃つが、いかんせん威力が足りない。

追い抜かれていく一般車。追い抜いてくる敵車。俺は一般車をどれもこれも間一髪で避けながら猛スピードで走る。

京助もやはり苦戦している。

カーチェイスを前提としたVR訓練はイ・ウーでは少ししか受けてないからな。

対戦車砲

「チッ！京助！RPG！」

「ムリだ！一般も巻き込みまう」

俺はハンドルを左に切り左折。やはりその速さゆえ曲がりきるのは相当な曲芸だと自分でも思ったよ。

「M870を使い！」

「りょかい」

京助はトカレフTT33を車内に戻し後部座席からM870を取り出す。

ダン！という短い発砲音。ガチャリとレシーバーを引く。

その一撃では仕留められなかったためもう一撃といわんばかりに京

助が構える。

「右！まがりまーす！」

俺は勢いよくハンドルを思いっきり右に切る。車体後部が大きく揺れる。約90度のドリフトで曲がりきった車の中はもうめちゃくちゃだ。

後ろから聞こえるカンカンという音は敵の銃弾が当たってる音だろうか。

「京助、あとどれくらいで倒せる？」

「わからん、だが、まあどうにかするさ」

ダアン！と響く銃撃音。

車は上り坂に入っただけだと思っただけに上り終わりそのまま5メートルほど飛び着地、が、15メートル前には店。どう考えてもブレーキが間に合う長さじゃない――

――だったら、

「京助！友香！しっかりつかまってるよ！」

「ちょ、まっ！」

サイドブレーキを踏んで一瞬減速、前輪にブレーキをかけ後輪を滑らせる。そのままハンドルを左に切り後部が大きく揺れる。建物に車の側面が当たり中破、が運転に支障はなさそうだ。何とか曲がりきれた。敵車はそのまま店に激突し、中から黒尽くめの男達が出てくる。

目を見るに、殺し屋。さっきの中国女と同じ目をした男と思われる人物。

俺たちも車から出て行き相手を見る。

男は何も言わず銃――マカロフPMM――をこちらに向けてる。正確には友香に。俺はガバメントのクローン銃、ハードボラーでその銃を撃ち落とす。

チッ！と舌打ちする男。運転のテクニクはいい、そこは賞賛する。

しかし、早撃ちは俺のほうが早い。

「あとは任せろ！」

京助は言うと同時に黒尽くめに向かって駆け、西洋剣で殴って気絶させ戻ってくる。

「さて、友香、脱げ」

「……………は？」

京助のいきなりの脱げ発言に俺は啞然とする。友香も鳩が豆鉄砲食らったような顔してるし。

「勇次、変なこと考えんなよ」

「お前だろ！」

と、俺はツツこむ。

「……………わかつ、た」

わからんていいよ、脱ぐな。

「でも、見たら、多分、貴方達は私を、捨てる。でも、でも」

友香は涙を垂らし、その涙を必死に抑えようとする。

動いたのは京助だった。京助は友香を反つと抱きしめ、大丈夫、と呟く。

「たえお前がなんであろうと、俺たちはお前を護る」

それからはダムが決壊したように友香は泣きじゃくる。その間京助はずっと抱いていた。

10分後

泣き止んだ友香は全て話すと言った。それは心を許した証拠だろう。まず友香は京助が言ったように服を脱いだ。そのほうが自分が何者か理解しやすいらしい。もちろん俺は止めたぞ。

友香の体には綺麗な美曲を描いたむ、じゃなくていくつもの痣と、体の服を着ていれば見えぬ部分に無数に描かれた線とアルファベット。売れ残った背中の部分にはアルファベットと英語表記の文字が、否、名前が書かれている。

俺たちは覚った。友香が捕まれば、まず殺される、と。

その事柄から考えられることは一つ、移植。右手を欲している人間がいれば友香の右手を高値で売り、腎臓を欲している人間がいれば友香の腎臓を高値で売る。

それに加え全ての部位の契約が終わっている。

ざけんな！

そんなこととしていいわけがない。数人十数人の幸せのために友香が不幸になる。そんなことはあってはならない。

ならば友香と逃げるか？それではいつまでたっても友香に幸せは訪れない。ならばどうするか？答えは簡単だ。

——その組織をぶっ潰せばいい——

そのふざけた組織をぶっ潰す。俺達の目的は友香と逃げることでなく、友香を護るために敵をぶっ潰すことに決まった。

「逃げる？そんなことあるわけがない」

不意に京助が呟く。

ああ、その通りだ。

「でも、怖くなかった？」

「怖いわけあるもんかよ。知ってるか？心の澄んでる女性は決して醜くはない」

京助がまたキザな台詞を吐きやがった。いつもはリアルはリアルは言ってるくせによ。

友香は京助に服を着せてもらうと同時に、ありがとうと言った。

The aria continues

友香（後書き）

投稿が2〜3週間遅れちゃった。
だめだ、最近考えることを諦めている（笑）

ハロウィーン特別番外編Ⅱ＝ヤンデレラⅡ＝（前書き）

役

ヤンデレラ・・・星伽白雪

王子様・・・遠山キンジ

長女・・・ジャンヌ

次女・・・レキ

幼女ではなく三女・・・神埼・H・アリア

やさしい妖精・・・峰理子

悪戯好きな妖精・・・ヒルダ（先行出演です）

王子様の妹・・・G？もとい遠山かなめ（先行出演です）

王子様の側近・・・雛菊京助

3女の母親・・・中空知美咲

♪はじまりはじまり♪

ハロウィーン特別番外編〃ヤンデレラ〃

むかしむかしあるところにちよつとお金を持っている家に母親と3姉妹とヤンデレラが住んでいました。しかし3姉妹はいつもヤンデレラを苛めていました。それを見た母親はその苛めを見て止めようします。しかし母親はとても口下手で気が少し弱いためいつも3姉妹に敵いませんでした。

「ヤンデレラ、ヤンデレラはどこだ」

「はい、なんでしょう」

長女のジャンヌは窓枠に指を擦り付けその指をヤンデレラに見せます。その窓枠には塵どころか埃一つないとても清潔な窓枠でした。しかし意地悪な長女ジャンヌはこういいました。

「なんだこの汚さは？」

「も、申し訳ございません」

「もっとちゃんと掃除しないと次はお前を氷付けにするぞ」

フン、と鼻を鳴らして長女ジャンヌはその部屋を出て行きました。まじめなヤンデレラは言われたとおりに何度も窓枠を雑巾掛けしました。

次にヤンデレラを呼んだのは次女レキでした。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あの」

「はい・・・・・・・・」

正直ヤンデレラは次女レキが苦手です。

「・・・・・・・・」

次女レキはヤンデレラを呼び出すといつもヤンデレラの眼を見たまま何も言いません。ただ悪戯に時間が過ぎるだけです。多忙な身のヤンデレラは長女ジャンヌより次女レキの方が数倍は迷惑がついてい

ました。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・あの、お仕事に戻ってよろしいでしょうか？」

「どうぞ・・・・」

ただ呼び出しては無表情にヤンデレラの眼を見る。毎日これの繰り返しです。

次に呼び出したのは幼、ではなく三女のアリア。

この中では末っ子で一番の我が儘っ子です。ヤンデレラを呼び出すなりあれをしるこれをしるとあれこれ命令します。

「ヤンデレラ、あたしが座る場所拭いて」

「はい」

「ヤンデレラ、お菓子持ってきて」

「はい」

「ヤンデレラ、テレビつけて」

「申し訳ございません、この時代にテレビはまだ開発されておりません」

とまあ、このような我が儘っ子で長女ジャンヌや次女レキ以上に疲れる相手でした。

「あ、ジューズこぼしちゃった。ヤンデレラ、拭いといて」

やっと三姉妹が寝る時間になってもヤンデレラが寝る時間はまだ先です。

やることはまだたくさんあります。食器洗い、アイロンがけ、リビングの一日6回の内6回目の掃除、その他もろもろ。ヤンデレラがやっと寝れる頃にはさすがにチュンチュンと鳴いています。時刻で言うなら朝4時30分、三姉妹が起きる時間は7時30分。しかしヤンデレラは三姉妹が起きる30分前に起きてご飯を作らなくてはいけない。つまり2時間30分しかヤンデレラの睡眠時間はないわけである。

それに部屋は屋根裏でかび臭く、布団も藁を敷いただけの粗末なもの。当然疲れなど取れるわけがない。

〓 〓 〓 〓 〓

それから数カ月後のある日

今日はお城で舞踏会が開かれるから、といわれてヤンデレラは三女達にドレスをもってこいといわれたヤンデレラは言いつけ通りドレスを持ってきた。

「いいかヤンデレラ。今日はお城で大事な舞踏会がある。お前はおとなしく留守番してろ」

と長女ジャンヌ。

「・・・・・・」

と次女レキ。

「わーいわーい」

と幼、ではなく三女アリア。

ヤンデレラはいつてらっしゃいませと見送るだけ。

それから数時間がたち、夜になるとお城の明かりが見えてきます。ヤンデレラは思いました。ああ、一度でいいからあんなお城に行って見たい。そう思ったときでした。

「じゃあ行ってみる？」

どこからともなく声が聞こえてきたのです。

「だ、だれ？」

「くふっ、私は妖精^{よーせい}さん」

なんとヤンデレラの目の前に小さな小さなひらの服を着た妖精が降りてきました。ヤンデレラは知っています。そういう服のことを『ロリータ服』だということを。

「チチンプイプイのプイ」

ヤンデレラは思いました。今時チチンプイプイはないよね、と。し

かし、気が付いたときヤンデレラが着ていた服はなんと袴に変わっていたのです。

「チンカラホイ」

と思っただけは服が消えて変わりに胸と下半身の陰部を隠すだけの薄っぺらい下着に変わっていたのです。ヤンデレラは知っていました。こういう服（？）のことを『ビキニ』と言うことを。

「アハハハハ！？」

さっきのロリータ服の妖精の隣に今度は真っ黒いロリータ服を着ている妖精がいることに気がつきました。ヤンデレラは知っています。そういう服のことを『ゴシックロリータ、俗に言うゴスロリ』と言うことを。

「ヒルダ！？なんでここにいるの！」

「下等な人間共を苛めるためよ」

パチコン、とロリータ服の妖精は持っていたステッキでヒルダと呼ばれた妖精を叩きます。

「いたッ！何すんのよ理子！」

ヒルダと呼ばれた妖精は理子と呼んだ妖精を自分の持っていたステッキで叩き返します。

「まあまあ、喧嘩はよくないよ」

止めに入るヤンデレラ。

「「ううう」」

言う二人（？）の妖精は喧嘩をやめました。

「そうそう、がぼちゃはある？」

唐突に理子という妖精が聞いてきます。理子という妖精はその質問にあると答えたヤンデレラにかぼちゃを持ってくるよう命じました。ヤンデレラがかぼちゃを持ってくるとそこには見たこともないほどの大きさのねずみがいました。

「どーだ！？」

ヒルダと呼ばれた妖精はふんぞり返って満足そうな顔をしています。ヤンデレラは知っていました。そういう顔のことを『ドヤ顔』と言

うことを。

「よしヤンデレラ。地面にかぼちゃを置いて」

理子妖精はヤンデレラに言います。

「チチンプイプイのプイ」

ボン、と煙立ち、煙が晴れるとそこにはねずみにつながれたかぼちやの馬車、もとい――鼠の馬車だから――鼠車そしゃがありました。気が付くとヤンデレラの服も袴に戻っています。

「さ、のつてのつて」

ヤンデレラは理子妖精に言われたとおりにかぼちやに乗ります。不思議と中は居心地がよく、眠気すらも誘います。

「これでお城まですぐに着くよ」

と言ってきた理子妖精。

「でも0時ぴったりに魔法は切れちゃうから」

「そうそう、その服はニツポンて言う国の民族衣装なんだって」

ヒルダ妖精が制限時間を教えてくれて、理子妖精が着物の名前を覚えてくれました。

「ねえ妖精さん、ここからお城まで一瞬で移動できないの？」

ヤンデレラが問います。しかしヒルダ妖精はこう答えました。

「それだと原作ブレイカーになるからだめだ」

と。しかしヤンデレラは知っています。もう原作もへったくれもないんじゃないかな、と。

ハッ、と気がつく妖精さんたちは消えていました。

鼠車に揺られること20分

お城の目の前に着いたときは既に23時30分でした。あと30分だけしか時間は残されてはいません。

ヤンデレラがお城に入るとはじつこのほうで他の人達と楽しくおしゃべりしている3女たちが見えました。そして、なんと驚いたことに近くに王子様が迫ってきてるではありませんか。ヤンデレラは最初近くにいる人に迫って行ってるんだなと思いました。が近くに人は

いません。無論背中側は外。

「キミ、名前は？」

唐突に王子様が話しかけてくるではありませんか。ヤンデレラはびっくりして気が動転しそうになりました。

「え、え、えっと、しら、シラユキです」

「シラユキか、いい名前だ」

王子様はニツコリと微笑むと手を差し伸べてくるではありませんか。「一緒に踊っていただけますか？」

ヤンデレラの頭が一瞬ブラックアウトした後すぐに白くなっていきまた黒くなっていきました。3秒間たったのちやっと視界がはつきりしてきて、はい、と答えることができました。

周りからは拍手喝采。ダンスを踊ったことのないヤンデレラは王子様にリードされながら何とか踊り終えることができました。しかし、時刻は23時59分。

ヤンデレラはごめんなさいと言って王子様から逃げるようにお城を去っていきました。

「あ、まって！」

王子様はヤンデレラを追いかけてようとしますが、妹に道をふさがれて追いかけれませんでした。

「おにいちゃんどうしたの？」

「ん？いやなんでもない」

||||||

3日後

あのあとヤンデレラはひどい仕打ちを姉妹から受けました。

ヤンデレラがもう勝手なことはいないということ事で事は収まりました。

しかし、納まらない人が一人いました。王子様です。

ヤンデレラが昼食後の掃除をしていると来客がありました。この家

の来客は全てヤンデレラが請け負っています。ヤンデレラがドアを開けると、

「おお、やっと見つけましたぞシラユキ様」

そこにはお城の騎士か何かを思わせるたたずまいの好青年がいました。

「あ、あの、なにか？」

「貴方様は王子様のご婦人になる権利が与えられました。どうします？」

「え、え、え？」

と戸惑うヤンデレラ。後ろからは三女がありえないという形相で睨みつけてきます。

そして、ヤンデレラは首を縦に振りました。

その後、ヤンデレラは王子様と幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし

ハロウィーン特別番外編〓ヤンデレラ〓（後書き）

終了後

白雪

「わ、わた、私が、キンちゃん様と、け、けけ、けけ、結婚!？」

キンジ

「落ち着け白雪!お芝居の話だろ!」

アリア

「そうよ!」

レキ

「(・・・・・・・・)」

ジャンヌ

「悪役というのも結構疲れるんだな」

京助

「お前は原作でも悪役だろ最初は」

ジャンヌ

「うるさい。冷凍グラタンにするぞ」

キンジ

「人間はグラタンにはできないぞ」

京助

「そついえば中空知が一言も発してないんだが……」

中空知

「わ、わた、わ、わたた、す、すみせん！」

白雪

「別に頭下げなくてもいいよ。お芝居の中だから」

理子

「クフ、ゆきちゃんのビキニ姿隠しどりい。高く売れる」

剣殺交差

別の隠れ家に付いた俺たちは仲間を2人呼んだ。できれば呼びたくはなかったが。どちらも実力は確かで対外の場合は負けないのだが2人とも少し性格に問題がありあまり2人を会わせたくはないのだが致しかたなしと言う事で呼ぶことになってしまった。何が言いたいかと言うと、二人が会うとうざいから2人同時に呼びたくなかったのだ。

「はあ・・・」

「まあみゆ、いいじゃないか賑やかで」

「うっさい、あとみゆと呼ぶな。それにしてもこいつらはどうにかならいのかねまったく。」

「ああ？誰が重いだって？」

「何打聞こえなかったのか。ではもう一度言つてやろう、お前は重いから床が抜けたらどうするんだ？出てったほうがいいんじゃないか？とな」

「あたしはまだ60行つてないわよ！」

「59・9999キロか。了解した」

「ムキーーー！あつたまくるわね！」

そこ、ジタバタするな。うざいしうっさい。

「そういうあんたこそ出てったらどうなのよ？」

「なぜ？」

「あんたがうざいか」

「そーそ、思い出した。頼まれてたもの持ってきたぞ」

「おう、サンキュ」

「人の話し聞きなさいよ！」

紹介が遅れた。うるさいほうが飛田百合香^{ひだ ゆりか}、名前はいたって普通で外見もいたって普通。しかし性格に問題あり。戦闘能力は中の上くらい。過去に爆発テロに巻き込まれ背中が炭となった過去を持ち、

親と2人の姉と1人の弟を亡くす。その後世界最高の外科医により一命を取り留める。しかしそのせいで犯罪者を恨み、今もテロを起こした犯人を捜している。女で貧乳。

「誰が貧乳だ」

そしてうざい方は慶次^{けいじ}、本名は本人以外誰も知らない謎の仲間。戦闘能力こそ低いものの情報収集能力、主にハッキングはこいつの十八番だ。以前アメリカ中央情報局にハッキングしデータを持ち出した程の腕前がある。

持ち出したデータは最強のウイルスとステルス迷彩という物のデータ。最強のウイルス、どんな対ウイルスプログラムをも破壊するウイルス。これは5年後に起こるといわれている第3次世界大戦で使用されるであろうウイルス兵器だろうと俺たちは勝手に結論付けた。

そしてステルス迷彩。俺はよく分かんが簡単に言ってしまうと透明マントなる機会で身体が透けるというものらしい。実用化されれば諜報活動で見つかる可能性がほぼなくなると慶次は言っている。イ・ウーの技術開発局に高値で売れたのは余談だ。

おっと、話がそれってしまった。まあ今後こいつの武勇伝を語ることはないだろう。

「そう褒めるな。照れるじゃないか」
「ついでに男だ。」

「さて、これからについてだが、慶次」
「敵地は発見した。驚け、なんと近くだ。西に7キロ行ったところだな」

近いな。いつでも攻められる位置だな。

「了解、後方支援を頼む」
「了解、と慶次。」

「飛田、戦闘中の援護は頼むぞ」
「任せときなさい、と飛田。」

＝ ＝ ＝ ＝

現在

実力は五分五分か。いや、妖刀を使えてないだけこちらが有利、か。どうやって一発入れるかなあ。

「アハ、アハハ」

今の京助の武器は高周波ブレードだからな。仕方ない、怨むなよ京助。

俺は今から行おうとしている一撃を決めるため、武器に集中する。太刀筋というものには必ず癖が出る。その癖を見極め、予測し、カウンターとして攻撃する居合い切り。

武器にはどのような武器であれ必ず急所が存在する。その急所の場所を見極め、その一点にのみ攻撃を加え、破壊する。武器、すなわち『剣』を『殺す』一瞬の『交差』俺はこの技を

―― 剣殺交差 ――

そう呼んでいた。

どんな短い隙でも読み、どんな些細な癖も読み、どんな軌道も予測し、全てを読み、全て予測することでその予測は確定された未来へと変わる。

そして、京助が接近し、振り下ろされる高周波ブレード、俺はそれを京助の左に回り込むように逃げると京助はそれを追撃するようにそれを振るう。しかし、そう来ることは、分かっていた。否、知っていた、とても言うべきであろう。

そして罪怠の能力の一つ、慣性やベクトルを無視して物を止める能力。俺はこの能力を使い完全停止、刃に向き直る。そして罪怠のもう一つ的能力。それは今までに止め、溜め込んだ慣性を一気に開放すること。踏み込むと同時に開放すれば―― 距離にもよるが

―― 速度は400キロをも超える。

追ってくる刃。その刃に向き直った俺。急所が分かっている武器。刹那、俺が動く。

「剣殺交差！」

刃が一閃。その刃は刃を一瞬だけ交差され、俺の体は一步で3メートル前進する。宙を舞う剣先とその破片。

俺は罪怠の能力で慣性を止め、体反転させを京助に向き直り、再び一步踏み出すと同時に罪怠の能力で今溜めた慣性を開放。京助は即座に高周波ブレードを捨て銃を取り出しこちらを向き直るが、こちらのほうが一瞬動いたのが速かった。俺はその勢いに乗ったまま右手を握り締め、勢いを殺さずに京助の顔めがけて拳をぶつける。

「正気に、もどれえええええ！」

|||||

2年前

次の日、俺たちは友香を隠れ家で留守番させ、敵のアジトに向かった。否、敵のアジトの中に既にいた。

外見はカモフラージュされていて見分けるのに苦労したが、地下に入ってしまったえば映画に出てくるような『ここは悪の組織です』てきなつくりだった。そして絶句した。目の前に広がるは――

うまい言葉で言うならば、『蟻の巣』だろうか――どこまでも続いているであろう長い通路と地下に続く階段。階段を行くとたくさん的小部屋。小部屋は大体6畳間くらいの何も無い空間。そこには3人の人間、主に女性が監禁されている。

人身売買か、それとも奴隷か。どの女性も初めにあった友香のような顔をしている。いや、友香はまだまじだったところか。

俺たちはさっきの長い通路に戻り、敵を避けながら歩を進め、見たくもないものを見つけてしまった。

――人体実験室――

見過ごすか、いや、京助ができるわけがない。俺たちはそこに銃を構えて入り、辺りを見回すが、人体実験に使われるであろう器具しかない。それと同時に違和感を覚える。俺は何度も人体実験室に

足を踏み入れているから分かる。こういう場所には実験者の『呪い』などの霊的なそれがあるものだ。しかし、ここにはそれがない。まさかと思いい人にこの部屋の探索をしてもらう。

「京助、みゆ、ちよつと来て」

飛田に呼ばれる。

「ビンゴか？」

「ええ、ビンゴよ」

飛田が壁のスイッチを押すと、ガタンと音を立てて壁が開く。そこには、いかにもMADサイエンティストがいますよ的な雰囲気をもし出した男がいて、周りには檻に入れられた背中から翼の生えている者、頭が二つある者、体中から体液が流れ出てる者、など非道の限りを尽くされた女性が呻いている。また、全ての女性は布切れ一つ纏っていない。

「おや、予想以上に早かったですね？私の予想では3分58秒02早いですよ」

知るか。

「お前がボスか？」

「そうですよ。ついでに言いますがここにあるのは全部私のお気に入り。美しいでしょう。そうですね、キミ達も私たちの実験に参加しませんか？面白いですよ」

「願い下げだ。なんで俺達がここに来たのかわからないわけではなからう」

京助が言ってる間にも俺はハードボラーを向ける。が、怯まな

い。
「ククク、今からキミ達に少し私の研究成果を教えてあげましょう。私達は超能力^{ステルス}、正確には魔術^{マジック}の研究をしていました。魔術は超能力^{マジック}よりはるかに強力な能力です。しかし、魔術は使用者に多大な負担をかける。その負担をなくす研究を」

そこで京助は言葉をさえぎるように叫ぶ。

「まさか、あの小部屋にいた女を、実験台にしたのか！？」

「ええ、そのまさかですよ。そして、実験はついに完成した。薬の副作用として右目を無くしましたがね。しかし、実験体に逃げられたんですよ」

瞬間、俺は感付いた。右目の無い女性。ひどく衰弱していた女性。そして、どこかからか逃げてきたような女性。それは、

「まさか、友香が……しかし、友香は臓器売買が予約されていた人間じゃないのか!？」

「ああ、アレですか、そうですね。実物を見てもらったほうがいいでしょう」

パチン、と鳴らされる指。降りてくる天井。そこには、俺たちはそれを認めたくはなかった。そこにいたのは、裸にされて銃を突きつけられている友香なのだから。

もう一度パチンと鳴らされる指。突如、友香が苦しみ始め、友香の体から青白く光った文字が浮かび上がる。

「この文字は拘束具なんです。魔術マジックを使われるとこちらとしても非常に困る。そのための拘束具。さあ、行きなさい」

言われると同時に、友香が右手を俺達に向ける。しかし、ただそれだけ。

「ん? どうした? 早くやりなさい」

「……だ。……も……や………もう、いやだ」

ポトリ、と垂れる友香の涙。そして、友香は、飛び降りた。それに一番最初に動いたのは京助だった。京助は友香の真下に行き、落ちてきた友香をうまく受け止める。

「人体実験? 魔術? 拘束具? ふざけるなよ。実験体モルモットもな、同じ命があんだよ」

京助は苦しむ友香を抱きながら話す。

「おまえらクソ科学者の所為で、何人、何十人、何百人、それ以上のやつらが死ななきゃいけないんだよ」

京助は少しでも友香の苦しみを抑えるために強く抱く。友香も弱くだが抱き返す。そして、床にやさしく置くと、西洋剣を抜く。

「俺はお前を監禁、死体遺棄、および過失致死で逮捕する」

京助の行動は早く、速かった。俺は京助が駆けると同時にハードボラーを撃つが届く前に弾かれる。

（硬化素材のガラス!?）

今の銃声に気が付いたのか武装した敵兵が波のように押し寄せてくる。が、突如現れた氷の人形が特攻し、敵を迎撃する。

「うつ……………うあッ!……………うつうつ!」

友香が苦しみ始める。なるほど、今のが魔術か。

はあ、はあ、はあ、と友香は息を荒くし、決死の思いで敵の迎撃を続行する。

「やめろ友香!そいつらのあいては……………フッ、そうかい、ただし、もう無理と思つたらすぐにやめろ、じゃなきゃ俺がお前を殴つてでもとめる。いいな」

京助の言葉に友香がコクとうなずく。友香の目には、あきらかに闘志が宿っている。俺たちと同じ目だ。

さて、多勢に無勢だが、数の問題は無くなった。問題は硬化ガラスだ。……………やってみるか。剣殺交差の応用を。

「京助、飛田援護頼む」

「了解!」

俺は透明の強化ガラスを見る。案の定目を凝らしてみないとほとんど判らない状態だ。そして、急所を見つけた。

「京助、俺が合図すると同時に飛び出せ、いいな!」

再び了解という京助の声。そろそろ友香の限界がきそうだ、それまでに決める。

ゴホ、と友香は血反吐を吐きながらも魔術^{マジック}を使用し続ける。その姿を見た京助の眼は変わりかけていた。まずい、と思う俺。京助は焦りと怒りで歯止めが取れてしまう可能性がある。

あと3秒、2秒、1秒。

「行くぞ京助!」

俺たちが飛び出すと同時、ついに限界が来た友香が倒れる。俺は

ガラスにたどり着くと同時、急所めがけて剣を振り下ろす。ガラスは蜘蛛の巣状にひびが入り、京助がぶつかると同時に大きい音を立てて崩れ落ちる。

そして俺は見てしまった。友香が最後の力を振り絞って駆けるところを。そして、京助が焦りで彼奴の急所に刃を向けようとしているのを。

刃はそのまま振り下ろされ、周りには生暖かい血が飛ぶ。ただし、友香の血が。

「な!？」

驚愕する俺達。

「クククク、正しく機能しましたね。おや? 何がなんだかわからないと顔をしていますね。何でか教えてあげましょう。それは、拘束具の効果でもあるんですよ。その拘束具は私の命が危なくなると自動的に友香が来るという仕掛けになっているんですよ」

京助は友香を手に取り後ろに向かって跳ぶ。

京助は疑問に思っていた。自分の氷を使えば自分を止めることくらいできただろう。なのに、なぜそうしなかった、と。

力なく笑う友香。

「あなたには、人を、殺めてほしくないから」

友香は京助の腕から離れて、彼奴に向かう。

「ありがとう、さようなら」

最後に友香はそう告げた。刹那、友香の周りを氷が包み、その氷は徐々に巨大化していきやがて彼奴を飲み込む。

「友香ああアア!!」

京助は叫ぶ、そして、自分に付いた友香の血を舐める。

それは吸血行為と同じ。友香の能力は、ちから遺伝子は、京助の中で生き続ける。

俺は京助を連れ、この部屋から脱出する。そして見てしまった。その通路に刻まれていた、イ・ウーのマークを。

そのご、脱出し俺たちは事後処理を押し付けるべく武装検事に連絡を取った。そのあとのことは知らない。

案の定慶次は死んでいた。無残にも額を一発。机に突っ伏しているところを見ると不意打ちだったのだろう。

「安らかに眠れんことを」

ボソツ、と飛田が合掌しながら呟く。その目にはうつすらと涙があつた。

T h e a r i a c o n t i n u e s

剣殺交差（後書き）

はい、疲れました……

久しぶりの長い文章。

改行のたびにスペース空けてみたけどあってますかね？

あと剣殺交差はもちろんあのラノベ、そう、『C3 - シーキューブ -』からもらいました。

現在アニメも絶賛放送中なので観てください。

次の更新は、とりあえず水曜日までを目標に書きいています。

あと次はジャンヌ&レキ視点で行こうと思つのでよろしく願います。

動き始める帝

目の前が暗い。何も見えない。なぜだ？

俺は自分が目を閉じているということに気付くまで10秒掛かった。

「ハッ！」

まぶしい。目の前には青空が広がり、手に高周波ブレードの残骸を握っていた。どうやら、いつの間にか折れていたらしい。あと頬が痛い。なぜだ……

「やっと気が付きましたか先輩」

「うああ、頭が痛い。ああ、何があった？」

周辺には月光の残骸、オイル、残骸、オイル、とそれしか見当たらない。

一体俺は何をした。とそこまで考えて、やめた。それは近くにタバコを吸っている者がいたからだ。武偵校内は——橋は武偵校内に入るんだろうか？——全面禁煙だったはずだ。

「たつく、やっと目覚ましたか」

おや、なにやら懐かしい声が聞こえる。

「ここは禁煙地域だ。他所で吸えみゆ」

俺は立ち上がると同時に勇次に近づき、勇次は俺が立ち上がると同時に俺に近づき、俺が右の掌を振り上げると勇次も右の掌を振り上げ、握手をするように掌と掌を打ち合わせる。その場にはパン！という心地よい音が響いた。

|| || || || ||

ジャン又は絶望的状况下にいた。目の前には敵が投入してきた謎の機械——月光であるが彼女たちはまだ知らない——に、なすすべもなく逃げていた。

「（く、侵入を許してしまうとは。不覚。理子とも逸れてしまうしな）」

ジャン又は建物の陰に隠れて月光をやり過ごそうとするが赤外線レーダーの前では意味をなさない。ダララララという銃声を聞いた瞬間、ジャン又は死を覚悟し、目を閉じる。

「（終わりか……………！？まだ死んでない！？）」

ジャン又は自分の手を握っては開きを繰り返し、近くの建物を殴った。痛かったというのが当人の感想だ。

そしてふとジャン又は気が付いた。銃弾が止まっていることに。

「やれやれ、京助の友人、ジャンヌダルク30世、よくこらえてくれました。これからは任せなさい」

目の前の女性は優しい口調で言う。

|||||

レインの目の前で爆発が起こった。にもかかわらずレインはいまだ無傷。ならばなぜ？という疑問にレインは一瞬で解いた。

「『紫電の雷神』が聞いて呆れることやってんじゃねえよ。こんな雑魚になに殺されそうになってんだあゝあ！？」

目の前に立ちレインを爆発から守ったのは、ガイエス・バーン。またの名を『炎帝ガイエス』。実力は雷神や風神をも凌駕する實力を持つ。

いや、月光は爆発したように見えたただだった。ガイエスは静かに腕を下ろす。その手のしたには溶けてドロドロになった地面があった。ならば月光はどうなった？レインは状況を整理するため自問自答する。月光は溶かされたと考えるのが自然か、と自答し、助かったと礼を言う。

「レイン！大丈夫か！？」

「ッ！？レイン、その人、炎帝！何で帝がこんなところに！」

「あゝ？んなもん決まってるだろ。破壊軍に一発礼をするためだ」

ニヤリ、と炎帝が笑った。その笑顔は本人には悪いが悪魔のようだったと後にキンジは述べる。

〓 〓 〓 〓 〓

コロニコロニコロン、と手榴弾が転がってくる。願はその手榴弾を転がってきたほうに蹴り、手榴弾を元のほうへ戻すと爆発と同時に悲鳴が聞こえる。

「（えええ、この人、武偵なのに人を……）」

オルコットは驚愕と同時に淡い期待をした。もしかしたら、この人なら救ってくれるかもしれないと。ゴクリ、とつばを飲む。

やがて、目的地であろう場所に着くとオルコットの体は受け渡され、願は次なる敵へと向かう。

「さーて、一体どいつが遊んでくれるんだ？お前か？お前か？それともお前か？」

願は虎徹をくるくる回して遊ぶ。すると、数人のAK47を持った敵兵が姿をみせる。敵は願を円状に取り囲むように詰めてくる。しかしそれはナイフで近距離戦を狙っている願から見れば愚か極まらない行為。おまけに円状に取り囲まれているということは即ち敵の目の前に願を挟んで敵がいる、つまり挟み撃ち状態な訳だ。そんな状態で銃を撃つたらまず間違いなく仲間に当たる。

こんな戦法を取るのはいくく素人か仲間をなんとも思っていない奴らだけだ。

そして、全ての敵が一步動いたところで願は動いた。願は体をこまのように回し、虎徹で一閃。たった一閃で敵は全滅する。

〓 〓 〓 〓 〓

彼女は決意しないまま動いた。

逃げるしか今はできない彼女は建物から飛び出し、近くで銃撃戦をやつてゐる武偵の囀になるために彼女は駆ける。

「こつち、こつちだよ！」

タアン！響く銃声。彼女は敵兵の足を狙つて撃つた。しかし、彼女は刀しか使つたことがないため銃撃が一発で当たつたのは奇跡のようなものだった。

囀としての役割はできた。あとは振り切るだけ。あの武偵が少しでも長く生きられるように。

そして、彼女は死を覚悟した。目の前は行き止まり、あるのは東京湾。仮に海に入つても泳げない彼女はただ単に狙い撃ちされて即座に死ぬだろう。

しかし、それでもいいかもしれない。と彼女は思った。

彼女は後ろへ倒れるようにして、海に向かつて落ちる。が、いつまでたつても海に身体が入らない。なぜか？それは体を支える土の棒があつたからだ。

一発、タアン！という銃声に反応した彼女は、楓は目を閉じる。

その目尻には涙が溜まつてゐる。

「死にたくないなら、死ななければいいさ。いつかきっと君を認めてくれる人が来るはずだから」

楓は涙の溜まつてゐる目を開ける。目の前には日本人と思われる人間がひとり。『地帝』それが彼の二つ名。名は奈落。

彼は、飛んできた銃弾を土で受け止めていた。

The aria continues

京助、理子と合流

ピリリピリリ！と喧しい音を立てて無線機が鳴る。通信科からの連絡だ。はい、と不知火は無線に応じる。

『敵、武偵高内強襲科棟前^{アサルト}に出現。直ちに迎撃お願いします』

分かりました、とまじめな顔で不知火は答えると、その迎撃要請が俺達に回る。

京助が立ち上がるとその周りに集まってくる仲間。間宮についてくる伯爵。伯爵は要らないんだけどなあ、とか思いつつ歩き出す。

〓 〓 〓 〓 〓

グサリ、と髪が腕を貫通する。その返り血が服や顔を汚す。だが今はそんなことを言っている場合ではない。周りに集る無数の敵兵をどうにかしなければならぬ。

「くっ、さすがにきついか。殺すではなく無力化でないといけないからなっ！」

言ってる間にも敵は動く。髪はいくら硬化してとはいえ所詮は髪、弾丸を何十回も防げるわけではない。後ろに迫る敵兵。理子はその敵兵に髪で操るナイフを振り下ろす、が、すばやく横に回避されたため当たらない。

「（拙い！）」

振り下ろされる敵のナイフ。理子は髪で防御しようとするが、如何せん間に合わない。ナイフが髪に理子に届く瞬間、タアン！と音とともに敵が血しぶきが飛ぶ。理子は敵が怯んだ瞬間に体制を立て直し、直ちに攻撃に移り敵を無力化させる。

タアン！タアン！と立て続けに遠くから聞こえる発砲音。そして一回の発砲音ごとに人が倒れていく。レキによるサポート狙撃だ。「うわぁ！」

とまたひとり敵が倒れる。今度は発砲音が近い。誤射か？と理子は考えたが、顔を見た瞬間驚き、すぐに微笑みの顔に変わる。

「待たせたな理子」

現れたのは敵兵を片手に拘束している京助、間宮、不知火、と見知らぬ人間もとい伯爵と勇次。

「クフ、このくらい理子ひとりでも」

「ま、そういうな」

京助は左手に拘束している敵兵を盾に右手のガバメントで敵兵を撃つ。放たれた弾は確実に敵の銃口へと入って行き、中から銃を破壊する。

不知火達は建物の陰に隠れて援護射撃を行い、勇次は罪忌に手を沿え、何かを念じるように目を瞑ると、見えない刃により敵が切り刻まれる。13人いた敵がすでに残り3人、京助が一気に距離を締め腕を取り背負い投げ、近くの敵に投げつける。よく訓練されていない素人だったのか、それで二人とも気絶する。最後に残った敵は勇次が急接近し峰で斬りつけ無力化させた。

「いっちょあがり！」

「だな」

と軽口を叩く俺と勇次。

理子との合流に成功した

|| || || || ||

「紫電の雷神、遠山の、チビ、こいつらは囷だ」

「チビって言うな！」

「うるさい、チビ。遠山の、合流だ。力を貸してほしい。時間がな
インフォルマ
いから情報科棟に向かいながら話す。いいな」

付いてこい、という言葉と同時に走り出す。途中敵が現れたがガイエスとレインが全て排除したためキンジたちは走っているだけだ

った。

「囷、つまり本命が他にあると」

レインの言葉にコクとガイエスはうなずく。そして、そのあとにつづられた言葉にレインたちは背筋を震わす。

「そんな。そんなこと許したら武偵高はおるか東京湾周辺が壊滅するぞ！」

「それをさせないために、俺たちはここにいる。それを防ぐために合流する。いいか。この戦いには緋弾の力が絶対必用だ。そして、それを守る者たちも」

横から月光が現れるがガイエスが頭部部分を溶かす。レインが電熱で中の回路を断ち切り、機動不可にする。

「着いたか」

|| || || || ||

土は砂になりやがては崩れ落ちる。さらにその砂は巨大な手になり、敵をなぎ払う。

「楓奈楓、悪いですが着いてきてもらいます。いいですね？」

ふるふると首を横に振る楓。

「私は、足手まといだから」

ニッコリと笑うが、その笑いはどこかさびしそうで、悲しそうなものだ。

「でわ、無理にでも着いて来てもらいます。というか拉致します」

奈落は楓の周りに砂を集め、囷むようにして球体にしその中に楓を閉じ込める。

「クッククク」

そしてその球体と奈落は地面に埋まり、その場から完全に消えた。

The aria continues

真の目的

動き出す時間、銃弾は空を射て壁に当たり砕け散る。月光はレーザーを使いジャンヌを探すが見つけることはかなわなかった。

時は少し戻り3分前、否、この表現はおかしいのかもしれない。正確には59/60秒ほど前の時間。しかしジャンヌの体感時間としては3分であろう。

「私の名前は雛菊輪廻」

「雛菊!?!」

輪廻は伯母ですけどね、と付け加える。

「時間がありません。手短に全てを話します。あなたが戦っている敵の真の目的、私たちの目的。失敗したときに起こるであろう事」

頼む、とジャンヌは返すと話を始める。

「敵の目的は、武偵高を破壊することではありません」

「なッ!?ではなぜ」

「人の話は最後まで聴くものですよ若人」

すまない、続けてくれ。と謝るジャンヌ。素直でよろしい、と笑う輪廻。

「敵の目的は武偵高の破壊ではなく、ファーストインパクトの発動。以前口サンゼルス武偵高が襲われましたね。それは今回も投入されるであろう最凶で最悪の兵器、『アダム』の機動実験に過ぎませんでした。もし『アダム』と東京湾の遙か地下に眠る『イヴ』が衝突したら世界は滅びます」

「滅ぶ……………」

「ええ、私たちはそれを阻止するために緋弾を守る者たちを集めています」

ピキリ、と空間にひびが入る。
「そろそろ限界ですか。情報科棟インフォルマに集まっているはずですよ。」

|| || || ||

タン！と響く発砲音。

『スネーク、敵が近くにいます』

「ああ、分かっている。ん？アレは！」

The aria continues

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2252s/>

緋弾のエリア～緋弾に集いし仲間達～

2011年11月19日13時21分発行